

---

# 101回目の異世界への召還

紅姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

101回目の異世界への召還

### 【Nコード】

N5635T

### 【作者名】

紅姫

### 【あらすじ】

度重なる異世界へ召還で手にいれた力はチートクラス。見た目は女の子でも中身は男の子、でも基本は日本人気質なため色々と葛藤があったり恋愛あったりと大忙し。万年金欠な主人公の行方は？

## 始まりという名のプロローグ

この世界には本来その存在すら認識される事のないまま終る歴史が多く裏に存在している。<sup>ストーリー</sup>

異世界の召還や失われた古代文明や遺失技術<sup>ロストテクノロジー</sup>、魔術や魔法など一般の常識の範囲では収まりのつかない超常現象はその欠片とも言えよう。

今から綴るこの物語も普通に暮らしてる人には認識できない歴史の裏に埋まるであろう冒険譚一つである。

## サウルサスト大陸 闇の神々の島

今、この世界を破滅させようと暗躍していた神々すら喰らい尽くした古代漆黒竜<sup>エンシェンチイトドラゴン</sup>は一人の黒髪の少女へ攻撃を加えていた。

すでに少女は体中に裂傷を抱えており、魔力と霊力で編まれた魔法戦闘服は体中の裂傷から流れ出た血で真っ赤に染まっていた。

それでも、その少女のドラゴンを視界に映している瞳は強く輝いており確固たる意志を感じさせた。

少女はドラゴンの攻撃を移動しながら避けながらもドラゴンが繰り出して来る攻撃の余波により体に少なからず傷を蓄積させていった。少女は両手に持つ双剣をドラゴンへ投げつけ空間に魔法式を展開していき、ドラゴンの鋼鉄の皮膚を突き破った刀傷跡に向かい魔法を打ち込む。

その繰り返しが始まり、すでに三日三晩続いている。

人の身でありながら神すら喰らい尽くしたドラゴンを相手に一步も引かずに戦ってる姿は驚嘆と言つて差し障りないだろう。

そして、数日間の攻防により魔法防御力が著しく低下したドラゴンへ、少女が展開した複数の魔法が放たれドラゴンは氷づけにされる。長期間による戦いにより力を極限まで使い果たしていたドラゴンはその氷の棺桶を破る事が出来ずに、少女が両手に発生された黒き刃により止めを刺され息絶えた。

少女の体が少しづつ光の粒子に取りこまれていき、薄くなっていく。この世界を破滅させようとした者を倒す為に世界の意志が召還した少女は、役目を終えた事でその任期を解かれたのだった。

少女は、自虐的な笑みを顔に貼り付けながらその強大な力を恐れた世界から追放された。

いま私は、異世界の召還から戻ってきたばかりで一人で住んでるアパートの一室に備え付けられてあるガスコンロでラーメンを茹でているところだ。

「異世界召還されて、一番困るのがこういう味の濃いジャンクフードが食べられないのがきついなだよな」

私は独り言を呟きながら冷蔵庫から、学校から帰ってくる間に購入した卵を割って麺を茹でてる鍋に投入して箸で卵にお湯をかけながら熱を逃がす為に換気扇の電源を入れた

。換気扇が回ると熱と煙が換気扇に吸い出されていく。

3分ほど、かき混ぜてると丁度いい固さに卵が仕上がった。

「あとは、ラーメンの器に入れてと．．．．．やっぱりチャルメラに卵は定番だよな」

私は呟きながらラーメンの入った器を持って、6畳程度の広さのバリアフリーの部屋にある、システムデスクとセットの椅子に座り、パソコンで動画を視聴しながらラーメンを食べた。

そうそう、

私の名前は、すずきゆき鈴木雪。

読み方も呼び方も女みたいな名前だけど、男だ。

よく日本では体が弱い男児が生まれた場合は体が丈夫に育つようにと女っぽい名前をつける風習があるらしい。

身長は160cmにわずかに届かない為、つねに学校では朝礼や行事の時に整列するときはいつも一番先頭に来ることが問題？

一番の問題が、顔が女顔で髪の毛が艶のある黒髪という事だ。

まあ身体特徴を上げると切りがないが、常に女と見間違われるのが問題だ。

去年の夏から私は、何故か知らないがよく異世界に召還されている。異世界への召還回数はさつき戻ってきた事を含めると100回の3桁大台に上ってしまった。

そういう事もあり、きつと私は異世界召還されてしまう体質ベスト1という自覚がある。

おかげで、今、私の前に展開され始めているサモン・ゲート召還門を見ても驚かないくらいに……

「帰ってきてすぐに異世界召還かよ……」

私はぼやきながら、大気の魔力を使い構成し始めている召還陣を見てがっくりと肩を落とした。

部屋内で展開されていく召還陣を横目に見ながら、戸締りガス栓を閉めて水でお皿やお鍋を洗いブレーカーを落す。

異世界召還の間に、微量でも電気を使ってしまうと電気代が高くなるからだが……

最後にアパートの戸口の鍵を閉めてから、完成していた異世界への召還門を見るために一度、まぶた瞼を閉じてからまぶた瞼を開ける。

私の瞳の中に朱色の幾何学模様が浮かび上がってくる。それを私はアルファステイグマ複写眼と名前をつけている。

この瞳に朱色の幾何学模様が浮かび上がってる間は、視界にあらゆる現象やモノの構成がグラフや数値で表示されその結果……

《解析完了……異世界への召還門。契約内容は不明。呼び出される用途は不明。呼び出される世界は魔法と剣の世界。》

このように表示される。

これで、101回目の異世界召還は確定なわけだが……

どちらにしても召還門の特徴としては、誰かが召還門を潜くらない限り消えないという事。

本当に厄介な代物である。

まあ、無闇に一般の人が危険な目に会う必要もないと私はそう思い、召還門を潜った。

## 始まりとつじ名のプロローグ（後書き）

初めて投稿します。ご指摘がありましたらぜひよろしくお願いしま  
す

## いきなりの戦闘

### エルベニス力針葉樹海

ここは、フレンリアル公国の北方地域に位置し、多くの珍しい動植物や危険な魔物まで住まう森である。

いまその森の奥深くに世界を構成している魔力が集まり滞留していく。

複数の青いルーン文字で円が形成されそれがいくつも折り重なり、円の中心部には白い光が舞い起こる。

針葉樹という高い木々に囲まれ昼間でも暗いこの樹海を青と白の光が当たり一面を照らし出す。

そして、何かが急激に面積を増やし青いルーン文字で編まれた召還門の出口に急激な速度でその影を大きくしていった。

世界から世界へ渡るためには基本は召還される事が大前提となる。

召還というのは一言で言えば世界と世界の間が存在している境界線を取り除き、自分達が住まう世界へ語りかける事により自らが欲するに近いモノを手元へ引き寄せる術である。

召還術というのは、とても、不安定な代物であり、一度召還したモノは元の世界へ還元しようとする。

その為、その還元しようとする力を取り除く為に編まれる物が、契約である。

それは、主人格つまり呼び出したモノが必要ないとまで判断するまで世界へ止めておく事が出来る。

逆を言えば、必要ないならば召還されたモノの意志を無視し元の世界へ還元する事が出来ると言う、とても非人道的な魔法である。

過去、地球においても使い魔や精霊を呼び出し使役していた時代があったらしいが近代では、魔法は本当に限られた極一部の者だけに



伝えられており召還術においては文献の中だけの存在となつてしまつている。

つまり、召還術と言うのは召還される被害者の意志を一切考慮しない人道上よろしくない術なのである。

そして、稀に次元の歪ゆがみや世界の意志、神様の気まぐれなどでも召還される事はあるが、大抵はなんらかの意思がそこには働く。

その意志をいち早く理解する事こそが、元の世界へ早く帰るコツである。

俺は体に特になんらかの細工を受けることなくそのまま、召還門サモンゲートから森の中に放りだされ、ガサガサツと音を立てながら転がっていき、10mほど地面を転がった後、苔の生えている針葉樹に背中からぶつかり、ゴキゴキと嫌な音が背骨なら鳴るのを耳で聞きながら止まる事が出来た。

「っ」。いつてーな！」

私は悪態をつきながらも、丹田を通し気を体中に循環させる事で肉体の損傷の回復を図る。

あちらこちらに細かい切り傷があるが特に異常は見当たらない。背中の中の音も音だけすごかったが特に問題はなさそうだ。

私は、気の循環による肉体の細胞の回復が済んだ後、立ち上がり周りを見渡すが、周囲は針葉樹のような木々に邪魔されており100m程度の視界を確保するのが精一杯な状況であり、薄暗かった。

「召還座標軸ミスったのか？それともわざとか？それにしても・・・見事に森の中だな。」

私は独り言を呟きながら、これからどうしようかと思案した所で、パキパキツ・・・と言う音が周辺から聞えてきた為、臨戦態勢に気持ちを移行した。

ガサツ、ガサガサと段々と私がいる方へ音が大きくなり、近づいてくるのが手に取るように分かる。

数は音から見ても少なくとも5はいる。

最後にガサツと一際大きな音と共に草が揺れ警告してくれる。音がした方へ視界を走らせると訪問者の姿が映った。

それは全身を白い体毛に覆われ、2本の大きな牙そして虎を3倍近くまで巨大化した魔物だった。

その数は、5匹どころではなく、20匹近くいるだろう。全てが得物を逃がさないように円陣で俺を取り囲み、少しずつ包囲網を狭めてきた。

「まったく、いきなりこんな状態の場所に召還するとか、今回の召還主はずいぶんと鬼畜だな」

はつきり言って今回の召還は、間違いなく一般人が召還されていたら死亡フラグ確定。そこまで考えていた所で、思ったより軽い音を立てながら魔物が俺の方へ四方八方より殺到してきた。私は突っ込んできた正面の魔物に向って一気に距離を詰める。

そして魔物の側面に周り込み、丹田を通し強化した筋力で横隔膜があるところと思われる場所へ正拳突きを打ち込み横隔膜を刺激し行動を制限した。

サーベルタイガーが行動制限されてる状態で前右足を両手で持ちそのまま、その巨体を振り回す。例えるならば扇風機？

次々と私に殺到してきていた、他の魔物が、振り回されている魔物の体とぶつかり合い吹き飛んでいく。

私はすべての突っ込んできた魔物を吹飛ばすと掴んで振り回していた魔物も固まって私の様子を見ていた魔物の一団へ投げつけた。

野生の獣だけあって力関係が理解出来たのか、すぐに私から距離を取って森の中へ敗走していった。

私は敗走していく魔物の後ろ姿を見ながら、一息つこうとしたところで突然殺気を感じてその場から飛び下がった。それと同時に、先ほどまで立っていた場所が直径3メートル、深さ1mほど爆発し爆ぜていた。

「魔法？」

周辺を見渡してもそれらしきものが見当たらない。

私は<sup>まぶた</sup>瞼を閉じ、再度瞼を開く。

黒い瞳の中に朱色の幾何学模様が浮かび上がりそれと同時に視界の中には、周辺の景色、大気、魔力構成がグラフで数値で表示されていく。

魔力の<sup>ざんりゅうほんのう</sup>残滓反応軌跡を追っていくと、空に赤い5m程度のコウモリの翼を生やしたトカゲが滞空して俺を見ていた。

私が気がつくと同時に、口を大きく開いて火炎弾を吐き出してくる。

私は存在の力を魔力に変換し発動していた《<sup>アルファステイクマ</sup>複写眼》で変換した魔力を制御下に置く。それと同時に空間に魔法式を書き込んでいく。

そして力ある言葉と同時に発動させた対火系統防御魔法《<sup>フレア・シールド</sup>炎呪封殺》が着弾した火炎弾を後方へ逸<sup>そ</sup>らす。若干タイムラグがあつてから後方で地面が爆ぜる音が鼓膜を揺さぶる。

私はそれを聞きながらも、<sup>マルチタスク</sup>並列魔法式構築で大気中に書き込みを行っていた魔法を発動させる。

「<sup>ブラム・ガッシュ</sup>《爆風弾》」

発動した風系統の不可視の風の刃が滞空していた魔物に着弾すると同時に周囲に無数のカマイタチを発生させ魔物のコウモリの翼を切り刻む。

滞空する力を失った魔物がそのまま森の中へ姿を消すのを私は見ていた。

「まったく、いきなり連戦とかどうなのよ？」

独り言を呟きながらも私は、先が見えない森に愛想を尽かし、新しく魔法式を空間に展開し《翔封界》レイ・ウイングを使い空へ舞い上がった。針葉樹を眼下におさめ、周辺を見渡した所、馬車や人が何度も通る事で出来る街道が見えた。

「とりあえずは街道に出て、情報収集だな。」

この世界に来る際に、本来なら表示されるはずだった召還目的が書いてなかった事を思い出す。

街道を歩けば誰か人に合える。そうすれば町の方向や情報を貰えると判断し街道方向へ飛び、数分で街道の上空へ差し掛かった。

私は、《翔封界》レイ・ウイングを解除し街道の上に降り立ち街道の左右を見比べたがどっちの道を見ても人っ子一人見当たらない事からとりあえず左の方向へ街道を進むことに決めた。

30分後 . . . . .

私は、10匹前後の豚を人の形にしたオークと呼ばれる魔物と戦闘中だった。周りには60匹以上ものオークが地面に倒れ付して痙攣している。

体中に纏った魔力を直接使い、オークの腹部を殴りつけ宙に浮かせるそのまま右回し蹴りを胴体に打ち込む。サッカーボールのように弾みオークがまた一匹再起不能になる。

「まったくキリがないな」

私は呟きつつも、次のオークが振りかぶってきた鉄製の剣アイアンソードを魔力で

強化した左の拳で粉碎し一歩踏み込みでつぷりと太った腹部に前蹴りを打ち込み後ろへ倒す。そのまま、踵かかとの部分でオークの首だと思われる呼吸器官を踏み潰し絶命させる。残りのオークの数が10匹を下回った所でオーク達がぶひひいいと悲鳴を上げながら街道を外れ、森の中へ逃げていった。

私はオークの死体を見ながら、魔物との遭遇率エンカウントが高いなと内心困っていた。

街道に出て左方向へ進み続けてからトロールや狼やデカイ鶏、いまのオークなど待ってました」と言わんばかりに遅い掛かってくるからだ。

しばらく、街道沿いに歩いていくと、キンキンと金属同士がぶつかり合う音が聞えてきた。

前方を見ると複数の人が、大型のモンスターに襲われているのが見える。

闘っている人の後ろには人が10人は乗れる大きな荷馬車が止まっており、どうやらそれを守って闘っているようであった。

少し、駆け足でそちらへ向うと段々と闘ってる人達の姿が視界に鮮明に映り込んでくる。

闘ってる人達は一人を抜かして同じ鎧と楯と剣を所持しているようだ。どこかの騎士団のように見える……

私が、闘ってる場所まで走って到着すると一人の男が避難するように私に言ってくるが、何人も戦闘していた人間が地面に倒れ伏している状態ではさすがに大人しく避難する訳にはいかない。戦闘参加への確認も行わずにそのまま、戦闘をしていた集団の横を抜け、一つ目の巨人イクに突っ込んでいく過程で丹田を通し、気ロブスを体内に張り巡らす。そして存在の力を魔力へ変換し《複製眼アルファステイグマ》にて制御し体の表面に魔力の流体を展開させる。

3 m近いサイクロプスは私の頭へ向けて2 m近くある棍棒を降り下ろしてくる。それを一歩踏み込み体を回転させる事により紙一重で避けながら遠心力と魔力を乗せた右拳《魔人烈光殺》を腹部へ打ち込みそのままサイクロプスの背中が衝撃破により爆ぜる。背骨を残り臍物を後方へ吹き散らしながら前のめりに倒れてくる所を避けながらもう一匹が横に振るってきた棍棒の上に軽く飛び乗り棍棒からさらに飛び上がり慣性の法則にしたがって落下しながら拳に圧縮した魔力《魔殺一刀両断撃》をサイクロプスの頭から股間に向けて振り下ろす。

地面に降り立つと同時に体を真つ二つにされたサイクロプスが左右に分かれて地面に倒れ伏した。

ルークは、走って駆けつけた少女が、避難の指示に従わずに魔物相手に恐れも抱かずに闘い始めた事。そして素手で、Aクラスの冒険者の力が必要なサイクロプスを一瞬で屠っていく事に驚愕していた。ルークは、少女の動きを見ながらも、サイクロプスの両足を両断し支えきれなくなった上半身が崩れてきた所で首を切り飛ばし一匹仕留めた。

さすがに形勢不利を悟ったのか残り2匹のサイクロプスは森の中へ逃げ込もうとする。

私は、それを視界におさめながら、魔法式を空間に展開していく。そして力ある言葉と同時に《氷の槍》アイシクルランスが発動し直径30cm長さ3mの氷の槍が形成される。私はそれを2匹のサイクロプスに投げつけそれぞれ背中から氷の槍で貫かれて絶命した。ルークはそれを見ながら、一瞬で魔法を編み込みあれだけの体術を扱う少女に関心を抱いた。

私は、サイクロプスを撃退した後、怪我人を見ていったがそれほど重症者が居なかった事から軽い治癒魔法で充分と判断し魔法を使おう

うとした所で後ろから声をかけられた。

「助かりました。私はこの隊をリーダーを勤めるルーク・フォン・スターレットといいます。どうぞルークと呼んでください。」

「えっと、私は雪と言います。」

感謝を言われつつ、私は名前を教えてもらったルークを足元から順に見ていった。ルークを観察しながら、翻訳魔法を使わずに言葉が通じることに少し驚きながらも召還門の影響かと思う事にした。

見た目は蒼眼に長髪 of 金髪 of 身長190cm前後の美男子。

とりあえず、こいつを観察した結果は、ずばり男の敵だと思った。万人に女扱いされている私とは充分な差だ。

これが格差社会なのか・・・と思ってしまった。

とりあえずは怪我人の治療が鮮血だと思い、治療の手伝いが必要か聞いた所、魔法が使える人達という事で自分達で治癒魔法がかけられるので問題は無い事を言われた。

## 登場人物編集（前書き）

少しづつ話が増えるたびに追加していきます。



## 登場人物編集

主人公 鈴木<sup>すずき</sup> 雪<sup>ゆき</sup>

身長 155cm

容姿 黒髪に黒眼

見た目 容姿・声色が女の子

本人いわく将来は男の中の男になるとの事

特徴：100回もの異世界召還を経験したことにより蓄積された経験は神すら倒せるかもしれない？くらい

趣味 ベットでゴロゴロしながらライトノベル・アニメ・ゲームをするのが生きがいというダメなコ

能力 何故か知らないが、アニメ・ライトノベル・ゲーム世界など架空世界に召還される事が多く、生き抜くために仕方なく多種多様の技を身につけている。

主兵装武器は

《魔降剣》と《至高剣》

互いに不安定要素を多分に含む概念物質より作られている為、一時間程度しか形状を維持できなく、作り出すにも膨大なエネルギーとダイクマターが必要になるため、一度作り出し消費したあとはしばらく使えなくなるというデメリットを含んでいるが、その切れ味はモース硬度27のナイフですらバターのように切り裂くほどの切れ味を誇る

ルーク・フォン・スターレット

宮廷魔法騎士団隊長

年齢 21歳

身長 189cm

容姿 蒼眼に金髪の長髪、筋肉質

趣味 体を鍛える事

フラン・フォン・デ・フレンリアル  
フレンリアル公国の女王

年齢 16歳

身長 155cm スリーサイズ それなり

容姿 琥珀色の眼 パール色の髪の毛のセミロング

趣味 魔法・料理

ルイーゼ

財務大臣

年齢 72歳

身長 177cm 小太りな体型

容姿 金髪(いまはテルテル坊主) 金眼

ドルイネス・フォン・スターレット

軍務大臣

年齢 58歳

身長 188cm 筋肉質というかマッチョ

容姿 銀髪 金目

趣味 軍事小説を書く事

ルディアス・フォン・デ・フレンリアル

フレンリアル公国の国王

年齢 49歳

身長 171cm 細身の体型

容姿 琥珀の眼 パールの髪

趣味 お忍びで城下町へ繰り出し散歩をする事

ファーブニル・フォン・ストラウス

フレンリアル公国南方領地を任されている

公爵筆頭

年齢 36歳

身長 175cm 細身

容姿 琥珀の眼 金髪

ヘルデイルム・フォン・スカール

フレンリアル公国北方領地を任されている

公爵

年齢 37歳

身長 180cm 細身

容姿 金眼 金髪

イルデアル・フォン・ロアスター

フレンリアル公国西方領地を任されている

公爵

年齢 39歳

身長 177cm 細身

容姿 金眼 紅髪

ワーカーズ・フォン・プライト

フレンリアル公国東方領地を任されている

公爵

年齢 67歳

身長 191cm 筋肉質な肉体

容姿 金眼 銀髪

ロドニク

外務大臣

年齢 41歳

身長 169cm 細身

容姿 紫眼 紫髪

グレンダル・フォン・アルバード・イスメラル

帝国軍総司令

王位継承第3位

年齢 58歳

身長 208cm 2mのハルバードを片手で振り回すほどの怪力の持ち主

容姿 緑眼 坊主

ヴェイン

帝国軍宰相直属部隊

身長180cm程度

年齢 不詳

身長 不詳

容姿 黒いローブを深く身に纏っており顔を見ることが出来ない

## 世界観編集（前書き）

世界観を編集しています。話数が増えていくたびに追加していきます

## 世界観編集

### フレンリアル公国

主に、鉱物資源に恵まれており大陸有数の鉄鉱石産地。王政だが、賢王と呼ばれている王の政策により一般市民の識字率は70%。奴隷制は禁止されている。

国土は国の中心に位置する王族直轄の天領。

4公爵が統治する東西南北に広がる東領・西領・北領・南領に分かれる。

国の周囲は高い山々に囲まれており天然の要塞になっており攻め入るにはかなり困難。

### ストラウス砦

フレンリアル公国の南領の国境沿いに築かれた対イスメラル帝国用の最前線基地。

### イルドルア共和国

商業にて維持されてる国家。国政は有力な複数の商人が行っている。識字率は商業国家という事もあり40%以上

### イスメラル帝国

大陸最大の領土と国力をもつ国家。国政は王政、つねに自国の王族・貴族の利益を追従し周辺国に謀略・戦争を引き起こしている。識字率は高くなく10%未満 奴隷制度が推奨されている。

### ルーデン魔国

イスメラル帝国と同等の国力をもつ、国政は王政。

## アリストロス連合国

イスメラル帝国に対抗するために小国が手を取り合い作り上げた国。穀物の主な産出国。3つの公国ルーゼン公国・アルドバツハ公国・シユメイル皇国より代表者を一名づつ出して国政する議会政治。

**事件は会議室で起きている！**

話は主人公が召還される3日前に遡るさかのぼ

その日、フレリアル公国フレイア城の会議室では討論が繰り広げられていた。

数日前に、伝令より伝えられた帝国からの進行の話であった。否、侵略と呼んで差し支えないだろう。

城の会議室には、財務大臣、軍務大臣、外務大臣、公爵家数人が考えを述べていた

「帝国は先月、発見された精霊石の坑道を狙つてると思われます。」

財務大臣ルイーゼがそう告げると、

「確かに、大陸統一を掲げているからな・・・」

軍務大臣ドルイネスが相槌を打つ。

「王はなんと？」

4大公爵の筆頭とも言えるファープニル・フォン・ストラウスは聞くが

「現在、王は病で今臥せており、いまだに意識は戻ってはいないようです。」



もう一人の公爵家　ヘルデイル・フォン・スカールは答える

「帝国は王の不在のこの時期を狙って国ごと手中に収めるために今の時期に攻めてきているのか・・・」

その軍務大臣の一言で、場が静まり返る。王が病に臥せっており、国の決定権があやふやな状況そして尚且つ王女は16歳になっているが、このような緊急な状態で冷静に性格な判断ができるほどではないだろう。

そこまで、考えて、会議室の空気は静まり返ったのだ・・・

「他の国への依頼などは？」

公爵家　イルデアル・フォン・ロアスターは提案を出して来るが

「おそらくムリでしょう。去年・今年と続いて高地にある我が公国以外は食料不足という話です。救援は望めないでしょう」

と外務大臣のロドニクが報告してくる、さらに

「他の国がたとえ、動いたとしても兵を集め、こちらに兵を派遣するまでに一ヶ月近くはかかります。とても間に合うとは思えません。」

その言葉に、公爵家の貴族は表情は、凍りつくが軍務大臣ドルイネスだけは分かりきっていた事だったので態度には表さなかった。

そのとき、会議室のドア外の通路から走ってくる足跡が聞こえ、扉が開く。

「失礼します！」

軍務大臣ドルイネスは突然入ってきた上級士官へ問いたです。  
「どうした？」

上級士官は、会議室の不穏な空気に当てられながらも、用件を話し始めた。

「帝国の主力部隊が国境砦に向かってきてると情報が入りました。」

公爵家 ワーカス・フォン・プライトは、年老いたと言っても50過ぎだが、その上級士官に話を促す

「数はどのくらいじゃ？」

「30万近くの大部隊との報告が入ってきました。」  
ふむ、30万とは、これはまたいかに・・・

歴戦の猛者ワーカスと比べて、他の公爵家筆頭を含めた3人と財務大臣は明らかに顔色を翳らす。

それぞれ信じられないと言った言葉を吐き出している

ファーブニルは周りの反応も確かめずにうめくように呟いた。

「我が公国軍の10倍の戦力だど・・・？」

さらに、続けてるようにワーカスは上級士官へ現状の報告を促す。  
上級士官もそれに合わせて報告を再開する。

「砦に集めてある兵力は今、1万7千ほどです、進行速度からして一週間後には到着。おそらく3日ほどで砦が落とされ、一週間ほどで都は包囲されると思われます。」

この会議室にいる公爵家、各部署の責任者は、この上級仕官が行った事は誇張ではなく現在の公国の戦力と比較し、明らかに現実味のある状況だと理解をしていた。

「市民を連合国へ移動させて、被害を抑えつつ撤退するしかあるまいな」

ファープニル公爵は、市民の被害を極力抑えるために言うが

「各国境からの連絡によりますと、帝国により街道はすでに全て封鎖されており、逃げ場がないとの情報が入ってます。」

それすらも、上級仕官からの報告により撤退を余儀なくされる

「なるほどのう」

とワーカスが言う・・・

「何がなるほどなのですか？」

とファープニルが聞き返す。

其れに対し、ワーカスは

「帝国は一人も逃がす気は無いという事じゃよ」と説明し始めた。

「とくに我が国は識字率が高い、識字率が高い奴隷は高く売れるからな、そのお金を帝国の戦費に当てようというのじゃろう・・・」

「それでは10倍以上の戦力を相手にして討ち死にしろと？」

イルデアル公爵が顔を真っ青にして聞いてくる。

「それしかあるまいな・・・王族、特に姫だけは国外へなんとか脱出させればそれを旗頭に今後も抵抗をしていく事も可能じゃと思うが・・・」

「・  
」  
さらにワーカスは続ける。

「そうですか、わかりました。我が息子のルークに連合国へフラン  
姫を脱出させるように手筈を整えましょう。」  
軍務大臣のドルイネスが話し始めた。

「そうか、お主の息子のルークは魔法騎士だったな・・頼みますぞ  
とワーカスは皺のある顔を引き締めて言ってきたのだった。

その頃、フレンリアル公国のフレイア城の一室にはこの国の王女が  
居た。

その部屋は少女趣味満載のピンクの家具一式で統一されており壁紙  
もピンクになっていた。

そして、フリルがついたベットの上でゴロゴロしながら、

ここの部屋の主 フラン・フォン・デ・フレンリアルは今、猛烈に  
怒っていた。

「もう、何なのよ。召還魔法の儀式でちよこつと失敗しただけで  
あんなに怒る事ないじゃないと私は思うのよね！」

ブンブンと擬音が聞えてきそうな感じである。

ここの部屋にいるメイドのエリザベスはさすがに長い付き合いもあ  
って、こういふときの姫は放置しておくのが一番だと理解してるが、  
つい突っ込んでしまう。

「フラン様、召還魔法といいつつルイーゼ様の頭の毛を焼いちゃう

のはいけないと思います」

「だからわざとじゃないもん！ちよこつと失敗したくらいだもん！ぶーっとなりを膨らませて抗議をしてくるフランを見つつも、かわいいな〜って思うメイドのエリザベスであった。」

「ところでフラン様？まだ、召還魔法は成されるのですか？」

「うん！大気のマナが不安定だから後日やるよー」

懲りてない雰囲気でのたまうフラン姫にエリザベスはあーとため息を吐くのだった。

## 団長の不幸な一日

会議室の議論の翌日まで時は遡る。

フレンリアル公国首都フレイアのフレイア城の宮廷魔法騎士団に所属してるルークは城内にある、騎士団部屋で書類整理をしていた。

ルークの家、スターレット家は代々続く由緒正しい騎士の家系。

父の名前はドルイネスと軍務大臣という役職を勤めてることもあって厳格な父親である。

ルークは、首都にある王立学院を12歳で卒業した後、上位王立学院に進学せずに騎士団に入った。

父親のドルイネスとしては、武官になって欲しいという以降もあり、上位王立学院に入って欲しかったのだが、父親とは仲が良いとは言えず、反発心もありすぐに騎士団に入った。

しばらくすると、魔法の適正があるからと無理矢理、魔法騎士団見習いに配属された。

訓練はとてみつかつたが、それなりに充実感もありあつという間にこの歳になつてしまった。

魔法騎士団の位置付けは魔法と武器を使えるというエリートに周りから見える。

だが、私からすればどっちもつかずな気がしないでもない。

ここ、フレンリアル公国は小国と言えど、豊富な地下資源に経済を支えられていてそれを背景にそれなりの国力も有している。

周りは山々に囲まれており、通れる街道も少なく街道の要所には関

所兼要塞も置いてあることから天然の要塞に近い形になっている。周辺国の間では、戦争が絶えないようだが我が国は天然の要塞・経済力を背景に200年近く平穩を過ごしている。

200年近く平穩を過ごしていると説明したが、実際は周辺国は常に戦火が燻つてる事もあり形だけの騎士団では困る事もあり、規律はきちんとしている。

早朝は鐘が鳴り響くと同時に起床。

鍛錬を行い、野営地での自炊を自分達で出来るように自分達で朝食を作る。

朝食が食べ終わつた後は、城内・城下町の巡回。

一応、城下町の警備もいるのだが、魔法が使えるため、魔法を利用し市民の怪我の治療や魔法でしか解決できない事を行うのがメインの仕事になる。

それでも、洗濯に魔法を使わせる市民もいるのだが、それはどうなるだろうか？と思つたりもする。

他の国の魔法騎士団の話を知ると、かなり偉そうにしてるらしい。現在、病に臥せているこの国の王ルディアス王の政策、魔法騎士団の働きもありこの国では、王族・貴族との垣根は他国よりもずっと低い。

もちろん、お昼は城下町の食堂が本店でほとんどの者が食事をしてる。

魔法騎士団と云えど、給料は危険手当が付く位でそれほど給料が高いわけでもない。

戦争などにいけば、別途手当でもつくがそついう事は無い方がいい  
日が沈み始めたら、騎士団寮に戻りってから一日の鍛錬の締めを行  
ってから就寝する。

翌日、早朝の鐘が鳴った事でいつもの条件反射で起きてしまった。

「今日はひさしぶりの休日なのにいつもどおり起きてしまった・・・

」

他の同僚達も連日の訓練？の賜物が休日なのに起きてしまっている。  
なぜ？同僚が起きるのがすぐわかるかって？それは騎士団寮は相部  
屋だからである。

魔法騎士隊長たる私が個室を貰えてない理由は、相部屋になっ  
てる同僚達の責任が大いにあったりする。

ここ数日、私の隊のハンスの為に給料天引きが相次いで大変な金欠  
な状況。  
どのくらい金欠かと言うと財布の中に銅貨7枚の銀貨3枚しかない  
くらい。

ちなみに手持ちの全財産を使ってもお昼一食分しかない

今日、やる事は冒険者ギルドに行って日雇いバイトをして日銭を稼  
ぐというのが目標であったりする。



決意を新たにしたところ、同僚のハンスが

「ルークさん、今日も飲み屋に行きませんか？あそこに勤めてる女性美人ばかりって評判ですよ！」

「すまない・・・最近いろいろあつてな・・・手持ちがなくていけないんだ」

ハンス、お前が規律を破りまくってるから始末書と顛末書その罰金が俺の給料から引かれまくってるから心の中で追加しておく。

「しっかりしてくださいよー」

と言って来たハンスに向けて、お前がな！と心の中で突っ込みを入れておく

「お金の管理は大事ですよ。それじゃおれっちは用事があるので城下町にいつてきますよー」

と言ってハンスは出ていった。

他の同室のメンバーは私が、ハンスの後始末が原因で今だに隊長クラスが与えられる個室が宛がわれてない事も知っており、憐憫の眼差しで見送っていた。

とりあえず、空気を一新するか・・・

「ところでお前達はこれからどうするんだ？」

そう聞くと、ほとんどの者は育ちも生まれも城下町のため、自主警備を行いながらご近所の手伝いを魔法でするということだった・

部下達は、挨拶をしながら部屋を出て行った。

さて、私も出かけるか。

今日は一日がんばって稼いで今日の夕食は少し豪勢に過ごす！

・

・

・

と想像した時期が私にもあった。

騎士団寮から出ると王城へ続く広場で、フラン様が魔法の練習をしていた。

と思われる形跡があった、なぜ過去形かと言うとルイーゼ様の髪の毛が炎上してるからであった。

思わず目をゴシゴシと擦ってみたが幻影は消えない。

「どつちら、少し疲れてるようだ・・・」

もう一回、目をゴシゴシ

どうやら見間違いではなく、本当に頭が（ゴフッ

髪の毛が燃えていた・

とつさに流水系の魔法で鎮火したが、すでに頭部の髪の毛の8割は燃えカスと化していた。

焼けた肌は治癒魔法で直したが・・・

ルイーゼ様に会議室で姫様もろとも12時間以上説教をくらってしまった・・・私は関係ないと思うのだが・・・？

途中で姫様が、

「ルイーゼは別にカツラだからいいじゃん！燃えたって、もっといいカツラつけばいいと思うよ！」

水じゃなくて油かけてどうするんだ

おかげで、ルイーゼ様から開放されたのはすでに日が傾きかけていた。

姫様も私も長時間正座させられていた為、もう足の感覚すらない・・・

余計なフロー入れなければお昼には開放されたというのに。

そして、朝から何も食べてない事もあり解散直後、フラン様が側にいるにも関わらずお腹が鳴ってしまっていた。

さすがに、姫様も自分自身がでかした事に巻き込んだのも悪いと思うたのだろう。

「ルーク！私が夕食作ってあげるよ！これでも料理得意なんだよね。」

一瞬感心してしまった。

王族でも料理をするのか。貴族や王族は食べる側専門だと思っただが・・・

「料理長に言っただけで厨房借りてくるねー」

そのままフラン様は厨房に入ってしまった。

しばらくすると、料理長が出てきて、フラン様権限で厨房を占拠された事を言ってきた。

怪我とかしたら料理長の責任になるんじゃないのか？と一瞬心配になったが、小さい頃から母親に連れられて厨房内で料理をしていたので包丁捌きだけはプロ級との事だった。

「それは、どんな料理が出てくるか楽しみですわね！」

料理長にそう話しかけてみたが、料理長は遠い物を見る眼差しで「がんばってな、骨は拾うからな」

と言っただけで食堂に設置されてある椅子に座り、今日発売の公国新聞を広げて見ていた。

何をがんばるんだろうか？と一瞬気になってしまっていた。

しばらくすると、フラン様が戻ってきてきた。

その手にはシチューが入っていると思われる器と別の器にはパンが

載っていた。

そしてそのまま、目の前におかれるが

見た瞬間、私の中の時間が止まった

というのは比喩だが、目の前にはトンでもないシチューも（・）ど（・）（き）（・）（）があった。

「名づけて！レインボーシチュー！！！」

とフラン様は名づけていたが、食べる方の身としてはこれは如何にも

「す・す・す・す・すごい綺麗ですね・・・」

なんじゃこりゃーと突っ込みを入れたかったが、相手は仮にでもなく王族。

突っ込みを入れたらそのまま死刑台とかに直行だ！とかになりそうでお世辞を言うのがこんなに大変な料理も珍しいと思った。

注 そんな横暴な国ではありません

とりあえず、見た目は危険でも味は良いかもしれない。

考えを変えて、そのまま一口飲んでみた。

そして私は空の星になった。

・・・

・  
・

「はっ！知ってる天井だ・・・」

いったいどういう事だ？シチューを食べてからの記憶がない？

そして貴重な休みの一日が何もせずに潰れてしまっていた・・・

## 雇用契約

段々と日が沈み、夜の帳が落ちてくる。

あれから、倒れた人達の介護などをしていたらかなりの時間が過ぎてしまっていた。

夜に動くと魔物との戦闘に不利になるため、街道沿いに流れている河川敷での近くでその日は野営をするという事になった。

私としては特に夜でも、問題ないわけなのだが……………

まあ、ルークと話した限りだと次の町で、助けてもらったお礼を兼ねて多少の金品をくれると約束してくれたのでそれまで付き合ってもいいかなと思っていた。

どうせ、この世界に来たばかりの俺は、一文無しなわけだし……私はそんな事を思いながら、河川敷を歩いていると川の中には日本と違ってたくさん魚が泳いでいる。よく、キャンプとか野営する時だと、とった魚をその場で調理する場面とか見た事がある人も多いと思う。

私も、同じ事をやってみたくなくなった事もあり、靴と靴下とジーパンを脱いでトランクス一丁で川に入ってしまった。

思ったより深くは無く、膝<sup>ひざ</sup>までくらいの水量だったこともあり川の中心部まで移動してから、魚を取ろうとする。

よくアニメだとかだと、絶対制空権みたいなのがあって、その中に入った魚を川から放りだして捕獲していたのでそれを真似しようと画策していた。

私は出来る子だ！いける！と自分を鼓舞<sup>うむ</sup>しながら、内心ドキドキしたまま、魚が足元まで来るのを待つ。そして……ちゃんと足に魚が触れたのを感じた瞬間、全力全開で魚を掴もうとするが逃げられてしまった。

その後は何度繰り返しても出来なかった事からイライラしてつい、

《アーク・ブラス地霊咆雷陣》を川に向けて叩きつけていた。

強力な電気が川の中を駆け巡り多数の魚が痺れて川へ浮かんでいた。そして、その中には川の中に入ったまま自分の発動した魔法で自爆し感電した私もプカプカ浮いていた。

目が覚めると、そこは荷馬車の中のようなだった。すぐ近くに腰まである金白色の髪と金色の瞳をした美少女が俺の顔をじーっと覗き込んでいた。

「もうお体は、大丈夫ですか？」

私の体を心配してくれたのか心配そうな顔で話しをしてくれて俺は大丈夫ですと言いなから立ち上がるうとするとうんぴーを着せられていた。

「あれ？服は？」

「あつ、えつ、えつと、これですか？」

しどろもどろになりながらも、私に渡してくれた服は河川敷に投げ捨てるように脱いだにも関わらず綺麗に折りたたまれていた。

「これは、貴女が？」

「いえ、それは、ルークが……」

「そうですか……」

随分とルークは心遣いができる人間のようだ。190cm近い長身にあのマクドナルドで言うスマイル顔です。みたいな顔と来ている。



まったく天と言うのはずいぶんと不公平なものだ。  
私のこんなに見た目、女みtainな容姿と比べれば……  
私が自分の容姿とルークの容姿を比較して落ち込んでいると、少女  
が俺の方を見て自己紹介をしてきた。少女の名前はフランという名  
前らしい。

「雪です。こちらこそ、よろしくお願いします。」

年齢が18歳を超えたにも関わらず、未だに変声が進んでいない私の  
声はソプラノであり女性の声とほぼ遜色がない。これも私の困って  
る点の一つだが……

フランは雪が話した声の高さと容姿体格から女性と思った。

「私達、お友達になりませんか？見た感じ同年代みたいですし、同  
年代のお友達ってめったにいないの。いいかしら？」

「別にいいですよ」

私は、こんな綺麗な子にお近づきになれる事など滅多に無い事もあ  
り2つ返事で返した。お友達から初めて将来、結婚を前提としてお  
付き合いとか出来ればと心の中で思い描いていた。

「それじゃ、私の事はフランって呼んでくださいね、私も雪って呼  
びますので」

俺はフランのその言葉に頷いた。

「それにしても雪って、川でいきなり浮いていたんですもの、驚き  
ましたわ」

「ええ。まあ．．．．．つい、若気の至りというか、お恥ずかしい．．．」

「うづん、でも雪のおかげで労せずにとくさんの川魚を取る事が出来ましたのでとても助かりましたわ。夜の献立は川魚が一品追加されそうですわ。」

「それなら良かったです。あはは、そういえば、この服を着せてくれたのはフランですか？」

「いいえ、それはルークが貴女が風邪を引いたらイケナイので洋服を着替えさせようとした所で、丈が合う物もっている人がいなかった事から私の服をお貸ししたのですよ」

「そ、そうですか．．．．．」

それで女の物の洋服なのか．．．

「でも、ルークだったらね。着替えは私達がやりますからって私を遠ざけたのよ？女性の着替えを男性がするとか本当にデリカシーが無いと思いませんか？」

「いえ、特に、私、男ですし．．．」

「え！？」

フランが目丸くして俺の体中を嘗め回すようにして観察してきた。

「う、うそでしょ？これで男？ええー！！！！！！」

フランの驚いた声が、ルークまで届いたのかすぐに男の敵のルークが荷馬車の帆を空けて大丈夫ですか？と覗いてきた。フランはマツハの速度でルークの方を見ると大発見をしたようなキラキラした瞳で話を切り出した。

「ルーク、大変よ、雪が男なんだって。」

「はあ、その話ですか・・・」

ルークがフランが大声を出した理由を聞いて溜息をついたのが俺からも見て取れた。

「たしかに、私も川に浮いていた雪殿を助けるまでは女性だと思っ  
ていましたが、抱き抱えてすぐに男性だとわかりました。」

そのルークの言葉に、フランがニヤリと笑ってどうしてわかったの？と聞いていた。それに大してルークも抱き抱えたときに胸がありませんでしたからとバカ正直に答えていたのを私は見て、何言ってるんだがと心の中で突っ込みを入れていた。

「もうすぐ、食事が出来ますのでお二人とも外に出てください」

ルークは私達にそう告げると荷馬車の帆を閉めて離れていった。私は、着ているワンピースをフランに返そうとすると、似合ってるからいいじゃん、それにまだ、雪の服乾いてないと思うしとニッコリ笑って話しかけてくれた。

フランと一緒に荷馬車から降りると、いくつもの焚き火が作られていた、私の服は木々の間に巻きつけたロープに干されていた。まだ

湿っていた事から乾くのは明日になりそうだなーと思いながらフランがいる方へ走っていくと、ルークが私の名前を呼んでいたのだからちらへ向った。

「どうしたんですか？」

私は何かあったのか聞くと、向ってる先の街道沿いに先遣隊を派遣して確認した所、多数の魔物の死体を発見したので気をつけるように言われた。私はその魔物の特徴を聞くと自分自身が殺した奴だったのでそれ私がやりましたと自己申告した。そういうと、ルークは目を丸くしていた。

「そうだったんですか。雪殿よければ、次の町にいくまでフラン様の護衛を私達と一緒にやりませんか？お礼は金貨20枚でいかがでしょうか？」

まあ、あれだけの魔物を一人で倒せる腕を持つてる人なら雇いたがるよなと納得しつつこの世界の貨幣価値を知らない私は貨幣価値を聞くことにした。

「ルーク、一つ教えてほしいんだけど住んでいた村ではあまり硬貨という物を利用した事がなかったんだけどどのくらいの価値があるか教えてもらえないか？」

ルークは私の言葉に少し戸惑いながらも教えてくれた。

「そうですね、金貨1枚で銀貨100枚　銀貨1枚で銅貨100枚の価値ですね。一般的な食事を取るのですたら一回で銀貨5枚　宿を取るのですたら一晩で銀貨50枚から60枚と言った所でしょうか？安い宿に限りますが」

という事は銀貨5枚で一食だと500円程度か、という事は金貨20枚だと20万円になる計算。

「次の町まではどのくらいの距離があるんですか？」

「そうですね、大体10日くらいだと思います。」

そうすると日当2万円か、私は少し考えこんでしまった。ルークもそれを察したのか、食事つきというのを提案してきた。私も食事つきならいいかと思いを承した。

「それでフラン様ってさつき言ってたけど、様つけて事は結構偉い身分の人？」

私は疑問に思った事をルークに聞いたが、大きな商会の一人娘という事を教えてもらった。その後は、フランの護衛をするに事になった事もあり護衛団の皆に私が仲間として加わる事とルークの指揮下に入る事の説明を受けた。

「そういえば、雪殿は何が得意なんですか？」

ルークに護衛に辺り特技を聞かれたので、無難な所で魔術と体術がある程度出来ることを説明した。ルークは府に落ちなかったような顔をしていたがそこは仕方ない。

そのあとは食事をしながら護衛団とこれからの話をしてこれからの交代で火の管理と周囲の警戒番を決めてから寝る事になった。

護衛団の人数は20人だった。

私はまだ、隊に入ったばかりの事もあり今回は警戒の番から外された。話が終るのを待っていたのかフランが此方こちらへ走ってきて私の腕

を掴んできた。

「ねー。雪、今日はお仕事あまりないんでしょう？それなら一緒に寝ましょう。」

「いや、男が女性と一緒に寝るのはちょっと……。」

ルークに助けを求めようと顔を向けると良い笑顔で親指を立てられた。その表情はこう言ってる、任せたと……

仕方なく、私はフランと一緒に荷馬車に乗り毛布を床に敷いて、フランから少し離れて寝た。

私は、雪が寝たのを見届けると雪の毛布の中に入っていき雪にしがみついた。抱き枕を持って来れなかったのでその代わりと言ったら身も蓋もないけど。それに雪って男のくせに良いニオイするし肌なんて真っ白でやわらかいし、まるで男の人とは思えないくらい。それに身長だつてわたしと同じくらいだし、もう食べちゃいたいくらいかわいいし、問題ないよね？と思いながら私はそのままどろむ様にして眠った。

そして河川敷に野営をしていたルーク達一団を上空に飛んでいた一匹の黒いコウモリが赤い目で見つめていた。

**寝起きは危険です！**

雪が寝始めてから4時間が過ぎた頃、少し離れた所では帝国の間者と暗殺者達が荷馬車の主と騎士団を抹殺しようと暗躍していた。

「あと少しで完全に暗闇になる、それと同時に奇襲をかける。フレリアル公国のフラン姫以外は全て抹殺して構わない。分かったな？」

そしてメンバーを見る。

アサシン・暗黒騎士団・魔法使い・神官とその人数は1000人近い  
どう見ても逃げられる数ではない、対する公国の魔法騎士団はわずかに20人にも満たない。

これではどうにもならないだろう。  
だが、暗殺者たる彼らはどんな状況下・敵であっても冷静に対処を進めていく。

それがプロというものだろう

そこで、リーダー格の男が魔法使いに問う

「この街道に配置しておいたサイクロプスは見当たらないがどうなったんだ？」

「どうやら、数匹のサイクロプスの死体は発見致しましたので、彼らが倒したのかと思います。」

その答えに一同がざわめく・・・

ざわめくのもムリはない。

異常とも言える耐久力に物理・魔法攻撃からのダメージ半減、そして強靱な肉体から繰り出す尋常ではない破壊力。

どれをとってもAクラスの冒険者数人並の実力はあるからだ・・・

そして、彼らの死体が無かったということは無傷ではないとは言え倒すだけの実力があるのだろう

だが、彼らの装備の形状からして恐らく、フレンリアル公国の虎の子 宮廷魔法騎士団だと思われる。

「なるほど、平和ボケの国の騎士団だと思っていたがそれなりの力もっているのだな・・・面白い。雑魚を殺しても面白くないがどうやら多少はやるようだ・・・少しは楽しめるな」

しばらくして日が落ち、周りが闇夜に染まる。

荷馬車の中では女性が就寝しており、それを中心として騎士団が護衛をしていた。

ルークは見張りに声をかけようとした時、周りに突如発生した濃厚な殺意を感じ取った。

そのまま、ルークは見張りをしてる者に寝ている魔法騎士団員を叩き起しに行かせた。



魔法騎士団が戦闘態勢で集まったときにはすでにルークが100匹以上のサーベルタイガーを相手に戦ってる最中であった。

そこに加勢するごとく魔法騎士団のメンバーはルークを中心に陣形を組みサーベルタイガーを倒していく。

そんな戦闘の真つ最中、どんな時でも、熟睡できる結界を覚えてからというもの、緊張感の欠片もないダメダメな雪は今だに寝ていた・

周りで怒号や金属の鳴らす音が聞えてもひたすら熟睡

暗殺者に襲われたら真つ先に始末される口であることは間違いないにせ、荷馬車で睡眠を取っていた女性ですら起きて外を見ているのだから・

女性と騎士団の距離は100m近く

そのとき、荷馬車の女性の口元に布が当てられてそのまま力を無くして倒れるように抱え上げられる

そしてそのまま担いだ男は森の中へ姿を消していった。

男の配下の者達は、前方から操ったサーベルタイガーに奇襲をかけたせ騎士団が前方へ意識を集中してる間に姫を攫いそのまま後ろから挟み撃ちにして騎士団を殲滅するという手筈だった・

そう・・・一つの過ちをしなければ問題はなかった

配下の一人の男が一人の少女が寝ているのを見ると、

「おい。もう一人女がいるぞ！こいつはどつする？」

「念のための保険だ、連れていけ」

そついうと、雪に近づき触ろうとする。

瞬間、何も無い空間に阻まれてしまう。

「なんだ、こいつ、結界か？触れねえ、おい何とかしてくれ」

「ちつ、仕方ないな」

一人の魔法使いがディスプレイの魔法を詠唱する。

《天と地 風と地 求める汝の古き詠歌 今ここに集いて 化の者の 組み込みし呪縛と解き放たん》

それと同時に結界が消えたが、魔法使いはかなり疲労していた。

魔法使いに解除を頼んだ男は毛布に包まって熟睡してる雪の髪を掴んで引つ張り上げて立たせる。

その瞬間、その男がキリモミ状に回転しながら20m近く吹っ飛んでいった。

何十人もの男達がそれを見て、異常事態というのを理解した。

この女は危険だと……

雪としても、寝ている間に結界が強制解除？されていきなり髪を掴まれて引っ張りあげられたもんだから条件反射で手が出ていた。

しかも、後ろを見てみると騎士団の人たちが、昨日の昼間に自分が追いついたサーベルタイガーと戦っていた。

しかも、荷馬車には寝る前に感じていた、女性の気が気配を感じることが出来ない。

少し、範囲を広げて見ると、女性の気配が離れた所にあり、ここから離れて行ってるのを感じる。

速度からしたら担いで走ってるのだろうか？女の人の走れる速度じゃない

そして今、私の周りには70人近くの黒で統一された男達が困っていた。

すでに殺気からしてどう見ても敵ですね、わかります。と言った具合

とりあえず、食物を先ほど頂いた事からそれほど無茶をしなければ大丈夫と確信してた事もあったが、とりあえずは

「出来れば、詳しい説明をして頂けると嬉しいのですが……？」

野党もどき達はこいつ何を言ってるんだ？っという顔した瞬間、ナイフを投げてきた。

「問答無用かよ！かなり丁寧に接したのに……」

そして飛んできたナイフをそのまま……指先で受け止めて……そ

のまま握りこんで砕いた・・・

その様子に、一瞬男達は戸惑いつつ、斬りかかって来た。

前後10本近くの剣戟、そしてそのまま私の体に触れた瞬間、私が展開した《硬気功》で受け止めた。

剣を振るった野党達は、剣を引き離れた。

直後、直径1m近くある火炎が飛んできた。

そのまま私を焼き尽くそうとした炎は、そのまま掻き消える。

野党達は一瞬だけ凍りつくが、次の瞬間には私が展開した《靈光弾》で全員倒れ伏していた。

殺してはいない。失神させたただけだ。

相手に認識されない打撃だけあって防御がしずらく尚且つ複数同時にダメージを与えられ、殺傷能力も威力を抑えればいいだけなので使い勝手のいい技である。

荷馬車に乗っていた、女性の気は距離的にすでに1km近く離れている。

たった2 3分で人を一人抱えてそれだけ離れるとかすごいな〜って感心してしまうが・・・

逃がしはしない・・・睡眠妨害の罪は重いのだ！

その頃、暗殺者達はフランを抱えながら森から抜けて、街道を走っていた。

今の所、作戦はうまくいっている。  
姫を攫うことも出来た。

このままいけば、魔法騎士団に気付かれずに本陣に戻れる。

恐らく、魔法騎士団の連中は、姫が攫われた事について取り返し  
つかない事態になってから気がつくのだから

俺は、ターゲットのフラン姫抱えた後、一人の部下が馬車から離れ  
て毛布に包まってる少女を見つけようとするか報告してきた事につ  
いて、何かの保険に使えるかと軽い気持ちで、その少女を確保しろ  
と言ったおいた。

だが、その少女の周りには結界が張ってあった。

一瞬嫌な予感がしたが、暗殺部隊の中でも1・2を争う魔法使いが  
デイスペルを使い結界を解除していた。

結界といえば特殊なアイテム・道具・神域・聖域で使われる物では  
ないのかと？それを姫ですらない只の少女にかけるとはおかしな話  
だと思っていたが、部下が目の前を通過して回転しながら飛んでい  
ったのを見て確信した。

こいつは、化け物だと・・・

だからこそ、すぐにターゲットを抱いて、本陣へ向かう為に最低限  
の護衛を引き連れてその場から離脱した。

あんな化け物を相手にしてたら任務遂行どころではないからだ。

**寝起きは危険です！（後書き）**

ご意見・ご要望がありましたら、どしどしよろしくよろしくお問い合わせ  
します

## 危険なウォークライ

先ほど、ターゲットを拉致してから、走り出して5分近くたつ。担いでるフレリリアル国のフラン王女は嗅がせた薬のせいでもうしばらくは起きないだろう。起きる前に第4王子殿下が待つ、進行軍に到着すれば仕事は終わるだ。

魔法を使い身体能力を上げているため、半刻（1時間）程で到着するはずだが

周りを固めてる30人の部下も精鋭揃いという事もあり、すでに失敗は考えられない。置いてきた時間稼ぎの部下もそれなりの手勢の為、問題なく逃げられるだろう。

部下の一人が進行軍の本陣まであと1時間程と助言してきたが、部隊の気を引き締めないといけない事もあり最後まで気を抜くなと注意を入れておいた。

すでに走り続けてかなり経つが、まだ余裕が部隊には感じられる。普段の修練の賜物か。

そう思い再度、前方へと視線を移動した瞬間、視界が横に流れ、地面を何回かリバウンドしたあと攻撃を受けたという事実を信じられないが理解した。

そして、俺の前にいたのは、化け物だった。そいつが王女を抱きかかえていた。

雪は周辺の黒尽くめを見て息を吐いていた。先ほど、襲ってきた者を気絶させ、それなりの速度で移動してる者達に睡眠の仕返しをするために《瞬歩》を連続して使って追いかけてきた為、それなりに息が乱れていた。

追いつく間際、荷馬車の女性が抱えられてるのを見て、その女性を力任せに奪い取り加速状態のまま蹴りぬいたのである。

奪い返した女性？美少女は髪の毛がキラキラしてて更に真っ白な肌、神の御業のごとく絶妙に配置された容姿！

すごいかわいい容姿だった。

とりあえずは、こう言う時に言いたかったセリフが前からあったのと言ってみた。

「女性を手籠めにしようと、集団でいい大人がそんな犯罪紛いな事をして恥ずかしくないのか!？」

どうやら、私の話を聞いてないのか、じりじりと男達の包囲網が近づいてきた。

男達も、突然現れた化け物に困惑していた。

瞬間移動の何かの術か？だがそんなものはまだどこの国家・研究機関でも発明はされてないはずだ。

そしたら一体なんなのだ？

良く見ると、化け物はこの当たりでは見慣れない服装をしている。

どうやらこの国の者ではないようだ。



恐らく、なんらかの事情で一緒にいるだけという線が強い。  
それならば、身分を偽って交渉すればいいだけだ、何も力で押す必要はない。

「その黒髪のお嬢さん、少し行き違いがあつたようだ。我々は、  
この国の王から密命を受けて動いているのだ。」

今、貴女が抱えてる女性はこのフレンリアル公国のフラン姫と言  
い、戦争が起きるのを予見した騎士隊長が王女を拉致してそれを手  
土産に他国に取り入ろうとしていたんだ。

そこで、王は私達に秘密裏にその保護を要請してきたのだが、まさ  
か貴女のような方がいるとは思わなかつた事からこういう事になっ  
てしまった。

それに服装からも貴女が騎士団に関つてないというのは分かる。ど  
うかな？一緒に私達が保護したいと思うのだが」

と極めて、友好的に話を切り出す。

「んーん、私があつたのは今日の昼過ぎでしたけど、こちらのフラ  
ン姫は嫌がる素振りはなかつた。それより薬か何か知らないが強制  
的に眠らせて拉致する方が信頼できない」

「それにな・・・私は男だ！！！！」

その発言に、さらに場が凍りついた。

明らかに声が女声、容姿も女、そんな女性が自分の事を男だど・・・？  
部下達も呆けて色々たと喚いている。

雪はそれを聞きながら、存在の力を魔力に変換して魔法式を展開

《メカ・ブランド  
爆裂陣！》

にて直径50mの範囲を大空に男達諸共、吹飛ばした。

姫さまはご立腹です！

周辺を呪文で天高く吹き飛ばしてからハッ！と気づく。

つい、愚痴を言われて魔法で吹飛ばしてしまった。

死んでなければいいけど・・・

とりあえず、王女様を背負ってるわけには行かないしな

思案してると、先ほど空に吹き飛んだ連中は落ちてきてうめき声を上げながら倒れていた。

とりあえず、こいつらは放置でいいかな？

そう思い、王女様を抱き抱えたまま、瞬歩を使うとするが、生身の鍛えてない人間では耐えられる速度ではない事に気がつき、一瞬の間を置いてから地球から連れてきた精霊の力を使い周辺の大気を掌握し風を作り上げる。

そのまま、上空へ浮き上がり地面から500mくらいの位置で浮遊すると先ほど、抱えてる女の子が寝ていた荷馬車に向った。

私は薬品を嗅がされたあと、どうやら夢を見ていたようだった。

私のお父様 ルディアス・フォン・デ・フレンリアル国王は現在、原因不明の病により意識が戻らない状態のため、お母様が他界してる事もあり、私が今は国王代理をしている。

でも、国王代理って言っても、中立国という事もあり経済力もそこそこの国だけあって平和そのもの

そういう事もあって、普段国王がする仕事はほとんど大臣が行っているのです。私がすることと言えば謁見の間で各国の使節団の方に挨拶をするくらいだから比較的自由に動けてました。

それも、長くは続かなかった。

昨日の夕方、外務大臣ロドニクと軍務大臣ドルイネスが私の部屋に尋ねてきた。

ドルイネスは私に向かって進言してきた。

今年に入って、見つかった精霊石の鉱脈を手に入れるためにイスメル帝国が進行中と言う事。

そしてその軍勢は私の国の10倍もの規模を有しており、そしてそれを食い止めるために公爵家が公爵軍を率いて国境へ移動しているという事を。

それを聞きながら、そういうえば、食堂にある公国新聞に精霊石の鉱脈発見！って見出しがあったような・そんな新聞を先日、料理長が見てた気がした・・・？

万が一があつたら困るため、同盟国である隣国に逃げるように言われた。

逃げる際には魔法騎士団も随行しますとも言ってきた。

そして、外務大臣は困った顔をして告げてきた。

「申し訳ありません、フラン様。政務はフラン様にはまだ早いと思います、国王様が倒れられてから半年間、公爵家と大臣達だけで今まで対応しております。」

私は外務大臣に

「国王代理である以上、代理とは言え、王族が国から逃げてしまっ

ては指揮ひいては国民に示しがつかないでしょう？だから同盟国へ逃げる事はできないです」

そう言うと、ドルイネスの息子のルークと数人の魔法騎士が部屋に入ってきて連れて行かれた。

私は担いでるルークに向かって

「まって！ダメだよ！私は国王代理なんだよ！私が逃げたら国民もお父さまも皆、死んじゃう。」

「魔法の制御もきちんと出来ないのに戦争に参加？戦場を舐めないでもらいたい！」

普段の温厚なルークから想像もつかない氷のような言葉が投げかけられる。

「それにフラン様は最後の王族です。国を取り戻した際に王族がないと話になりません」

最後？最後の王族？お父様は？まだ生きてるのに・・・

「嫌！お父様も一緒に連れていかないよ」

お母様が死にお父様までも死んだら、一人になっちゃう・・・そんな事には耐えられなかった

私はその後も色々とルークに対して言っていたが全て、無視されていた。

しばらくすると王城の裏口に馬車ではなく荷馬車が見えてくる。

「フラン様、帝国をだます為に荷馬車を使います。荷馬車なら魔法騎士が守っていても重要な物を護衛してくらいにしか思われて無いでしょう。普段使ってる王族用の馬車に関しては別方向へフラン様の影武者を乗せて移動させる為、相手側を分散させる事も出来るため安心してください」

影武者で王族用の馬車を使わせるって危険だよね・・・？

「ルーク、その馬車に乗る影武者の人って騎士か何かなの？」

「いえ、フラン様付きのメイドのエリザベスです。年・格好が似ているのが彼女しかいなかった為、彼女に影武者をして頂けるようにお願いしました。」

私は一瞬頭が真っ白になった。

だって、エリザベスはお母様がまだ生きていた頃からずっと私付きのメイドとして一緒にいたのだからそれが王族用の馬車に乗って囷として移動する？だから今日の朝からエリザベスの姿を見なかったんだ。

他のメイドに聞いても用事があるようですとしか言っていなかったし  
「ダメだよ！」

私自身も思わず言ってしまった声の大きさに驚く。

「囷とか絶対ダメ！そんなの認められないよ！」

まるで駄々を捏ねる子供のようだって私だって分かっている。

でも、ずっと一緒にいてくれてエリザベスはどう思ってるかわかんないけど、私にとってエリザベスは家族と一緒にだもん！それなのに、困とかそんな危険な事はさせられない。

「申し訳ありません、すでにエリザベス殿は王城より発っておりません」

そのルークの言葉に私は、意識が遠のくのを感じた。

その後、気がついたのは金属同士がぶつかりあう音だった

荷馬車の帆からこつそり表を見てみると、魔法騎士が3m以上もある魔物と戦っていた。

そして何人かは地面に倒れて血を流していた。私はそれを見た瞬間

「ひっ」

小さく呻いてしまった。

人が血を流すのは始めてみたから・・・そして命のやり取りをしているのを見て初めて恐怖が沸きあがってきた。

怖い怖い怖い、お母様、お父様、エリザベス・・・助けて！！その間も、人が倒れる音が聞える。

もう、嫌、なんでこんな事になるの？もう嫌だよ！

そうしてる間に突然、戦いの音が消えた。ドスンドスン足音が離れていく音も聞えてくる。

表をそーっと見てみると、一人の黒髪の女性が立っており、ルークと話をしていた。

しばらくするとルークは、先ほど襲ってきた魔物を半刻ほどで倒してきたみたいだった

その後、魔法騎士団にも多少の怪我人が出ていた為、ある程度離れた川沿いで野宿をすると報告がきた。

食事中にルークに話を聞いたところ、先ほどの襲撃をしてきた魔物は何人もの召還術者が召還するという上級の魔物サイクロプスという事だった。

どうやら、魔法騎士団もサイクロプスに何人も倒されており、死人が出るところだったとか・

そこに向こうで食事をしている女性が駆けつけてくれ、一人で倒してくれたとルークは言っていた。

その時のルークの苦虫を潰したような顔は一生忘れられないかも。

遠くから、その女性を眺めてたけど、黒髪に黒眼この辺では見かけない感じ。

とってもかわいい印象をうけた。

私は多少寝たこともあり、落ち着いた事もあり、今回の隣国への移動も仕方なく納得した。

雪と言う少女はルークから毛布を借りると、何かを呟いたあと寝たようでしたが、私とルーク、そして魔法騎士団の皆さんはその女性がした事に対して驚きました。

結界を即席で立ち上げてしまうのは人には絶対にムリだからです。

もしかしたら、彼女は普通とは違うのでは？この戦争を食い止められるかもしれない。

そんな思いを抱きながら私も荷馬車に乗り眠りにつきました。

そこまでで私の意識は覚醒した。

雪と言う少女は、一瞬で私を攫った帝国兵を吹飛ばして荷馬車まで連れていってくれました。



でも、その移動方法が失われた古代魔法だったのにはびっくりした。

でも意識があったことは黙っておく事にしました。

つまい話には裏がある！

雪がフラン姫を追ってる時まで時は遡る。

ルークは、愛用の魔法が付与されている魔剣グラムを振るい最後のサーベルタイガーを倒していた。

そして、後方の荷馬車を確認した所、数十人の人が倒れてるのが見えた。

しまった！こっちは囷かと思い、そちらへ駆け出す。

到着して確認した所、意識のみ刈り取られた黒い鎧・ローブ・レザ―アーマーと着込んだ連中だった。

明らかに帝国の兵士そしてアサシンだった。

流行る心臓の鼓動を抑えつつ、荷馬車の中を見るが、姫様はどこにもいなかった。

「くっ、なんてことだ・・・」

攫われたのか。

同時に回りの魔法騎士へ倒れて気絶してる者達の拘束を命じる。

姫様の波動は、以前から知っていた為、どちらに連れて行かれたか探知魔法で調べるがどうやらこちらに向って来てるようだった。

そういえば、よく見ると先ほどまで寝ていた女性が見当たらない。

一瞬間者かと思っってしまったが、しばらくすると、空から姫様を抱いたまま雪と言う少女は降りてきた。



り精霊・魔族・神族・地球で認識された空想の技などは極端に制限を受けてる状態になる。

「はあーなんかめんどくさいことになってきたな」

そう小さく誰にも聞かれないように呟いていた。

荷馬車の付近では、雪が気絶させた野党を縛り上げてるところだった。

「タイミング悪すぎる。どうせならサーベルタイガーが戦ってる状態で帰ってきて何食わぬ顔で寝て、惚けたかった。これって説明必要フラグじゃん」

「とりあえず、もう起きてしまったことは仕方ないよな」

そのまま荷馬車の横に着地すると抱えていた姫様を荷馬車に横たえて、荷馬車から離れた

そうすると、魔法騎士の人たちが私と姫様の前に壁になるように立ち、見てきた。

敵意・殺意は感じないが不信任感？戸惑いを感じる。

そうしてるうちに、ルークと呼ばれたリーダーの人が近くにきて

「当家のお嬢様を助けて頂きまして、ありがとうございます。」

と言ってきた。

私もそれに合わせて、

「いえいえ、とんでもないです。当然の事をしたまでです。」

「そうですか、ですが随分お強いんですね？女性とは思えないほどです。」

「ええー女性ではなく、男なので！」と返した。

その瞬間、その場の空気が固まった

・

・

・

ような気がした。

「とっさで、雪殿はどちらから来られたのですか？」

無理に隠す必要もないし

「えーと、異世界？からこつちの世界にきちゃいました・・・あはは」

ぶつちやけ面倒なので正直に答えてみた。

いろいろ詮索されて突っ込まれためんどくさいしね！

こら！そこ！異世界から来たほうが突っ込まれたらとか思わないように！！はっ！誰に言ってるんだろw

けふんけふん

「えーと、という事なのでこつちの世界の一般常識とか一切わからないので、無礼してたらすいません」

そういうと、顔を真っ赤にしたルークが

「いえいえ、そんな事ないです。2回も助けて頂き、大変感謝しています。異世界というのは魔界ですか？」

魔界？そんなのがここの世界にはあるのか？物騒だね〜とか思ったりした。

「いえ。理もまったく違う世界です。なのでこればかりは信じて・・・」

そこまで言った瞬間、天啓が振ってきた！召還前に購入したYAHOOのソフトバンクの新機種を見せればいいじゃない！それで問題は解決じゃん

ポケットからAQUOS PHONE SoftBank 006  
SH 出して

「これを見てください！」

その瞬間、ルークと近くにいた魔法騎士が驚く。

フフフ・・・なんと言っても綺麗でタッチパネル式だからね！機械が何もない世界では驚くもの無理はない！私の一週間分の日雇いバイトのお金を注ぎ込んだからね

しばらく、ルークと魔法騎士がそれを触っていたけど、どうやら納得してもらったみたいで携帯電話を返してくれた。

それに伴い、ルークが話し出す。

「どうやら、本当に帝国の密偵・我が国の民ではないようですね。」

ん？この流れは嫌な予感がヒシヒシとしてきた。

「ユキ様も今回、巻き込まれ当事者になっており尚且つおひとり帝国内の暗殺者部隊を殲滅してしまつた以上、間違いなくユキ様にも追つ手がかかると思います。」

デスヨネー

追つ手を潰す場合、確実に殺さないと顔を見られてた場合、障害になるとして指名手配をかけられるんだつた・・・

すっかり忘れてたよ

「そのため、私達と一緒に同行を願えませんか？もちろん無料とは言いません。それなりの対価をお支払いますしこちらの世界での身分証が無ければ発行も致します。ですが身分証明書の発行についてはしばらくかかるため、今、向かっている連合国についての申請になると思いますが・・・」

むーつまり、同行してその姫様を警護すれば、お金と身分証明書がもらえるのか〜うまい！

・  
・

・  
・

・

と想ってた時期が私にもありました。

私は決断をミスっていたのに気がつくのはまだ先の話





## 姫様のたわごと・・・

野党もとい帝国軍からお姫様一行を守った？私は、用心棒（傭兵）として雇われることになった。

金貨50枚で！

通貨の単位が分からなかった為、ルークに聞いたところ

銅貨1枚が1円　銀貨1枚が100円　金貨1枚が10000円と  
いう感じだった。

そうなると金貨50枚で50万円か・・・

どうやら連合国の国境まで10日ほどで入れるそうので、そうすると  
日当5万円か

かなりうまい！日本の日雇いバイトが霞んで見える。

そして、傭兵という事もありお互いの身分もある程度理解しておい  
たほうがいいという事もあり説明をされた。

現在、帝国軍に追われてる事

追われてる原因は、護衛対象であるお嬢様もといお姫様が原因であ  
ること。

そして、王族を逃がし再起を図るため、帝国と敵対している連合国  
に逃げるといふ事も教えてもらった。

やっぱりこの展開ですか。いきなり国家陰謀クラスに巻き込まれるとか運悪すぎるでしょ……

しかも護衛して行って連合国に入るのはいいけど、用済みで消される可能性も……それはないかw

もう、いいや……

疲れてることもあり、要点だけを聞いて寝る事にした。もちろん、結界を張ってからだけどね

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

話は、雪が、フラン姫を荷馬車に乗せた直後になる。

今、私は荷馬車の中で横になっていた。

そして、荷馬車に戻ってくる間に、上空から見えた風景を思い出した。

、

上空から目に映ってきたのは大きな大きな月と月明かりに照らされてキラキラと光る川と湖、そして鬱蒼と茂る森。

初めて空を飛んだ感想は、もう言葉に表せる事が出来ないくらい甘美で幻想的だった。

そっと目を開くとどうやら荷馬車の出入り口の布は下ろされて表と中両方から見る事が出来ない状態になっていた。  
チャンス！と思い、そのまま少しだけ布を巻くって表を見た。

そのときルークが

「当家のお嬢様を助けて頂きまして、ありがとうございます。」

と言っていました。お嬢様じゃなくてお姫様だよーと心の中で突っ込みました。

それに大して、黒髪の美少年？うん、美少年に決定！

「いえいえ、とんでもないです。当然の事をしたまでです。」

うあー、美少年の人のいま言ったこと、思いっきり棒読みだよーって思ったけどそのまま聞きいてました。

「そうですね、ですが随分お強いんですね？女性とは思えないほどです。」

「ええー女性ではなく、男なので！」

さすがに聞くのが2回目とはいええ、にわかには信じられない事実。

だってルークも魔法騎士団も皆、氷結魔法で氷付けにされたみたい  
に固まったもん

そしてルークは

「ところで、雪殿はどちらから来られたのですか？」

いきなり核心聞いちゃうの？もう少し遠回りに言おうよ。だから出  
世しないんだよwと失礼な突っ込みをした。

そのまま任務という盗み聞きを続行！

「では、ユキ様。どちらからこられたのですか？」

「えーと、異世界？からこつちの世界にきちゃいました・・・あは  
は」

異世界？つてずつと昔の古代史の時代にこの世界に私達の祖先も  
神の樂園から来たつて古文書にあったけどそれと一緒に？うーん、よ  
くわかんない

「えーと、という事なのでこつちの世界の一般常識とか一切わから  
ないので、無礼してたらすいません」

と断りを入れて来る辺り、ある程度の教養はあると推測。

「いえいえ、そんな事ないです。2回も助けて頂き、大変感謝して  
います。異世界というのは魔界ですか？」

とルークが更に突っ込みを入れて聞いている。

魔界というのは、ルーデン魔国の事を言うんだけど、そこには私達人間国では想像もつかない様な魔物などがいるため、別名 魔の世界 魔界と言われてんだよね

「いえ。理もまったく違う世界です。なのでこればかりは信じて・  
」

とユキ様が言いかけた時、懐から小さい、塊みたいなのを出して、

「これを見てください！」

と手渡していた。

私は何を渡したか気になっただけど、丁度、ルークが遮蔽上に見えなかったのでほんの少しだけ荷馬車から乗り出し・・・ルークと目が合った・・・

仕方ないのでそのまま、また荷馬車の中に隠れて話を聞いてたけど、

「どうやら、本当に帝国の密偵・我が国の民ではないようですね。」

そして、ルークは、

「ユキ様も今回、巻き込まれ当事者になっており尚且つおひとり帝の暗殺者部隊を殲滅してしまった以上、間違いなくユキ様にも追っ手がかかると思います。」

うんうん、それはあるよねー。一人で暗殺部隊壊滅させちゃう人だったら王すら暗殺できちゃうもんねw

それだつたら間違はなく帝国指名手配だよ！きつと私より大々的だよ！

「そのため、私達と一緒にご同行を願えませんか？もちろん無料とは言いません。それなりの対価をお支払いますしこちらの世界での身分証が無ければ発行も致します。ですが身分証明書の発行についてはしばらくかかるため、今、向かっている連合国についてからの申請になると思いますが・・・」

ルーク！いま私達の隊はそんなにお金ないよー！って突っ込みを入れそうなのを我慢して、でもあのユキ様が味方になれば大抵の事はできちゃうんじゃない？もしかしたら攻めてきている帝国軍すら追いつ返しちゃうんじゃない？ルーク！スカウトがんばってーw

ルークの説得によりユキ様は私達の隊の護衛に入ったみたいですけど、その頃には私はもう夢の中に旅立ってました・・・

## フラン姫の料理教室1

翌朝、私が起きると騎士団の人たちは急いで野営撤収の準備と朝食を作っていました。

皆、元気になってよかった〜と思いキョロキョロ回りを見渡してる  
とルークを発見！

荷馬車から降りて、ダッシュでルークの元まで行くと、

「ルーク！私もね、朝食作るお手伝いする〜」

とお願いしたら

ルークがその瞬間、硬直した気がしたけど、たぶん私がお姫様だから厨房と勝手も違う事もあるし怪我したら大変だと思って心配したからだと思った。

「いえ、フラン様に朝食を作ってもらうなどもっての外。道中、強行軍だったのでお休みください」

「もう〜そんな事気にしなくていいよ！」

あ！いい事思いついちゃた。

昨日から2回も命を助けてもらってる雪様に手作りのご馳走を振舞  
っちゃおう！

うん！！私ながらいい案だね！天才だね



少人数の料理くらいなら、そんなにたくさん食材とか切らないしルークも許可してくれるよね！

「ねね！ルーク。雪様に昨日から何回も助けてもらってるから感謝の気持ちも込めて、朝食を作つてあげたいの。雪様だけに作るから一人前だからいいよね。おねがい」

と両手を顔の前に重ねてお願いしてみた。

ルークは顔を真っ赤にしながら、少し思案したあと

「コホン、本当に1人前ですね？」

と聞いてきた。私は、

「うん！そつだよ！」

ハキハキ答えたけど、そんなに私つて信用ないのかな？

「まあ仕方ないですね。絶対に1人前ですよ！」

「はい」と答えておきました。

フラン様が朝食を作ると言つて来たときはどうなるかと思つたが、なんとか雪殿だけを生贄に収まる事になりそつだ。

フラン様が離れていくのを見て私は、今日の朝方に合った事を思い出していた。

昨日、雪殿の身分を確認してるときの事だった。

雪殿は珍しい魔法具を出してきた。

小さい鉄で出来てる手のひらに収まる大きさの魔法具を見た途端、この世界では到底作り出せない物というのは理解できた。

光る文字に手をかざせば、自在に変化する不可思議な文字そしてランプや魔法光などとは明らかに違う一定した光がその魔法具からは発生しており、暗闇の中でもその文字が良く見えるようになっていた。

恐らく、この魔法具は、とてつもない魔力を秘めているのだろう。

おそらく神器クラスだと想像できる。

それを持つてるこのユキ殿も相当位の高い人物だと推測はできた。

だが、今は帝国の追っ手から身を守りつつ連合国へ逃げ延びなければいけないのが現状であり、今のこちらの戦力では、下手をすればフラン様を守り抜く事が難しいと言わざるえない。

そこで、私はかなり勝手だがユキ殿を警備として雇い入れることにした。

帝国の兵士を撃退した雪殿は間違いなく帝国になんらかの追っ手が掛けられると思われた。

たぶんあの暗い夜の中、はっきりとユキ殿の顔を覚えてる物は少ないだろう。

だが、もし追つてを掛けるならば、この国で黒髪・黒眼のこれだけの美少女はまずいない！そこから調べることが出来るだろう。

さすがにこの言葉を言ったあとは、ユキ殿も落ち込んでる様子だった。

うまく話しを纏めることができ、雪殿に護衛をしてもらえるように交渉が成立した。

そのあと、雪殿はすぐに寝てしまっていたが、私としては最大限の

効果を得る事が出来たので満足してた。

## フラン姫の料理教室1（後書き）

ご意見・ご要望がありましたら、どしどしください。お待ちしております。

## フラン姫の料理教室2

翌朝、目を覚ますと私の護衛対象はすでに撤収の準備をしていた。

そして、数人は朝食を配っており食べてる者もすでに何人か見れた。

「そういえば、昨日の夕食から何も食べてないな」

お腹もいい具合に減ってる。

魔法騎士の食べてる朝食に目を向けると、バターロールみたいなパンと山菜のシチューのようだった。

一応、私もこの隊の傭兵になった事だし、ルークという騎士隊長と話をし衣を抜かす食住は、10日間向こうで負担するという事だったので朝食をもらいに行こう朝食を作っていた、魔法騎士に話しかけようとした時、

「ユキ様！少しいいですか？」

と声の聞えた方を見ると、琥珀色の眼差しに朝の日差しに照らされ綺麗に輝くパール色の腰まで届く髪。

そう、誘拐されかけた女性が話しかけてきていた。

「どうかしましたでしょうか？姫様」

私の言い方が気に喰わなかったのか、フラン様は少し怒った感じで

「姫様じゃなくて、フランって呼び捨てしてください！」

と言って来たが、いきなり王族を名前で呼び捨てはまずいだと心の中で突っ込んでおいた。

「それはいささか、ムリがあると思われませう。フラン様ではまずいでしょうか？」

そういうと、姫様はいい事を思いついたような顔をして

「えーっと、そしたら王族権限で私的な時だけ！フランって呼ぶように命令ちゃいます！」

と言って来た。

横暴すぎる・・・そして無茶振りすぎる。

今まで幾多の異世界を回ったきただけ、今回の姫様は別格すぎるなと思っていた。

仕方がない・・・

「分かりました、私的なときだけ、フ（・）ラ（・）ン（・）（・）と呼んばせて頂きますね。そして、私の事は様付けはいらないので雪と呼んでください。」

そう言うと、フランは笑顔で

「はい！」

と答えてきた。

そのあとは、他愛もない話をしていたが、突然フランが話しを変えてきた。

「えっと、実は今日の朝食は昨日のお礼もかねて私が心を込めてユキの分を作りました！ぜひ食べてくださいね。」

今まで異世界召還100回の中で料理が出来たお姫様は皆無だった。

今回の召還はその幻想を打ち砕く勢いだった。

私は、浮かれる気分を押し殺して、簡易的に設置された木造のテーブルと椅子がある所へ引かれて行き、椅子に座ってる間、

「今回の異世界召還はいいね！」

・・・

って目の前に料理が来るまでは思っていました。

しばらくしてから料理が並べられた。

魔法騎士が食べてる物と大差はなかったけど、何故か・・・脳内と本能が危険信号を鳴らしまくっていた。

エマーゼンシー

エマーゼンシー

エマーゼンシー・・・

危険です。と・・・

料理を見ると、オレンジ色なジャム

虹色のロールパンに虹色のシチュー　　が並んでいた。

「心を込めて作りました。」

フランは上目遣いで見てくる。

くはっ、心の中で敗北感を感じたけど、なんとか立ち直りもう一度料理を見る。

このオレンジ色なジャム・・・どこかで見覚えが・・・というかこの世界にジャムってあったのか？

たしか、kannonのジャムにとっても似ている・・・



しかもレインボーパンにレインボーシチューだと？

これは・・・あの名作のCLANNADの決戦殲滅兵器じゃないの  
ka? 注 兵器ではなく食べ物です

《俺》は、周りをキョロキョロと見渡し、味見という毒見をさせる  
ために近くに見つけた花にスプーンで一掬いしたシチューをさりげ  
なく零す。

その瞬間！！

「うお！」

叫び声をあげてしまっが・・・

フランはその時、魔法騎士の方を見ていたようで気がつかないよう  
だった。

仕方なく、いま、シチューを零した花に目を向けると先ほどの花が  
生気を無くした様に黒く染まって枯れていた。

ちよWまっWWW

3秒で枯れるとかどんだけ毒性高い薬品使ってるんだよ！！って心  
の中で突っ込んだ

くっ、この朝食は化け物か・・・とどこかの赤い彗星さんが語って  
いた言葉を思い出す。

とりあえずオチツケ《俺》

注 主人公が私という丁寧な言葉ではなく、《俺》という言葉遣いを使つてるときは生命の危機に瀕してゐる時かぶち切れてゐる時です。

《俺》は、術や体術はある程度使えるけど、今は術は制限はかかつてゐるし体術に限つては短期間で仕上げただけであつて毒物とかにまったく免疫ないんだぞ？

こんなの食べた日には、正露丸・太田胃散をダース単位で飲まない  
とどうにならないんじゃないのか？

注 薬はダース単位で飲むものではありません。

そしてさつきから料理を前にスプーンが止まつてる様子に気がついたフランは

「じーっ」

擬音がでるような目で見つめてきている。って口で言つてゐるよ！  
このお姫様w

くっ、食べるしかないのか・・・

震える手を押さえつける。

そして、レインボーパンにオレンジ色のジャムを塗り、口に入れた瞬間・・・

「はっ！知らない天井だ・・・」

どうやら、あの後、意識を失って荷馬車にルークが載せてくれたらしい。どうやら5時間ほど寝ていたとの事。

## クライアントからのお願い

カタカタ・・・と車輪が回る音が聞えてくる

あの、フラン姫が起した雪殺人未遂から6時間ほど経過していたが、いまだに荷馬車の中で雪とフランはゴロゴロしていた。

「雪、実は聞いてほしい事があるの!」

フランが神妙な顔つきで聞いてきた。

「何ですか?」

元々、王族・貴族などいない地球育ちのユキは聞き返す。

「実はね、私達が連合国に逃げる前にね、メイドのエリザベスが私の身代わりで反対方向へ囮として向ってしまったの」

そう言ったフランは今にも泣きそうな顔をしていた。

「それでね、ユキは短時間で長距離を移動できる呪文とかもってるよね?私の身勝手な理屈だって分かってるけどずっと私と一緒にいてくれたエリザベスを助けてほしいの!まだ、エリザベスの魂の波動は消えてないから生きてると思うの。だからお願い、王女としてじゃなく私の友人として助けに行ってくれない?」

王女としてじゃなくて、友人としてって・・・元々、友人関係の形成すらフランとはまだしてないんだけどね。

「えっと、申し訳ありませんがここに私がいる理由はこの隊、それもフラン様の護衛で雇われているのですよ？契約違反なんかしたら契約料ももらえませんかし食事だってもらえなくなるじゃないですか！」

まったく、囹として行かされたって事は向こうの方が危険って事だろ。

つまり助けにいったら高確率でこっちよりエンカウトするって事になるわけで、その辺理解してくださいよw

「なら私が一番、ここの隊で身分が一番上なら私の命令なら動いてくれるのよね？報酬はさらに倍にするからやってください！契約を反故することは絶対にしません」

報酬倍か、それだけあればリンクが確立するまで普通に生活できるかな？

大抵は1ヶ月くらいで戻れるようになるし・・・

まあそのエリザベスって人のところに行ったら、さっさと行って戻ってくれば問題ないか

「それではフラン様、その話を受けるにあたってお願いがあるのですが・・・」

ルークを説得してもらおうように依頼しないとね

「え、何？」

しばらくすると荷馬車と周りの馬が移動する音が消えて、ルークが、本当に仕方ないって言った感じで荷馬車の中に入ってきた。

「ユキ殿、正気ですか？おそらく私達がこちらの王城を出てから片道2日の距離、間逆に進んでるため、4日の距離があると思います。それを往復で戻ってくるにはどんなに馬を飛ばしても10日いえ2週間近くはかかると思います。それだけの時間があれば、国境は落とされ国城も包囲もしたら落とされて国がなくなってるかも知れません。そんな危険を犯してまで助けにいくなど身代わりをしてくれている者に対しても失礼になります。」

デスヨナー、聞いてても正論です。

「実は、その身代わりをしてるエリザベスと言う方のあなた方であろうと魂の波動ですか？それが分かれば往復に1時間もかかりません。」

「なっ！」

「えっ！」

ルークとフラン王女が驚く。ん〜フラン王女は驚いた顔もかわいいね

「ですから問題ないですよ」

同時に精霊を使い周辺の状況を確認していく。

「どうやら半径5km以内には敵愾心を持つ者はいないようなのでこの場で待っていてくれればいいです。」

「あとメイドのエリザベスさんの魂の波動を知ってる方に、移動魔法を使う際に目標座標設定で手伝って頂きたいのでどなたかお一人選んでおいてもらえますか？」

こういつときはサクサク進めないと邪魔されると報酬の金貨50枚  
なくなっちゃうしね！と思いつつ話は進めていく

そして

・

・

同行者は姫様になった、あれ？

ルークに聞いた所、私の近くが一番安全という事らしい。  
とりあえず、荷馬車と騎士を守るために最低減の事しておくこと  
にしよう。

目を閉じて、再度開く。

幾何学的な文様が瞳に映る。

複写眼を使い、存在を魔力に変換していく。

そして、空間に召還ゲートを書き込む。そして力ある言葉と同時に  
起動させる。

「我が召還に応じよ！バハムート！！」

瞬間的に空が曇り騎士団が空を見上げてる。

その雲が割れ、中から現れたのは翼を広げれば数百メートルを数え  
るほどの巨大な漆黒の龍！ファイナルファンタジーの代表される召

還獣。

魔法騎士達がその姿を見て、恐怖に顔を引きつらせている。

「バハムート！私が戻るまでこの人たちの守護を頼む！」と

言うとバハムートが騎士団・姫の脳内に直接「承知」と返答を返す。

しばらく、騎士団の連中は氷ついていたがあとは時が解決するだろうと思ひ、ルークに今からエリザベスを迎えに行く事を伝え

「それでは、フラン様、今から移動しますのでなるべくエリザベスさんの波動を正確に感じとってください。」

体感的には2〜3分ほどで、王女様から正確な情報が、アルファステイグマ複写眼を通して情報として流れてくる。

広域に展開した精霊と精神を同調させながら移動魔法を唱えた。

《リリルーラ》

ルークは目の前に存在している巨大な龍を見ながら感慨に耽っていた。

これほど巨大な龍は創生神話の時代に存在したクトウルフのようではないか？と

その頃、エリザベスは王城を出て早2日、今まで何事も無かった事



もあり安心していた。

それが、今日の朝から、執拗に私達一向は帝国の騎士団に追われており何度も剣を交え、そのたびに一人づつ死んでいった。

すでに、一緒に出た護衛騎士の数は100人が20人ほどになっており、今、私達の前にいる千人近くの帝国兵を止める事はもうムリだという事も分かったいた。

私と騎士団がいる場所から千人近くいる帝国兵までの距離は約300mほど、でもこれだけの兵士を引きつけ、時間を稼ぐ事が出来たならフラン姫も無事に逃げる事が出来たことでしょう。

あとは、あの少し気が回らない魔法騎士隊長のルークに任せるとしましようとの心の中で折り合いを付けた時、前方の帝国兵からこちらへ攻めてくる声が聞えた

雪とフランは今、移動魔法ですごい速さでエリザベスの元へ向っていた。

フランはあっという間に王城まで戻ってきて、尚且つそれを一気に通りぬけてどんどん、反対側の国境へ向かっていくのを感じて驚いていた。

そして、移動速度が遅くなってふと前方を見たところ王族用の馬車が見えた。

そしてそれと同時にその少し前方に千人近い帝国兵も・・・

私は、ユキに

「お願い！ユキ、あなたの力で騎士とエリザベスを守って！」  
思わず言ってしまった。

私は、フランの言葉を聞きながら、そのまま馬車の横に降りた。

馬車の周りにいた騎士達は、空から降りてきた姫と私に対して一瞬敵かと身構えたが、姫の姿を確認した瞬間に驚いていた。

たしかに驚くよな！。身を挺して守ろうとしたお姫様がこんな敵陣の近く。

しかもこれから突っ込んでくる大群の前に現れたのだから・・・

私はそのまま、フラン姫を馬車のドアを開けて驚いてるドレスを来た女性を見ながら無理矢理押し込んでから、馬車の中のように  
言い

《光気絶対防御陣》

を展開させた。ついでに騎士団の人にも

「いま、馬車の周辺に結界を張りました。その結界の中にしばらく  
いてください。」

と伝え前面に展開している帝国の兵士を視界に納めた。

ルーイード子爵は馬車の近くに空から降りてきた二人の女性を見て考え込んでいた。

今回、フラン姫を捕まえるように帝国宰相から言い付かってきた。

今朝、王族が乗る馬車を見つけてから執拗に誘導しこの捕縛軍の本軍前まで来るように誘導したのは良かったのだが、今空から降ってきた2人の女性はなんだ？

黒髪の女性は白い髪をした女性を馬車に乗せて、馬車の周りにいた騎士に何か指示を与えてこちらに向かってくるのではないか・・

だが、こちらが必要な者は姫だけであって他の者には用はない。さっさと終わらせて用事を済ませようとしよう。

全軍へ、フラン姫以外は抹殺するように指示を出す。それと同時に騎馬隊が突撃した。

## 戦場へ光臨する魔王

突撃してくる兵士達を視界におさめながら、溜息をついていた。数多の異世界に召還された際に、私は感情を捨てて戦う術を身につけた。

何故なら、人同士の命の取り合いなどした事が無かったからだ。本来、日本にいれば余程の事が無い限り命の取り合いはしない。だからこそ、自分の心が病まないように《俺》は本当の死が飛び交う戦闘時には、全ての感情を停止した機械のような状態にしている

一度感情を斬り捨てる為に目を閉じてから深呼吸を一回する。

そして、再度目を開く。目には幾何学な模様が浮かびあがってくる。

アルファステイグマ  
《複写眼》

これは全ての、人や物、世界がグラフで数値で表示されていく。たとえば今向ってきてる一人の兵士もゲーム感覚で見ることが出来る。

そのため、いくら殺しても罪悪感が痛む事はない。

こちらへ向ってる兵士はの殺気から見るに俺達をどうやら全員殺すような気がする。

相手を殺す気という事は殺されても文句は言えないだろう？

私は感情を切り替えてる時は好戦的になる。

だからこそその発言であるが、それと同時に体内の気を丹田通して昇華させていく。

そして、突っ込んでくる騎馬兵に向かって、右手に存在の力を載せ

た風を手刀の形にして空間を横に凧いだ。

### 《空破斬》

距離はまだ100m近くあるが、それだけで同時に数十の馬と騎士が上下に切られ、当たり一面に馬と人の残骸が血を吹き散らしながら散らばる。

それと同時に、マルチタスクで展開していた魔法式を発動する。

### 「プラスト・ボム 《暴爆呪》」

10個近い焦点温度数千度の直径2m近い炎が、前方に展開していた歩兵と見られる兵士をを一瞬にして骨や鎧すら残さず燃やし尽くす。

こちらへ直接向って来てない陣営から、魔法を展開する気配を感じ、そちらへ複写眼を展開したまま目線を向けた。

解析完了。 攻撃パターン ファイアーボール 発動数27 発動術者10人  
発動時間まで残り7秒 効果有効範囲 50m

そしてそれを無効化するために、存在の力を魔力に変換しながら空間に高速で魔法式を書き込んでいく。

相手の攻撃発動時間が残り3秒を切ったところで俺の魔法が発動する。

「《求めるは侵入>>>・蝕走<sup>ウツ</sup>》」

発動した黒い霧がその魔法を発動させてる陣営を飲み込み、術者の術式を侵食していく。

同時に敵軍の魔法が全て無効化された。

そして、魔法式を構築・発動してる間に接近し斬り込んできた、兵士の攻撃を避けつつ、地面に丹田により全身を強化している拳を打ちつけ地面を吹飛ばす。

吹飛ばした煙が晴れないうちに先ほど魔法を無効化し陣営へ視線を移し

《フレア》

を加減して発動させる。

それと同時に大気が振動し大地が爆ぜ人を構成していた物がミリ単位で散らばっていく。

粉塵が丁度晴れてきた所で、複写眼にて兵士達の位置を確認すしながら《火炎柱陣》を発動させた。

数十本の直径3m高さ10m近くの炎が周囲に展開されその中にいた者、周囲にいた者が次々と焼き尽くされていく。

それを見ていたルーイード子爵は動揺を押し隠せなかった。

「な・・・なにが・・・起きたんだ？」

理解できない事が今、目の前で起きている。

今回、公国のフラン姫の捕縛を宰相から受けたのは、今までの度重なる戦争の実績があったからであったが、その30年近く重ねた経験の中にも、たった一人でこのような立ち回りをした者を見たことはなかった。

吹き散る、部下の死体、爆ぜる大地、そして経った今発動しながら部下を焼き尽くしていく数十本に及ぶ炎の柱。

すでに部隊は30%損失が出ており、恐慌をきたしてる者まで出ている。

この短時間でここまで損害が出すのはSSSクラスの古代竜でも不可能な筈だ。

それでも、ルーイード子爵は、長年の経験からその少女を見た時、心の内側に到来したのは、手を出したらいけない存在ということだった。

それと同時に、帝国から進軍してきている本陣へこの化け物の存在を伝えなければ行けないという事も理解した。

そして、近くに控えていた自ら連れてきていた兵士に

「私は、本陣へ急ぎ向かいあの化け物を報告しなければならぬ。時間を稼いでくれ」

と命令を出した。

あんな化け物相手に戦うことは、自殺行為なのは分かっている。だが、誰かが時間を稼がなければ逃げる事すら難しい。

だからこそ、時間稼ぎを任せた。命をかけた殿を・・・

《火炎柱陣》を展開させ、それによって次々を焼き死んでいく兵士を見ながら雪は少しづつ暴走していた。

まったくつまらない

この世界の兵士はこんなものなのか？

くだらないな

こんなくだらない世界に召還されてしまうとは

雪は複写眼で周囲を見渡していると前方に展開する部隊の後方から



一人の指揮官と思われる男が逃げていくのが見えた。  
ゴミが一匹居なくなつた程度問題はない。  
どちらにせよとそこまで考えてからもう一度周囲を見渡す。

そしてそのまま、目を細め、不敵に笑う。

女性のような風貌を持つていることもあり、その笑い方はまるで好きな玩具をこれから壊す妖艶さが漂っていた。

複写眼にて周囲に兵士の存在を解析する。

解析完了。 残存兵力619人

つまらないな。1分もしないうちに、4割も死んだのか？脆い、脆い、脆すぎる。この世界の兵士はなんと脆い事か。  
それと思い、もう玩具で遊ぶのは飽きたな。そう心の中で思いつつ、存在の力を魔力に変換し空間に魔法式を構築する。

そして発動。

「フラゴザハース《死黒核爆烈地獄》」

焦点温度数千度、空間反転する際の熱量は数億度の炎が周辺に展開  
さらされていく。

そして、それに飲み込まれていく帝国兵。  
発動した魔法が消えた跡には直径数百メートル深さ1km以上もの  
クレーターが出来ていた。



## それぞれの思い

雪が戦ってる最中、私は、エリザベスと3日ぶりに会うことが出来た。

エリザベスも最初は、私が突然、馬車に入ってきた事に驚いて目を丸くしてたけど、今の状況を思い出したように緊張感のある顔を私に向けてきた。

そして、なんでこんな危険な事をしたのか説明しなさいと怒られた。簡単に要点だけ掻い摘んでエリザベスには伝えた。

私と一緒に来てくれた雪はが異世界から来た人という事。

そして街道で襲われた時、野営の際に誘拐されかけた時に助けられた事。

結果、戦力不足という事もありルークと私の同意の元、部隊の警護についたもらった事を説明した。

そして、エリザベスの救出を無理矢理、ルークと魔法騎士の皆、ユキをお願いして連れてきてもらった事も伝えた。

そこまで、エリザベスは聞いてくれたあと、

「まったく、仕方の無い方ですね。王族なのに私なんかを」

そう言いながらエリザベスが優しく抱きとめて、頭を撫でてくれた。

エリザベスに抱かれるとエリザベスは母様と同じ香水をつけてるのが同じ匂いがしてとても気持ちが悪いらいだ

全部話しをすると落ち着く事が出来て、何度も爆発する音が聞こえてきた。

馬車のガラス越しに騎士団を見ると、皆、剣と盾を落としていた。戦争中に、騎士が得物を落すなんてとっても不注意と思い、馬車のドアを開けてみると馬車を中心に金色に光る魔法陣が展開された。魔法陣の外は、飛んできた石とか余波で傷ついてたけど、魔法陣の中はまったく損害がない。

これだけの魔法陣を展開できるなんてと思いつつ、馬車から降りて雪が戦ってる方向へ視線を向けた。

そしてその瞬間、私は腰が抜けた。

「う、うそ」

私の口からは怯えて擦れた声が出ていた。

雪の戦ってる姿を始めて見たけど、あれほど冷酷に感情が読み取れない人を始めてみた。

無表情な顔で帝国の兵士を一方的に殺戮してたからではない。

良くは分からないけど、人を楽しみながら殺していた。

まるで自分を守る為に殺すのではなく、殺したいから殺す。

そのような雰囲気醸し出してたから

私はその風景が怖くなり、目を瞑ってしまった。

しばらくすると音がやみ、どうやら戦闘は終わったみたいだった。

ザッザッと私に近づいてくる靴音が耳に入ってきた。

そしていつもの表情で

「終わりました、フラン様。それでは、皆さんと一緒にルークさんの所へ合流しますか？」

と雪は言ってきたけれど私は、先ほどの光景が目から離れなかった。

だから、視線を合わせずにそうですねと返した。怖くて、まともに視線を合わせる事が出来なかった。

そのあと、すぐに馬車に乗り込み、エリザベスを見た瞬間、抱きついた。

私はルークの待機している所まで移動し合流する間、ずっと恐怖で体の震えは止まらず、目から涙が溢れ続けた。

エリザベスは私の様子を見て、髪をずっと撫でていてくれた。

雪は、戦闘が終わった後周りを見渡し、怪我人がいるかどうか見ていくが特に治療が必要そうな人はいないようだったので、ルーク達の元へ合流する為に移動魔法を空間に書き込んでいく。

書き込んでる途中に、馬車の方を見ると、フランが私の事を見ていた。

その目には、覚えがある。

恐怖

私は心の中で、あんな戦い方を見たら怖がらない方がおかしいなと突っ込みを入れた。

それと同時に馬鹿らしい事を考えていた。

よく、アニメだと主人公が超絶な戦闘力を発揮しても周りは受け入れてくれる事が多い。

だが、実際は、そんな事はありえない。

強大すぎる力を目の辺りすれば、恐怖・憎悪・嫉妬など負の感情を抱く者が9割だ。

今までの異世界召還でそれを嫌と言うほど味わってきた。

だからこそ、またいつもの事かと諦めていた。

魔法陣の構築が済み、あとは発動するだけになった。

ルーク達も待つてる事だしさっさと合流しよう。

そう気持ちを切り替えて、移動魔法を発動させた。

## それぞれの思い 2

移動魔法を使い、ルークたちの場所へ向かってる途中にふと南の方に目を向けてみると山々の間に一本の白い筋が見えた。

それは地平線の向こうに続いていた。

フラン様とルークの話聞いた限り南の方から帝国の兵達が進軍してきてるはずだが・・

一度目を閉じて、再度開く。目の中に幾何学的な文様が浮かび上がってくる。

複写眼の効果で視界に数値とグラフが表示される。

長距離の情報を読み取る為にはとても役に立つ能力だ。

そして、ルークなどの魔法騎士の生体情報を基準にして、他の生体情報を間引きしていくと、人と思われる数が表示されてくる。

解析完了。 336995

多少の誤差は誤差は仕方ないとして、帝国の兵士が数がルークに聞いた30万だとすると、こちらのお姫様の国の兵士の数は3万6千。おそらく、こちら側の兵士は皆に籠り防戦に徹するからある程度までは持ちこたえられると思う。

たしか、有名な話で砦を落すには3倍の兵力が必要だったようなとどうでもいいことを考えてしまっていた。

そのまま、空を飛行しているとルークを含む魔法騎士達が視界に入ってきた。

ルークは、空を見上げていると近づいてくる物体が目に入った。

「本当に1時間以内に帰ってきたな」

と感嘆の言葉をルークは呟きながらも、つい先ほどまで頭上にて飛翔していた、巨大な龍もいつのまにか姿を消していたことに今更気づいた。

馬車の中では、減速し始めた事に、メイドのエリザベスが先に気づき、中から窓越しに表を見ると同じくらいの高さに一匹の巨大でいて美しい龍が見て取れた。

「大きい・・・そしてとても綺麗・・・」

エリザベスがそう呟いた途端、龍は光の粒子となって消えてしまい、代わりに地面が見えてきた。

「フラン様、そろそろ到着するようですよ」

とやさしくフラン姫にエリザベスは話かけた。

泣きはらした目を擦りながらフランも窓越しにルーク達、魔法騎士の姿を視界におさめていた。  
雪は、地面に着陸してから、魔法を解除して、ルークへ報告にむかった。

「ルーク殿、フラン様より受けた任務は終わりました。」

「わかりました。しばらく休んでいてください」



ルークは以前と少し雰囲気が違うユキに戸惑いながらもそう答えた。そのままユキは荷馬車に乗り、消耗した体内を構成する存在の力を回復する為、睡眠を取った。

ルークはそのまま、フランとエリザベスが乗っている王族用の馬車へ向かい、一言声をかけてから馬車の扉を開け、中を確認する。フランとメイドのエリザベスの姿を確認したあとホッと一息つき

「ご無事で何よりです。フラン様！エリザベス殿」

安堵した表情で声をかけるが、フラン様の顔を見ると目元が少し赤く貼れてるのが見て取れた。

エリザベスに久しぶりに会った事もあり、甘えていたのだろうとエリザベスに抱きついてるフラン姫を見て、思っていた。

ルークは、フラン姫とエリザベスより事の顛末を聞き、今後の方針について決めようと考えていた。

なにせ、あの巨大な龍を召還するユキが味方についたのだ。高位の龍は其れ単体で小国であれば滅ぼせる力を有している。

それをこちらが戦力として利用する事ができれば、戦況をひっくり返す事も可能はず。

そのためには一度、城へ戻り、大臣達と交渉をしないといけない。それと、一緒にエリザベスと着いていった兵士の数が少ない事も気になっていた。

ルークは雪とフラン様と離れた間に起きたことについて、聞くために二人に声を再度かけた。

「エリザベス殿、フラン様と合流してから今までの事を教えて頂きたいのですが」

そうすると、エリザベスは話始めた。

その内容はとても信じられる物ではなかった。  
それでも、ルークは確信をもった。

この戦いは勝てると・・・

## それぞれの思い 2 (後書き)

「意見・要望がありましたらぜひよろしく願います」

### それぞれの思い 3

雪が寝付いてる間、ルーク達は今後の方針については決めかねていた。

それは、フレンリアル公国にどのように接してくれるかで戦況が大きく変わってくるからである。

そのため、かなり消耗してる雪が荷馬車から起きてくるのを待っていた。

それにしても困ったものだ。

どうも、フラン様が泣いていた原因は戦場で鬼神のごとき戦いをしていたユキに原因があるようだった。

エリザベスから聞いた所、ユキが使う魔法はほぼ詠唱時間を必要とせずに発動していたという事。

そしてその破壊力は数十人を一瞬にして消し飛ばす程という事だった。

そこまでエリザベスから聞き、ルークはたしかに我々魔法騎士ですら数人で尚且つ数分の時間をかけて発動する魔法をたった一人で発動させているのだから、戦闘の素人であるフラン様から見れば脅威に見えるし、初めて目の前で敵国とは言え、多くの人間が死んだのを目の辺りにしたんだ、恐れるのも仕方ないと思ってもいた。

「困ったな・・・」

今度は口に出していた。

それでも、国の行く末が決まってしまう、交渉には国の代表である

王族が必要不可欠。

その王女が今から、依頼をする者に対して恐怖を懐いてるのははっきり言って良くは無い。

「フラン様？起きていらつしやいますか？」

ルークは馬車の近くにより、扉越しに声をかけていた。

「ルーク殿ですか？」

とエリザベスの声が聞えた。

どうやら、情緒不安定になっている姫フラン様にずっとついていたのだろう。

「実は、今後の方針について少しフラン様と話がしたいのですが、お願いできませんか？」

今は、とにかく時間がおしい。何せ国の未来がかかっているのだ。失礼だと分かっても話をしなければいけない。それもユキが起きる前に王族としての仕事をしてもらわなければ困るのだ。

エリザベスも国の現状を分かっている一人。

しばらくすると、エリザベスに起されて馬車から姫が降りてきた。

「申し訳ありません、フラン様、急ぎ取りまとめたい案がございます。そのため、ご無礼をお許しください」

「わかりました。エリザベスとユキの周辺に警護の魔法騎士を数人置いて、皆さん集まるように言ってください」

フランはルークに指示をした。

ルークからの提案は、ユキを正式に騎士に任命し国の兵士として戦ってもらおうように依頼をする事だった。

傭兵のままでは、いつ他の国がその能力ほしさに勝手な交渉をし引き抜くか分からないからという事もあるが、正式な手順を踏んで騎士になるわけではないので古参の者はよくは思わないだろう。だからこそ、

「つまり私の直属の騎士にしる？という事ですか？」

フランは言った。そうそれこそ、ルークの考えた事だった。

姫が直接、護衛の騎士に任命すれば、戦争に行くのも姫の命となる。多少は護衛という意図からは離れてしまいがその辺は押し通せばいい。

「ですが、私は今、ユキには・・・」

歯切れの悪い言葉でフランは言う。

フランは、先日、次々と人を殺戮していく光景を忘れることは出来ないのだった。

ルークはそういう事を察していた。だからこそ

「フラン様、戦場では誰しもお互いの命をかけて戦っています。人を慈しむ心は確かに大事ですが、それだけでは国は守れません。たとえ、これからフラン様が国の将来を担っていくなれば時には万の民を守るために千の民の命を切り捨てる事もあるでしょう。それが王族の責務です。それを忘れてはなりません。」

ルークは、内心言い過ぎたと思っていたが、普段からの王族らしからぬ意識の低さから今が言う絶好の機会だとも思っていた。

「それにフラン様、今回の戦場での戦闘もフラン様がエリザベス殿を助けに行く事をユキ殿にお願いしなければ今回のような事にはなりませんでした。つまり、今回の帝国の兵士の死はご自身の命令の結果だにご理解ください。」

フランはハツとしてルークを見たが、ルークはそこまで考えていなかったのかと・・・内心残念に思っていた。

「ですが、今回の戦は負ければ、もっと多くの民が死にます。王族として決断してください。隣国に逃げ延び、民が死ぬのを待つのかそれとも雪を説得し多くの民を守るのか」

フランは、自分が雪にお願いした事で、ユキが多くの人を殺戮していた事に恐怖を懐いていた。

でも、突き詰めればそれは、私や、エリザベスを守るため、そして私のお願いを聞いてくれたから・・・

私は、人を殺めて戻ってきた、ユキに対してなんて私は反応したの？

ありがとうって言えた？

ごめんなさいって言えた？

あの時、ユキは私の表情を見て、いつもと違う表情をしていた。

怒り？

嫉妬？

悲しみ？

絶望？

ううん、あれは・・諦めだった。

何度も人に裏切られて、でも仕方ないよねって諦めてる目だった。そこまで、考えた所で私はなんて身勝手な考えをしていたんだろうって思った。

「わかりました、ルーク、私から雪を説得して国のために力を貸してもらえるように頼みます！」

王族として、今やる事は国を救う事であり、個人の感情は二の次。打開できる物があるならそれを使って民を守る。

それが王族としての責務。



「わかりました」

ルークそう答えてくれた。

そしてルークもまだ問題は山積みだがフラン様を説得できた事に安堵した。

「ルーク、雪様のお力添えが頂ける様になったらすぐに移動しますので、直に魔法騎士を再編成しておいてください」

フランはそういい、雪が起きてくるまで待った。

荷馬車の中で目を覚ましたユキはソフトバンクの携帯電話を確認した。

5月29日20時か・・・

こちらの世界に飛ばされたのが5月28日の8時頃だったから、まだ一日半しかたってないのか・・・

と感慨を抱いた。

しばらくぼーっと荷馬車の中の天井を見ていると人の気配を感じた。そちらを目を向けるとフラン様がこっちをじーっと凝視してた。

「おはようございます。どうかしたんですか？姫様」

「姫じゃなくてフランだよ！」

あれ？先ほど起きた戦闘でかなり恐怖心を持たれていたのにそれをほとんど感じない？

フランは、ルーク達の話し合いの後、雪がいつ起きても対応できるように荷馬車に乗っていた。

荷馬車に乗ると、雪の寝顔が見えた。

見るとまるで天使のような寝顔だった事もあり見とれてしまっていた。

しばらく、雪を見つめてから、

「ねえ、雪」

「エリザベスを助けてくれてありがとう。そして私のためにたくさん辛い思いをさせてごめんなさい」

「大丈夫ですよ、命の奪い合いは慣れてはいませんが、こっぴつ荒事は慣れていきますので」

雪はフランが心配してくれてる様だったので、安心をさせるために言った。

そのあと、フランは、ルーク達と話した内容をそのままユキに伝えた。

「つまり、国を守るために、帝国との戦争に、姫様直属の騎士として参加してほしいという事ですか？」

「うん、お願いできる？」

雪は、本来あまり人とは係わり合いを持ちたくないタイプだった。何故なら人というのは信用に値する物ではないと思っっているからだが、あまりにも愚直にストレートで頼まれてしまうと

注 別にあなたのためにやってあげるわけじゃないんだからね！勘違いしないでよね！と

仕方ないなーと思いつつも手伝う気質があった。

そういう事もあり

「それで報酬はいくらもらえますか？」

途端に姫はえ？つて顔をしていた。

馬車は騎士達が馬に体力増強魔法と持続力強化魔法、それと併用して回復魔法を唱え休みなしで王城へ向け疾走していた。結果、明日の朝には到着できるという話だった。

## 戦乙女は男の娘！

王城に向っている荷馬車の中で、雪は目が覚めてから手元にあるソフトバンクの携帯電話を見ると5月30日AM10時と表示してあった。

フラン様との会話から既に10時間以上寝ている計算になる。

昨日、大規模古代語魔法を調子に乗って使ってしまった余韻からかなり寝てしまっている。

それにしても、物理的な筋肉の疲労などは回復してきているが、消費した存在の力が戻ってきていない。

本来ならば、しばらくすれば回復はするはずなのだが、まったく回復していない事から考えると元の世界との繋がりがほぼ切れてると見て間違いはない。

荷馬車の帆を少し空けて前方を見ると城が見えてきた。

城門の前で荷馬車から再度、目の前にある城を見るとかなりの大きさだった。

そう、まるでドイツにあるノイシュバンシュタイン城みたいだった。そうしてるところにも、馬車+荷馬車は城の正門から入っていった。城の中には、先にルークとフランが城内に入って行き、そのあとを付いていく形でエリザベスと私がついていった。

城に入り5分ほど歩くと大きな扉が見えてくる。

その中へ、フラン、ルーク、エリザベス、最後に私が入っていく。

部屋の中は西洋風の調度品に彩られており、中央に大きな会議向け

の机が設置されている。  
部屋には数人の男達が立っていて、私を値踏みするような視線を向けてきていた。

フランシーが入ってきた部屋は、このフレイア城の会議室であり、そして会議室の中には、軍務大臣・財務大臣・外務大臣が先に待っていた。

大臣達は伝令より数度の戦闘で獅子奮迅の戦いとした者がまだ、歳若い女性と聞いていた。

だが、今目の前にいるのは少女にしか見えない。

その容姿はこの国の性格以外なら問題ないというフラン姫にも勝るにも劣らないとも言えよう。

そして、こんな少女がこの公国を守る事が出来るなど、大臣達は信じられなかった。

「フラン様、お帰りになられたのですね。お元気そうでありよりです。」

無理矢理、他国へ非難させようとしたルイーゼとしては苦虫を潰した顔をしていた。

「ドルイネスも元気そうでなによりです。」

そう返すとドルイネスは雪を一瞥してから確認をしてくる。

「フラン様、報告にあった帝国兵の襲撃退びにメイド、エリザベスの救出の際に千の帝国兵と単身で戦ったというのはそちらの少女でいいのでしょうか？」

「そうですけど、ドルイネス！こちらのユキは、少女ではなく男性ですよ」

（たぶんと心の中でつけるフラン）

そう言われてもと、ドルイネスはユキを観察するが身長は自分の胸辺り手足は細く白い、そして顔は堀は深くはないが可愛らしく、髪も色は黒く、時折日の光に反射して輝く様は夜の夜空に浮かぶ星のようだ・・

こんなで、1千人もの帝国兵を一人で壊滅できるわけがないと思うのはドルイネスだけではないだろう。

ドルイネス以外もその場に在籍している、ルイーゼ、ロドニクも同じ考えをもっているのは顔を見えずぐ理解できた。

どちらにしても、今更、連合国へ再度、逃亡しようとしても間に合わない。

それなら、姫の気の迷いに付き合うの一興だろう。

「フラン様のお言葉を疑う気はありませんが、そちらのユキ様に力を見せて欲しいのですが如何ですか？」

ドルイネスはフランに確認してくるが、フランは、ユキの方へ視線を向けて、ユキがそれに仕方ないと肩をすくめて了承をすると広い場所がないか聞いてきた。

ドルイネスは、半年前に作った、有事の際の模擬戦を行う鍛錬場案内した。

雪も、会議室の会話から簡単に信用されるとは思っていなかった。逆にこんな見ず知らずの身元不明な人間を簡単に信じる方がおかしい。

ユキはそう思い、鍛錬場に入っていく。

ついた場所を見渡すと広さ的には、マリンスタージアムほどはある。

そして先ほど、鍛錬場へ移動する間にフランに派手な魔法を見せるように言われてた事もあり、

「召還！バハムート！！」

召還呪文を発動させた。

大空に鎮座したその姿は一言で言えば畏怖の象徴。

ユキはバハムートに攻撃をしないように伝え、上空にて待機しておくように伝えた。

「こ、これは」

ドルイネスは、突然現れた龍を見て呆気に取られていた。

この龍から見れば、若かりし冒険者の時代に災害クラスと言われ数百人のAクラスの冒険者を犠牲にして討伐した古代龍も足元に及ばないと理解できた。

ルイーゼとロドニクに至っては腰が抜けており、初めて見た、龍に顔を真っ青にしてる魔法騎士達に介抱されていた。

「わ．．わかりました」

ドルイネスは、どうやら信じてくれたようだった。

私に向き直り龍を消してくれるように頼んで来たのでバハムートを召還した魔法式を解除する。

同時にバハムートは光の粒子となって元の世界へ消えていった。

会議室に戻り、話し合いの結果、私はフランの警護役を務めること

と成った。

役職はフラン姫直属の護衛騎士、本来は、女性が主の場合、護衛騎士も女性に限られる。

その為、用意されていた護衛騎士用の鎧、着衣も全て女性用．．．今は、急務という事もあり、フラン姫の護衛騎士の式典をすぐに執り行うという事だった。

はあ、溜息しか出てこない。

体をひさしぶりに洗い、用意された服に腕を通し鎧をつける。胸が無いためそこは上げ底のパットをつける。

服は白を基調としたワンピース。

そしてその上から鎧を着込む。鎧の色は青そして縁取りは白。サークレットは鳥の羽を両端にあしらっておりブルーマリンが中央に埋め込まれていた。

そして．．壁に掛けられている等身大の鏡に目を向けるとどこからどう見ても黒髪のレナスが移っていた。

背は低いけどね！

それを見た瞬間、私は余りにも似合いすぎてる事もありひさしぶりに落ち込んでいた。

しばらくすると、一人の扉の向こうからノックする音が聞えてくる。それに大して、返事を返す。

「失礼します。式典場所へのご案内に伺いました。」

男性の騎士が入ってきた。

その騎士が私を見た瞬間、呆気に取られて顔を真っ赤にしていた。理由は想像がつくけどね



騎士に案内されて、謁見の間に案内された。

謁見の間の扉は3m以上あり、私自身の身長の数倍以上。

（扉でか！）と心の中で突っ込んでいたが、その間にも扉は開いていき、中に通される。

そこは、ユキが住んでる6畳一間のしょぼいアパートが軽く2000個以上は入るくらい大きく、映画のセットのように調和が取れていた。

私は周囲の調度品を見ながら高そうだなーとか思っていると、近くから小声でルークが、前へ進んでくださいとジェスチャーしてきたのを視界に収めて前へ進んでいった。

周りを見渡すと先ほどの3人の大臣が玉座に座ってるフラン姫中心に左右に立っていた。

その3人は、私の姿を見ると、呆気に取られてるは見える。

ルイーゼとドルイネスは、雪の姿を見て、女性にしか見えなかった。あれで、男ってのは有りなのか？と

小声でお互い、その事を話していた。

ロドニクに至ってはさすがに外務大臣だけあって、言葉、態度とというのは重要なのは理解していたので言葉にこそ、出さなかったが、男と嘘をつくという事は何かあるのか？とある意味違う考え方をしていた。

フランは周りの大臣を見ながら

「まあ仕方ないよね？あんなにかわいいんだもん」

口に出していたが誰もそこに突っ込みを入れるものはいなかった。

そして、姫の前に進みながらなんで女の格好して性別が女性と間違われたままこんな事しないと行けないんだろ。

雪は心の中で突っ込んでいた。

## 決戦前夜

フレンリアル公国フレイア城にてユキが戦乙女姿で護衛配属の式典へ出ていた頃

フレンリアル公国南方のストラウス領と帝国の国境にある砦では、公国の4公爵と各部隊の将校が今後の作戦を練っていた。

「現在、我が公国軍の数は予想の32000より多い36000弱まで増えております。恐らく2日後の戦闘までには一時的な民兵を含めて4万には達すると思います。」

ヘルデイル公爵は発言した。

現在、フレンリアル公国では、帝国が攻めてきていることは既に一般市民まで伝えてあり、有志を募り一時的な軍を形成していた。

現状で、四公爵の中で一番多い兵力を投入出来たのは、このストラウス砦の領主ファープニル・フォン・ストラウス公爵である。その数は騎士 衛兵 民兵 傭兵を含めると2万を越す。他の公爵と比べてもやはり筆頭というだけはある。

「つまり2日後の戦闘では公国軍4万 帝国軍30万がぶつかり合うわけか」

イルデアル公爵は呟いた。

「帝国軍も進軍中であり、本日中には到着することでしょう。休息に1〜2日ほどかけたあと攻めてくると思われませんが」

ヘルデイル公爵は自分の考えを告げる。

それを聞いていたファープニルだが、果たしてそううまくいくのか？ 私ならば戦力が10倍差あるなら翌日には砦攻略に動くと考えていた。

その後も多様な案が出ていたが実りはなく時間が只過ぎていくだけであった。

たまりかねたワークス公爵は一度場を纏めようと案を出す。

「どちらにせよ、夜目が聞く者を数箇所数人で配置し敵陣を見張るしかあるまい、戦力差がある以上攻めたら全滅するしの。防戦に徹するしないの」

他にいい案もない事からワークス公爵が提案した内容で軍議は締めくくられた。

砦内部では数日中に起きるであろう戦いに向けて、兵士が忙しく駆け回っている。

ワークスは一人、砦の屋上に向けて砦内部の階段を上がっていった。砦の屋上から南側を見ると帝国の軍勢がまだその姿は小さいが目で確認する事ができた。

帝国軍を視界におさめながら、ワークスは積載してある石の上に座る。

「ふむ、向こうの指揮官次第と言った所か」

しばらく、ワークスは帝国軍の進軍を見ていたが、行軍に乱れはない事から、十分な休息を取らせた可能性があると考えていた。

「下手をしたら明日の朝には戦闘になるかもしれないの」

それから間もなく砦から数キロの所へ、帝国軍が本陣を構えて今後の方針を軍儀をしていた。

周りの貴族達からは、すぐに突撃するべきと進言があつたが、それをグレンダル総司令は一蹴した。

いくら兵士の疲れが見れないからと言つても見えない所で必ず疲れというものは出ているからだ。

「今日は兵士に十分な休息を取らせよ！」

グレンダルは軍議に参加していた貴族と将校に伝える。

軍議に参加していた貴族や将校が出て行った後、しばらくすると一人の兵士が天幕へ入ってくる。

「総司令！ルード子爵が内密な話があると来ております。」

グレンダルは伝令の報告を聞き、珍しい事もあるものだと考えていた。

ルードと言えば、獅子公と別名を取るほど、数多の戦を勝利に導いてきた豪傑だ。

それが、内密な話とは、よほどの用事なのだろう。

「わかった。通してくれ」

私は報告にきた兵士に向かって告げる。

しばらくすると、黒き甲冑、漆黒の鞆を腰に下げた男が現れる。だが、その顔が些か焦燥してるのは気になるが

「久しいな、子爵！今回お主は、宰相の命で公国の姫の先に捕縛す

る任務を受けていたのではないのか？」

グレンダルはルイーードに声をかけるが

ルイーード子爵からの話は一人の化け物に邪魔をされて、その化け物の情報を伝える為に部隊に殿を任せて逃げてきた事。

そして恐らく殿をした部隊は全滅した内容だった。

グレンダルは王位継承権を持つてはいるが歴戦の戦士でもある。

一騎当千という話もあるが、それは言葉通りの意味では無いというのは理解している。

一平卒そして戦をしない貴族の言葉なら戯言だと一蹴するが、ルイーードは獅子公と言つほどの働きを見せ、男爵の地位から子爵の地位まで駆け上がった英傑である。

それほどの男が嘘をつくはずがない。

「わかった」

その後、相手はどのような使い手だった？とも聞いた。

ルイーードもさすがに信じてもらえるとは思ってはいなかったが、信じてくれた事に感謝した。

そしてルイーードは、相手の特徴・戦い方を見たまま伝えた。

「それはまさしく化け物だな・・・」

私は思ったままの事を口に出した。

それでも規模がまったく違う。

その時の兵士は千人、今、追従してるこちらの軍の数は30万。

一騎当千は信じてもいいが、さすがにこの数を相手にするのは不可能だろう。

その結論づけ、明日の朝には皆へ進軍する事を全軍へ告げた。

## 雪と姫のパジャマでお勉強会 1

今、雪は宛がわれた部屋で休んでいた。

先ほど、姫の護衛騎士のお披露目という自分の羞恥プレーが終り疲れきっていた。

「これから警護の仕事するときは毎日、女扱か」

一人しかいない部屋でユキは愚痴っていた。

「でもまあ今回の警護の仕事が終われば、フランと約束した報酬を地球に戻る時に一緒に持っていけば、あんな安アパートから出られるしな」

そう思うととニヤニヤが止まらない

何せ今回の報酬は金貨5000枚だ！一枚1万円とすると日本円に直すとなんと！！5000万円！！！

地球に帰るときは金塊トルンクにしろって、インターネット経由で買取をしてもらえば一気にお金持ちだ。

毎月、日雇いの低賃金で食い繋いでる人からすれば、このユキのニヤニヤ顔を否定することは出来ないはず

「初めて、異世界に召還されてから度重なる無茶振りのある連発異世界召還でせっかく決まった仕事に無断欠勤などしてクビになった事は多数。だがここからはずっと私のターンだ！」

ワハハハとやけにテンションを高い状態で維持していた。

テンションが高くないと当然、女装を強要されるのだからやってら



れねーても関係してるかもしれないが

その頃、会議室では魔法鏡の通信により帝国軍が砦の近くに拠点を設置したと報告が来ていた。

そして、四公爵で最も戦場に慣れている、ワーカス・フォン・プライト公爵より帝国軍は恐らく明日の夜明けと共に砦へ侵攻を開始する可能性が高い事を示唆してきた。

軍務大臣ドルイネスは、ワーカス公爵へドラゴンを使役できる召還術師が一人、数日中に砦に援助に向かう旨を伝えた。そしてその召還術師の特徴を告げた。

「その者は戦場にきて大丈夫なのかの？」

ワーカスはドルイネスに確認してくるが問題ない事を伝える、そして容姿を説明していく。

「わかった。黒髪に黒眼の少女だな？」

そうドルイネスにワーカスは確認しながらも戦闘が出来なくても、ドラゴンを召還し使役出来るだけで帝国兵に心理的恐怖を与え、その姿を見るだけでも公国軍の士気を高める事ができるだろうと期待していた。

そのために詳しい容姿と名前を再度確認していく。

「名前は雪。黒髪に蒼い甲冑に両端に羽飾りのティアラを頭につけている。あとは見ればわかるかと思う」

ドルイネスはワークスへ告げ、2、3の連絡のやり取りをしたあと定時連絡をお互いに終わらせた。

今回の定時連絡でフラン姫が王城へ戻ってきてる事を告げなかったのは前線の士気を考えてあえて、ドルイネスは言うのを控えていた。

日が沈み、あたりの空気が冷え込んできた頃、ユキは女物の用意されていたピンク色のドロワースとネグリジェを着てベッドの上でゴロゴロしていた。

男物の部屋着が欲しいから用意してくれとルークやフランに頼んだが、その返答は怪しまれるので我慢してくれと言われたからだ。

「それにしても、この女物の服って地球で言うシルクっていうのかな？すべすべしてとつても肌触りがいいね」

まんざらでもない様子だった。

その頃、ドルイネスはユキの部屋に向っていた。

先ほどのワークス公爵の話が本当ならば、砦が攻められるまで一刻の猶予もないからだ。

そして砦を抜けられてしまえば、この城まで一週間ほどでたどり着いてしまう。

だからこそ、砦が持ちこたえられる数日中にユキ殿に砦に着いてもらわなければ行けない。

そのため今、ユキがいる部屋に向っている所なのだった

それより少し時は遡り、

フランはユキの部屋の前に来ていた。

来ている服はユキが着ている服を少し高価にした感じになっており上から赤い半透明なストールを羽織っていた。

なぜ、ユキの部屋の前まで来てるかと言うと、召還魔法や魔法などいつまでたっても上達しないフランはコツを教えてもらうためにきたのだった。

「ふう、やっとついた。」

ホツとしてから、周りをキョロキョロ見渡して衛兵がいないのを確認し、扉に力を入れてそつと開ける。

どうやら鍵はかかっておらず内側に扉は音を立てずに開いていく。そのまま、フランはユキがゴロゴロしているベットまで音を立てずに近づいていき、ユキに向かってダイブした。

「グフツ」

ユキは突然、後ろから抱き付いてきたフランにより声をあげてしまった。

誰かと後ろを見ると、フランがちよこんとベットの上に座っていた。フランはユキが視線を向けると同時に

「ちやおー！」

とフランが話しかけてきた。

ユキは思わず、こつちの世界でもそんな挨拶の仕方があるんだーつとどうしようもない事を思った。

そして、はぁーと内心ため息をついて、

「姫様、夜に男性の部屋に忍び込むことは感心しませんよ？」

一応、釘を刺すことをユキは忘れない。

なぜならば、基本一人でいたいからだ・それは一人暮らしが長いから！としか説明はできない。

「とにかく、しばらくはお城で姫様の「姫さまじゃなくてふたりきり」の時はフランだよ！」

と言われてしまい、ユキも仕方なく

「それではフラン様、もう夜も遅いのでそろそろご自分のお部屋に戻って睡眠をおとりください。」

「大丈夫！ここで寝るもん！それにユキは私の護衛だから近くで仕事もできていいね！完璧！」

フランはそう、言いきった。それも素晴らしい笑顔で！！

だが、ユキも負けてはいない！主に自分の精神的安住を守るためにw

「フラン様、一応私も”男”なので、ここで寝るのはよくないかと思いません。」

「大丈夫だよ！だって、ユキの今の姿を見て、男の人って思う人はいないもん！！！」

「グハッ」

ユキは、自分が男として見られてないという、的確な突っ込みによ

り心の中で血を吐きながらベットの中に沈んで……いくかー！！

「えつとですね、フラン様。ルークも大臣の方々もエリザベスも私が男だつて事は知っているんですよ？その部屋に夜に安易に出入りするのはいくつとも思いません。」

だが、フランには大義名分の起死回生の一手があった。

「大丈夫だよ、ルークとエリザベスには魔法の使い方を教えてもらうために今日はユキの部屋に泊まるって言ったなら、いいって言うてくれたもん」

なんだと？この何も考えずに行動してる姫という名ばかりのフランが少しは考えて行動してるというのか。

ととても失礼なことを心の中で突っ込んでしまっていた。

それに魔法を取得するためという大義名分を抱えて来てるため、何も教えずに部屋から追い出すと言うのも日本人気質が邪魔をした。

それに相手は5000万円のクライアントでもある。

くそ、貧乏がうらめしいぜ。

そのため、本当に仕方なく、フランに魔法を教える事になった。

雪と姫のパジャマでお勉強会 1 (後書き)

ご意見、ご感想をお待ちしています。

## 雪と姫のパジャマでお勉強会 2

月明かりに照らされ、ベールがふんだんに使われてるベッドの上で2人の少女は座っていた。

ユキは向かい合わせにベッドの上に座っている、フランを見ながら体感時間的に午後22時くらいだろうかと思っていた。

リアル（地球）では、朝方4時までMMOをしたり小説を読もうなどを見ていたり、深夜アニメの神のみぞ知るを見ていたりしていたのでそんなには眠くなかったりする。

この世界では、どうなんだろう？  
どうでもいい事を疑問にしてみた。

まあ最近、やってたMMOはハッキングにあっつてしまい装備とか一式パクられてENDしたけどね

それは横に置いておく事にして、先ほどフランから魔法を教えてください。言われた事もあり、まずはフランの魔法の構成を確認する事からした。

「えーと、それではフラン様はどんな魔法を使えますか？」

「うーん、火かな？」

フランは唇に人差し指を当てて、かわいらしく傾げる。

「カハッ」

心の中で血を吐きながらかわいいじゃないか。と突っ込みを入れる

雪であつた。

とりあえず気を取り直して・・

「それでは、簡単な魔法を使つてもらえますか？」

「うん」

雪は、一度目を閉じてから再度開く。瞳に幾何学的な朱色に光る五芒星が浮かんでくる。

目の前ではフランが集中しているのが見える。それと同時にこの世界の全ての物が数値でグラフで視界に表示されていく。

「ルー・ウィー・デ・アルフォウス」とフランの口から呪文を紡ぐ声が聞えてくる。

アルファステイグマ  
《複写眼》

その性質はその瞳に移る物質を、グラフで数値で認識し解析することができる。。

そして解析した情報媒体を自らの物として取り入れてしまう。

これは生来の物では無いが異世界に召還された際に手に入れていた物である。

そのまま、複写眼にてフランが今発動させようとしてる魔法の流れと公式と構築を確認する。

そして、先日メイドのエリザベスが襲撃にあつた際の戦闘で視ていた帝国の魔法と比較していく。。

「え？」



思わず私は、呟いてしまった。  
何故ならば、フランが呟いてる詠唱には一切の大気中の精霊が干渉をしないのだから

「ファイアーボール  
「火炎玉」

フランは魔法を発動させたが、その大きさはせいぜい直径5cm程度である。

ユキは精霊が干渉しないのに魔法が成功している？と疑問に思った。元々、魔法という概念は地球で言うところと霊視力・神器・霊器・血統・龍脈などを無意識でも使い語りかける事によって精霊に力を貸してもらい発動させる物だからだ。

だが、魔法を発動させる上で精霊の力は必ず必要不可欠である。

精霊の力は言わば世界を構成する万物の法則のある元素だからである。

それを使わずに、発動させてる時点でフランの魔法は明らかにおかしかった。

そして、精霊の力を使わずに発動させる事が出来るものは、近代兵器くらいなものである。

科学で作られた兵器は、精霊の力を使わずにも強大な破壊力を秘めている。

つまりフランが使った魔法は科学に近いところだ。

実際、フランを複写眼で見たが、この世界のルーク達、魔法騎士や帝国兵に共通する体内の魔力が一切感じられない。

魔法が日常的に存在してるこの世界ではありえない事だ

フランはどちらかと言えば、雪などの地球人に肉体的構成が近い。それは複写眼で見てる数値やグラフからも分かる。

「フラン様、もう一度魔法を使ってください」

フランはもう一度魔法の詠唱に入る。  
今度は注意して複写眼で見ているがそれでも、体内の構成物質は反応なし、大気中の精霊も反応がない。  
なぜ？と思ったその時、フランの指に嵌っているルビーの指輪が視界に入った途端・

雪の目に痛みが走った。

「フラン様、詠唱を一度ストップしてください。」

雪はフランの詠唱を一度中断させる。

雪の態度からフランも怪訝そうな顔をして見返していた。

「ねえ、私ってやっぱり魔法の才能がないの？」

心配顔をしてフランはユキに聞いてくる。

「フラン様、右手の薬指に嵌めてるその指輪ですけど、少し見せてもらえますか？」

「うん、いいけど」

フランは指から外した指輪を雪に渡す。

そして、神妙な顔つきをしてる雪を見ながらフランはえっと、どうしたのかな？ユキ。

いままでぼーっと私の方を見てたけどいきなり指輪を貸してなんてでもこの指輪、赤い宝石嵌っててかわいいもんね。

ユキもやっとな女の子らしく宝石に興味がわいたのかな？

暴走しだす姫であったが

注 主人公は男です

「少しだけ借りますね」

ユキは言い複写眼を展開したまま指輪を右手の薬指に通した。

そのまま少しだけ自分の”存在の力”を魔力に変換し指輪に流すが変化はない。

複写眼は、その指輪を数値・グラフにて表示させる。

どれも見たことのないグラフと数値が視界に表示されていく。

だが、その数値の高さから高水準の技術が使われているというのは理解できる。

少なく見ても、今まで見てきたこの世界の技術レベル否、以前、御神苗先輩に偶然見せてもらった「時の止まった物質」に近い技術が用いられているというのはわかる。

そう、「時の止まった物質」それとまったく同じ、数値・グラフだったのだから・・・

どちらにしても、この指輪はある程度の魔法の真似事はできるようだったが、フランは地球人とほぼ体内の構成物質が変わらないため、魔法は絶望的と言わざるえない。

まあ地球人の場合は、「存在の力」を魔力に変えれば大抵の事は出来てしまうのだが、

存在の力を無くしてしまうと世界から消えて無くなる事もあるから教えるわけにもいかない。

仕方なく、フランへ指輪を返す。

「フラン様のご両親は魔法は使えますか？」

「ううん、お父様は使えなかったけど、お母様は使えたよ。」

「それでは、ご両親以外に嫁いで来られた人以外で魔法が使えた王

族の方はいますか？」

「ううん、王族はね、基本的に誰も魔法は使えないよ。」

「でもね、私だけ安定しないけど魔法が使えたの！だからね、お父様もお母様もすごいすごい期待してくれたの。だから私も一生懸命勉強したんだけど、でいつまでたっても魔法がうまくならなくて」

フランはユキに抱きついて泣いていた。

ずっと、魔法が使える世界で始めて魔法が使える王族として期待されてずっと一人で悩んで抱え込んでいたんだ。ふと、それが雪にはわかった。

「フラン様、恐らく王族が魔法を使えないのは何か役割があるからだと思います。そして、魔法をフラン様が使えるのは先ほどお借りした指輪が力を貸してくれてるからです。」

「え？この指輪が？」

「恐らく魔法が使えるようになったのは、その指輪を嵌めてからではありませんか？」

「うん、そうだけど・・・どうして？」

「まだ、よくは分かりませんが、その指輪にはある程度の魔法が付加されている可能性があります。そのために詠唱には関係なく魔法を発動させる瞬間だけ適合者の意思を汲み取りなんらかの力を発動させてる可能性があります。」

「ですから今から私が展開する魔法を見て発動させてみてください」  
そう言つて、ユキは暗殺者から盗んだ魔法を展開させていく・・・  
もちろん存在を魔力にかえて

ファイアーボール  
「火炎玉」

直径1mほどの火球が手のひらの上に形成される。

「フラン様、最後のこの瞬間の光景だけ、心の中で思い描き指輪を解して発動するようにイメージをしてみてください」

「うん！」

ファイアーボール  
「火炎玉」

詠唱を使わずに発動させた魔法は、フランの手の平の上30cmを浮遊しており質ともにユキが形成している火球とまったく同じものが存在していた。

だが、ユキをそれを見た瞬間、背筋に冷たい物が流れいた。

この指輪は、ロストテクノロジーって言うレベルではない・・・事象を支配下に置きコントロールするものだ・・・なんでこんな物がこの世界に？

そこまで考えた所ですでにかなり遅い時間になっていた。  
さすがに睡魔に勝てない雪はとりあえず寝る事にした。

お互いに魔法を消して最後のレクチャーを雪はフランにした。

「フラン様、その指輪は適合者のイメージを再現する事ができる指

輪だと思いません。リミッターはあると思いますが、くれぐれも軽はずみな行動は控えてください」

「うん！わかった！！」

元氣よくニコニコとフランは答えた。

本当に分かっているんだろうか？と雪は心の中で突っ込んでいたがそんな気持ちを知らずにフランは心の中でガッツポーズを取っていた。

苦節12年やっと魔法が使えるようになったのだ。

イメージだけで魔法が使えるという事は途中の詠唱はいらないって事だよー！

一度魔法を見てイメージできるようになれば使いたい放題だよー！と考えていた。

そんな考えをしているとは思ってないユキは魔法講義が一段落ついた事により

「それでは、魔法講義は終わりにします。寝ますのでフラン様もご自分のお部屋に戻って寝てください」

「ううん、今日はここで寝るよー」

羽織っていたストールをフランは外してユキのベッドの中に入ってきた。

ダメだ・相変わらずマイペースなお姫様だなと心の中で白旗をあげてユキはフランと眠りにつくのだった。

その姿は、ユキの性別を知らない者からすればまさしく姉妹のよう

に見えた。

## 大臣と戦乙女

雪の魔法抗議が終わり、雪とフランが寝付きしばらくたってから、後軍務大臣ドルイネスは雪宛がわれた部屋の目の前にきていた。

時間はすでに日本で言う午の刻。

この時間になってしまったのは、定時連絡が終わったあと、思ったより早い帝国軍の侵攻に対応するべく、フレイア城に常駐している近衛兵団長、魔法騎士団長、警備団長に捕まってしまう対策を練っていたからである。

「もう、寝ているだろうな」

ドルイネス一人呟きながらも扉をそつと開けた。

そして、ドルイネスの目に入ってきたのは2人の少女が寄り添って寝ている姿だった。

注 一人は男です。

フラン姫は幼少の頃より見慣れてるため、そうでもなかったがもう一人のユキと呼ばれる者は月明かりに照らされ、はにかむ様に丸くなって寝ている姿は女性用の寝巻きも相まって天使のようだった。さすがに、齢を重ねたドルイネスと言えど一介の男である。その光景に、目を奪われるのは仕方無い事だろう。

心の中で、どうみても、男には見えんなど突っ込みを入れつつ雪を起こす為、部屋に入っていく。

しばらくして、月明かりが雲に遮られてしまい、部屋の中が暗闇に



閉ざされてしまったが、現状を説明し砦に向って同行して貰うに為  
に雪に近づいていく。  
ベットに近づいていくと、気配を察知したのか一人がベットの上で  
起きた。

まだ暗闇で夜目が効いていなかったがドルイネスはそれを感じて、  
さすがだなと感心していた。

殺気を出していなくても、気配を察知し目を覚ますとは、さすが姫  
様の警護につくだけの事はあると

「雪殿、この時間に申し訳ない、火急の用事がありこちらへ伺いま  
した。」

「なにー？雪ならまだ寝てるよー」

フランがドルイネスに説明してきた。

さすがのドルイネスもまさか警護をする者が、主より気配を察知す  
る能力が低いとは思っていなかった為、しばし呆然としてしまった。

「ゆきー、ゆきー、おきてー、おきてー」

フランは雪のの肩を両手でむんずと掴んで可愛らしく揺する。

雪はそれでも一向に起きない。  
皆も考えてほしい。

平和主義国日本で15年以上生きてたまたま異世界に飛ばされたと  
は言え、それだけで蓄積された危機管理ゼロ！の意識がそう簡単に  
変わるだろうか？答えは否！

よく、最強系主人公は、殺気や気配などを俊敏に捉え対応するが本  
来の一般市民はそんな事は出来ない物なのだ、  
だからこそ、結界師の術を覚えた時、本人はとても喜んだ事は想像

できるだろう。

「ゆーき、ゆーき、ゆーき」

言いながら未だに肩を揺すっているフランだったが時間が時間なだけ段々と眠くなってきた。

しかも目の前にいるのは小さい頃が知っているドルイネスだ！肩を揺すりながらポスツと布団に撃沈してしまった事は仕方ないと言えよう。

ともあれ、状況はドルイネスが雪を起しに来た状況に戻ってしまった。

いや、一つ違いがあるとすればドルイネスの雪を見る視線が冷たいという事くらいだろう。

「仕方ない」

ドルイネスは寝ている雪をを姫様だっこし、城門前に用意してある馬車まで歩いていくのだった。

「雪殿はずいぶんと軽いな、フラン様とほとんど変わらないくらいだな」

ドルイネスは一人呟きながら部屋を後にした。

30分後、ユキを抱きかかえて馬車の中に設置されている椅子に寝かせ、ドルイネスとユキは南方にある砦に向ったのだった。

ユキを馬車まで連れてくる間にいろいろあったのは後日談となろう。

しばらく馬車を走らせていると、段々と夜が明けてきた。それと同時に「ピピピピッ」と電子音が流れた。もちろんソフトバンクのお天気予報サービスである。それに、反応したのか

「うーん」

と猫のように背を逸らせてユキが起きた。

もちろんドルイネスはそれを見ているのだが、ユキが着ている服はピンク色の半透明なドロワーズとネグリジェなわけで声変わりもまだしてないユキの艶のある声と相まってドルイネスは深いため息をついた。

これで、男とは、神は世界の男の理性を砕くためにユキを作ったとしか思えないなと突っ込みを心の中で入れながら

しばらく、目を擦りながら、馬車の中をきよるきよるしてた雪は

「だれ〜？」

ドルイネスの方に顔を近づけてきて、誰かを確認しようとする。そして確認できた瞬間！声がでない叫びをあげていた。

「！」

ちよつと、なんで馬車の中にいるんだ？しかも目の前には軍務大臣がいるし。

あ、服装が昨日、寝たままのネグリジェとドロワーズのままじゃないか  
イカ

城から連れ出して連れて行くならせめて男の服を着せてくれYO -  
心の中で絶叫しながらも動揺を悟られないようにきわめて冷静に行かないとダメだ！

「えっと、おはようございます」

「おはようございます、よく寝れたようですね？火急の用があり失礼ながら本日、朝方に起しにいったのですがお目覚めになられなかったので仕方なくそのまま馬車までご同行願いました。」

えーとそれって拉致って言うんじゃないの？と思わず声に出したかったけど、ドルイネスは今大変怒ってるような気がしたので、そうなんですか。

と相槌を打っておくに止めておいた。

「それで火急の用というのはなんでしょうか？」

「その前に、その服のままというのは色々とありますので護衛騎士用の服と一緒に持参してきてるためそちらに着替えてください」

そうドルイネスに言われ、今更気がついたように顔を真っ赤にして着替え始めた。

しばらくすると、戦乙女装束に身を包んだ、女性もとい雪が目の前に座った。

スカートはロングスカートの為、中が見えることは無いが、ユキ自身は落ち着かない。

はあ、なんでこんな格好を……

「ドルイネスさん、この格好で戦争に出るとかそついう落ちはないですよ？」

「もちろん、その格好で参戦してもらいますが？」

こいつ何言ってるんだ？という顔で聞き返された。

「あのースカートで足がからまって身動きが」

「大丈夫ですよ、龍を召還して使役するだけなのでそれで問題ないでしょう。」

ドルイネスにそう返され、先日の闘技場で召還術師としてしか説明していなかった事に今更気がついた。

時既に遅し、万人が見て、ユキの身長160以下 見た目美少女手足がほそく白い そんな姿を見て誰が近接が得意だと思うだろうか？

1億人が見て1億人が否と言っだろう・・・

もう仕方ないと諦めて、これからの予定をドルイネスに聞く

「あの一なんでこんなに急に南の国境の砦に向うのです？」

予想ならば、到着に2〜3日ほど猶予があるはずだった。だがその予想は次のドルイネスの言葉で消えた。

「思ったより帝国の侵攻が早く下手をすれば、今日の夜明けと同時に戦闘になる可能性があるかと思ひまして、早めに向ってる次第です。」

なんやてーと心の中でツツコンでしまつ。

「今、王城から国境砦に急いで向っておりますが4日ほどかかるでしょう。そのためにしばらく、がまんしてください」

とドルイネスに言われるが、ユキとしては30万の大群に3万ちよいの数で4日ももつとは思えなかった。

ドルイネスとしては、山の間で作られた砦のため、当初より警護する砦の人数も増えたこともあり5日はもつと考えていたが

「申し訳ありません、私一人で先に砦に向います。」

「いえ、そのために名馬を使いいま最速にて砦に向っております。龍に乗っていくという事だと思いますが、今は力を温存させておくべきです。」

「大丈夫です、バハムートは使いませんから」

雪はドルイネスにそう言残して、そのまま馬車から飛び降りた。

それに気がついた従者は急いで馬車を止め、止まった馬車からドルイネスも降りる。

雪は馬車から降りると一度目を閉じて再度開きく。

朱色の幾何学的な模様が浮かび上がってくる。

そして複写眼を使い、存在の力を魔力に変換しながら空間に魔法式を構築していく。

そして力ある言葉と同時に魔法を起動させた。

「レイウィング  
《翔封界》」

空中に雪の体が浮かぶと同時にドルイネスへ先に向う旨を伝え、常軌を逸した速度で視界から遠ざかり消えた。

それを驚きの顔をしてドルイネスと従者は見ていた。



大臣と戦乙女（後書き）

ご意見・ご要望をお待ちしています。



## ストラウス砦攻防戦

雪は荷馬車から飛び降りた後、ストラウス砦に向けて飛び続けていた。

以前、城の上空から見た砦の大体の距離と移動速度を考えると2時間弱で到着できる。

そして、何よりも先ほど起きた際に体内の存在の力が回復していた為、力を抑える必要がなくなったのが大きい。

雪は先ほど、アラーム設定をした覚えが無いのに携帯が鳴った事を疑問に思い、画面をチェックする。

携帯の画面上にこの世界では本来、通信が入らないはずの天気予報サービスからのメールを受信していた事に驚いていた。

雪はメールを受信したという事は一時的とは言え、世界が繋がったのか？と心の中で疑問を持っていた。

その頃、砦前方の帝国軍陣地内指揮官の天幕内

「グレンダル総司令、全部隊の出撃準備が整いました。」

一人の貴族が、グレンダルに報告をしてきた。

「わかった。」

グレンダルは天幕から出ると周囲に展開している帝国兵士30万に高らかに全軍進軍の命令を下した。

砦内部では動きだした帝国軍に対抗するべく、4人の公爵が軍議を開いていた。

「どうやら、帝国は動きだしたようじゃな」

「やはり……」

ファーブニルは自分の懸念が当たってしまったことに対して、溜息をついていた。

「それではどうしましょうか？」

「今こちらの兵士はどのくらい集まった？」

「現在は民兵を含めて3万8千程度です」

「分かった、それで砦を守るしかあるまいな」

ワーカスが場を纏め上げる。

「それではすぐに防衛の準備に入るように手筈どおり動いてくれ」

ファーブニルの命令により各部隊仕官が部屋を出ていく。

「それといいニュースがあるのじゃが」

ワーカスは他の公爵にこれから数日中に来る援軍の召還術師の事、容姿を伝えた。

上位のドラゴンは単体で国を落す事も可能な為、公爵達は戦況の貢献の出来る優秀な術師に期待を高鳴らせた。

ストラウス砦の攻防戦からすでに2時間が経過し、帝国にも少なからず被害が出ていた。

小国と言えど、鉱物資源国であるフレンリアル公国は経済大国と言う事もあり、その経済力に支えられ、作られた横幅500m 高さ10mという巨大な砦は鉄壁を誇っていた。

各場所に設けられた弓を引く窓、厚さ3m近くの煉瓦を重ねて築き上げられた砦の外装は攻略の困難さを帝国軍に見せ付けていた。

「さすがに、音に聞こえしストラウス砦だな。あれを落すには魔法部隊を入れ替えながら少しづつ砦を削っていくしかあるまいな」

戦況を見ながら、グレンダルは呟いていた。

周りには異論は無く、時間はかかると推測されていた。

そこへ一人の黒いローブを身に纏った男が近づいてくる。

「グレンダル様、一ついい案がございますが」

黒いローブの男は無表情に提案を出してきた。

「宰相の部下のヴェイン殿か何のようかな？」

「実は、私も宰相閣下直属の機関が作成いたしましたゴーレムがあるのですが、それを使う許可を頂ければあの忌々しいストラウス砦の門をこじ開けて見せます。」

「なんだと？そんな事が可能なのか？」

近くにいた貴族が横槍を入れてくるが、周りに控えていた貴族も同じ様子であった。

「だが、ストラウス砦の正門は厚さ50cmもの鉄で作られてるのだぞ？それでも可能だと？」

「はい、お任せください。こういう時くらいは我々研究機関もお手伝いをしたいと考えておりますゆえ」

グレンダルは周りの貴族のヴェインの話聞いていたが、あの薄気味悪い宰相が何を考えているか疑問に思ったが、砦攻略にかかる兵士の損失を最小限に抑える事が出来るならばと決断をした。

「ヴェイン、兵士を一度下がらせる。そのゴーレムというもので砦

を攻略してくれ」

「わかりました。ぜひ期待に添えるように致しましょう。それと我々のゴーレムの名は狂戦士バサカと呼んでください」

ヴェインはそのまま、貴族達から背を向けてその場から退席した。

## ストラウス砦攻防戦（後書き）

ご意見・ご要望をドシドシお待ちしております。

## ストラウス砦攻防戦 2

ストラウス砦の窓と屋上より近づいてくる敵兵に向けて数百の兵士が弓を射掛けていた。

ワーカスは刻一刻と変わる戦況を見ながら指示を伝えていく。

この2時間、帝国側の遠距離魔法部隊と、攻城兵器を盾に正門を破ろうと突っ込んでくる帝国兵士に弓を居るように命令を下すだけであつた。

この砦は数千の兵士が同時に矢を射掛ける事が出来るため、その火力で帝国兵を押し切ることができるというのが一番の利点であり、強みである。

そのため、同じ作戦で帝国兵が攻めてくる限り、相当の打撃を帝国に与えることが出来る。

ワーカスは、指揮をしたまま、砦要塞屋上より帝国兵の動向を見ていると、帝国兵が引いていくのが見えた。

「妙じゃな？帝国軍が下がっていく・・・どういう事じゃ？」

疑問には思っていたが、兵士の疲労も蓄積されてる事を考え、休息を与えるため、別の待機していた兵士との弓を射掛ける場所の位置の交代を命じた。

その頃、帝国軍宰相直属部隊ヴェインは、先ほどグレンダルの命により下がらせた前線部隊よりも百メートルほど前に出ていた。

砦からの距離は300m。

ヴェインの周りには、魔法で作られた3m近いガーゴイルが4匹で一つの4m四方の黒塗りの鉄の箱を抱えており、箱の数は全部で10個存在していた。

ヴェインは、ガーゴイルへ砦の方へその箱を移動するように命令を下し、ガーゴイル達は飛翔しながら箱を砦の方へ運んでいった。

「それでは殺戮シヨアの始まりといきましょう。」

新しく作り出した、一匹のガーゴイルの背に乗り、これから始まるシヨアを見学する為、本陣の上空500mの所へ待機したのだった。

「なんじゃ、あれは？魔物が何かを運んできておる。」

ワーカーは嫌な予感がし、弓部隊へ飛翔する魔物を打ち落とすように命令を下した。

弓部隊は魔物を撃ち滅ぼす事に成功するが、魔物は魔法で形を作られてるだけであって地上に落ちる前に砂となって消える。

そして、魔物が運んでいた、黒塗りの鉄の箱は慣性の法則に逆らわず地上に落ち、落下衝撃により箱が砕ける。

「あれは・・・ゴーレム？」

箱から出てきたのは、銀色の不恰好な人の形をしたゴーレムだった。大きさは3m肩幅も3m近い。通常のゴーレムより一回り大きいゴ



ーレムであった。

数は10体程、大した脅威にもならないだろうと待機していた40人の魔道士隊を展開させ、攻撃魔法をゴーレムへ打つように指示した。

上空から遠目の魔法を使用しながら、ウェインは弓に落とされ箱から開放された狂戦士を見ていた。

「どうやら、相手の指揮官はかなり優秀のようですね。」

数秒のうちの魔法が狂戦士に着弾する。

狂戦士は、敵対行動もしくは動く標的を抹殺するプログラムと言う物を組み込まれている為、自立的に命令できないのが辛い、現在の所、動力は雷撃系統の魔法で賄っており30分程度の活動時間になっている。

それを過ぎれば自動的に機能を停止するという、微妙な性能だがそれでもその圧倒的な破壊力はウェインが所属してる機関でも折り紙つきである。

今回は、戦争時においてどれだけの戦果をもたらすのかその実験でもあった。

数百発に及ぶ、<sup>ファイアーボール</sup>火炎球がゴーレムに着弾し爆風が巻き起こした煙が晴れていく。

眼下には、まったく形を損なわない10体の銀色のゴーレムが立っていた。

「ば・・・ばかな・・・」

誰が呟いたかは知らないが、その気持ちで魔道士隊はほぼ占められていた。

公国が誇る、魔道士隊の質は他国を追従を許さないほど極められておりそれだけに砦内に走った衝撃は大きかった。ワーカスもまた、驚いていたが流石に戦場に慣れてる事もあり、火の耐久に優れたゴーレムと認識し魔道士隊へ火属性以外の魔法で攻撃をするように命じた。

ドサドサツ．．．軽い音が近くから聞えてきた。

そちらを見ると、ワーカスは目の前の光景を見て凍り付いていた。たった今眼下にいた銀色のゴーレムが砦の上におり、魔道士隊数十人がバラバラの肉塊になっていたのであつたが、ゴーレムに攻撃をした者を優先的に処理するゴーレムはまず最初に魔道士隊をターゲットにしていた。

銀色のゴーレムは、体中から、細い光を時折発しておりそれに触れた物や人が次々を切り裂かれていった。そして、わずか数分足らずで砦の屋上に展開していた3000もの兵士が物言わぬ軀と化していた。

その中にはワーカス自身も含まれていた。

「すばらしい、すばらしいですよ！さすが宰相閣下が作られた狂戦士バーサーだけの事がありますね！」

その光景を帝国本陣上空から見ていたヴェインは、あまりの一方的な殺戮を見て狂ったように笑っていた。

### ストラウス砦攻防戦 3

前線に展開している帝国の魔道士隊は遠見の魔法を使い先ほどから行われる戦いの一部始終を見ていた。

そして、そのあまりにも一方的な殺戮をしているゴーレムを見て一様に顔を青くしていた。

そしてその様子は、帝国軍本陣グレンダル総司令の元にも届いていった。

「なんだと？ストラウス砦の屋上の部隊は全滅してるだど？」

報告にきた前線の魔道士隊団長に聞き返す。

「いえ、あくまでも見える範囲という事でございます。やはり砦の上部には壁などが多く設置されており細部まで見えたわけではありませんので」

ふむ、グレンダルは近くにあつた椅子に腰をかけて、お湯を啜った。

「どちらにせよ、ヴェイスとの約束であと半刻は手を出さない約束をしているのだ。くれぐれも帝国の兵士を一人もストラウス砦に近づけるのではないぞ？わかつたな」

報告にきた魔道士隊団長以外にも貴族や上級仕官にも聞えるように釘を指した。

まったく、報告が本当ならばこれからの戦が大きく変わるかもしれないな。

善戦しているのは帝国の陣営だったが、グレンダルは言い知れぬ不安を感じていた。

その頃、ストラウス砦では戦いとはすでに呼べないほどの一方的な殺戮が起きていた。

ゴーレムから発せられる光は、騎士が着ている鎧・盾・剣そして重厚な煉瓦すら等しく切り裂き次々と動く生物を殺していった。

ワーカーズと連絡が取れなくなってから数分立っているがその間にも、砦の中では果てる事のない悲鳴が聞えており、魔法鏡がある会議室に現在いるのはファープニルだけであった。

正門を守る部隊を指揮していた、イルデアル公爵は数機のゴーレムによって部隊ごと物言わぬ軀と化しており、ヘルデイル公爵は現在、輸送のため、兵士と共に近隣の村へ向っているところだった。

つまり4公爵のうち2人は既に死亡しており、

現在砦を指揮できるのは、ファープニル公爵だけであった。

ファープニルは僅かに息をしていた部下より、見たこと聞いた事もないゴーレム達が砦の中に進入しており、それにより屋上の部隊壊滅とワーカーズ公爵の死亡。

そしてたつた今、出窓より確認していた部下の知らせにより正門前の部隊が全滅という知らせを聞いていた。

たつた10分程度でワーカーズの部隊3000人、イルデアルの部隊10000人、そして自身が指揮している砦内部の連絡が取れなくなつた部隊8000人

これを含めるとすでに21000人の死者が出ていると考えられた。物資の補給に向っているヘルデイル公爵の率いる10000人を引くとすでに砦内部には7000人程度の兵士しか残ってない。

未知のゴーレムがすぐに砦から撤退しても、7000人の兵士では指揮が地の底まで落ち指揮系統が壊滅状態のままでは、砦を防衛する事は叶わない。

非常事態を知らせるためにファープニルはフレイア城へ魔法鏡を使い通信を開いた。

その頃、会議室にいた、外務大臣のロドニクと財務大臣のルイーゼは突然発動した魔法鏡を見て、不思議に思いつつも定時連絡時間でも無いのにファープニルが魔法鏡を使用した事に関して驚いていた。

「手短に言います。」

ファープニルは焦燥仕切った顔をして、挨拶を抜きに戦況を報告した。つまりストラウス砦は陥落するということを。

ロドニクとルイーゼはあまりの事に言葉を失ってしまった。

ストラウス砦は、フレンリアル公国最大の防衛要所であり、守りの要。

それが陥落するという事は国は消えて無くなると同じだからだ。

「どうしてそのようなになったのだ？」

ルイーゼはファープニルに聞くが、それに答える前に、魔法鏡の前にいたファープニルの体が光が過ぎ去ったあとに斜めにずれて床に叩きつけられたのだった。

魔法鏡に返答したのは赤い血だけだった。

ルイーゼとロドニクは緊急事態というのを理解した。

そして、フレイア城の団長、隊長クラスを全て集め、今後の対策を開始した。



## ストラウス砦攻防戦 3 (後書き)

ご意見・ご感想をどしどしお待ちしております

## ストラウス砦攻防戦 4

ファープニル公爵が絶命した頃、ストラウス砦に向って、飛翔していたユキは砦の異様さに気がついた。

砦の上空に差し掛かった際に、数え切れない程の人を構成した物が散らばっていたからであるが

私はそれを見ながら、一瞬で戦闘モードに意識を切り替える。

眼を一度閉じ、再度開く。

同時に幾何学的な模様が浮かびあがってくる。

同時に体内の気を丹田を通して昇華させ体中へ張り巡らす。

砦の屋上へ降り立ち、散らばってる肉片から手を取り見る。

「体を切り裂かれているのに血が出ていない？切り裂かれてる部分が炭化している？つまりレーザーか何かで攻撃されたって事か？だが、この世界でそんな科学的な物など存在しているのか？」

雪は独り言のように呟いた。

ん？誰かこちらを見ている？気配をした方を見ると一人の男がこちらを見ていた。

狂ったように笑いながら見ていたので一目で黒幕だと分かった。

私はその場から、その男に向って移動していった。

「あーはははは、いい、いい、いいぞ」



遠見を使いながら帝国軍上空からストラウス砦の様子を診ていたが、笑いが止まらない。

あれほど堅固と歌われた要塞がたった10分程度で陥落直前だとは、この力を使えば、帝国だけではなく宰相様は世界の霸王となる事ができる。

「すばらしい、すばらしいですね！」

「ん？砦後方から何か来ますね？」

ほーずいぶんと美しい女性ではありませんか。

死体を調べてからこちらを見た？

この距離で私に気づける者がいるのか？

最後まで言い切る前に、雪は瞬歩にて目の前に移動してきた。

私はこのローブの者が、砦の事に関与してることは間違いないと思っただ。

でも一応確認の為

「貴様が、砦をこのようにしたのか？」

「私の名前はヴェイスと言います。美しいお嬢さん、いえ戦乙女さまとでも言いましょうか？」

こいつ死刑確定。女扱いはした瞬間死刑だと心の中で突っ込む。

「出来ればお名前をお聞きしたいのです……が……」

その瞬間に、そいつの体を破壊した。

発動してある複写眼で砦内部の情報を読み取っていく。

残存、兵力8698人

そして、ちよろちよろ動くのが10体程。  
砦を陥落させるために使った物に間違いはないな

同時刻、本陣テント上にはバラバラになったヴェイスの肉体と砕け散り砂となったガーゴイルの残骸が降り注いだ。

砦上空へ戻ってきたあと、数秒で砦内部をグラフで数値で確認し破壊するモノの位置を確認する。

複写眼を使い、存在の力を生命エネルギーと概念物質に返還していく。

そのまま両手を合わせ、地面に手を当てる。

そして生み出された魔法陣が2つに分かれる。

魔法陣からそれぞれ剣がせり出してくる。

一本はダークマターで編まれていく《魔降剣》

もう一本はエーテルで構成されていく《至高剣》

それを両手で持ち、城門前に確認したモノに向っていく。

そいつの前に立つと、ゴーレムの姿だった。

私に攻撃を加えようと、胸部のカバーを開いてエネルギーを貯めて

放とうとするが、瞬歩を使い回避する。思考を加速しているユキの速度を捕らえる事は出来ず、一瞬にして3体を細切れにした。それに反応したのか、砦の中から7体のゴーレムが出てきた。そして一斉に、私に向って光を放ってくる。それを避けながら横一列に並んでいたゴーレムを横一文字に切り伏せた。

しばらくすると、砦に補給より戻ってきた、ヘルデイル公爵は雪がゴーレムを倒した場面に遭遇していた。

その頃、ヴェイスとの約束からすでに30分が経過したて帝国軍は、残り30分で部隊を突撃させる手筈を整えていた。

178

雪がヴェイスを倒していた頃まで話は戻る。

ヘルデイル公爵は近くの村よりストラウス砦へ補給物資を輸送していたが、砦の内部に入った途端、死臭を感じた。砦内部、会議室、ともに他の公爵と兵士のバラけた死体が無数に転がっていた。

正門に現状を確認しに行ったその際に、一人の蒼い甲冑に両端に羽飾りをあしらったティアラを頭につけている一人の少女が見たこともないゴーレム数体を一瞬に屠っている姿を見た。

「これで全部か・・・」

雪は、気配を察知しヘルデイル公爵の方を見た。

「あなたは誰でしょうか？」

「王城から派遣されました、召還術師です。」

ヘルデイルも軍議で出ていた、召還術師がこんな短時間でこの砦まで来れるとは思っていなかった。

移動についてはおそらく、龍を召還し使役でろうと納得した。

そのあと、ヘルデイルは壊滅状態に陥った、ストラウス砦を再編成していたが、僅か10体のゴーレムにより砦はほぼ陥落。

残存兵力は18000人程度、4公爵のうち残ってるのは自分だけだと思つと、戦略的に30万の帝国兵を再編しきれない兵士を率いて砦を守る事は不可能だと結論づけた。

それでも、ここの砦を落とされると後がないと言つのも理解してる。だが、再編には最低1日はかかる。

すぐに帝国兵が攻めて来ない事は不気味ではあつたが、長くは続かないだろうという事も予想はついていた。

ユキは、ヘルデイルと同じ会議室にぼーっと座っていたが、近くに立てかけてあつた魔法鏡に血糊がついていたので、テーブルの上にあつた布でやる事もないので拭いていた。

そうすると、いきなり鏡の向こうにフランとルイーゼ、ルークの姿が見えた。

フランはこちらを見るとすぐに涙目になって

「皆がね、陥落したって聞いたからすごい心配したんだから！」

そういいながら鏡の前で泣いていた。

「それで、現在皆はどんな様子でしょうか？」

ルイーゼはユキに聞いてくるが、複写眼で人数の把握はできるが現在の状態をまったく把握するほどの能力が無いため、ヘルデイムを連れてきて報告をさせた。

結果、八方塞がりどうにもならないよーな状態らしい。

どうやら一番の問題は軍の再編成にあるみたいで、時間稼ぎが必要かと私は思った。やるならとことんやる。それが私のモットー

「ヘルデイム殿、軍の再編成ってどのくらいかかりますか？」

ヘルデイムは早くて一日と答えてきた。

仕方ないな、溜息を吐きながらも一回全力でやってみるかと思ひ

「わかりました。時間を稼いできます。」

そう言い会議室を雪は出ていった。

扉から出ていくと見張りをしていた兵士から帝国軍がストラウス砦に向けて進軍してきてると報告が会議室に届いた。

ユキは、そのまま砦から出て、攻めてくる30万の帝国軍を眼下におさめながらも賃金UP交渉をすることを忘れていたことを思い出していた。



## ストラウス砦攻防戦 4（後書き）

ご意見、ご感想をどしどしお待ちしております。

## ストラウス砦攻防戦 5

帝国軍の本陣を含めて30万の大群が砦に攻め寄せてきた。

その前に立ちはだかるのは、戦乙女もとい雪だけという普通に考えたら無茶振り。

帝国軍前線指揮官オルデルス公爵は、ストラウス砦と帝国軍を挟んだ中央に突然現れた一人の美しい甲冑に身を包んだ、黒髪の少女を見て眉を潜めた。

「なぜ？こんな戦場にあのような年若き少女が？」

戦場で戦っている者ならば、戦はと言うものは古今東西、男がするものと言うのは認識的に一致する。

女性と違い、男性というのは自己の力・能力を誇示したがるのだからそれにより優劣を決めたがる。

それが争いになり、規模が大きくなった物が戦争でもあるからであるが

すでに戦争をしてるオルデルスとしては手を抜く気は毛頭無かった。

「すまないが、同情をする気はないぞ？」

オルデルスは呟き、前線部隊10万を砦に進軍させた。



迫ってくる、帝国の大群を見ながら、雪は

「はあ、《俺》なんであんな大群に突っ込まないといけないんだろ」と呟いていた。

手元にあるのは右手で握っている《至高剣》と左手に握ってる《魔降剣》であり当然、インテリジェンスソードのように返答するわけではない。

「さてと・・・」

雪は、一歩前へ踏み出し両手の剣を頭上に掲げてからランスへと構成を作り変える。

そこへ、自己の存在の力を変換し作り出した膨大な魔力をそのままランスへと載せる。

《至高剣》には水の力を  
《魔降剣》には雷の力を

そしてそれをそのまま、進軍してきている帝国兵へ丹田を通し昇華された気によって強化されている腕力によって投げつける。

前線を指揮しているオルデルスは女性が突然、両手に携えていた剣をランスに形状変換させ、尋常ではない速度で帝国軍へ打ち出したランスを見て、魔道士隊に対衝撃防御の魔法を展開するように命令していた。

着弾する、数秒前には展開が終わっていたが、ランスが着弾したのは帝国がこれから侵攻しようとしていた数十メートル先の地面だった。

オルデルスは、杞憂に終わったかと思っていたが即時、着弾したランスが砕け散り膨大な魔力を放出。それと同時に大気の水素が結合されて巨大な水の壁が帝国陣営を押し流す。

もう一本着弾したランスも同時に砕け散り巨大な雷撃を発生。水に浸かっていた帝国兵3万が一瞬のうちに戦闘不能に陥ったのだ。つた。

要塞へ進軍していた帝国軍が足を止めていた。

誰にも命令はされてはいないが、実際目の前で起きた今までの戦場の常識を覆す光景を目の辺りにすれば、進軍の足が止まるのは当然と言えよう。

そしてオルデルスも自軍の半数が一瞬で壊滅した事とそれを成しえた者が細身の少女であったことから

「なんだ？化け物か？」

と呟いていた。

オルデルスは前線を任されたのは今回の戦争が初めてであり、その思考の空白をついた攻撃には対応する事はできなかった。

ユキは一度、眼を閉じて再度開く

瞳に幾何学的な模様が浮かび上がってくる。

同時に周囲の風景、人が数値でグラフで視界に表示されていく。

肉体の存在の力を魔力に変換し、魔法式を大気中に書き込んでいく。

その様子を見ていた、前線指揮官オルデルスは前方の一人の女性が

展開していく魔法陣の膨大な魔力を目の辺りにしていた。

「ばかな・・・神域クラスの魔法だと？」

前線部隊の数千人の魔道士隊に、対魔法攻撃防御を展開させる。

同時に、ユキの魔法も構築が完了。

敵陣営に展開されている魔法防御を確認したが問題ないと判断。力ある言葉と同時に魔法を発動した。

「ハロー・イン七鍵守護神」

魔法発動と同時に、ユキの手の平より直径数メートルの光の束が打ち出され、帝国軍の前線魔法部隊、数千人で構築した魔法防御を一瞬にして消し去り後方部隊をも貫いた。

七鍵守護神がもたらした破壊の跡は、主にその衝撃波であり、直径数メートルの光の束が突き抜けたあと、そこを基点とするように50m範囲の物を衝撃波にて破壊していく。その被害はにより帝国軍は大混乱に陥った。攻撃を本来受けるはずのない後方部隊まで損害を被ったからであった。

攻撃を受けるかもしれないと気構えが出来てる人間と気構えが出来てない人間の差は大きい。

それは、中央本陣にても例外ではなかった。

同時刻、たった今、発生した巨大な破壊音を確認するためにグレンダルは本陣のテントから出て、要塞の方を遠目の魔法にて確認していた。

そこには、一人の少女が手の平を帝国軍に向けており、その少女の

手の平から直線状に地面を抉るように一本の線が帝国軍の後方部隊を抜けているが確認できた。

「何が起きたのだ？」

グレンダルは近くの魔法部隊へ確認するが誰もどんな魔法か理解すら出来ないため、わかりませんと返答が返ってくるだけであった。先ほどの少女を目視していると再度、魔法を展開しているのを魔力の高まりから感じとった。

## ストラウス砦攻防戦 6

雪が次の魔法式を展開してる頃

ストラウス砦内部では、ヘルデイルム公爵は部隊編成を行っていた。魔法騎士一人に対して魔道士を含む兵士を100人つけ、さらにそれを10グループで組み一つの部隊としていた。

現在、砦に残存している兵士は魔法騎士・魔道士・騎士そして一般の公募を含めて戦闘に参加出来る者は15000人弱。

そして、魔道士隊の統率をするのは侯爵以上の階級が必要。

運がいいのか、生き残りの魔道士隊が少ないこともありヘルデイルム公爵の副官ジョイル侯爵が指揮をする事になった。

15部隊に分けた部隊は砦の各所に配置され、屋上に2部隊 正門に6部隊 裏門に3部隊

砦内に4部隊を配置するように手配をつける事が出来た。

すでにユキが砦外部に出て、帝国軍を足止めしてたからすでに1時間が経過していたがこれだけの人数をこれだけの短時間で編成分けし、各所に配置できた事は普段から雑用をこなしていたヘルデイルムの気転による所が大きい。

配置がほぼ終り、ヘルデイルムは砦屋上に上がり、現状の戦況を確認した。

「信じられないな・・・」

他の者もヘルデイルムと同じ意見だっただろう。

何せ、砦の前面に展開している帝国軍の陣形を見てみると前線部隊はほぼ壊滅。

さらに帝国軍の前線から後方部隊まで地面を抉るように何かか貫いたあとがありその周辺には死体の山が築き上げられていたからだ。

残念ながら、ヘルデイルムは雪が魔法を使い終わった直後に上ってきた為、いまのこの戦況がどのように築かれたかは理解できなかった。

それでも、この状況を作り出した者が本当にあの黒髪の召還術師ならば、敵に回した際には、帝国とは比べ物にならない程の脅威になると本能が感じていた。

それと同時に雪が戻ってくるまでは一切、手を出さないように各部隊へ伝令を回した。

その頃

雪は再度、軍を展開していく帝国を視界におさめながらも、存在の力を魔力へと変換していく。

同時に複写眼アルファステイグマを使い力の流れを制御し、本来存在しえない力へと変えていく。

同時に魔法式を空中に書き込みつつ、精神集中をかねて呪文の詠唱を開始する。

『黄昏よりも暗きもの 血の流れよりも赤きもの』

雪の周りに赤い粒子が集まり始める。

『時の流れに埋もれし』

そして膨大な魔力を元にし余剰エネルギーにより雪の周辺に魔法防御が自動的に展開される。

帝国の魔道士隊が雪が魔法を使い始めた事に気づきその隙を狙い攻撃魔法を打ち込んでくるが全て、自動的に展開されてる魔法障壁に散らされる。

「攻撃が当たらない？いや、弾かれるだと．．．詠唱呪文をしてる途中すら攻撃呪文が通らないのか？化け物め！」

前線魔道士隊は本来ありえない事が起きてる事により理解の範疇を超えてしまい恐慌状態に陥る。

次々と魔道士隊だけではなく兵士まで戦線を離脱していく。

グレンダルも目の前で起きてる事が信じられなかった。

『偉大なる汝の名において』

その時近くに近衛兵魔道士隊隊長がグレンダルの側まで駆け寄ってくる。

「グレンダル様。あの化け物が展開してる魔法は、神域クラスなんて物じゃありません。早々に撤退のご指示を！このままだとあの呪文で軍は全滅する可能性があります。」

すでに進言してる言葉は切羽詰まった声というよりかは悲鳴に近い。大気が軋みを上げて一人の前方の少女に流れ込みその周辺で渦巻いてるのが見える。

『我ここに闇に誓わん』

「近衛兵魔道士隊へ通達しろ。本陣を中心に魔法防御を形成させろ！いそげ！」

グレンダルも指示を出しながら、自身も防御魔法を展開していく。

『我等が前に立ちふさがりし 全ての愚かなるものに』

光が集まり赤い紅球となっていく。

『我と汝が力もて 等しく滅びを与えん事を！！』

「ぶきとべー！！」  
《ドラグスレイブ竜破斬》



雪が打ち出した赤い球は前線部隊中央部分を突き破り直進、敵中央本陣深く着弾し展開していた魔法防御を一瞬にして吹飛ばし膨大な熱を放出。

その熱だけで兵糧などは一瞬で蒸発。

そのあとに起きた、爆風と衝撃波により帝国軍は壊滅した。

ガラツ・・・

グレンダルは、砕け散り折り重なった死体から這い出し回りを見渡した。

そして視界に映ったのは本陣を中心に直径数キロに及ぶ巨大なクレーターであった。

そして、このフレンリアル公国ストラウス砦の戦いの勝利により一時的ではあるが、フレンリアル公国に仮初の平和が約束された。

## ストラウス砦攻防戦 6 (後書き)

ご希望、ご要望がありましたらお待ちしております。

## ストラウス砦攻防戦後

今、ストラウス砦では、戦闘終了後の後始末が行われていた。

雪が帝国軍を壊滅させたあと、両軍の被害の実態を明らかにするためにヘルデイル公爵は不眠不況で仕事をこなしていた。

雪は大規模戦闘の疲れが出た為、部屋を一室もらいそこで睡眠をとっている。

フレリアル公国のストラウス砦の戦いにおいて確認できた使者はストラウス、ロアスター、プライト領の領主が死去。

そして当初の予定を遥かに上回る一般兵士の死者 29661人

現在、王都フレリアのフレリア城にある会議室では、死亡が確認された公爵家の次期当主だった者を公爵家本家と魔法鏡を使いそれぞれの当主交代の確認と引継ぎをフラン姫より承諾されていた。本来ならば、フレリア城謁見の間にて執り行うのだが、時期が時期なだけであり時間が惜しまれこのような形になってしまった。

公爵家の当主だけではなく、多くの貴族が死去した為、さらに、自らの領地から徴兵してきた兵士も多くおり、公爵の立場を引き継いだ事を明確にしておかないと家内部のゴタゴタなどあったら、領地の運営悪化・領民の不満などが起きてしまい手が付けられない事になってしまう事は明白であった為、即急に決めてしまっていた。

今回、急遽とは言え、公爵家を引き継いだのは全員年若い者達であった。

ストラウス領当主はリアネーテ・フォン・ストラウス　ブロンドの髪  
の19歳の女性

ロアスター領当主はフィリア・フォン・ロアスター　22歳の紅  
の色の髪をもつ女性

プライト領領主はユーグネス・フォン・プライト　黒髪の20歳  
の男性である。

しかも全員未婚と言う事から結婚平均年齢が15歳と低いローレン  
シア大陸において今回の公爵家当主は結婚する気ないのか？とフラ  
ンは考えていた。

更に、会議では問題が発生していた。

雪の処遇である。

たった一人で帝国軍を壊滅させた雪をどう扱っていいのかが焦点に  
なっていた。

他国に流れてしまえば危険な事になるのは目に見えている。  
暗殺をしようにも失敗したら国が減ぶ。

そうなると報奨を上げて丸め込むのが一番の最良の選択になる。

そのため、毎月金貨10000枚　地球換算で言うと月収1億とい  
う金額で雇う事になった。

そして、役職はフラン姫護衛騎士として配属する事がきまった。

そのあとは、ストラウス砦の戦争時において、大量の貴族と王位継  
承権を持つ、王子を含む捕虜の扱いについて話あったがそれは中々  
決まらなく、平行線を辿っていた。

日は沈んでも議論は続いていたが、帝国の出方もある事もあり翌日に流された。

それでも、フレソリアル公国王都フレイアでは、戦争の勝利を祝う催しが各所で行われていた。

帝国軍が壊滅した翌日

6月1日午前9時そう表示されてるソフトバンクの携帯画面を見ながらゴロゴロとユキは宛がわれていたベットの所で転がっていた。

今来ている服は、昨日戦場で来てる服とは違い皆でもらった服を着ていた。

皆の人達は雪の容姿見て勘違いしたまま、一番サイズの多いメイド服を渡してきた。

予備の女性の服には雪の身長が低い事もありサイズが合うものが無かったからであったが

雪が今来てるメイド服は黒を基調とした生地に白いフリルのたくさん付いたエプロン。

そしてホワイトブリムを頭につけて、ガーターベルトを付けストッキングを履いた姿をしていた。

どこから見てもメイド姿である。

そしてその容姿も相まって布団の上で天井を見上げながら、片足を曲げている状態で

溜息を吐いて目を細めてる姿はとても扇情的であった。

片足を上げた状態から見えてしまう太ももは百人の男がいたら百人が理性を無くす事は間違い無いシチュエーションでもある。

だが、本人はいたって、真面目になんで男の服支給されないのかな？と心の中で呟いていたが、日本人本来の謙虚さから強く出れないのであった。

## 登場人物編集2

主人公 鈴木<sup>すずき</sup> 雪<sup>ゆき</sup>

身長 155cm

容姿 黒髪に黒眼

見た目 容姿・声色が女の子

本人いわく将来は男の中の男になるとの事

特徴：100回もの異世界召還を経験したことにより蓄積された経験は神すら倒せるかもしれない？くらい

趣味 ベットでゴロゴロしながらライトノベル・アニメ・ゲームをするのが生きがいというダメなコ

能力 何故か知らないが、アニメ・ライトノベル・ゲーム世界など架空世界に召還される事が多く、生き抜くために仕方なく多種多様の技を身につけている。

主兵装武器は

《魔降剣》と《至高剣》

互いに不安定要素を多分に含む概念物質より作られている為、一時間程度しか形状を維持できなく、作り出すにも膨大なエネルギーとデータが必要になるため、一度作り出し消費したあとはしばらく使えなくなるというデメリットを含んでいるが、その切れ味はモース硬度27のナイフですらバターののように切り裂くほどの切れ味を誇る

存在の力を非常に消耗した場合、強制的に回復しようとして体を一時的に作り変える。その間はほぼ全ての力を封印される状態になり、普通の日本人と変わらない状態になってしまう。

ストラウス砦と竜との戦闘により存在の力が尽き、普通の日本人の女性の状態の時にユーグネスの夜這いにより純潔を奪われてしまい男女関係を作ってしまう。最近では、思考の際の考え方も女口調にな

つてきてしまっている。

フラン姫直属護衛騎士の職が危険な状態になりつつある。

ルーク・フォン・スターレット

ストラウス砦攻防により団長が殉職した為、宮廷魔法騎士団隊長から団長へ昇進

年齢 21歳

身長 189cm

容姿 蒼眼に金髪の長髪、筋肉質

趣味 体を鍛える事

武器 魔剣グラム 付加は切れ味を増強させる魔法が込められている

フラン・フォン・デ・フレンリアル

フレンリアル公国の王女 現在、国王代理

年齢 16歳

身長 155cm スリーサイズ それなり

容姿 琥珀色の眼 パール色の髪のセミロング

趣味 魔法・料理

武器 指輪の形状をした事象を操る魔法<sup>リング</sup>書

特徴 複写眼ですら、存在保持が確認出来ない部分を含んでいる。

王族全てに限った事であるようだが解析不明の状態

ルイーゼ

財務大臣

年齢 72歳

身長 177cm 小太りな体型

容姿 金髪（いまはテルテル坊主） 金眼

ドレイネス・フォン・スターレット

軍務大臣



年齢 58歳

身長 188cm 筋肉質というかマッチョ

容姿 銀髪 金目

趣味 軍事小説を書く事

ルディアス・フォン・デ・フレンリアル

フレンリアル公国の国王

年齢 49歳

身長 171cm 細身の体型

容姿 琥珀の眼 パールの髪 現在は原因不明の病により床に伏せている

趣味 お忍びで城下町へ繰り出し散歩をする事

故・ファーブニル・フォン・ストラウス

フレンリアル公国南方領地を任されていた。

ストラウス砦攻防戦において戦死

リアネーテ・フォン・ストラウス

ファーブニルの娘であり、後継者。

フレンリアル公国南方領地・公爵家

年齢 19歳

身長 170cm 3サイズは秘密

容姿 ブロンドの髪に金の瞳

特徴 実は、ある秘密がある困った令嬢。

ヘルデイルム・フォン・スカール

フレンリアル公国北方領地を任されている

年齢・砦を短時間に纏め上げた功績により公爵家筆頭を命じられる。

公爵家筆頭

年齢 37歳

身長 180cm 細身  
容姿 金眼 金髪

故・イルデル・フォン・ロアスター  
フレンリアル公国西方領地を任されている  
ストラウス砦攻防戦において戦死

フィリア・フォン・ロアスター

イルアデル公爵の娘であり継承者

フレンリアル公国西方領地・公爵家

年齢 22歳

身長 168cm 3サイズしくれつと

容姿 紅髪 金眼

故・ワーカス・フォン・プライト

フレンリアル公国東方領地を任されている

ストラウス砦攻防戦において戦死

ユーグネス・フォン・プライト

ワーカス公爵の孫にあたり、父のエルユードからの推薦により就任  
フレンリアル公国東方領地・公爵家

年齢 20歳

身長 195cm

容姿 黒髪に金眼

特徴 父、エルユードより戦闘訓練を幼少より受けており九頭竜と  
いう武術の使い手。冒険者レベルはS+

父譲りの精霊魔法と王家特有の特殊魔法も使う事ができる。

雪を母親アイナの策略に乗り夜這いを成功させて肉体関係を築いて  
しまう、雪の事はすでに俺の嫁！という思考をしておりフラン姫の

護衛を辞めさせようと暗躍をしている。

エルユード・フォン・プライト

ワーカス公爵の息子であり、次期当主であったが元、冒険者だった事もあり自由に過ごしたい！

というわがままな理由から息子のユーグネスに公爵家の地位を譲る。現在はプライト領内のギルドマスター

本来の冒険者レベルはSSSだが現在は、ある事情により力を制限している。制限中のレベルはS+

九頭竜という幻の武術と大気の精霊を使う浄化・破壊の術行使が得意。

主兵装武器 精霊の石より作られ特殊な錬金により作られた《精霊劍》

アイナ・フォン・プライト

冒険者時代からエルユードの仲間であり、エルユードと共に漆黒の翼というギルドの一員でもあった。

ギルド解散と同時にエルユードと婚約をして結婚。現在は、プライト領のギルド受付をしている。冒険者レベルはSS 本気になったときの戦闘力は未知数

戦略級の王家直系の血筋の者だけが扱える、炎と水と雷の複合原書オリジンリンゲを所有している。

将来、義理の娘になる雪を調教中。腹黒でありかなり策士

ロドニク

外務大臣

年齢 41歳

身長 169cm 細身

容姿 紫眼 紫髪

グレンダル・フォン・アルバード・イスメラル

帝国軍総司令

一時期捕虜になったが多額の身代金と交換に無事帝国領に帰還

王位継承第3位

年齢 58歳

身長 208cm 2mのハルバードを片手で振り回すほどの怪力の持ち主

容姿 緑眼 坊主

ヴェイン

帝国軍宰相直属部隊

ユキに瞬殺される。

身長180cm程度

年齢 不詳

身長 不詳

容姿 黒いローブを深く身に纏っており顔を見ることが出来ない

## 答での一日！bY日記口調！

6月1日AM10時

お布団から出て廊下にでる。その時に何人かの答常駐の兵士さんに話しかけられ、朝食をご馳走しますと言われて兵士用の食堂に連れて行かれる。

同時20分

食堂についた途端、ヘルデイル・フォン・スカール公爵に捕まり、本当に男か聞かれる。それにYESと返答すると周りの男性陣が盛大な溜め息を吐く。  
なんでだろ？

AM11時

する事がないので答内部をぶらぶら歩き回る。男性陣からジロジロと見られるのはキノセイだろうか？

同時40分

いい匂いがしてきた方向へ進むと、たくさんのおばちゃんも昼食を作っていた。私はそれをぼーっとして見ていたけど、おばちゃん連中に見つかり料理を手伝わされる。  
味付けで砂糖が無いのは、問題だと思った。

PM13時

軽い食事を終えて、砦内部上層部を見て回る。昨日のゴーレムの襲撃のあとが残っており、切り崩された石などが多数転がっていたが、移動に問題のある物は取り除かれてる為なのか移動には支障はなかった。

P M 1 5 時

砦城門前から出て、捕虜に食事を配った。捕虜の大半は私の姿を見て一瞬氷付いていたが特に騒ぎもせず運んでいった料理を口にしていた。

緑色の眼にお坊さんの頭・髪の毛皆無のつるつるの人に睨まれたが、何で睨まれたか分からなかったので、営業スマイルで対応したら顔を背けられてしまった。たぶん嫌われているのだろう。

P M 1 8 時

捕虜がたくさんいて大変だったが、近隣の村・町から人を雇ったようスムーズにテントを設置し食事を配り終えることができた。日がもう傾きかけてきているので今日も一日終りかなーと思った。

P M 1 9 時

フラン姫より魔法鏡にて、私の体調を聞かれたが問題ないと答えた。その際に、フラン姫が私のメイド服を見て

「くすくす」

とルークと一緒に笑っていたのは永遠の謎である

フランより会議にて正式に姫直属の女性騎士として採用される事が決まった事を聞いた。

その時の姫様はすごくいい笑顔だったから、俺、男なんだけどと突っ込みは我慢した。

一瞬断ろうとしたが月の給料が金貨10000枚という事もあり、  
即効OKしてしまった

P M 2 2 時

あれからフラン姫と話したけど、帝国に捕虜を引き渡すまでは問題  
があっても困るため抑止力を含めて  
しばらくはストラウス砦にすることになった。  
フランには一応、男の服と下着を何着か用意してもらおうように依頼  
した。

P M 2 3 時

就寝

・・・

「ふう・・・」

とため息をユキはついた。

あれ？今日はなんで日記口調なんだ？と心の中で盛大に突っ込んで  
いたが返すものはいなかった。

そして、ドロワースとネグリジェを着てゴロゴロとベットの上で寝  
転んでいた。

「はぁ・・・一体いつ男扱いされるんだろ・・・」

と思いつつ就寝したのだった。



答での一日・一日記口調―(後書き)

「意見・要望がありましたらどうぞしお返事ください」

## フラン姫の夢の中での大冒険！

この話は、フィクションであり、同姓・同名とは明らかに（ryです。

あれ、私、誰に言ってるんだろ？

きつと、UMAだよ！

と、フランは夢の中でふわふわ考えていた。

フランはしばらくして、これは夢だね！？って事に気がつく。

そうだ、ここ最近、ストラウス砦襲撃の後始末とかあって疲れてたから夢を見てるんだーって思ったw

そういえば、夢って知らない情報を整理するためだつて！ジークムント・フロイトも言ってたよね！と世界観を壊す考え方を持ち出しながらも仕事なんて全部忘れちゃえーと本当に王族かと思うほどいい性格をしていた。

しばらくすると、一つの扉が見えてくる。

そこを開くと、

初めてユキと話した野営場所が見えた。

改めて、ユキを見ててもホーツとしてしまいどう見えも女の子しか

見えないよ！どう見ても美少女だよね！と失礼な気持ちを徒勞してしまう。

でも、夢の中だからあっちこっちさわってもいいよね・・・

「はあはあはあ」

と変態思考丸出しにユキに近づいていくが、次の瞬間には足元が消えて浮遊感を感じた。

そこから見える光景は、漆黒の空に浮かぶ大きい月そして数多に輝く星、そしてそれに照らされて光る川と湖だった。

「きれ・・・い・・・」

と目をとろーんとしたままそれを眼下に納めながら、眼下に馬車が見えた瞬間、落下感を感じ次の瞬間には、フランだけを守りながら数多の敵を戦闘を繰り広げる黒髪の少女が見えた。

そして、場面が切り替わり、一つの建物の前に立っていた。

そこは、ラーストル教会、フレンリアル公国首都フレイアにあるもっとも古く権威のある教会である。

そしてその正面の両扉を開いて、フランは教会の中に入っていく

どうやら、今日は新郎新婦の結婚式のようなだった

フランはすごく気になって神父がいる祭壇？まで近づいていく。

そして、新郎新婦が目視できる位置まで来た所で、

「キヤー」と叫んでみた、それはさながら昼ドラの見ちゃ行けない所を見ちゃたよ！みたいな感じの歓喜の悲鳴である。

そう何を隠そう。新婦はユキであり、新郎は先日話したユーグネス・フォン・プライト公爵だったからだ・・・

そしてそんな夢を

フラン・フォン・デ・フレンリアル王女は大きなフリルが付いたベツトの上で抱き枕を抱きながら

「えへっへっへっ」

とニヤニヤしながら涎を垂らしながら見ていた。

同時刻、砦内部に儲けられた一室で寝ていた。ネグリジエとドロワースに包まれていたユキは、

「うーん、うーん、やめてええええええ」

とうなされていたとかいないとか・・・

王子様にプロポーズされました。

雪さんはもう手遅れですね。、病院の先生が言っセリフが聞えてきた。

なんやてええええと心の中で突っ込みながら意識が鮮明になっていく。

「ハッ！」

目を覚まして天井を見る

「知らない天井だ・・・」

「なんか、すごい生々しい夢を見たんだよな。気のせいじゃないならいいんだけど」

フ란の夢の中での大冒険をみてね。

すでにストラウス砦にきてから3日目

雪はベットの上でゴロゴロしながら不思議な事を考えていた。

この携帯電話、ぜんぜんバッテリーの目盛り減ってないんだけどどうなってるんだろ？

と考えていた。

しばらくするとお腹がなってしまい仕方なく

「食堂いくかな」  
独り言を呟きながら、ドロワースを履き替えてネグリジエを脱ぐ。  
そして洗濯籠の中に入れて、用意されている服を手取るが、感觸  
が昨日のメイド服と違う事に気がついた。

こ・これは？

「なんじゃこりゃあああああ」

雪は叫んでいた。

寝起きから1時間、緑を基調としたサマードレスを着込んだ一人の  
少女が兵士の食堂で朝食を摂っていた。

「慣れって怖いな、女物の服を来て、人前に出ても最近はなんとも  
思わなくなっちゃよ」

結局、着る物が無い為、用意された服を泣く泣く着たのであった。

もちろん食事の量は肉がメインですでに数キロ食べていた。

周りの兵士達はその体のどこにそれだけ入るんだ？と首を傾げてい  
た。

私は食事を摂った後、捕虜達に朝食を配ってる間、身なりのいい捕  
虜から声を執拗に掛けられて困っていた。

突然一人の捕虜に、腕を掴まれ転びそうに成った所を2mを超える緑色の目をした人に抱きかかえられて助けられた。良く見ると、昨日睨んで来た人だった。

グレンダルが少女を助けたのは、倒れかけた要因を作ったベルトイ侯爵についてカツとなつてしまったからであつた。

そして、少女が自分を見て、蕾が開いたような笑顔を見せた瞬間、恋に落ちていた。

朝食後、フレンリアル公国のヘルデイル公爵よりイスメル帝国とフレンリアル公国の両国の上層部で話し合いが付き、本日の夕方までに物資の引渡しと釈放を告げられた。

グレンダルは8千人まで減つた手勢を指揮し夕方までに帝国へ戻る算段を付ける事が出来ていた。

ヘルデイル公爵より帝国を退けたのは雪というのは釈放の話の際に聞いていた。

今まで、権力闘争の中枢に位置する身分から貴族の女性には余り良い感情を抱いてはいなかった。

朝の一件依頼、つい目線で雪を追つてしまつていた。

捕虜達の給仕をしている事から、彼女は貴族ではない事は分かつた。そして、あれほどの力を有していてもそれを殆ど誇示し無い事にも好感を抱いた。

部隊を壊滅させられた事は、戦争だつた為、悔やんでも仕方がない。それがこの世界の常識、そして国に加担してゐるならばそれを一感情で責めるのは妥当ではない。

朝食の給仕が終わったあと、雪は、ヘルデイル公爵より念の為に夕方出立する帝国の見送りを一緒にして貰える様に依頼を受けていた。仕方なく、蒼い甲冑と羽をあしらったティアラを付けて戦列に加わってポーッと帝国の出立を見ていた。

グレンダルは出立の際に雪の姿を見て、感動していた。

雪の姿はまるで絵画からそのまま抜け出してきたような伝説の戦乙女ヴァルキリーを連想させたからであった。

あまりにも優雅なその姿に呆気に取られてしまい、近くまで歩みよりに、一つの指輪をプレゼントした。

指輪に嵌ってる石は、トパーズでありローレンシア大陸ではプロポーズをする男性から女性に愛の告白をするための物である。

友人に無理矢理買わされてずっと持っていた物であった。

雪も指輪を渡された事に疑問を持っていたが、貰える物はもらっておこうと思い一応礼儀として自分の名前を告げることにした。

「私の名前は雪、あなたは？」

「我が名は、グレンダル・フォン・アルバード・イスメラルだ。すぐに返答はいらない、考えて答えてくれ」

グレンダルはそう雪に言うとその場を走るような気持で帝国部隊へ馬に乗り追いつき、帝国に向けて出立していった。

雪は、今グレンダルに言われた話の内容をグレンダルの後ろ姿を見ながら頭の中で整理していた。

そしてその姿を見ながら良い方向に捉えたグレンダルは良い返事が期待できそうだなと年甲斐も無く思っていたが！



雪としてはなんかすごいプロポーズばい事言われたんだけど気のせいだよね？

それに名まえにイスメラルって入ってなかった？

それって帝国の名前じゃ？

それに返答って何？

考えて答えてくれってどういう意味ナノデスカ？

という思考のループに嵌っていた。

その日の夜

現在時刻は、携帯の表示で午後23時

ここは、砦にある会議室の魔法鏡前、雪は一人の少女と密会をしていた。

その相手はこの国の王女フランであった。

「と、言うことなんだよ・・・」

「そうなんだー」

「で、どういう事なの？」

「いま説明したじゃん！」

「と、いう事なんだよ・・・じゃわかんないわよ！」

「打つのメンドクサイんだから、作者の意図を汲み取って」

「はいはい、じゃ1から教えてねー」

「（説明中）」

「そういう事だったのね。ふふふっふ」

「いあ、笑ってないで説明してくれ」

「分かったわよ、えっとね。ここの大陸ローレンシアでは、男性から女性にプロポーズする時はね、男性から女性に対してトパーズの指輪を送るのが主流になってるの」

「な・・・に？そ・・・それって、まさか？」

嫌な汗が止まらない

「うん、ご名答、ユキがもらったトパーズの指輪だよ。ふふふっふ」

「ちょっと落ち着こうか。俺はどこからどう見ても真正正銘の男。そんな馬鹿な事があるわけ無いだろ、それに指輪に嵌ってる石だってそのトパーズだって決まったわけじゃないし」

「うっん、そうね！それならその指輪今もってるなら見せてくれる？」

「ほら、これだよ」

フランは雪が差し出した指輪をじーっと見ているとニコツと笑った。雪もほっ、勘違いだったかと安心しかけたが

「うん、おめでとう、間違いないね！トポーズだよ。まさか帝国の王位継承権持つてる人にプロポーズされちゃうなんてすごいね。」

「俺、男だから、プロポーズされても困るんだけど？」

「もうダメだよ、その容姿にその声で男の子とか言ったらダメですよ！嘘つきはダメです！」

「それじゃそろそろ寝ないと、エリザベスに怒られちゃうかもしれないから、ユキまたね！」

「ちょっとフラン言い逃げはよくないぞ！」

そんな会話が深夜の砦ではあった。

王子様にプロポーズされました。(後書き)

ご意見・ご要望がありましたらドシドシ、ヨロシクお願いしますー

## フレンリアル公園のギルドのショートストーリー

ここ、ローレンシア大陸ではギルドは一つの組織として運営されている。

ギルドの形態には無数あるが分かり易く説明するならば「何でも屋の人材派遣会社」というのが、一番分かりやすいと思う。

その規模は、各国の情勢・研究機関・王族に影響を受ける事はないが、王族から市民もしくは亜種族に至るまで公平に仕事を発注・受注する事が可能である。

地球風で言えば多国籍企業と言った所である。

各領地の都市に本社を置き、町や大きめの村に支店を作っている。

国の数だけ本社があり、その本社のTOPは常に実力主義の冒険者達が担っている。その実力は最低SSランククラスが必要であり、更に本社の取締役になるためにはその国の今までの行ってきた業績・他の冒険者からの好感度など様々なチェック項目があり、不正をして取締役になる事は不可能に近い。

ちなみにSSランククラスの冒険者の実力は単騎で100人以上の熟練された宮廷魔法騎士団を相手に出来るほどである。

そしてギルドの運営は、どこの本社が偉いと言う事はなく、それぞれのギルドの立場を尊重し相互を支え合っている。

そして、このローレンシア大陸においてはギルドの支店長のギルドマスターすらSクラス以上の実力が必要

とさる、そしてそれと同時に羨望の的ともなる。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

これは、プライト領地デルモント市の冒険者ギルドのショートスト  
ーリーである。

プライト領地デルモント市の人口は27万人

プライト城から扇状に町が広がっており町の周辺には広大な畑が点在  
していた。

フレンリアル公国は他国と違い百年以上戦火を免れており、徴兵も  
ほとんど無いため、他国からも安定した生活を望み多くの難民が移  
り住んでいた。

そしてフレンリアル公国の歴代の王も来るものは拒まずの精神をも  
っており、代々質素儉約を旨にしてきた事もあり、税率はとても低  
く住みやすく、職も安定していたため、税金は低くとも大抵の者が  
収めていた為、国庫は潤っておりそのため、他国からは経済大国と  
言われていた。

だが、戦火が無いと、武力は縮小の一途を辿る事は必然でありその  
ため、魔物などの討伐にはギルドが有する冒険者が活躍していた。

注 国が抱えてる騎士団は主に平原や公道の魔物を倒していたのだが、ここ最近活発してきた魔物の襲撃に関しては国からの補助金が出る形で冒険者ギルドに委託している。

ここデルモント市の冒険者ギルドもその一つであった。

このギルドマスターは3年に一度、査定されるギルドマスターを連続で21年も勤め上げている冒険者の中でも一際有名な存在である。

名前はエルユード・フォン・プライト 当時18歳という若さである事件を解決した事を評価されSS+ランクの冒険者になり一児の父となったため、現役を引退しギルドマスターになったという経緯がある。

そのエルユードは、今、フレイア城から届けられた報告を見て唸っていた。

なぜならば、エルユードの父ワークスが、帝国軍との戦いにおいて戦死したからであった。

「大丈夫？あなた・・ムリをなさらないでね」

そう声を掛けて来たのは、エルユードの妻アイナであった。

「アイナ、どうやら父のワークスが先日のストラウス砦の攻防で死んだようだ・・だから私が公爵の地位を継がなくていけないとフレイア城フラン様名で連絡が来ている。」

「あら？そんなの・・・でもあなたのお父様がお亡くなりになられたんですもの、仕方ないわよね」

「ああ、だがすぐにギルドマスターを勤められる者が現在いないし、それに私ももう40歳だからな・・・やはり若い者にこの領地を任せたい・・・そこで息子ユークネスに譲りたいと思っっているんだ」

「あら？そんなの？それはいいかも知れないわね。あの子っいたらいつまでたつても昔のあなたみたいに魔物が現れて被害が出てるって届けがきたらすぐに出て言っちゃうんですもの、気が気でないわ」

「ははは・・・」

と乾いた笑いだけをエルユードが出していたが

「まあな、だが最後の事件の時は仙術と言うものを扱う臃という名前の青年が仲間にくれたから解決できたしな・・・あいつにもそういう仲間を作ってもらいたいものだ」

「ええ、そうね。臃さんが話していたお弟子さんもユークネスと年齢的には同じくらいですものね。今度いつ臃さんが来るかわからないけど、来たら紹介してもらいたいわね、きつといい人に育ってるはずだわ」

「そうだな・・・おつと冒険者のグループが鑑定品をもってきたようだぞ、アイナ頼むな」

「はい、あなた」

「いらつしゃいませ、今日は鑑定ですか？」

その声が、受付から聞えて来るのを耳で捕らえ、エルユードも先日、ストラウス砦にてユキが破壊したゴーレムの鑑定を始めていた。



フレンドリアル公園のギルドのショートストーリー（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしています。

## フラン姫の策謀

フラン姫様との会議室での魔法鏡を利用した密会の後、自失呆然としたユキはフラフラと砦の屋上まで登ると

ありえねええええええええ

と屋上から叫んだとか叫んでないとか・

翌朝、ちゅんちゅんと鳥の鳴く声が聞えてくる。

ベッドの上でスヤスヤと寝ている笑顔は女神そのものであり、男とは見えない。本人に聞かれたら、私の全力全開受けてみて！と魔砲少女のセリフの如き魔法を叩きこまれるのは確実である。

何はともあれ、一人の美少女はベッドの上で未だに夢の中にいた。

しばらくすると、

はづつゝむにゃむにゃと言いながらむくつと起きた。

ベッドの枕の横に置いてある携帯電話の画面表示で時刻を確認すると6月3日AM8時を表示していた。

そのままベッドから降り、まだ、思考が働いてない頭で、ドロワースを履き替えて、ネグリジエを脱ぐ。

そして、先日フラン姫に頼んでいた洋服が届いていたのでそのまま服に手を通した。

服は胸元の広く開いたワンピースであり丈はひざ下20cm程度色は青色を基調とした仕立てとなっていて裾には黄色の蝶が数匹刺繍されていた。

縁取りは銀系にて縁取りもされており、一目で高級な洋服というのが分かる。

雪は、髪の毛が肩に届くほどまであるのでフランより送られてきた髪留めを食事の合間だけ付けているのだが、その髪留めは現代風でいうとバレッタと呼ばれる物で純銀で出来ており、ユキの黒い髪と合わさってとっても映えていた。

当の本人はそんな事を気にせず、兵士の食堂で朝食を食べていたがしばらくして、今回の砦での戦場での兵士指揮を評価されて、公爵家筆頭に任命されたヘルデイル公爵より呼び出しがかかって、会議室に来ていた。

そして魔法鏡を通して、現在、フレリア城にいるフランと話をしていた。

「ユキ、えっとね砦も落ち着いた事だし、そろそろ一度お城に戻ってこない？」

「.....」

「フラン様、お一つ言いたい事があるのですが、いいですか？」

「なに？ユキ、どうしたの？」

とつても可愛らしい笑顔でフランは聞き返してきた。

「実はデスネ、先日私は（男物の）服と下着を頼んみましたよね？」

「うんうん、頼まれたよー」

「それで、今、私が着ている服装を見て何か思い当たる事はありますか？」

ニコツと雪は怒りを込めた笑顔でフランに送る。

ゾクツ！その時、近くにいたヘルデイムはどんな戦場よりも恐ろしい片鱗を味わった。

しばらく、鏡の向こうのフランはユキを見ていた。

「うん！おかしい所はないよ？すごい似合ってるよ」

とてもまぶしい笑顔で言い返す。

「違うでしょう！反応が！私は男なんですよ、女物の服を着てる方がおかしいんです！」

「もう、何を言ってるの？雪ちゃん、女の子がそついう口調で話したらいけないよ〜ふふふ」

「しかもグレンダル王子からも求婚されてるのに、未だに女の子と

しての自覚を持たないのは良く無いと思うのよね」

「球根？花でも植えるの？」

溜息を吐きながら雪は突っ込んだ。

そして、内心ではダメだ、この姫さんは確実に女扱いしてきてると  
いうか玩具扱いしてるだろーと心の中で突っ込んでいた。

給料で男服を買うしかないな、ユキがそう思ってる間に

フランは球根ですって、ぷぷぷ。と心の中で笑っていたが

「もう雪ちゃんたら昨日の求婚の事を無かった事にしようとして  
るのね、現実逃避はダメだよ」

はあ、溜息しか出てこない

「もういいです。とにかく今日そちらに向いますね。主に報酬をも  
らいに」

「うん！わかった。ルイーゼにもそう言うっておくね。あとそれと届  
けた髪飾りと洋服は報酬から引いておくからねー、じゅ雪またあと  
でねー」

一方的に通信を切られた・・・

その様子をヘルデイルーム公爵は見ながら、ユキの肩の上に手をのせて  
憐憫の眼差しを浮かべていた。



## フラン姫の策謀（後書き）

ご意見・ご要望がお待ちしています

## 消失した力

フランとの会話の後

早速部屋に戻り、フラン姫直属護衛騎士団の女性用の服と鎧に身に纏い城に戻ろうとしたが

鎧が見当たらない。

「あれ、どこに？」

すでに部屋を清掃していた者が鎧をメンテナンスするために持って行ってしまっていた。

「仕方ない、この格好でいくか」

ちなみに今の格好は、白いサンダルに金の縁取りをされた膝丈の白いワンピース姿だった。

この世界の商店の閉店時間を知らない、ユキは早めにお城に行ったほうがいいなと思い

まあ鎧は報酬から引いてもらってもいいし、そんな高いものじゃないだろと思い、ストラウス砦屋上まで上がってきて、周辺を確認。

そのまま、存在の力を魔力に変換し力ある言葉と同時に魔法式を発動。

「レイ・ウイング  
翔封界」



にて皆から離れていった。

皆から飛び立ってからしばらくすると、前方上空に大きい物が見えてくる。

「ん、あれは？」

興味を覚えてさらに速度を上げて近づくと、はっきりとその姿が視界に見えてきた。

それは全長200mほどのレッドドラゴンであった。

そして、どうやらドラゴンはユキを気にせず東に向っているようだった。

少し気になったユキはそのドラゴンのあとを少し後ろからストーカーすることにした。

時間的には1時間ほどだろうか？しばらくすると、ストーカーしていたドラゴンが森の中の集落に降りていくのが見えた。

上空から見ていると、どうやら村はお祭りをしてるようであり一つの飾られた御輿がドラゴンが降り立った所まで運ばれていくようだった。

「何をしてるのかな？」

といいつつ飛行中の魔力制御の為に発動中の、アルファステイグマ複写眼で、御輿を見ると自動的に構成を数値でグラフで表していく。

すると人が入っている反応が視界のグラフに表示される。

同時に、ゲームだとこの展開はドラゴンⅡ貢物Ⅱ生贄方程式がある事は容易に想像がついた。

それでも今のご時世で、人を人身御供にして差し出す習慣があるのか？

と考えていたが、よく考えるとここ異世界じゃん、という事に辿りつく。

まだ、御輿が山を登り始めたばかりでドラゴンのいる位置までの到着には30分程度かかるのは予測できた。

もしかしたら、雪が生贄と思ってるのは違つかも知れない事から集落で情報を集める事にした。

集落に降りてる間に1000人近い村？を確認していく。

そして、近くの年配の女性に話を聞くため近づく。

「すみません、ちょっといいですか？」

「あら？ずいぶん若い子なのね・・・こんな山奥の集落までどうかしたの？」

「実は親戚のおじさまがいて、今日、大切な催しがあるから来るようにと言われたのですが」

「そうなの、村長さんも町に出してた娘さんを生贄にしないといけないってすごい困ってて、貴方を呼び出したと思うけど、帝国から逃げてきた奴隷商人さんがね、たまたまこの村に寄ってね、あなたくらいの年頃の女の子を売ってくれたの。だから今年はもう大丈夫みたいよ？」

年配のおばさんは、自分の知り合いじゃないから死んでも大丈夫だから、みたいな事を言ってきた。  
「やっぱり生贄なのか、この世界ではそれが普通かも知れない。」

「すみません、親戚って村長さんじゃないんですよ。おじさんから村に戻ってきたら村長さんの家に行くように言われたんですけど、どの家か分からなくなってしまってます。」

おばさんへ説明するとそれは、たいへんだったねと村長の家を教えてもらい、急いでそちらへ向う。

すぐに村長の家についたが、村長の奥さんエレーヌさんは村長さんは御輿と一緒に山を登ってるからいないのよねと答えてくれた。

仕方なく、村長の奥さんが見てる前で上空へ飛び出した。

ドラゴンの前まで御輿が到着するまでの猶予が残り10分あるが急いだ方がいいと思い、見られてるのも気にせず翔封界レイ・ウイングを使っていた。

先ほどのドラゴンが降りた所を上空から見ると信じられない光景が目に入った。

御輿はすでにドラゴンの前に到着しており、ドラゴンの片腕にはすでに生贄の少女が握られていた。

「くっ、」

翔封界からの瞬歩は切り替え時にまったく違い構成を組みなおすため、膨大な存在の力を必要とする。



解析完了。感情抑制魔法 タイプA 解除は可能

と視界に表示される。

あとで解除することにし少女をその場に置いたまま、瞬歩でドラゴンの前まで移動した。

ドラゴンとユキの体格差は比較してはおかしいが30倍以上の差があった。

だが、ユキはまったく意に介した様子もなく、

「すまないが、手を引いてはもらえないだろうか？」

雪はドラゴンに話かけた。

ドラゴンは呆気に取られた。

まさか話しかけてくる人間がいるとは思ってもいなかった。

それよりも自分の腕を斬り飛ばしておいてこの人間は何を言ってるのだ？と疑問に思っていた。

ドラゴンは100年以上生きると人語を理解し語る者も少なくない、だからこそ、

「悪いが、私のジャマをした時点で話し合いはない。貴様を殺して喰らい、生贄の娘も喰らわせてもらおう」

それと同時に、レッドドラゴンは炎のブレスをユキに吐き出した。

ユキは瞬歩にて回避し

そのまま、展開していたオーラブレードにより右手も切り飛ばした。

「きさまー」

怒り狂い炎の渦を作り出す

ユキもそれに対し、マルチタスクにより魔法を編んでいく

高速で編んでいた呪文を展開

「ダイナスト・プレス  
《霸王氷河烈》」

ドラゴンの周囲に展開された炎の渦を氷つかせ、ドラゴンの足元そして体の一部を一瞬にして凍りつかせていく。

「バカな？人間がこれほどの力を？」

その瞬間、体中の力が抜けていくのをユキは感じとった。

しまった。先日の大規模魔法と無理矢理切り替えた力の乱用で存在の力が

もう一つの魔法を展開させようとしたが、力が消えかけてる状態の為、魔法式の構築が終わらない

「炎の矢」  
フレア・アロー

十数本空中に展開された矢が火竜ヒートドラゴンに刺さる。それにもまったく動じずに、レッドドラゴンはユキの方へ近づいていく。

そこで、存在の力を許容量まで使い果たした所で肩までであった黒髪が伸びて腰まで到達した所で銀髪になってしまう。

同時に、丹田にて構成していた力が霧散し体を支え切れなくなりその場で蹲ってしまう。

レッドドラゴンがユキに止めを刺そうと、体内に駆け巡る火の精霊を啜内に収束させていく。

鉄すら溶解させるほどの威力を誇るドラゴンブレスを雪に叩きつけようとしていた。

ドラゴンブレスが放たれる前に魔法式が完成する。  
雪は瞳から消えていく複製眼アルファステイクマを使い力ある言葉と同時に魔法を発動させた。

「《風の魔道 エクスカリバー》」

膨大でいて巨大な無形の風の刃が天空ソウから打ち下ろされ、レッドドラゴンを頭から尻尾まで一刀両断にした。

レッドドラゴンの断末魔を聞きながら、同時にユキは目の前が暗く閉ざされて地面に倒れこんだ。

その後、一人の青年が、ユキを抱えて馬に乗せて町へ連れていった。

先ほどの雪が助けた奴隷の少女も他の騎士に抱えられていた。



公爵邸へお持ち帰りされました。

白いレースで飾りつけられてる大きなダブルベッドの上で一人の少女が寝ていた。

ん。小さい声を出しながら寝返りをうっている。

容姿は、腰まで伸びた銀色の髪を後ろで三つ編みにしており、寝巻きは赤いネグリジエを着ていた。

しばらくすると一人のメイド姿の20歳くらいの女性が部屋の扉を数度ノックして入ってきた。

銀色の髪の少女は半ば開いた瞳をトローンとしたまま天井を見ながら

240

「知らない天井だ・・・」

と相変わらずのセリフを吐いた。

それと同時に周囲を見渡し、今自分が置かれてる現状を確認している。

広さは日本風で言えば畳40畳分、ダブルベッドに目の前には一人の170cmほどのスタイルのいい女性、そして窓が近くにあり、メイドさん？が通ってきた通路に繋がってる扉は開けたままになっていた。

少しづつ頭が冴えてくると同時に今、自分がどのような状況下に置

かかっているか確認の必要が出てきた。

「えっと、ここはどこでしょうか？」

話した途端、違和感を感じる。

どう考えても、声変わりが無かった以前の自分の声ではなく、高い音調の女性の声が自分の口から発せられたからだ。

その少女は顔を真っ青にして、バツと胸元を確認する。

「なんてことだ」

存在の力を使いすぎて、強制的に女性の姿になってしまっていた。

そして着ていた服を探して見渡すが見つからない。

女の物の服だからどうでもいいけどね

携帯電話もどこかに落としたようであった

はあ、この世界に来て何回目になるか分からないほどの溜息をついた。

その少女の様子を伺っていた女性はひと段落ついたと思い、話しかけてきた。

「私の名前は、ユミルといいます。これからしばらく、お嬢様のお世話をさせて頂くメイドでございます。」

「え？えっと私は、雪といいます。よ……よろしくお願ひします」

私はいきなり話しかけられた、ユミルってメイドさんに主導権を握られて話してしまった。

一度話したならもうあとは関係ないかと思いい話を聞くことにした。

「ユミルさん、ここはどこなのですか？」

「ここは、フレンリアル公国プライト公爵領のデルモント市を望む公爵家の館です。」

.....

.....

.....

.....

頭の中が混乱してきた。

なんであんな山奥の集落からこんな公爵家まで移動してるのかと、それを見透かして、ユミルさんが話しかけてきてくれた。

「雪様、混乱してらっしゃるのはムリはありません。公爵様がお帰りになられましたら説明をしてくれるはずですのでそれまでは当家にてお泊りください。連れてこられたのは公爵様ですので明日にはお戻りになられるはずですよ。それまではお休みになられた方がいい

です。ユキ様は公爵様が連れて来られてからずっと寝ていらつしやたのですから」

私を連れてきたのは公爵？

どちらにしても今出来ることは何もないから、力が戻るまでは大人しくしてた面倒をみてもらおう。

と思つてた時期が私にもありました。

起きてしばらくしたら、メイドの人にお風呂に入れられて、軽く夕食を食べた後そのまま起きた部屋に部屋に戻り、そして寝巻き（ネグリジェ）に着替えさせられて、寝かされた。

ユミルさんはどうやら、背まで150cmまで縮んでしまった私を見て保護欲を誘われてたようで強制的にベッドの中までお供してきた。

その為、現在、ユミルさんに抱かれてる状態。

ユミルさんの体からいい匂いがしてきて、それが眠気を誘ってきて、瞼が下りてきた。

今回は公爵の視点で話が進みます。

話は、雪ががドラゴンをストーカーし始めた頃まで遡ります。

プライト領地デルモント市では、ワーカス公爵の死去の報告を受けて公爵の交代などの事件があったが市民にはそんなに影響はなかった。

プライト領地の税の徴収の仕方は、他領地とは違い、公爵（男爵まで税の取り扱いには一切関与していなかったからだ。

つまり、税は直接、国が設置した財務務という所で直接支払う形になっており、貴族の収入は爵位と仕事の出来高制で支払われていたため、どんなに貴族が入れ替わろうと市民には殆ど影響はなかった。貴族が横暴であったならば、入れ替わった際に問題は他国の貴族のように問題は起きていただろうが、フレンリアル公国の場合は、代々の王の民の視線で政治を行っているため、一部不正はあるが大々的な事件については過去に取り除かれた事により概ね平和に回っていた。

そして、識字率がプライト領地においては9割を超えており多くの市民は重要な職に気軽に就けていたのも一端であろう。

この20年間の間にプライト領地で行われた改革は、現在の現代日本を習ったように多くのインフラ設備が整えられており同じフレン

リアル公国の中でもプライト領地デルモント市は他の3貴族領地都市より20年は進んでる。

実際、プライト領地内の経営を理解できる者は他国も含めて、王と3公爵、商業国家程度であったが・

そういう事情が重なり、殉職した兵士の家族に対しても、積み立てていた国庫より多額の保証金すでに払われておた。

カララン・・・戸の入り口に付けられていたベルが音を鳴らし、来訪者を知らせる

「いらつしやいませ」

一人の女性が奥から出てくる。容姿は黒髪に金眼の容姿。もつすぐ42歳になるとは思えない程であり見た目はだけならば28歳で通りそうである。

「おふくろ、おやじはいるか？」

そう話してきたのは短髪黒髪・金眼、身長190cmを超える若者である。

「どうしたの？ユーグネス何かあったの？」

「おふくろ、聞いてくれよ！今、公爵の館に一人の女の子が助けを求めにきたんだよ。」

「助けに？」

スーッと目が細められる・

「違うぜ！おふくろ、おやじの愛人とかじゃなくて・・・」

「大丈夫よ、ユーグネス。全部わかってるから、男の人はいつも仕方ないわね、もうあの人の事は忘れなさい？」

「まで、おふくろ、カウンターの下から取り出して何、指に付けてんだ？その戦略級の魔道書リングたる落ち着けよ！」

「大丈夫よ、ユーグ。わたしは十分オチツイテルワ」

絶対落ち着いてないだろー！

そんなの使ったら町の半分が消し飛ぶだろ。

ダッシュで母親を羽交い絞めにしながら話を続ける

「実はその助けを求めにきた女の子んだけど、ここからかなり山奥に入っていった他国との境界線にある村から来てる人なんだけど、今年のドラゴンの生贄に自分が選ばれたから助けてくれとギルドに先日依頼してきたらしいんだ。俺、昨日もここに顔出したけどそういう依頼が無かったから驚いて急いで今来たんだよ。」

「あら？そうなの？もう、ユーグったら、勘違いしちゃたじゃない？きちんと用件は先に言わないとダメよ？」

「あ、ああ。わかったよ」

ふう、なんとか町が灰燼になる前に止められた

「で、その確認のためにおやじを呼んでほしいんだ、祭りは今日の昼からスタートするようで時間が無いんだ。だから急いでくれ!」

「分かったわ、少しまってね」

言いながら女性が中に入っていった。

しばらくすると壮年の男性が出てくる。

「また、ユীগ来たのか。お前も領主になったんだから少しは冒険者をするものほどほどにしておけよ?」

「おやじ、時間がない。この前、ここにドラゴンの討伐依頼をしてきた女の子がいるはずだが依頼書はきてないのか?」

「ん?この前か。そういえば、パートタイマーのイスメラルさんに任せていたが」

ゴソゴソとカウンター近くの依頼書棚を調べている。

「おお、あったあった。何々?今日の昼から、昔から行っている村ぐるみの生贄にされるため、助けてくれか。相手はドラゴンということはSクラスの冒険者が数人必要だな」

「ああ、おやじだけど時間がないんだ、あと1時間少ししかない、ギルマス権限で支店にあるスレイプニルを貸してくれ、普通の馬だ」と間に合わない。」

「だが、相手はドラゴン、書いてあることは火を吐くと書いてある、となるとレッドドラゴン 中位クラスの幻想種だぞ」



「ああ、大丈夫だ、親父が公爵就任の際にくれたこのナツクルがあれば余裕だ！それに公爵邸から数人Aクラスの魔法騎士を連れてきている。だから頼む！」

「ふむ、押し問答をしてる時間はないか、スレイプニルの乗り方は分かるな？」

「ああ！大丈夫だ、じゃいつてくるぜ！」

ボタンと言う音がして扉が閉まるとその震動でベルがカランカランと音を鳴らした。

「あなた、またユーグは？」

「ドラゴン退治にでかけた。」

「領主になってもそこはかわらないのね、まったく誰かさんを見るようだよ」

5匹のスレイプニルに跨り、ユーグネスと公爵家魔法騎士4人は生贄がいまだに実施されている村へ急いでいた。

ユーグネス一行は村に着き次第すぐに、行動に移した。

儀式を中止するために村長の家に行ったが、妻エレーヌさんしか在宅しておらず、すでに、村長を先頭に山をに向ったと言う。

エレーヌから話を聞く限り、時間が残り少ない。

すぐにでも向おうとスレイプニルに跨ったとき、エレーヌさんより自分達より先に村長の場所を確認しに来た少女がいた事を聞いた。そしてその少女はエレーヌと話をした途端、空を飛び山の方へ向ったと言っていた。

ユーグネスは人間が空を飛ぶ術などこの世界に無い事は知っていた為、疑問視していた。そんな事はあるのかと山を登っていき、ドラゴンがいると思われる祭壇近くまで来たとき、木に立てかけられていた少女が目に入った。

その少女の目を見た瞬間、禁止されてる術の一つである感情抑制の魔法を掛けられてる事に気づいた。

「くそやるうが!!」

「おい、俺が今からドラゴンを始末してくる、お前らはこの少女を守っておけ!」

歩きながら体内の気を感じのまま循環させていく。

同時に《フアンクトム亡霊》で脳内のリミッターを切っていく。

直接、体内の細胞を支配化に置き、鋭敏になった感覚も直接制御下におく。

木々の間から、巨大なレッドドラゴンの姿が見えた。

力を溜めて攻撃をしようと飛び出した所でおかしい事に気がついた。そのレッドドラゴンは下半身が凍り付いており、切断されていた。そしてドラゴンの視線は一人の蹲ってる少女に向いており、口を開きドラゴンブレスを吐きかけるところだった。

「ちっ！間にあつか？」

再度、レッドドラゴンに飛び掛ろうとした瞬間、その少女が展開させた魔法により目の前でレッドドラゴンは真っ二つになり絶命した。

「おいおい、マジかよ？なんだよ、今の魔法は、お袋の魔法に近いぜ？」

どうやら、その少女は意識を失い倒れてしまったようだ、髪の色。さっき見たときは黒じゃなかったか？今銀髪なんだが？

まあいいか、顔を向けさせて抱き寄せて抱えた

おいおい、すっげえ美人なんだけどなんだよこれ？思わずゴクリと喉をぬらしてしまった。

いままでたくさん女の俺は見てきたが、こんなに引き込まれる魅力をもった女性は初めてだった。

少女を抱いたまま、スレイプニルに乗り、控えていた騎士へ命令を下した。

「魔法騎士を3人ここに残して今後の対応をしてくれ。生贄にされかけていた少女とこの銀髪の少女は一度公爵邸へ運ぶ！」

そう魔法騎士エルネイスに命令をして、そのまま町にある公爵邸へ

足を向けた。

俺が、プライト領地デルモント市に到着したのはすでに昼を回っていた。

そのまま、デルモントギルドが所有している馬舎へ行き、スレイプニルを返した。

一人の生贄にされかけていた水色の髪の少女には、休養が必要だと思いい、控えていた魔法騎士イーリッドへ治療の専門医療師の手配をするように命令をした。

普通の馬に乗り換えたイーリッドは生贄にされかけた少女と一緒に公爵邸の方へ向っていった。

俺はその背中を見送りながら、レッドドラゴンの件と話と戦っていた少女を抱いたままギルドに足を進めた。

カララン

扉に取り付けられたベルが軽快な音を立てて扉が開く。

「いらっしやいませ」

お袋のアイナが受付から営業スマイルで声をかけてくるが、俺が抱き抱えている意識を失った少女を見ると心配しそうな顔をして近寄ってくる。

「ユーグ、その女の子をどうしたの？」

お袋に事の事の経緯を説明し始めると、話の途中で勘違いしたのか、泣きそうな顔になった。

「生贄にされてた子なの？」

「いや、違う。」

お袋と話をしているとお袋の後ろから声が聞えてきた。

「ユーグネス帰ってきたのか、ん？その女の子はどうしたんだ？攫ってきたのか？」

半分冗談に親父が聞いてくる。

「いや、違うんだ。この子一人でレッドドラゴンを倒してたんだ。」

親父もお袋もおどろいていた。

「で、その直後に意識を失って倒れたんだけど、レッドドラゴンは各部位を魔法具・薬の材料になるからかなり高値になるだろ？それでこの女の子くらいの実力ならS+ランクくらいの実力はあると思っただけ、討伐金と部位換金料をこの子が登録してるギルドバンクに入れてほしいと思って連れてきたんだよ。」

「なるほど、そういうことか。」

「ふむ、ユーグ。本当にこの子が倒したのか？」

「ああ、間違いないぜ！きちんとこの目で見てたからな」

「アイナどう思う？」

「そうね、私から見ても魔力の残滓がまったく感じられないから魔道士って感じではないわよね。」

「さてよ、お袋、親父。この女の子がレッドドラゴンを魔法で真つ二つにしたんだぜ。魔道士じゃないはず無いだろ」

「そうか、ユীগお前は私達の違って魔力を感じ取ることが出来ないからな」

親父はそう言うのとカウンターに立てかけてあるギルドプレートを少女の指先に当てて、認証を開始した

「どうやら冒険者ではないようだ。」

「アイナ、すまないがその少女の身元が判明できる物を身に付けてる服から探してくれないか？」

さすがに男が気絶してる体を探るわけには行かない為、この場の唯一の女性であるアンナにその役目が任された。

さっきの部屋から出て、応接室で俺と親父はお袋の報告を待ってい

る間に話をしていた。

「ユーグ、お前の言葉を信じないわけではないがあの少女には魔力を利用する器が存在しないんだ。つまり外界からの精霊の力を自分の中に取り込みそれを魔力に変換する事が出来ない。だから魔力を使用することが出来ないんだ。わかるな？」

「それは知ってるけどさ、実際魔法を使っていたぜ？」

「うむ、だから身元の確認を最優先したんだ。取りあえずアイナからの報告待つか。」

「そういえばドラゴンの体長は何メートルだったんだ？」

「そうだった、忘れてたよ。大きさはそうだな〜20mくらいかな？」

「なるほど、それだと上位竜に匹敵するな。そんなドラゴンを一人で倒してしまうとはその少女かなりの使い手だな」

「そうなんだよ！だからギルドに連れてきたんだけどな。」

「ふむ、それに可愛らしく、スタイルもいいから手元に置きたいというところか」

「ちょっと待てよ、親父。なんでそんな話に」

「ふ、顔に出てるぞ、それにそんなに顔を真っ赤にした状態でそんなセリフを吐かれてもな」



扉が開き、閉まるとお袋が先ほどの部屋から出てきた。

「あなた、ユーグ。こんな物をあの少女が持っていたのだけど」

アイナが二人の前に差し出してきたのは最新機種のソフトバンクの携帯電話だった。

「なんだ？これ」

ユーグネスは、はてなマークを頭の上に浮かべている

「これは、携帯電話か？」

「ええ、そうだと思うけど」

「最近の機種はずいぶん小さいんだな。メーカーはソフトバンクが携帯電話の会社はNTTしか無かったような、ソフトバンクって名前は人材派遣会社じゃなかったか？」

的外れな事をエルユードは言うがそれをユーグネスはまったく理解出来ていない。

アイナから携帯電話を受け取ったエルユードは画面らしき表面を触り、ユーグネスが見たこともない文字が表示される。それをエルユードは知っているかのように操作していく。

「ふむ、どうやらその少女はプロフィールから見るに鈴木雪すずきゆきという名前らしいな」

「ゆきちゃんですねーかわいいわ〜」

と体をくねらせてるお袋

「プロフィール？なんだそ、どいう事だ？おやじ家名があるってことは貴族なのか？」

「いや、お前にも以前一回話したことがあるが日本という異世界があるのだが、そこでは全員家名と名前をもっているんだ。この場合だと鈴木すずきが家名で雪が（ゆき）が名前になるな。」

そっか。だからお袋がユキちゃんって言ったのか・・・

っていう事はお袋も異世界人？

「親父それで、結局どいう事なんだ？」

「そうだな、結果だけ言うならば異世界人でしかもよくわからないって事が分かった。」

「何も分かってないって事じゃないかよ〜」

あらあらと、ニコニコしながら旦那と息子のそんな突っ込みを見ていた。

「ユーグ、そのゆきちゃんだけどね。しばらくは公爵邸に置いて、話を聞いたほうがいいわよ。その方がお互いのためにもなるし」

アイナも息子がゆきに一旦ぼれしてるのに気がついてた。

「わかったよ、じゃ公爵邸に戻るわ。無くなっても困るからその平べったいのはこのギルドで保管しておいてくれよ」

「ええ。分かったわ」

そのままユキを抱いて公爵邸にユーグネスは向った。

ユーグネスは公爵邸に戻ってきてから元々ワーカス公爵の娘が住んでいた部屋へ運びユキをベットの上に下ろした。

その後、公爵邸の執事長へしばらく、連れてきた少女を世話するようと言った後、レッドドラゴンの後始末のため、明日になったら戻ると言い公爵邸を後にした。

## 公爵邸へお持ち帰りされました。 4

ちゅんちゅん・小鳥のさえずりが聞えてくる。

朝のやわらかい日差しが窓から入り、レースの使われたベットで寄り添うように寝ている一人の女性と少女を照らし始めた。

女性の名前はユミル、この公爵邸のメイド。

ユミルに寄り添うように天使の笑顔を見せている寝ているのは雪である。

ユミルは目を覚まして、抱き枕にしていた雪を抱き寄せると毛先に沿う様に頭からいい子いい子してあげた。

それをされた雪は、気持ちいいのかユミルの胸元におでこを寄せて幸せそうにしていた。

「あーっ、もう食べちゃいたいくらいかわいいよー」

心の邪悪な部分を口に出していた。

雪が公爵邸に連れて来られてから、時間的にはまだ一日もたつてはいないが、代わり映えのしない公爵邸の日常には大きな変化が起きていた。

容姿、声、時折見せる切羽つまったアタフタした行動はこの公爵邸に勤めている人達全員のハートを鷲づかみにしており特に女性陣にマスコットとしてほしいランキング1位を2位以下をぶっちぎって獲得していた。

今日の添い寝も自称倍率100倍を超える中を勝ち取った結果？であった。

ユミルは雪が今日も泊っていくならばどんな手を使っても、添い寝権を獲得しようと考えていた。

ユミルは、雪の髪の毛を撫でているとトローンとした目をしたまま見つめられた為、はわーと心の中で思ったと同時に理性メーターが振り切れた。

すかさず、雪の腰をホールドアップし自分の唇を押し付けてその感触を楽しんでいた。

唇を奪われた当の本人、雪は寝起きで頭が回転していない所に無理矢理唇を奪われて、息が出来なくなりますます意識が遠のいていく。生存本能からか、くぐもつた声を上げる事しか出来ていない。

そうしてるうちに酸素欠乏により体中の力が抜けた所で腰を引かれ、しまい顎を引かれさらに苦しくなってしまう。

ユミルが雪の顔を見ようと唇を離れた所で、雪は酸素を求めて、唇を開く。

それを狙っていたのかユミルの舌先がユキの唇を通り過ぎ、唼内に侵入して歯を嘗めながら唼内を蹂躪していく。

静かな部屋に唾液同士が奏でる音が鳴り響く。

しばらくしてから、ユミルが唇を離すとお互いの口から唾液の糸掛かりシーツの上に染みを作る。

そして、ユミルの右手が雪の胸を揉み始め、左手で足の付け根の部分の茂みを刺激していく。

雪は、体中に広がる甘い刺激から時折、甘い吐息を吐く。

ユミルは雪の唼内を自分の舌で蹂躪していき、左手を茂みの窪みに差し込もうとした所で部屋のドアをノックする音が鳴り響いた。

部屋のドアを開けて、メイド長のメイスが部屋に入ってきてユミル

の首をガシツと掴んで雪様、すいませんでしたとメイド長のメイスがユミルを連れて部屋を出て行った。その様子をぼーっとして見ていた雪は段々と起きた内容を理解するに連れて慌てた。

「朝から、貞操の危機に晒されるなんて・・・」

そのまま、体を見ていくが、いまだに女性の体のままであった。

雪の力にはリミッターが掛かっており、存在の力を許容量以上に使った際に肉体がその力を回復させようと女性化する。

さらに、長期間の回復時間を必要とされる場合、言語機能・思考能力共に女性の体に準じた形成を半強制的にされてしまう。

まだ問題はあり、女性の状態で異性と関係を持つてしまうと女性のままの性別で固定化されてしまう。

つまり男性の時は、女性と関係をもっても大丈夫だが、全ての力を使いきり力を回復中の一般的な日本人の女性となった時に男性と関係をもつと永遠と女性のままという事である。

完全な女性になれば、存在の力は戻り、力はそのまま行使する事は出来るそうだが、男として生きて生きたい雪にとって、それは死刑宣告に近いものであった。

心の片隅でもう、諦めちゃえよ！という聞えてきた声は無視するとして、この世界へ来てからというもの自分の力の許容量を考えずに力を使っていた為、今回のような事態を招いた事に対してを反省した。

今はまだ、無理矢理起された体は睡眠を欲しがっていたのでそのまま、ベットで寝る事にした。



## 戦争の亡霊

雪が公爵邸でお世話になつてゐる頃

イスメラル帝国の首都ギルメスティア中心部の貴族街から北方へ1 kmほど進んだ所にある、黒一色の建物にはプレートが掲げられており、そこには血のような赤い色でアルテイルス科学研究所と書かれていた。

そしてその建物の周辺を多数の警備兵が巡回していた。

建物に設けられている正門の警備兵の詰め所へ一人の壮年の男性が近づき、警備兵へ通行許可証を見せる。

ヴォルフ・ヒトラーという名前が記載されており、通行書の名前の上にはアルテイルス研究所所長と記載されているのが目に止まった。警備兵は、その通行書を見た途端、顔を青くしてその男性を丁重に研究所に通して言った。

今、警備兵が案内している男こそ、イスメラル帝国の宰相であり影から王を操っていると噂されている人物である。

そして一部の者には有名だが、この研究所の地下には巨大な施設があり多くの人体実験を行つてるとされていた。

強大な権力をもつてゐる男に不快など取られような者ならどうなるか分かつたモノでは無い警備兵は顔を青くしていた。



ヴォルフは研究所の通路門を開いた警備兵に大した感慨を抱くことを無いまま、研究所の地下階段を下りていく。

突き当たった所には扉があり、鍵を懐から取り出し差し込んで開錠し中に入っていく。

200mほど進むと更に下に続く階段が視界に入ってくる。

その階段下りていき、近くにあったスイッチに手をかけて照明をつけた。

ここの研究施設には、この世界には本来ありえない電気を利用した照明が備わっている。

施設内を巡回しひとつの巨大な採掘現場までくると、あちらこちらに雪が破壊した物と同機種のメタリック色のゴーレムが土の中から掘り出されていた。

すでに掘り起こされて並べられてる数を合わせると1万体を超えている。

その後ろには巨大な木で作られた木造の船が鎮座している。

その船は半ば土に埋まっているが、材質が木に見えるのにその木の周りには虹色の壁が見える。

さらに木造の船の周りにはたくさんの透き通ったクリスタルで作られた髑髏が転がっており根源的な恐怖を与えてくる。

そのまま、通路を通り、ヴォルフは一つの実験施設に入っていた。そこには様々な生物同士を掛け合わせた生き物が檻の入れられており、実験用の薬を投与されデータ採取を多くの研究者が行っていた。

「ヴォルフ様、どうしたのですか？いきなりここに来られて？」

「うむ、今回のフレニリアル公園にある船を動かす《鍵》を手に入

れようと帝国兵を送ったのだが全滅したからの。その後始末をしていたのじゃ」

「なるほど、そういう事で最近来られなかったのですね。」

「うむ、実験はどうなっておる？」

「はい、投与した薬により3日ほどで組織細胞が崩壊してしまいましたがその間は普通の人間の数倍の力を有し痛みが麻痺する薬が出来ます。もちろん催眠効果も期待できます。一番最初に命令をした者の言葉だけを忠実に聞く化け物にできます。」

「ふむ、さすがだな。エルベルク、お前を同盟国の島国の内藤と言ったか？あれと会わせたと一緒に”エンハスの鏡”にてベルリンより脱出した甲斐があったわ」

「それでもこんな異界が実際あつて来るとは思いませんでした」

「うむ、どちらにしてもあの戦況ではもう勝利は無かったからな、仕方がないわ」

「ですな」

「それと、ヴォルフ様、さっきヴェインの使い魔より帝国軍が壊滅した際の映像データが届いています。」

「わかった、すぐに見てみよう。グレンダル王子より報告は魔法鏡から聞いているがこの世界の文明レベルが低すぎて説明も要領を得なかったからな」

「それとヴェインはそのあとどうなったのだ？」

「はい、どうやら帝国軍と実験のために連れて行った狂戦士と一緒バーサーカーに死亡したようです。」

「ふむ、おしいな。ゴーレム作成としては一流だったものを・・・」

「それでは、そろそろ実験に戻ります。ヴォルフ様、映像データは例の部屋に保管してありますので。では失礼します」

去っていくエルベルクの背中を見ながら、部屋を出て細い通路をし  
ばらく歩き、データ室とプレートに書いてある部屋に入っていく。  
そして第2次世界大戦時の技術と魔道を応用し作り出した魔道機械  
を起動させた。

起動ししばらく経つと、空中に画像が展開され先日のユキが使った  
魔法の展開・軌跡が克明に映し出されたあと帝国兵が全滅する様を  
見せていた。

その様子をヴォルフは何度も見ながら、ようやく時期がきたな、も  
うすぐ世界は我が物になると空中に表示されてる画面を見ながら考  
えていた。

太陽が少しづつ昇ってくるに連れて一日の活気が出てくるのはこの世界でも共通である。

本来、人という生き物は朝日と共に起きて生活をし、日が沈むと同時に休むものだから

なので今、メイド長室で朝礼時間にユミルがメイド長のメイスに猛烈に怒られてるのは仕方ないと信じたい。

とユミルの頭の中で今までのナレーションを作っていた・・・

「ユミル！聞いているのですか？公爵様にお世話を言い付かった客人に対してああいう破廉恥な対応をするのはメイドとしていけないとあれほど！」

それに大してユミルがキツ！とメイド長のメイスを見つめると

「それなら、あのシュチエーションになったらメイスさんなら自制が効いたと言うのですか？」

もう、明らかにユミル自身がやった事を棚に上げた発言だ、さらに

「メイスさん！もしあの子が寝てる時に寝言でメイスさん〜とトロロンとした目で見つめてきたらどうしますか？」

とさらに筋違いな言い分も出し始める。

「うっ」

それはさすがに我慢しきれないかもと心の中で思っていたりしたメイスであったが、他のメイド達の手前もあり

「とにかく！今後、添い寝は中止です！わかりましたか？」

そう言いつと、

「え〜」とか「そんな〜」とか「横暴よ〜」

と

「世界が終わりだーみたいな顔をしてもだめです！さあ、朝食ですの雪様を起してきてください。そろそろ公爵様もお戻りになりますので解散。」

そう言い、メイド達の朝礼は解散した。

ユミルがメイド長のメイスに連れられて部屋から出て行ったのと入れ替わりにユーグネスは雪の部屋に入室していた。

昨日のレッドドラゴン貢物の事件は、調査の結果、村ぐるみで行っていた事が判明。

国の境界線をすでに越えている事から、他国の問題のため、王宮を通して正式に隣国へ情報を送る手筈を整えた。

レッドドラゴンの処理に関しては討伐者の雪のデータを偽造してつち上げ雪の名前にて引き取った。

村の方もさすがにレッドドラゴンを単身で倒すほどの者に逆らう気は無いようで特に問題が発生する事はなかった。

そのあと、ドラゴンの部位の販売などをしていたら帰宅が今の時間になってしまったという事だ。

今、ユーグネスは雪が寝ているベットの上にいる。

ユーグネスは寝ている少女の髪を手で救い上げてその感触を楽しみながら顔を観察している。

この世界の女性には見られない顔つきをしている。

窪みが浅い眼窩、それに合うような神技のごとく配置された顔のパーツ、美人と言うよりかは可愛らしく庇護欲が駆られる容姿をしている。

そして、体の方もきちんとしている。

ユーグは雪の唇の感触を味わうように人差し指で唇の上をスーッと撫でてみた。

とても滑らかにすべりやわらかい。

「ぱくっ」

「！？」

雪がユーグの人差し指を口の中に入れてモグモグしていた。

暖かい感触が指先から伝わってきて、ユーグは顔を真っ赤にしてしまった。

そして思わず

「きもちいいものだな」

呟いてしまっていた。

そうしていると満足したのか、唇から指先が開放されたがそれに閉じて少し残念に思っていた。

しばらくすると、一人のメイドがユキを起しに戸を数度ノックしてから入ってきた。

ユーグネスがいる事が分かると、すごい剣幕で近づいてきて

「ユーグ！何を寝ている女性の部屋に入ってきているのですか？」

とすごい剣幕で怒ってきた。

俺、一応公爵なんだけど、と思ったが幼馴染のユミルに言うときさらに激怒されるのは目に見えていた為、すまないと言ってそのまま部屋から追い出されるようにして出て行った。

途中で、他のメイドから食事の用意が出来てると聞き食堂に向ったのだった。

「もきゅもきゅ」

音を立てながら、ロールパンもどき固い何かを雪は食堂で噛んでいた。

ゆっくり唾液でやわらかくしながら食べないと噛めないパンは食べ物としてはどうなの？と思っていた。

結局、雪が起きたのは、公爵邸の主が部屋を去ったあとから3時間を経過したあとであり、その間ずっと起しにきたメイドのユミルはユキの体を弄んで（肩に手を当てる揺らして）いたが愛くるしい寝顔に悩殺されて3時間近く見つめていた。

そついう経過もあり遅い朝食というなの昼食を摂っていた。

その食べ方を見ながら、ユミルはかわいいなー食べちゃいたいなーと黒い考えを心に描いていた。

スープを飲み終んだあと、お水を飲み一息ついたユキは、公爵が仕事をしている応接室へ案内された。

トントン、扉をノックする音が聞えてきた。

「ユミルです。雪様をお連れしました。」

「わかった。通してくれ」



中から透き通った耳心地のいい男性の声が聞えてきた。

雪は部屋の中に入ると、書斎という感じの部屋を見回した。両脇に本棚が置かれ、奥まった場所には執務机が鎮座している。

中央には来客用のテーブルとソファアが置かれていた。

ソファアに座るようにここの主から薦められて雪は座り、テーブルを挟むように薦めてきた者も腰下ろした。

「お初にお目にかかる。私がここの主、ユーグネス・フォン・プライトだ。一応、ここの公爵をさせてもらっている」

「あ、えつと私は、鈴木雪すずきゆきと言います。助けてもらったみたいでありがとうございます。」

ユーグネスはしばらく、雪を見ていたが声も想像通りとても可愛らしく歌うようにしゃべる子だと内心では焦っていた。

「そうか、それでは少し話したいので、ユミル。少し席を外してくれないか？」

「はい、わかりました。」

心の中で、ムスツとしながらも顔には出さずにそのまま部屋から出て行った。

扉が閉まり去って行く音を聞きながら、

「それでは今回のドラゴンに関してですが、雪殿が討伐したという

形を取らせて頂きました。そのための報酬がこちらになります」

そう言いながら、パルプ製の紙を広げてユキに見せたが、反応が今ひとつだった為、やはり異界人だから言葉が通じてても文字が読めないのかと理解しユーグネスは説明を開始した。

ユーグネスさんに紙に書いてある内容を説明してもらった結果、金貨3000枚が私の口座を作ってくれてそこに振り込んでくれたみたいだった。

話によるとユーグネスさんのお父様がこの領主のギルドを束ねてる方らしく、うまく立ち回ってくれたとか？

ユーグネスさんを見たとき、身長がすごい高くて髪は黒で目の色は金色で肌は日焼けしているのか若干黒い感じでもってても精悍な感じがしてすごいカッコよくてドキツとしちゃて、

見つめられて説明を受けてる間、ずっとドキドキしてて顔が真っ赤になっても、目線はボーっとユーグさんの顔を見つめていて唇の動きをずっと追っていた。

ユーグネスさんに携帯電話の事を聞いた所、無くした場合困るからってギルドに預けてるとの事と、生贄にされかけていた少女の治療には何人かの医療術師を手配してあるようでしたけど、かなり難易度の高い術式が掛けられてるのか時間がかかるといふ事でした。

でも、私は今、ほぼ力が使えない状態なので無言で聞いてました。

ユーグネスさんはまだ力が回復中の私がうまく歩けない事を知るとお姫様だっこしてくれて公爵邸を案内してくれました

その都度いろいろと話しかけられてたけど、ずっと夢心地ですつこい遅い腕でだっこされていたので安心しきってうんうんって何も考えずに返事してたの。

明日、一度ユーグネスさんのお父様とお母様の働いてるギルドに行  
って携帯電話の返却手続きをするから今日一日、ゆっくり過ごすよ  
うに頭を撫でてくれました。

思わず顔が赤くなっちゃたけど、ばれてないよね？

でも、明日連れて行ってくれるってことはそのままご両親に紹介す  
るってこと？でも私まだ心の整理がついてないよー

.....

.....

.....

.....

.....

.....

夜まで

ユーグネスさんにいろいろと話をしたりしてから部屋に戻ってきて一人になった途端、乙女モードが解除されて、意識が鮮明になり、男の意識が戻ってくるにつれて

「ぐはっ！」

血を吐くような気持ちの悪さを感じた。

誰か私をころしてーと先ほどまでのユーグネスとの会話の中で自身の痛々しいやり取りがメモリーに浮かんでくる。

この異性がいるときに発動する限定的な乙女モードはどっにかからないものかと頭を抱えながらベットの上でゴロゴロと唸りながらもそれは寝るまで続いた。

公爵邸へお持ち帰りされました。

7

ちゅんちゅん・小鳥のさえずりが聞えてくる。

朝のやわらかい日差しが窓から入り、レースの使われたベッドで寝ている一人少女を照らし始めた。

決して42話の使いまわしじゃないよ！というナレーションが人知れず入っていた

ベッドの上では銀髪の長い髪をツインテールにした少女が寝ており時折、スーツスーツと言う息遣いが聞えてくる。

ツインテールにしてる少女の名は雪。

そして只今、夢の中で絶賛恐竜の尻尾を鉈で切り落とし、火にクベテイタ。

「むにゃむにゃ、もう食べれないよ〜」

あどけない顔からは想像もつかないような壮絶な夢を見ているという事を誰が想像出来ようか？

きっと神ですら不可能かも知れない。

だが、その少女の見る夢の中では捕獲したティラノサウルスを目の前にしながら巨大な1m以上の鉈を振り回しながら、『この世の全ての食材に感謝を込めて頂きます』と料理をしていた。

注 これは実際、過去にあった出来事であり、フィクションではありません。

というまた意味不明なナレーションが入ってたのはいつもの事だろう。

しばらくすると、メイド長のメイスがユキを起しにきた。

さすがにメイド長という事だけはあり、スムーズに雪は起きる事が出来た。

それが肉體言語が多少入っていたとしても・・・

「おはようございます、メイスさん」

「ご機嫌はいかがですか？雪様」

先ほどの黒歴史があったこともあり、雪は大丈夫デスヨという意味合いを込めて首を上下に動かした。

「そろそろ朝食の準備ができますので洋服に着替えてくださいね」  
「ときばきとメイスは雪にドレスを着せていった。」

ドレスの色は空色を基調として縁取りは白地になっており胸元にフリルがかかっているとしても可愛いものであった

。スカートは足首あたりまででありお嬢様という雰囲気のものである。

「ところでメイスさん、もしかしてユーグネスさんも一緒に食事なんでしょうか？」

「そうですよ」

とメイスはニツコリと笑って返してくる。

ヤバイよ！ヤバイよ！ヤバイよ！男の前だと気持ちから全部、乙女モードになっちゃうよ！なんとか異性と会わないようにしないと！

「えっと、メイスさん。実は、体の調子が悪くて・・・この部屋で一人です！≫食事をしたいのですが無理でしょうか？」

「え？」

一瞬意外そうな顔を見せるが

「分かりました、それではこちらのお部屋で食事が出る用に手配させますね」

さすがにメイド長様！本職は違う！私の気持ちを汲み取ってくれたのね！と

《ユーグネスと一緒に部屋で食事をするまでは》思っていました。ええ

ユーグネス食堂では、メイド長のメイスより体調が優れない為、一人で食事をしたいと雪様から聞いたので食事をお部屋にもっていき  
ます。

と報告を受けた時、レッドドラゴンの討伐の際に無理をして体を壊した事か昨日無理に屋敷内を連れ回した疲れが出たのかと思いい様子を見る事を含めてメイスに雪と同じ部屋で食事が出る様に支度をさせるように指示した。

それを、雪が聞いたら、イヤお前が来るほうが迷惑だからとマツハ速度で突っ込む所だっただろう

ユーグネスが部屋に訪れ雪が、ユーグネスを顔を見た途端、頬を赤らめてモジモジしていた。

それを見た、ユーグネスは抱しめたい気持ち湧き上がるのを精一杯押さえつけていた。

雪もユーグネスの姿を見た途端、心臓の鼓動が早くなってしまい、ぼーっとユーグの顔を見つめてしまっていた。

そして、ユーグってかっこいいな。頭ナデナデしてほしいなと  
考えていた。

食事の時間は終り、ユーグネスに抱きかかえられるようにして馬に乗ったユキはそのままユーグネスがギルドに向ってる間、ユーグネ



スの体温を感じて匂いを嗅ぎながら、トローンとした恋する乙女のような視線をユーグネスに向けていた。

ユーグネスはそれを見ながら、昨日、雪を抱きしめていたときに庭を散策してる間、ユキに求婚をして、トパーズの指輪を送ったあと返事で「はい、結婚したいです」と了承をもらっていた。

今回のギルドに両親に会いに行くのも両親に紹介する事が9割を占めており、携帯電話の事に関しては物のついでであった。

ちなみに、その結婚云々の時の時は、ユキは乙女心全開の時の夢心地タイムに聞いており記憶の彼方にしか残ってはいなかった。

馬から下りてユーグネスに抱き抱えられるようにして降りた雪は、そのまま地面に降ろされた。

雪は、ユーグネスともっと触れ合っていたのに〜と心の中で考えながら、ユーグネスがギルドの方へ歩き出したので、急いで左腕をぎゅっと抱きしめてから歩きだした。

ユーグネスもまさか、こんな町の中まで腕同士を絡ませて歩くとは思っていなかったが、雪の方を見ると顔を赤らめて目を潤ませて見上げてくる。

腕は雪の胸に押し付けられていた。

からら〜ん

ギルドの中に入ると見知った人達がユーグを見て、驚いた顔をして聞いてきた。

「どうしたんだ？ユーグネス、その銀髪の女の子。いつから本命作ったん・ゴフツ」

一人の冒険者が話の途中で吹飛ばされていた。

私はその話を聞いて、他にも女の影が見えた気がしてイラツときた。昨日、求婚してきたのに他にも女がいるなんて・・・ひどいよ

「ライデン、彼女に誤解を与えるような発言は控えてほしいな？逝きたいなら別だが？」

雪に見えない位置で般若の顔をしていた。

「いや、なんでもない。またな・・・」

からら〜ん

音を立てて冒険者達がギルドから出ていった。それを見送ってから雪の方を見たが

「ユーグ！ひどい、私以外に女の子と付き合ってたの？結婚しようって言ったのは嘘だったの？」

涙を瞳に湛えながら言われ

「違うぞ！？俺はお前一筋だ！！勘違いするなよ！！！！」

「でもだって！いまの人が、！？」

俺は、雪がさらに何かを言おうとしたので、雪の唇を自分自身で塞いだ。

行動で示したほうが分かってくれと思ったからだ。

キスをしてる段階で欲望に耐え切れなくなって、雪の腰に手を回して、唇を舌で割って舌先で雪の歯のを嘗め回していく。

雪も感じているのか舌を出してきたので舐めとり触れ合った後、啞内を嘗め回した。

私は、ユーグネスにキスされた気持ちの良さからぼーっとしていた。

「俺がお前を好きなのは本当だ、だから信じてほしい。」

ユーグネスに再度告白されてしまい、雪はやっぱりユーグっていいよね。

はうー結婚したら子供3人くらいはほしいなーと想像していた。

「うん、わかった。信じる」

ユキはそう言いながら、ユーグネスの胸に飛び込んだ。

ユーグネスも花が咲くような笑顔を振りまきながら抱きつかれて、幸せを感じていた。

## 夜這い

その日、ギルドの受付嬢をしていたアイナは、ギルドの扉の外側に看板をかけていた。そこにはこう書いてあった。『本日は所要にてお休みします。部位の換金はここから500mの所にあるギルド銀行にて一時的に行ってます』

こんな横暴な事が出来たのも、SSランククラスが二人も在籍しているギルドならではのと言える。

そんな中、ギルドの2Fにある応接室では、ギルドマスターであるエルユードとその妻アイナが並んで座り、机を間に挟んで息子のユグネスと寄り添ってる少女雪がソファアにて座っていた。

アイナの心境としては、先ほどのカウンターの前で広げられてたやりとりを見てて、「まあ仕方ないわね、若いんだもの」とカウンターで微笑んでいたが、

母親としてはかわいい息子を誑かす雌として認識しており、顔は微笑んでいたが腹の中は煮え繰り返す感情を抱いていた。

そして、雪といえは、そんなアイナが眼中にないようにユグネスに視線を向けており、それもアイナの怒りを買ってる一因であった。

この部屋に入る前に、雪を見てアイナがこっそり指に戦略級の複合オリジ原書を着けようとしていたのをエルユードが発見して没収したのがいい例だ。

という事もあり、雪とアイナの間にはすでに姑バトルがスタートしていた。

「それでな、親父、お袋。前からさ、さっさと結婚しろって言うってただろ。中々いい女性がいなかったんだが俺さ、雪さんに一目ぼれしちやてプロポーズしたんだよ！そしたらOKもらったからさ、今度結婚するからさ、いいだろ？」

その言葉を肯定するように

「えつと始めまして、私は鈴木雪すずきゆきと言います。日本という異世界から来たのですが、ユーグネスと一緒にになりたいと思っています。お父様、お母様これからも末永くよろしくお願いします。」

と雪もユーグネスの両親に挨拶をした。

「ちょっとまって！簡単に結婚って言うけど、ユーグネスと結婚するくらいなら家事全般くらいはもちろん出来ますよね？」

「それにユーグネスにはまだ結婚は早いと思うのよね！そう、もう少し考えてからでも遅くないんじゃないかしら？ねえエルユードもそう思うでしょ？」

「大丈夫です、お母様。私は家事全般は得意ですし、年齢も18歳です。日本の法律から言っても問題ないです。」

「お袋、雪さんもこう言ってるんだからいいだろう？前から結婚しろって言ってたんだからいいじゃないか・・・」

このガキがうちの息子を誑かしやがってと服の袖から隠してる  
風魔道書ミドルリングを出そうとする。

それを眺めていた、エルユードは

「はあ、アイナ。少し頭に血が上りすぎだ、雪さんの存在の異常にまだ気がつかないのか？」

と発言した。

「え？」

ユーグネスとアイナは疑問に思ったがそれを気にせず雪はユーグネスに抱きついたままである。

仕方ないと言った感じで

「ユーグネス！しばらく俺と席を外せ」

二人が部屋を出て行き、部屋にはアイナと雪だけが残される。

アイナは相変わらず、この女いつ血祭りに上げてやるつかと考えていたが……

ユーグネスが部屋を出て行ってしばらく経ち、雪の乙女モードが解除された。

「グボハッ」

と盛大な吐血を吐いたような気がした雪の姿がアイナには、もう疲れたんだ、パトラッシュもう寝てもいいよね？っていう感じに目に

映った。

「大丈夫？雪さん？」

「ええ、大丈夫です。ようやくユーグネスがいなくなったので乙女モードが解除されたようで助かりました。」

「え？どういう事なの？乙女モード？」

「話すと長くなるのですが、秘密にしてくださいね」

「ええ」

さすがに毒気を抜かれたのかいつもの口調にアイナも戻っていた。

そしてアイナが雪から聞いた話は、日本という異世界から来た事、本来この世界の者ではない為、事象をコントロールする際に存在の力と言う物を使うこと、使用しすぎて限界を超えた場合回復の為、男の体から女の体になる事、そして長期間回復の目処が立たない場合、精神・感情・考え方が女性化してしまう事、そして防衛本能として強い異性に恋愛感情を抱いてしまう乙女モードが発動してしまう事を説明された。

「大変だったのね・・・」

これしかアイナが雪に言う言葉はない。

つまり自分の意志などそっちのけで潜在的意識は男のままですと結婚するのだ。

どれだけの拷問なの？と思われても仕方ない

「えつとあとここから重要なのですけど、女性化してるときに体内に男性を受け入れてしまうと永遠と女性のままになって戻れなくなってしまうらしいんです。ですから最後の一線だけは越えないようになんとか結婚しないように手筈を整えてくれませんか？」

アイナはそう説明されて、むーと唸った。

さすがに母親だけあって、精神は男でも見た目が美少女と結婚すれば、日本育ちって事で話は合うだろうし、フィーリングも合うかもしれない。

しかも小さく抱きしめればすっぱり入りそう。

それに元、男の娘なら男の人の苦勞も分かるし、喧嘩になることも少ないだろう。

しかも完全に女性化すれば魔法も使えるし、息子があれだけ執着してるし！母親としては心境的に複雑でもこれから付き合っていくならかなり好物件！

「ええーそうね。しばらく考えた方がいいかも知れないわね。間違いが起きても仕方ないから《数日》は、近くのホテルに一室借りて上げるからそこに泊っていけばいいわよ。そうすればユーグネスにも合わなくて済むしね。」

やったー！やっぱり母親です。ユーグネスさんが男の人と結婚するのはやっぱり反対ですよね！よかった。相談してーと雪は心の中でアイナに感謝していた。

アイナの腹底では、既成事実を作らせてから私好みの嫁にしちゃえば問題ないのよねーと黒い考えを抱いていた。

借りるホテルは完全防音！ユーグに夜這いをかけさせれば乙女モードになった雪さんなら拒めるはずないから孫の顔もすぐに見れるか



もくと邪神クラスの悪意を笑顔の裏側に隠していた。

「それじゃ、フェアリーブルーホテルって所の受付の人にアイナって名前出せば部屋借りられるから言ってきたね。」

雪は、アイナにそう教えられて、ギルドの裏口から笑顔でホテルに向っていった。

その頃、アイナはユーグネス、エルユードに雪と話した内容を聞かせていた。

アイナは話の一部に嘘を交えて説明していた。つまり元男の子という事と乙女モードそして、一線を越えたら女性として性別が固定されてしまうという事を秘密にしていた。

「ふむ、異世界から来たから存在が不明瞭だったのか、なるほど。そして力を今は使い果たしていると・・それならば理解できるな。よし！俺は王宮から頼まれてる鑑定をするからあとは頼んだぞ」

エルユードはそのまま仕事に戻っていった。ユーグネスもそのまま帰ろうとしたが

「ユーグ！ちょっとこっちに」

「なんだよ、お袋。まだ用か？」

「はい、これ。」

「ん？なんだこの鍵？1012号室？どこのだ？」

「うん、それはね。雪ちゃんが泊るフェアリーブルーホテルの鍵よ、今日は雪ちゃんがねあなたとどうしても一緒に寝たいって言うてたから、男を見せるチャンスよ！」

「まじか？お袋？まだ結婚前だぜ？」

「大丈夫、大丈夫。サクツと男を見せてきなさい。やさしく何度も抱けばイチコロだからがんばるのよ」

「お、おう。」

「いくなら午後22時以降がお奨めだからね、一応向こうの支配人には話は通してあるからアイナの名前を出せば通れるからがんばってね」

「わかった！少し時間潰してからいってくる」

そう言い、ユーグネスがギルドの裏口から出ていった。

其れを見ながら「作戦どおり」ニヤリと悪魔のような笑顔をアイナはしていた。

その頃、雪は部屋を借りてバスタブでお湯に体を沈めていたにもかかわらず、思わず悪寒を感じた。

## 始まる悪夢

雪がホテルにチェックINしたと同時刻

イスメラル帝国の研究施設の地下では実験が始まっていた。

広大なりノリウムの床が広がる上には数多の機械が鎮座しており不気味なコードがそこから延びていおり全てが広間の中心部にある闇に続いている。

しばらくすると、地下実験場は慌しくなる。

「第1回路から第17回路まで異常なし。」

一人の研究員が報告を上げると次々と報告があがっていく。

「セフティーロック解除、空間安定座標軸を算出、起動します。」

それと同時に広大な闇に閉ざされていた空間が電灯に照らされる。

そこは巨大なストーンサークルであった。

「エルベルク副所長、現在、全システム正常に稼動中です。」

「ふむ、あとはこの世界を形作っている泉のエネルギーを取り出せるかだな？」

「はい」

一人の研究員が答える

「臨界点まで10.9.8.7.....0」

「18番回路から33番回路まで接続」

「ミミールの泉より既存概念の抽出を開始します。」

「魔道の技術を言うもは便利な物だな。ありもし無い物をエネルギーにすることが出来るとは」

「エネルギーへと変換開始、エネルギー変換率61% 89万テラジュール」

「よし、抽出したエネルギーを魔道具を通し魔法陣へ流し起動させる」

「全エネルギーを増幅魔道具を通し、ストーンサークルの周辺に設置してある魔法陣へ開放」

「時空間歪曲を確認。魔法陣、吸収したエネルギーにより”エンハスの鏡”の力を増幅中」

「空間展開座標をベルリン上空に展開中」

おおー、周りの科学者達から感嘆の声が沸く。

「副所長、やはりこの程度のエネルギーだと直径5 m程度の穴を数分間空けるのが精一杯です」

「そうだな、だが中々いい研究結果ではないか？66年前に発動したときはエネルギー不足で直径2 mを十数秒間空間に穴を空けるだけで精一杯だったからな」

「鍵”さえ手に入れることが出来ればエネルギー不足は解決する。フレニリアル公園に例の物で襲撃する準備を整えておけ。それと傀儡の薬も必要になる。作っておくように研究所の者に手配をしておけ、いいな？」

「くくくつ我が故郷、ベルリンもずいぶん様変わりしたものだな、もうすぐ我が偉大なる総統閣下と帰還する。その時こそ、偉大なる我が民族の力を世界に知らしめてやろう。ハハハッハアハ」

エルベルグはかつての自分が住んでいた故郷を空間に空いた穴から見て、狂ったように笑っていた。

## 夜這い 2

「ふう、いいお湯だった」

そう言いながら雪はベットの上でゴロゴロしながら、ギルドでアイナに渡された携帯電話の画面を見ていた。

携帯電話の時刻は、6月5日21:45分を指している。

「むー、これはやばいんじゃないの？」

実は先ほど、雪は存在の力が回復しており、髪の毛は腰まで届く艶のある黒髪になっていた。

問題は・・・体と口調が男に戻らないと言う点であるが、自分自身の体を複写眼で調べた所、アルファステイグマどうやら原因はあのユーグネスにあるように何度もデープキスをした為、彼の唾液が女の体から男の体に戻るのが阻害しているようだった。

しばらくは、異性の唾液を含めてた粘膜接触をしなければ（一線を含めて）24時間ほどで男に戻る点と乙女モードが解除されてる為、当面の問題はないと言う結論に達していたわけである。

雪はそのあとメールを見て驚いていた。ソフトバンクからの天気予報メールの日付が自分のもってる携帯電話とリンクしてる事に。

雪は元の世界では日雇いバイトで食いつないでる一人暮らし、アパートは低賃金であるが毎月振り込みが必要なわけである。先月の月末の家賃を払う前にこの世界に召還され、今月の家賃が払えない場合、契約上アパートを追い出されると言う可能性が出てくる

つまり、タイムリミットがあと24日しか残されてないというリア

ルな現実が突きつけられていた。

「うあゝ早く帰る方法探さないとやばいよー」

ベッドの上でゴロゴロしてるのは当然であった。

「ちょっと待って。ということは、週刊少年系の漫画も立ち読みできないって事？先週のメロウコーラの結果見てないし、緋弾のアリアのデュランダル戦も中途半端なままだしどうすんの？」

注 主人公は貧乏です

そしてどうでもいい事はっかり考えてます。

「まあ．．．いざとなれば動画サイトでアリアは見ればいとして  
．半年くらい経てばBOOKOFFに中古本として並ぶからそれを立ち読みすればOKだよな」

寝巻きを着よう。雪がベッドで横になって寝てからしばらくしてから扉の中に入ってくる一人の男がいた。

雪は基本気配を察する能力は0な為、いつもは結界を張っているはずが疲れてる為もあったそのまま寝てしまっていた。

そして、部屋に侵入した男、ユーグネスは雪を見て、驚いていた。

「髪が黒髪になってる。つまり魔力が戻ったって事か？」

そのまま、雪を観察していくが、髪の毛は無造作に背中に流されていてベッドの上に広がっている。着てる服は薄い色のピンクのネグリジェに絹製の純白のドロワースを穿いている。

胸元は大きく開いており、丁寧な刺繍がしてあり、メッシュに近い。

わずかに膨らんだ胸が呼吸と共に上下するのが見て取れた。

「髪が黒色ってお袋みたいだな」

そのまま、ユーグネスは起きる雰囲気を見せない雪のベッドの中に入り、雪を抱き寄せた。

ふわっと花が香る匂いが髪から発せられて、思わず腰を引き寄せ顔を自分の方へ向け、キスをした。

雪もさすがに一般的な日本人クラスの危機管理意識とは言え、キスをされて呼吸を妨げられたら起きないわけは無いわけで、息苦しさからゆっくりと目を開けていった。

視界いっぱいユーグネスがいるのが見える。ちよっと、これってユーグネス？なんでこの部屋に？というかなんで俺の部屋に入ってきてるんだ？

しかもキスってちよっとw

雪は必死に抵抗し止めるように態度で示すがユーグネスは取り合ってくれない。

そのうちに、背中を指先で撫でられて、びくんっと感じたところで歯の隙間からユーグネスの舌が入り込んできた。

舌で進入を阻止しようとするが絡め取られてしまい啞内を蹂躪されてしまっていた。

ユーグネスは雪が起きて、思ったより反応する雪に支配欲を燃やして、更に攻め立てる。

雪の胸を服の上から揉み始め、抵抗が段々と弱くなっていった所で、腰を抱き寄せ啞内を蹂躪しながら自分の唾液を飲ませ続け、完全に抵抗がなくなつた所で、首を唇で吸い上げてうっ血を何箇所も作る。そして耳たぶを甘噛みしながら反応を楽しむ。

「もう、やぁん！」



かわいい声を上げながらびくんと感じて、涙目で自分を見る雪を見て、ユーグネスは早く自分の物にしたいといきり立っていた。力が完全に抜け切って放心状態の雪のネグリジエを脱がしていく。

はあ。く耳を噛まれると感じちゃうんだ。なんかぼーっとしてるしこれって……

ユーグネスは既に、ネグリジエを脱がしていた。

雪も愛撫に感じているのか肌がピンク色に染まっていた。ユーグネスはそのまま、雪の胸の頂上を甘噛み吸いながらドロワースを脱がせていた。

胸を吸われた際に雪は思わず声を上げてしまっていた。段々と体中に心地よい痺れが広がっていく。

「雪、とても綺麗だよ」

そう言われて、快樂でまともな思考が雪には出来ていなかった。考えても時折くる快感で頭が真っ白になってしまい考えが纏まらない。

ユーグネスはすでにシーツまで垂れて塗らしている雪の秘所に己を入れていく。

雪は纏まらない思考の中で痛みを感じ、自分の中が押し広げられていくのを感じ腰と腰が当たった瞬間、痛みで意識が朦朧としていた。ユーグネスに止めるように抗議しようとするが、陰核を撫でられてしまい意識が飛び続けて弱弱しく体を押す事が出来ない。

その間も、何度も体の中を擦られて、声を上げさせられて、いつの間にか雪は気を失っていた。

雪を散々、堪能したエルユードは朝の風を受けながら、「フツ、太陽が黄色いぜ！」そんなセリフを吐いていた。

雪はユーグネスに抱きつくような格好で寝ており、抱き枕にもさらされた。そしてその身には服を一切纏っていない事もあり、バランスのいい体をユーグネスに押し付けていた。

「うゝん」

かわいらしい声を上げながら、雪がゆっくりと目を開けてトローンとした目でユーグネスを見つめている。

ユーグネスはそんな雪の反応と裸体を見ながら、再度、官能に火がついたのかまた雪を抱いていた。

雪は強制的に何度も絶頂をさせられ体の中にユーグネスの子種を注ぎ込まれた。

そういう事もあり、ギルドについたのはその日のお昼であった。

「ちょっと！アイナさんどういことですか？約束が違うじゃないですか！！」

もちろん、雪の肌は、艶々しており、昨日見たより幾分綺麗になっていた。男女関係を持った際に精製された大量の女性ホルモンのせ

いなのだろっ。

「え？ユーグネスの事？もう、あの子ったら雪ちゃんに会いたいたいだけに公爵権限を発揮してホテルに行つて夜這いしちゃうなんて仕方ないわね。」

誰もユーグネスなんて名前も出してないし、一言も夜這いにきたなんて言っていないよ！と心の中で突っ込んでいた。

ちなみにユーグネスは朝、雪を何度も抱いていかせた後、公爵の仕事があるから先にいくからと部屋を出ていつてしまっていた。

そのあと複写眼で自分の体を確認したところ、10日間は女性の体のままという数値が出てきた。つまり・・・男に戻ることは出来るというわけだが、男の人と無理矢理であつても男女関係を持つてしまったと言う現実には雪の精神に大ダメージを与えておりしばらく立ち直れないのは仕方ない事であつた。

唯一助かつたのは存在の力が戻っていた為、女性の体で固定される事はなかつたという点だが・・・

「それで、どうだったの？初めてはやっぱり痛かつたでしょ？」

「えっと、それは・・・」

顔を真っ赤にして言葉に詰まっしてしまっていた。

もうそんな恥ずかしい事言えないよー。朝もされちゃたし、とにかく話題をかえないと

「えっと私、行くところがあるのでちょっと出かけてきますね、そ

れじゃー！」

と言いながら雪はギルドから出ていった。

「さすがユーグね、やる事はきちんとやっちゃうなんて」

雪がしきりに太股をすり合わせて痛みを我慢しているのをアイナは感じとっていた。

そのアイナの後ろ姿を見ながら、まったく仕方ないなという顔をしていた。

### 夜這い 3

雪はデルモント市にある銀行で、金貨300枚程度を下ろして買い物しようとして町を散策しながら落ち込んでいた。

はあまさか男と関係もっちゃうなんて、本当にブルーだよ。今、雪が女物の服を着て街中を歩いていた。

まずは、タオル用に市場にて長めの布を何枚か購入していた。

「絹製のタオルが木綿の5倍もするとかどついう事なの！」

「ドロワースもすっごい高いし、絹製で一着金貨5枚とか高すぎるよ！」

小声で怒りを露にしながら路地を歩いていく。

男の人間のズボン安いんだけど、今はちょっとズボンは痛いからドロワースとスカートの方がいいんだよね。

ズボンだって穿いた日には、染みを作っちゃうし、スカートしか穿けないなんて、はあもうさいてー

溜息をつきながらもその後ろ、雪は洋服店を回り黒と白色の洋服を購入していった。

うー。ユーグネス会ったら絶対、文句言っただけだから、それと洋服代も請求しないと・・・あ！

「そつえば、フランに一回も連絡あれからとってないよね？」

魔法鏡借りに、またギルドに行くのか？ アイナさん苦手なんだよね。

からら〜ん

軽快な音を鳴らして扉に着けられてるベルは来訪者を知らせた。

「あら？雪ちゃん。戻ってきたのね？」

アイナはニコニコしながら目ざとく見つけた雪に話しかけてきた。

「あははは〜ただいまです。」

「アイナさん、所要でお金は払いますのでギルドにある魔法鏡を貸してもらえないですか？」

「いいけど、どこと通信するの？」

「えっと〜ちょっと知り合いと・・・」

「ふ〜ん、別にいいわよ、将来私の息子と結婚して、私の義理の娘になるんですもの、無料でいいわよ？」

いや、それはないから、と心の中で突っ込みながらも無料ならばと魔法鏡のある部屋の扉を開ける。

「えっとそれはないと思いますけど、お借りしますね」

部屋に入り、誰もいない事をが確認したあと、雪は魔法鏡にストラウス砦で見た、王宮会議室の魔法公式を入力していく。しばらくすると見慣れた大臣が移ってきた。

「おや？ユキ殿ではありませんか？」

ルイーゼが話しかけてきた。

「えつと会議か何かをしてるんですか？」

「ええ、いま文官と外務官全員を集めて、帝国軍を壊滅させ撤退させた後の帝国から受け取った身代金の予算会議をしてるところでした。」

「ユキ殿は髪が伸びましたか？」

「ええ、いろいろとありまして、あははは」

「え〜とフラン様には明日には戻る事を伝えておいてもらえますか？」

「わかりましたが、今どちらにいますか？」

「えつと色々あって、デルモント市の公爵邸でお世話になってます。」

「そうでしたか、それでは気をつけてください。」

そう言って通信が切れた。

「はあ、今日は疲れた」

雪は魔法鏡の部屋から出て、カウンターにいたアイナを見た。

「アイナさんお借りしました、今日はもう疲れましたので帰って寝ますねー」

そう言っつてギルドをあとにした。

路地を歩きながら、今日はさすがに、ユーグネスも来ないでしょと気楽な気持ちでフェアリーブルーホテルのフロントでチェックインして、自分の部屋までいく。

部屋に入るとユーグネスがベットの上で寛いでいた。

「ちょっと！なんでいるのよ？」

「お帰り、雪。お前に会いたくて急いで、仕事終わらせてきたんだぜ！」

そう言いながらもユーグネスがベットから降りてユキに近づいてくる。

「べつに会いたくないもん」

「雪は、怒った顔もかわいいな」

「本気で怒ってるんだから！初めてだったのにあんなにして！とつても痛いんだよ！この世界ってテッシュとかシャワーないからすぐに洗い落せないし、垂れてきたらすぐに拭けないんだから！だから今度からああいうの絶対禁止！ユーグネスは公爵邸があるんだからそっちで寝てよね！」



「それと私、今からお風呂入るんだから部屋から出ていっておい  
ね！」

「わかったよ・・・」

ふうふうというジェスチャーをしてユーグネスが部屋から出ていくの  
を確認してから雪は即効扉の鍵を閉めてからお風呂に入った。

ユーグネスは部屋から出てから、母親に言われていた事を思い出し  
ていた。話の内容はこういう感じだ

雪は魔力が安定してない銀髪の際は意中の男性を激しく求めてしま  
う事、魔力が回復して黒髪に戻ったあとは好きだけど照れ隠しから  
素っ気無い態度を取ってしまうと言う嘘を教えていた。

そのため、ユーグネスは今日も夜這いしちゃうぞ！作戦を実行しよ  
うとしていた。

そしてポケットからこの部屋の鍵を取り出して頃合を待っていた。

「やっぱりお風呂はいいよねー」

明日はとりあえず、フレイア城に戻ってこれからの事を考えないと

いけないなー

お風呂を出た雪は今日、購入しておいた、絹で織られた白い単調なネグリジェとドローワースを穿いてベットのの中に入っていた。

今日は念の為、

「《ほしいじょうそ方囲定礎・けつ結!》」

ベットの周りに結界を張ってその中でしばらくゴロゴロしていたが昨日、さんざん体中をユーグネスに弄られた疲れが出てきていつものまにか寝てしまっていた。

## 夜這い 4

ここ、フェアリーブルーホテルでは今、ある作戦が実行されようとしていた。

その作戦は、精密な作業と大胆な行動が求められる内容であり、さらには死地に踏み込む英雄の如き勇気が必要とされていた。

1012号室。そこは雪が泊ってる部屋である。

その部屋の前には公爵の一人 ユーグネス・フォン・プライトが作戦を実行しようとしていた。

「どうやら、雪は俺がどうやって部屋に入ってきたかまでは分かっていないようだな。ふ、まだまだ危機意識が足りないな」

どう考えても公爵のセリフではないセリフがユーグネスの口から漏れる。

ユーグネスは《亡霊<sup>ファントム</sup>》の力を使い肉体の細胞全てを直接支配下に置いていた。それにより強化された五感は雪がすでに寝ていることを教えてくれる。

「作戦開始だな！」

すかさず、扉に近づくと、鍵を扉の鍵穴に指して回す。

ガチャという音が鳴りすかさず部屋の中へ体を滑り込みます。そこまでの所要時間わずか3秒・・・無駄に神業である。

ベットへ暗殺者顔負けに音を立てずに近づいていく。月明かりに照

らされて黒髪の少女が目に入ってきた。  
黒髪に白いネグリジエはとも映えており、洗って乾かしたばかりの髪は光っており宇宙に瞬く星のようであった。  
そのまま、ベットまで近づいていくが、ガン！という音と共に先に進めなくなってしまう。

「なんだ？ 結界か？」

くっそー、ここまで来て結界ごときで自分の女を抱けないなんて、引き下がるわけないだろ！ 心の中でそ突っ込みながらも、風の精霊力と火の精霊力を高めていく。それを手刀の形にした左手に集めて結界に叩きつける。

《九頭・左竜閃刀》

ザシュと音がなった瞬間、雪が張った結界が壊された。本当に無駄なこと全力を使うユーグネスであった。

そのまま、ユーグネスは雪が寝ているベットに入ってしまった。

やわらかい日差しが部屋の窓から入ってきてベットの上を照らしてきた。その日は、温度が低い朝だったこともあり、雪は暖を取る為に身近にあった物に体を絡めて寝ていた。いわゆる抱き枕というものである。

ユーグネスは結局、昨日ユキがとっても痛かったんだから！ と怒って言ってきた事もあり添い寝だけだがまんするといふ難易度の高いミッションを潜り抜けていた。

「くそ、好きな女が横で一緒に寝てるのに何も出来ないのがこんな

に拷問だとはな」

モゾモゾとしながら雪が目をつつすらと開け始めた。まだ意識が定まっていないのか目がトロロンとしている。

「ちっ、こんくらいはいいだろ。」

ユーグネスは朝から雪の唇を味わっていた。

まだ、意識が纏まらない雪はユーグネスから流し込まれた唾液を飲んでしまっていた。しばらくキスしているとユーグネスが満足したのか唇を離していく。

はふく体に力が入らないよ。それになんか暖ったかい・・・それに髪の毛がなんか弄られてるみたい」

目を再度開けて見ると、ユーグネスが雪の髪を手に絡ませて遊んでいた。

そして、寒いのか雪自身もユーグネスに抱きついていた。

「.....」

「ユーグネス、どうしてここにいるの？」

「惚れた女と一緒に寝たいのは男の本能だしな！それにもうお互い気にする仲でもないだろ」

「えつとね、住居無断進入に強制ワイセツ罪が適用されるからね！よって死刑！」

「おいおい、添い寝でがまんしてたのにそれはないだろ？」

「私は昨日、公爵邸に帰る様に言ったよね？それに結界張ってたのにどうやって入ってきたの？」

「企業秘密ってやつだな」

ユーグネスの顔が再度近づいてくる。

「ちょっとやめてよ」

何度も朝からキスされるなんて。ユーグネスだけかも知れないけど抵抗感が最近無くなって来たような気がしてこわい。

「ふう、雪はかわいいな」

「もう、ユーグネスさいてー、女の子の寝込み襲うなんて本当にさいてーだよー！」

「わかった、わかった。」

あーもう、絶対分かってないよね！雪は丹田を通し気を練り強化された筋力で平手打ちで相手の頬を殴ろうとするが、ガシツ！と言う音と同時にユーグネスが自分の頬に当たる前に雪の手首を片手で抑えてた。

「え？」

「あまいな。お前、初動が長すぎるんだよ、それにしても女の腕力じゃないな？俺も力を使ってなかったら押さえ切れなかったぞ。こんなのでビンタされたら普通だと失神どころか首折れるんじゃない

のか？」

「まったく、手加減くらい考えろよ。とりあえず雪にはお仕置きが必要だな。」

「あまいよ！左手もあるし。」

「な！」

「だからなく俺くらいの武術使える人間からしたらお前の動きなんて筋肉の縮小から読み取れちまうんだよ。さてと両手を頭の上に固定と。雪、覚悟しておけよ」

「覚悟つて、何する気なの？」

ユーグネスは雪の寝巻きを抜かしていく。そして生理的反応かしつとりと濡れている秘所へ指を入れていく。ちゅくと言っ音が部屋に鳴り響き、雪の体が跳ね上がる。

雪は、まだ痛みが取れて無い事もあり涙目で抗議する。

「イヤだよ！ユーグネスやめて！まだ痛いの！」

「ダメだ。お仕置きだからな」

「まって、痛みが引いてからにして、いやあ」

力を使い果たし、全裸で倒れこんでる雪はシーツを体に寄せながら涙目でユーグネスを睨んでいた。

「ユーグネスのばか！やめてって言ったのに！うう痛いよ、なんか

まだ物が挟まった感覚残ってるし。」

雑誌とかだとすぐ気持ちよくなること書いてあったけど、全然嘘じゃないの。

「ねえ？ユーグネスつてもしかして下手なの？」

「ゴフツ」

なんて事をさらりとこいつは聞いて来るんだ？そう言うのって男にいうのは普通タブーだろ。ユーグネスは再度、雪を抱きしめながらキスをしていた。

キスは、頭がフワフワしてきてすごい気持ちいいよー。キスって人が発明した中でも一番すごい発明だよー！と雪は思っていた。

ハッ！男にキスされて何、私は喜んでるのよ。複雑な葛藤が雪の中にあっただ。

「もうお昼だな・・・何か食べにいくか？おごるぜ？」

「もう、こんな事したんだからおごるのは当たり前だよ。洋服のお金もあとで請求するからね！！」

「まあいいぜ。」

「あとね、ユーグネスには話して無かったけど私、王宮務めしてるから今日から王宮に帰るからね。」

「は？王宮つてお前なんの仕事してるんだ？」

言っちゃっていいのかな。いいかな



「姫様の直属護衛騎士だよ。」

「ほーすごいな、って！雪、お前がストラウス砦30万の帝国兵撃退した戦乙女？」

「そついう事になるのかな？」

「つまり、お前って遠距離専門タイプの魔道士なんだな」

「一応近距離も戦えるよ？」

「一流程度までならいいかも知れないが、冒険者でSSランク超える者相手に近距離で戦うなよ？発動する前に殺されるからな」

ん〜一応、瞬歩もあるし大丈夫だと思うけどな！

「きつと大丈夫だよ。」

「ダメだ！お前、まったく分かってない。寝ながら気配すら察知できない奴が暗殺者とかに対抗できるわけないだろ、それにお前の力の使い方は能力に頼りすぎてて基礎がまったく出来てないんだ。だから簡単に部屋に入られてこんな状況にもなるんだぞ？」

「う〜」

実際、体感してるだけあつて何も言えない・・・

「仕方ないじゃない！元々平和な国から来たんだから、寝たら熟睡しちゃうよー！」

「わかったから泣くな。」

え？泣いてる？

手をもつていくと涙が出た。

「まったく仕方ないな」

ユーグネスがぎゅつと雪を抱きしめながら涙を昨日買ったタオルで拭いていた。

あれ？なんで、思考パターンが女になってるの？それに、感情がすぐに表情にでちゃう、これってやばいんじゃない

「とにかく、俺はお前が護衛とくに姫さんのをするには反対だな。自分の身すら満足に守れないくせに人を守るとかムリだ、それ以前に俺の女が危険な状態に置かれるのは納得いかない。あとで王宮に連絡しておく。」

「え、ちょっとユーグネス待つてよ！俺の女つて、ユーグネスの彼女になった覚えはないよ？」

「彼女じゃなくて妻だな。領地内のゴタゴタが済んだら結婚式する。」

「ちょっと、私元の世界に帰るんだから話勝手に薦めないでよ。」

「雪、悪いがそれはダメだ、好きな女を帰す男はいない。大丈夫だ、お前を惚れさせて帰りたくないようにしてやるからな」

「それに早く子供もほしいしな、雪、覚悟しておけよ。」

えーちょっとまってよ。それに存在の力があっても子供できちゃたら女の性別で確定しちゃうんだから」

それに子供って私が生むんだよね？一応、体は女だけど心は男なんだけど・・・

「どっちにしても今日はお昼すぎに王宮にいくってフラン様と約束してるから出かけてくるね！」

雪はさっさと着替えて扉から出て行ってしまったが

「そうか、ってことは現況はフランかよ。俺の女に手だしやがって。女同士で百合か？めんどくせえな」

雪の後ろ姿をユーグネスは見ていた。

## 崩壊の序曲

移動魔法によりフレイア城の鍛錬場についたのはすでに午後14時を過ぎていた。

そして鍛錬場でルークを見かけ、フラン姫の所まで連れていってもらった。

「ユキ！お帰りなさい。本当に、一時期ストラウス砦からフレイア城に戻るって言ったあと連絡が途切れてたから心配したんですよ。」

「すみません、フラン様、ご迷惑をかけました。」

「それでは、護衛の仕事に戻りたいと思いますので鎧とかストラウス砦でどっかに無くしてしまったようですので、予備があればお借りできますか？」

「その事でしたら、砦の方で手入れが終わったようので此方に届いてますよ。」

そのあと、雪は、フランに連れられて届いていた騎士の鎧をつけていたのだが……

「むーやっぱり、女性用の騎士鎧だけあって、体が女性化してるときちんと着れる。」

はあいつ男に戻れるんだろ……

また、男に戻るまで10日とか出てたし・・・

もう絶対にあの男には会わない！

「そういえば、フラン様、約束の金貨ですけど、支払いは一応金塊でよろしく願います。出来れば1kgぐらいの単位で・・・」

「わかりました。それでは、今日はユキも戻ってきてくれたことですしゅっくり休んでくださいね。」

「まあ仕事もありますからそうともいかないのですが・・・」

「フラン様！大変です。イルドルア共和国がストラウス砦を襲った  
ゴレムに国境を強襲されてわずか2日で国が落とされたと報告が  
・・・隣国のアリストロス連合国から報告が入りました。」

「え？それは本当なのですか？」

「フラン様、至急、会議室に来てください。いま対策を検討中です。」

「ユキ、私は会議に出ますのでしばらく休んでてくださいね。」

「わかりました。」

ユキはそう言い、城のバルコニーに移動し、存在の力を魔力に変換し風に意識を溶け込ませます。

国を2日で落すって事は10体や20体で落せる数じゃない・・・  
そのまま精霊を展開していくが同時に

ピピピピッ

「ん？また天気予報サービス？違う、メールを1件受信？一体どこから・・・？」

そう言いながらユキはメールをチェックする

その瞬間、雪の姿が元の男の姿に強制的にもどされた。

「ゲツ、一体何が？男の姿に戻ってる・・・？なんでだ？」

そう言いながらもメールを再度確認していく。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

受信メール表示

2011/06/06 11:00

送り先名 アーカム財団考古学研究所

宛先名 アーカム財団考古学研究所所属B級エージェント以上

件名 異常気象と古代遺産オーバー狂戦士バースカーの多数出現と対応について

ドイツ首都ベルリン上空において、巨大な積層雲が停滞しており、その中心には次元振を感じ。

それに伴い海流の変化も発生中。世界中で大規模な自然災害が発生。アーカム財団考古学研究所のコンピューターが弾き出した計算によればあと1週間で急激な氷河期に突入する恐れがあり、早急にベルリン上空の次元振を封印または破壊する事。

発生が一番、最初に確認されたのは西暦1945年6月9日

次に発生が確認されたのが2011年5月26日から断続的に発生使われた祭具は、おそらくエンハスの鏡と想定される。教皇庁から盗み出されたエンハスの鏡の用途は、次元震を発生し異なる物質を取り寄せる効果があるのが確認されているがそのためには膨大なエネルギーが必要とされる。次元の壁を跳躍する為に必要なエネルギーはアーカムのメインコンピューターで計算した所、一人を転送させる為には約10万テラジュールのエネルギーが必要と推測される。

ベルリンの積層雲の中から数体の狂戦士バーサーカーが振ってきており、2万人ほどの市民の死亡を確認。死亡してる人種は、ユダヤ人を主なターゲットとして狙ってる模様。現在、ドイツ軍と国連合同により殲滅作戦を行っており、気化爆弾により午後18時より殲滅を開始する予定。





「ええ、アーカム研究所日本支部副所長 剣山 充 です。」

「やっと連絡がつかましたね。雪さんがどこか別の次元に飛ばされた可能性がある与会長から極秘に捜査が日本支部にきてたのですが、今どちらに？」

「ははは、そのまさかの別次元の異世界です。」

「そうですね。今の段階で連絡が繋がるという事は恐らく、いま世界各地で起きてる次元の歪が原因と思われる。雪さんがいなくなつてから、ずっと連絡が取れず時空の歪と同時に連絡が取れるようになったという事はそちらとこちらの世界が繋がってる可能性が高いです。」

「アーカムからのメールは見ましたか？」

・・・

「はい、見ました。あれは本当の事なんですか？」

「残念ながら本当の事です。今、自体はさらに悪化してると言うて間違いないでしょう。」

「今回、アーカム財団から雪さんへの依頼はそちらにあるエンハスの鏡の破壊と首謀者の捕縛もしくは抹殺になります。」

「え？ジャンさんや暁さんや御神苗先輩は？」

私より優秀な人材が一杯いるのになぜに？という心境である。

「残念ながら、敵にエンハスの鏡がある以上、そちらに行ける者はいません。そしてタイムリミットの2011年6月9日AM0:0

0の日付変更までに事を片付けないと世界で氷河期により数十億人が死ぬ事になります。そして、次元を超えるだけのエネルギーを放出した雪さんのいる世界は分子単位で分解され崩壊します。」

「おそらく、この状態を演出してる者達は何度も実験を行ってるはずです。そして座標軸を調べる為だけに・・・いえ、とりあえず何と少しでも破壊もしくは阻止してください。」

「しばらくは連絡が繋がる状態が続くと思いますので、分からないことがあれば聞いてください」

素晴らしい電話が切れた。

・・・

「さてよ・・・異世界の出来事が現実リアルにも影響するのかわ？それにどうやって探せばいいんだ・・・よ・・・？」

「さてよ、狂戦士バーサーカーつて古代文明の遺産オーバーツつてメールには書いてあったよな。エンハスの鏡も古代遺物オーバーツなら犯人は・・・帝国か」

そういえば、さっきなんとか共和国つてのが攻め落とされたって言うってたけど・・・

古代遺物オーバーツなんか出された日にはそりゃ当たり前だよな・・・

「はあ、一人で対処とか不幸すぎるだろおおお」



「フラン様、聞いてますか？」

「ええ、聞いてます。隣国のアリストロス連合国よりイルドルア共和国がすでに帝国の手により支配下になっていると言つ事ですよね？」

そうフランは聞いてくるが

「実際は、何も無いのです。」

外務大臣ロドニクが答えてくる。

「何も？とはどういう意味なのですか？」

「町も砦も死体すら何も残っておらず荒野になつてゐるそんなのです」

「荒野？そんな巨大は攻撃魔法があるのですか？」

「わかりませんが、ですがこれは非常に由々しき事態であり、各国家のギルドと帝国を抜かした国にすでに魔法鏡により帝国討伐の聖戦共闘を提案し承諾を得ています。すでに数日中のうちには帝国へ攻め入ります。その際にはユキ殿にも参戦をお願いしようと思つています。」

「帝国の兵士の数は60万ほどですが、こちらは各国と兵士とギルドをあわせれば互角の戦いが出来ると思われれます。」

「予想では帝国首都に到着できるのは10日後と考えられます。」

「出陣の際には各国家王族が出向いてくることもあり、安全な本陣にいて頂くと思いますがお願いします。」

その頃、雪は手元にもってる携帯を見ながらフラン姫の寝室の前で待っていた。

携帯電話の日付は2011年6月6日22時を指している。

「はぁ、まさかいきなりこんな事になるなんてな・・・今までたくさん異世界召還受けてきたけど、今回は一番ヘビーだな」

コツコツと廊下を歩いてくる音が聞えてくる

「ユキ？どうかしたのですか？」

怪訝そうな顔をしてフランが聞いてきた。

これから嫌な思いをさせないと行けないとはな・・・

「フラン様、実は《俺》はこれからやらなくては行けない事があるため本日もって”姫様”の護衛騎士を辞退させていただきます。」

すでに雪の着てる服は魔力により作りだした戦闘魔法服になっている。もちろん男性用・・・

黒を基調としたスーツになっているがその耐久度はモース硬度27のナイフですら切ることはできない。この世界で常時展開できな

つたのは膨大な存在の力を消費し続けるからだ、すでに現実の世界とは繋がってるため無限に力行使できる状態になってるため顕現させている。

「なぜ、今になってからなのですか？」

フランが信じられないと言った目で見つめてきている。

「それと契約した報奨金はこれからの国の補填に使ってください、それでは失礼します」

「まって！ユキ！なんで私の問いに答えないの？なんで助けてくれないの？」

「つつ！」

「もう、時間がないんです。だから、《俺》がいなくなってもがんばってください。」

それ以上の事は言っても仕方ないし、意味もない。フランが泣いててもいずれ去る俺が慰めても仕方ない・・・

その日 一人の漆黒の髪の少女は王宮から消えた。

## 一人ぼっちの戦い

現時刻は6月7日13時・・・

すでにフレリリアル公国を出帆し日付がかわりお昼を過ぎていた。

その間も、雪はストラウス砦を遙か眼下に見ながらもオリジナルス  
ペル《風の疾走》により超高度から帝国首都に向っていた。

イスメラル帝国の領土に入り、首都ギルメステイアが近づくにつれ  
大地が削り取られたように消えていく。

「これは一体？」

そついいながらも首都の姿が見えてくる。

「なんだ？風の精霊で調べているけど一切生命反応を感じない・・・  
？これだけ大きい都市なのにどうなってるんだ？」

帝国首都の大きさは東京都に匹敵するくらい大きい。その大きさで  
無人な状態というのはどれほど人に恐怖を抱かせるか・・・

「ん？」

その瞬間、千近い狂戦士バクサーカーが光を雪に向けて打ち出した。

《瞬歩》

にて回避。

目を閉じ、次の瞬間には開く

アルファステイグマ  
《複写眼》

全ての存在・物質・世界を形どる全てがグラフそして数字で現されていく。

それと同時に、意識を戦闘モードに切り替える。より鮮明により明確により冷酷に・・・

数を把握・・・1339体

同時に自身の存在を魔力に変換するのでは無く、現実の世界からの力を直接魔力へと変換していく。その変換効率は自身の存在の変換効率とは比べ物にならない・・・

マルチタスクを使用し空間に次々と魔法陣を展開

空間自体に積層型の魔法陣を高速展開していく。

「《超原始崩壊励起（ジオダスプリード）》」



ゴーレムが次々と原子剥離を起し消滅していった。

「くくくっ、すばらしいな．．あれほどの力を人の身で行使できるとは．．．」

研究室の魔道モニターの前では一人の男が笑いながらエルベルクに話しかけていた。

「はい、ヴォルフ様。ですが些か性急すぎたのでは？」

「鍵が揃ってからでもよかったですと思いますが？」

「ふん、この前のミミールの泉の実験のおかげでこの世界の存在自体が連鎖的に崩れ初めているのだ．．おかげで実験をした中心地のこの首都ギルメステイアにいた1千万人近い人を形をした者は全てミミールの泉に回帰してしまったではないか？どちらにせよ、この世界はあと数日中に霞のように消える。私達のように地球から来た者意外は全て例外なくな．．．」

「どちらにせよ、鍵はすでにいらん、代わりの物が手に入ったから

な・・・」

同時刻、ローレンシア大陸各地において、次々と森の生物だけでは無く建物・人が粒子化して消えていくという減少が起きていた。

## 研究所

バサカ  
狂戦士を破壊し今、雪はアルテイルス科学研究所入り口まで来ていた。

すでに周りには人が来ていた物であろう服が散乱していた。

「服だけが散乱？」

疑問に思っていたが、風を広範囲に展開したところ、この建物には生物の反応があったため、此处に来ていた。

そのまま扉を潜ろうとすると数体のゴーレムが研究所から向ってきた。

『風よ 行く手を阻みし者共を 切り裂け』

「《牙裂斬がれつざん》」

瞬時にして細切れにされ散らばる。

そのまま正門を抜けていく。

正面を抜けていくと地下への階段が見えてきた。

「なんか、定番というかなんとというか・・・悪い事やってる奴らっ

て地下にアジトとか研究所作る奴多いよな・・・？世界共通なのか？」  
どうでもいい考えをしながらも奥へと進んでいく。

途中にあるドアやロックも全部

「《がねつぎん牙裂斬》」

で破壊していく。

しばらくすると、巨大な採掘現場が見えてくる。

「な・・・な・・・ん・・・だ・・・これ？」

雪の目の前には広大な地下の空間に木で作られた巨大な箱舟が浮いていた。

「あれがメールであつた箱舟か？」

「そうですね、美しいお嬢さん」

「！？」

周りを見渡すが誰もいない・・・

「探しても無意味ですよ、貴女みたいな化け物の前に姿を現せるほど無謀ではありませんからね。」

「私の名前は、エルベルク・ドイツの偉大なる総統閣下の部下の一人です。」

「あなたの力はストラウス砦から今までずっと見てました。そしてその言葉、髪と目の色顔立ちやっとな貴女が誰かわかりましたよ。日本人ですね？」

「ああ。そうだ！それがどうかしたのか？」

「いえいえ、運命というか因果な巡り合わせかと思ひまして、おつと貴女の名前をまだ聞いてませんでしたね。」

「雪でいい!」

「では雪さん、私達の仲間になりませんか？総統閣下からは貴女は始末するように言われているのですが、元は同じ三国同盟を組んだ仲としてぜひ私達に協力して頂ければと思ひまして危険を承知で話をしてるわけですよ」

「仲間に？どういうことだ？」

「それではこの世界の隠された真実を伝えましょう。」  
「そついいエルベルクは話に乗ってきた雪を見てニヤリとした。」

## 狂った幻想と狂気と真相

「この存在している世界は元々、超古代文明が避暑地として作ったテーマパークだったんですよ。」

ですがね、気象システムを使用した世界戦争を行った結果、1万年前に文明は崩壊。」

一部の特権階級の古代人達はこの世界に次元転送で逃げたんです。」

「ただね、雪さん。簡単に簡単に考えても、一部の特権階級の人間が逃げてきてもそこは結局、テーマパークであり、人工的に作られた箱庭なんだ。そんなところで長期間人が住めると思えますか？」

「思わないだろう？そこで作ったのがミミールの泉システムだ。北欧神話では知恵の泉と言われてるがここのは違う。この世界を古代人が作り上げた時、ひとつの独立生態系をくみ上げる為に作ったのはミミールでありシステムもあるんだ。」

そして大戦から避難してきた者が自分達に、奉仕する為にミミールを利用して作った存在が自然・精霊・生物だ。」

そして、この世界のミミールという循環システムに組み込まれてる者だけが使えるのがこの世界の固有魔法だ。」

貴女は何故か知らないがこの世界の魔法も使えたようだがそれを見た時は驚いたものだよ。」

「さて、此処までの話で分からない事はあつたかな？」

「つまり、王族が魔法を使えないってのは・・・そのミミールってシステムに組み込まれていない元地球人ってことなのか？」

「まあそれに近いですけど・・・王族というのは船を動かす鍵なんですよ。」

本当は正当な血筋が既にフレリアルにしか残っていないと思っ  
ていましたが、まさかグレンダルも正当な漂流者いえ、箱舟を動かす  
パスコードをもってる鍵とは知らなかったので、雪さんが殺さない  
で帝国にグレンダル王子を返してくれたおかげで助かりました。」

「な！グレンダルはどうしたんだ？」

「簡単な事ですよ、魔法にて粒子単位に分解して鍵に再構築させて  
いただきました。そして箱舟の動力炉のエネルギーは帝国にたくさ  
んいたミミールで保管させてもらいました。」

帝国の首都に人がいなかったのは箱舟の動力の為に生贄にしたから  
って事なのか・

「さて。雪さんこの世界はミミールの大量抽出により概念物質が連  
鎖崩壊し始めてます。恐らく長くは持たないでしょう。どうです  
か？私達と一緒に地球で指導者になる気はありませんか？」

こいつ、完全に狂ってる・・・この都市だけでも1千万人近い人がい  
たかも知れないのに、それを全部殺したのか？

ふむ、どうやら考えてくれてるようだが・・・もう一押し必要な  
？とエルベルグは考え、

「地球に繋がった際に大量の資料などを見ましたが、世界は本当に  
腐ってるじゃないですか？あんな世界を救って意味があるのですか？  
歴史は嘘を教え、歴史からは何も学ばない人類。国や企業が儲けを

出す為だけに終わらない紛争や戦争。

政治家が嘘をつき、人を騙し、ゴミのような指導者達が市民を食物にして世界は加速度的に悪くなっている。

そんな世界にどのような価値があるというのですか？市民というのは偉大な崇高な指導者が導いてこそ！希望ある未来を掴めるのです。私達がこれから行う事はとてすばらしい事なのです。ぜひその力を我々のために振るっては頂けませんか？」

そう、雪に言くとエルベルグは静かになってしまった・・・

シーンという静寂が耳に痛い

どうやら、言いたい事を言っただけで満足したようだ・・・まったく一部分を除いて間違っただけじゃないが・・・

「悪いけどさ俺、馬鹿だから良くわかんないけど人に迷惑をかけてまでやる事は間違ってると思うんだよ。だから、とりあえず！お前のそのふざけた幻想をぶち壊させてもらおう！」



## 成層圏での戦い

エルベルグが話を雪とし稼いでた時間により箱舟の中では次々と次元跳躍の為のシステムが組みまれていた。

「ミミールの泉からのエネルギー効率17億6千万テラジュール・」

「すばらしいな、やはり存在しているこの世界自体を生贄にささげる事によってこれだけの力が得られるのだからな。」

「”エンハスの鏡”を量子レベルにて分解開始・・・帝都上空100kmにて1kmの広範囲に散布し展開終了」

「座標軸をアメリカ合衆国都市ワシントン上空に設定」

「量子震動機を箱舟各部砲弾座席に設置完了」

「共振設定を開始します」

「主砲グングニルシステムを起動。キーデバイス”グレンダル”を起動」

「さあ、66年前に自分の国の愚かな経営を人の国に侵略して経済を立て直そうとした世界一の殺戮大国アメリカよ！今度は貴様の国が世界地図から消えてなくなる番だ！」

「アハハハハハ」

「なんだ？箱舟が上昇している？でもあれでは岩盤にぶつかるのでは？」

「ふん、東洋の少女よ、そのような心配は不要だ。あの箱舟には1000個を超えるクリスタルスカラが設置されている。ほら、始まったようだぞ」

「な・・・あれはやばい」

『暗黒の力よ！ 門を開き 彼の地より 我が処に集え！ 我が力と為り 聖なる力を 退けよ』

結界が展開されたと同時に帝国首都だった場所が地下からの赤い光により岩盤を全て消失させ直径20kmのクレーターを作り出した。

「つ、なんだよ、これ・・・」

そのまま、複写眼でクレーターの周りを見るが・・・膨大な熱のエネルギーで溶解していた。

「まじかよ、こんなの打たれた日には都市が消え去るぞ・・・」

箱舟が上空へ優雅に上っていく。

「どちらにせよ、あんな危険物指定な物地球に行かせるわけにはいかない。」

両手を合わせ、輪廻の輪を形成。

そのまま大地に両手をつけ、魔法陣を形成。

一つの魔法陣が2つに別れ、それぞれ剣が大地より迫り出してくる。

迫り出してくるたびにエーテルで編み上げられていく《至高剣》

ダークマターで編みこまれていく《魔降剣》

右手と左手に一本ずつ持ち、魔法を展開していく。

《翔封界》  
レイウイング

そのまま箱舟に向っていく。

「速度はそれほどでもないから追いつけなくもないな」

「ヴォルフ様、後方より例の蠅ゆきが向ってきてますがどうしますか？」

「ふん、エルベルグの奴め、視覚障害の古代遺物オーバーハーツを持って行つたぐせに失敗したのか。まあいい、試した。主砲グングニルを打ち込んでやれ」

「はっ、重力子エネルギー抽出を開始。エネルギー構築を開始。目標、雪に発射」

箱舟の同行を複写眼を展開しながら、追っている雪であったが

「なんだ？粒子の展開がおかしい・・・」

「まさか、グラビティンレーザー重力砲か？」

「ヴォルフ様、主砲グングニル発射します！」

「さあ。かつて一撃で大陸すら海に沈めた力その目に焼き付けるがいい！」

黒い光の収束された束が雪に迫ってきた。

「くっそ、複写眼で解析してる暇がねええええええ」

両手の《魔光剣》《至高剣》を交差してさらに結界師の結界を多重に周囲に展開。体の周りには高防<sup>ホーククレトウス</sup>御圏をマルチタスクにより展開する。

そのまま、グングニルが結界に着弾、7乗に展開していた結界を一瞬で破壊する。交差しているエーテルとダークマターの剣を直撃。二振りの剣を構成してる物質を9割近く削られながらも軌道をずらした。

ドンと大気を振るわせる音が衝撃波と共に雪の体を揺さぶる。

「おい、おかしいだろ。なんて破壊力なんだよ・・・インフレにもほどがあるぞ・・・！」

風の魔法に守られてるとはいえ、すでに真空近い高度から見た広大な帝国の領土が目算で300km範囲が消滅していた。そしてその消滅した下には銀色の水が流れていた。

「あれがミミール？どちらにしてもこんな馬鹿げた物破壊しないと・  
」

今のが日本で打たれたら、深夜アニメが終了しちゃうじゃないか！

「ヴォルフ様、直撃を確認しましたが進行方向を捻じ曲げられて殺すにはいたりませんでした。」

「まあ、いいあの地下研究所の時間は外界より時の流れを遺物で操作してあるしな、計画に支障はない。どうせ、やつにはこの箱舟を破壊するほどの力はない。」

「まあしかしすでに高度30kmなのにまだ普通に生きて戦える奴は人を辞めてるな。その点は好感がもてるな・・」

神滅斬！

ブッ

「なんだ着信か？こんな状態で・・・」

「雪か、たいへんだ。ワシントン上空に巨大な次元震を感知している。すぐに対象をはか・・・ツーツー」

「時間、まだあるんじゃないのか？俺が戦闘を開始したから？」

箱舟の距離まで残り3kmか・・・

そのまま、雪は複写眼で箱舟を解析していく。

「普通の木で組まれてるようだが・・・でもデータとグラフと数値が時の止まったプレートにそっくりだな。」

「どちらにせよ、高度50kmを超えたから、魔法に制限はないけどな・・・」

そっぴいながら、雪は存在の力を魔力に変換してエーテルに昇華していく。

星の光を収束・・・エーテルによりレンズを形成

超長距離エーテルスキル《銀牙》

「ヴォルフ様、巨大なエネルギーがこちらに向ってきてます。威力は・・・ばかな・・・グングニルの100倍以上です!!!」

「落ち付け。問題はない。」

その瞬間、箱舟を巨大な星の光を集めた銀牙が染め上げた。

光が消え去ったと何事もなく、箱舟の姿は空中に存在していた。

雪はそれを見ながら呆然と・・・

「・・・まじか？」

「俺が使える最強の魔法だぞ・・・星すら砕くつてのに」

「時が停止してる物質ってどうやって壊すんだよ・・・」

「ヴォルフ様、各部異常はありません。あと2分でエンハスの鏡を起動し次元を抜ける準備に入ります。」

「ふ、時の停止してる物質を破壊出来る者などこの世界には存在せん。チエックメイトだな」

その頃、雪は色々な魔法を箱舟を追いながら打ち込んでいたが・・・

「こうなったらマトリフ先生魔法をお借りします。右手から火炎魔法、左手から氷雪魔法。合成！」

《極大消滅呪文メドローア》

光の束が直進し箱舟の前で消え去った。

「え？対消滅防御壁……」

物理防御も魔法防御も完璧とか……どこの使途だよ！！！！

その瞬間、《至高剣》と《魔降剣》が時間切れで消失

「くそ、ダークマターもエーテルも消滅系魔法も通常魔法も効かないとか、八方塞がりすぎる……」

「こういうとき、アニメだと一発逆転の技が存在するってのに……」

「エンハスの鏡を起動、次元境界線を排除します。」

「よし、総員次元を抜ける準備に備えよ」

そしてヴォルフは箱舟の外で無駄に足掻く少女を見て、笑いを浮か



べていた。

空に展開された、蒼い境界を《複写眼》アルファステイグマが視界の端に見つけた。その瞬間、解析する。

「あれが転送装置か？この速度だとあと一分くらいしかもたない・

」

時の止まった物質に対して有効魔法はこのくらいしか！

空間固定絶対防御魔法なら時間稼げるだろおお

『暗黒の力よ！ 門を開き 彼の地より 我が処に集え！ 我が力と為り 聖なる力を 退けよ』

言葉と同時に箱舟の前方に直径5mほどの絶対防御障が空間に固定された状態で展開され

ドン！

「ヴォルフ様、箱舟の前進が止まりました。」

「なんだと？どういう事だ？」

「わかりません、なんらかの進行を妨げてる物が空間にあるようです。」

「おのれ、あの女の仕業か・・・いまましい、座標軸を特定する為に召還したとはいえ、ここまで邪魔されるとは・・・各部より共振クリスタルの砲撃ブリュナーグであの女を焼き払えと伝える。」

その頃、箱舟を停止した雪は箱舟の前に出ていた。

箱舟の大きさは高さ70m 幅50m 長さ500mほどであったが・・・

「ふう、箱舟の前方に出れたけど、どうするか・・・」

その瞬間箱舟の方から地下の岩盤を溶解させた高熱エネルギーが打ち出されてきた

「数百の高熱エネルギーとかどうなんだよ・・・巨大戦艦が人に対空ミサイル打ち込むみたいなもの・・・」

それでも足場に展開していた結界師の結界を高速で移動しながら雪は避けていたが・・・

「とりあえず、あれ・・・やってみるか？」

現実の世界の存在の力をそのまま、魔力に変換していく。複写眼に

て制御。力を具現化。

悪夢の王の一欠けよ

天空の戒めとき離れたし

凍れる黒き虚ろの刃よ

我が力我が身となりて

共に滅びの道を歩まん

神々の魂すらも打ち碎き

「ラグナ・フレード  
《神滅斬！！！！！！》」

両手に巨大な漆黒の刃を展開。

「これが防がれたら、打つ手なしだな」

「いけー」

漆黒の刃が箱舟の対消滅防御壁と時の止まった物質を空間ごと切り裂いていく。

「ヴォルフ様、箱舟右舷小破。こちらの防御を突破してきています。」

」

「ばかな？超古代文明が作った最高傑作を破壊出来る物などあるはずが・・・」

「ヴォルフ様、例の女が何かをしています。」

「なんだと！モニターに写せ。」

それと同時にドームにモニターが映るがヴォルフはそれを見て啞然と

「なんだ、あれは？黒い剣？」

雪は上空に浮かんだまま、ニヤニヤしていた。

「ふ、メイドIN JAPANにかかれば、古代文明も大したこと無いな・・・見せてやるぜ！オリジナルスベル、日本のアニメーションを見せてやる！」

## ラグナ・スレイフ

マルチタスクで空間にいくつもの魔法陣を展開していく。

高速で展開していくのは、複写眼により無駄な箇所を省いていき、力の流れを制御する。

それと同時に魔法を基礎構築を展開。

「日本のアニメーションの真髄！想像と言う魔法を見せてやる。」

『悪夢の王のひと欠片よ』

『天空の戒め解き放たれし』

『氷れる黒き虚無の刃よ』

『我が力 我が身となりて ともに滅びの道を歩まん、神々の魂すらも打ち砕き！』

それと同時に魔法陣が輝き展開されていく。

さらにマルチタスクを使いながら同時に魔法を構築

『闇よりもなお暗き存在』

『夜よりもなお深き存在』

『混沌の海よ たゆたいし存在 金色なりし闇の王』

『我ここに汝に願う 我ここに汝に誓う』

『我が前に立ち塞がりし全ての愚かなる者に』

『我と汝の力もて等しく滅びを与えんことを』

もう一つの魔法陣も同時に完成する。

そして2つの魔法陣を合成！

「ラグナ・スレイフ《超広範囲神滅斬！！！！》」

それと同時に箱舟の時が食われていき、消滅していく。

「ヴォルフ様！船体が崩壊していきます。船体内の時間軸が元の時間軸に強制送還されて・・・」

「おのれ・・・おのれ、あと一歩というところで・・・そのままヴォルフいや旧姓アドルフ・ヒトラーは消滅した。」

虚無に食われていく箱舟を見ながら雪は

「思いつきで、重破斬と神滅斬を合成して広範囲魔法に空間さえ切

り裂く特性をつけた魔法を土壇場でやってみただけで成功してよかった……」

とホツとした表情のまま大地を見るが・

「え？」

巨大な円形の海の上に一つの巨大な大陸が乗っており帝国領の広大な穴が開いてた所からは銀色の水が流れてるのが見えた。

古代人が作ったって聞いたけど、やっぱりコロニーだったんだな・  
それと同時に、コロニーが粒子となって少しづつ消え始めた。

「ミミールが損失したからか……でも複写眼で見てもどうにも出  
来ないぞ、これは……え？」

後ろに気配を感じて振り向くと妙齢の女性が浮いていた。

「誰ですか？」

俺の戦闘モードの時に、こんなに近くにくるまで気配感じさせない  
なんて……

「私はミミールのメイン人格システムです。雪さん、貴女にお願い  
があるのですが……」

「お願い？……」

あとでそのお願いは聞くべきじゃなかったと相変わらず後悔するの  
だが・・・



えびろーぐだよ！

ブロロローと鳥の鳴き声の代わりに車の走りすぎる音が聞えてくる。

日当たりだけはいい、6畳一間の安アパートの窓を日差しが過ぎてベットの上の人物を照らしてる。

携帯電話にかけた目覚ましがり響き一日がまた始まった。

雪は東京駅の北口改札口から電車に乗り、電車に張ってある週刊誌の表紙の広告を見た。

- ・ドイツでバイオテロ発生！
- ・ユダヤ人を狙った大量虐殺？
- ・一時的な世界異常気象？
- ・地球は氷河期に突入する！

など、真実と嘘と憶測などが入れ混じった広告が週刊誌を飾っているのだろう。

2週間前に起きた大規模なベルリンの大虐殺については、ドイツと国連では細菌兵器をテロリストがばら撒いたという事にしていた。そしてその細菌兵器を処分する為に気化爆弾を使った見解を国連は発表している。

テレビやマスコミや自分の事すら満足に評論できない評論家達がテ

ロリストや、気化爆弾処理を行った軍や国連に対してパシップを行ったりと世界は嘘で塗り固められているが、概ね平和に回っている。

結局、あのあとミミールの世界では、世界を存続させる為に大量の存在の力を俺から借りる事となったんだが、詳細は不明だが日本人というのは夢や希望がたくさんあり想像力が豊からしい・・

想像力がミミールの力の源らしく、それを俺経由でミミールが受け取りミミールの世界は余儀なくされた崩壊から助かったらしいが結局、エンハスの鏡は消失したので俺が、元の世界に帰って定期的に向こうの世界への行き来をして力の供給の約束をなし崩的にされてしまった。

まあこっちの世界の人間が数億の命を自分の欲望の為に利用したのだからそれを持ち出されると断れないけどな。

無くなった大地は元に戻るらしいが、失ってしまった命は個として存在していた為、戻せないらしい。

それとギルド銀行のお金を金塊にして持ってこようとしたら、世界の構成されてる物質が違いうらしく次元をわたった途端、バックに入れている金塊は粒子となって消えて、持ち込みは不可能だった。

エンハスの鏡を破壊する為、アーカム財団から依頼されたお金は世界を救ったにもかかわらず、B級エージェントだからって理由で金一封の20万円・・・家賃と光熱費で消えてまた、日雇いバイトをしてる。

何はともあれ、一つの異世界の召還はこうして幕を閉じたわけだが・

フランとは仲直りはしたが、その経緯は後日談になると思う。

「ふう、なんか・・・日記口調で話しちゃたけど・・・誰に話してるんだろ・・・」

「っていつかミミールに貴女って聞かれたときに否定しなかったもんだから、力を取り戻しても女のままなんだけど・・・」

とりあえず、一言言わせてもらえば異世界召還＝不幸だッてことに間違いは無いつて事だな！

P S、アリアのデュランダルはめっちゃかわいかったです

## 王と姫と公爵

イスメラル帝国の王権体制が事実上崩壊し、4ヶ月が過ぎていた。

経済大国の小国フレンリアル公国の王女フランは突然病が完治したルディアス・フォン・デ・フレンリアル国王の側につき、国の運営の仕方を学んでいた。

帝国の崩壊の要因は、未だに定かではないが、魔法騎士団長ルークが先遣隊として王都に近づき確認した所、王都は目に見える範囲で大地ごと消えており、しばらくしたあと、何事もなかったように大地は修復されていったと言う事だった。

各国の学者達はその謎の現象を突き止める為に多くの仮説などを経て調べているが、いまだに答えは出ないままである。

それよりも、指し詰まった現状としては、帝国に生きている人達の仕事の斡旋とこれからの経済復興を含めた生活支援。

そして世界の物流を賄っていた商業国家の消滅による世界全体の影響を緩和する為、他国と魔法鏡を使用した政策の話し合い。生き残ったイルドルア共和国の人達への支援など山のようにやる事があった。

まだ、イスメラル帝国もイルドルア共和国も先の謎の大戦で受けた傷跡は大きかったが戦争が無くなったという事は仮初の平和が一時的かも知れないけど、それを本当の平和にしていることと思ってる。

ルディアス王が職務に復帰してから王女フランは前から試していた事を説明した。

「お父様！私ね、魔法がきちんと使えるようになったの。」

「そうか、」

ルディアスはそう言いながらもフランが詠唱無しで魔法を使ってる事に関して疑問に思っていた。

「フラン、その魔法だがどうやってやってるのだ？」

「うんとね！雪との秘密なんだよ！」

フランは影を残した笑顔でルディアスに答えたが、それを見ていたルディアスも何かあったんだろうな・・・と思っていた。

「そうか、大切な友達なのか？」

つい聞いてしまったが、フランがルディアスに抱きついて来た為、それを受け止めてから話を聞いていた。

フランいわく、異世界から来て何度も救ってくれ最後には、国さえ救ってくれた事。そのあと行方不明になっていたこと。

その後、フランから離れていき行方不明になった事。

そのあと帝国が壊滅状態に陥り、戦争が終結した後も行方を捜していたけど見つからない事。

「ふむ、それはおかしいな。」

「どうしたの？お父様？」

「本来、異世界から来る際には文献によると100年に一度発生する黎明の森の霧を抜けるか何か使命があった時だけ、召還される物なんだよ。」

「黎明の森の霧を抜けてきたのはわしの知り合いだけだ。となるとその雪と言う者は後者に属するな」

「フラン、召還をした際の心構えを覚えているか？」

「うん、召還をしたらその体と魂をこの世界に固定する為に儀式を行うのよね？それをしないとすぐに消えてしまうからって習ったわ」

「そうだ。そして稀にすぐに消えない場合がある。それは使命を持って召還された者だ。そしてその使命が終わるとその者は世界から異物と判断され元の世界へ送り返される。」

「もしかしたら、その雪と言う者は不器用なのかもしれない、それが説明をしてる時間が無かったかどちらかになるな・・・」

「フラン、もし雪と言う者の態度が急変し去って言ったのならフランお前にも話せない内容だったのかもしれないぞ・・・」

そういえば、戻ってきた時は雪はいつもどおりだったのに、喧嘩別れするときは夜廊下でじつと私に来るのを待っていたような・・・それにすごい辛そうな顔してたよね・・・

その時、廊下の先から何かを止める音が聞えてきた。

「お待ちください、公爵様！いま王女と王様は執務中です。御用は・  
・」ふあ」

近衛兵が数人吹飛ばされて廊下に転がる音聞えてきた。

その間も何人もの近衛兵が吹飛ばされる音が聞えてきて

ボタン！と大きな音が聞えてその公爵つてのが目に映った。

その青年は目を吊り上げており相当怒っているのが顔から読み取れた。

それをルディアスとフランは見ながらもルディアスは何事も無かったようにその公爵に問いただした。

「ユーグネス・フォン・プライト公爵、そんなに急いでどうしたのかな？そのように息巻いた状態ではうまくいく商談も失敗するぞ？」

そのユーグネスと言われた者も目の前にいたのが国王と分かり冷静に膝をつき言葉を発した。

「ご無礼を致しました。私の名前はユーグネス・フォン・プライトと言います。突然の訪問、まことに申し訳ありません。姫殿下へ確認したい事がありました。城まで伺いました。少しお話のお時間を頂きたく存じます。」

ルディアスは目線でフランに確認を取る

「立ち上がってください、ユーグネス公爵それで聞きたい事というのはなんでしょうか？」

「はい、鈴木<sup>すずき</sup> 雪<sup>ゆき</sup>と言う者が姫殿下の護衛をしてると言っておりますので引き取りに伺いました。」

え？雪を？どついう事なの？

「ユーグネス公爵、雪とはどのようなご関係ですか？」

「私の妻にする女性です。」

つま・・・って奥さんってこと？雪って男って言ってなかったけど？でも最後にあつた時って女の子って感じだったよね・・・？

「今、雪はこの城にはいません。4ヶ月前から行方不明なのです。」

ちつ、親父達の言ったとおりか。元の世界に帰ったって話を聞いてたがギルドメンバーの生命反応版のログにこの世界に週に一回着てるログがあつたからな・・・

親父に聞いた話だと、一時的にこの世界を構成する物質が崩壊しかつてたのを食い止めたのが雪って言ってたからまさかとは思ってたが・・・

其れでも俺に会いに来ないって事は姫さんのところにいると思つてたが、音信不通ってことは会える可能性はとて低いつて事なんじゃないのか？

「そうですね、わかりました。ですがこちらに伺いましたら教えて頂けますか？」

「え？ユーグネス公爵、雪がこの世界に来ているのですか？」



「ここだけの話ですが、ギルドメンバー生命反応版のログには異世界からこちらの世界へ週に一回の割合で来るとログが残っています。」

「そうですね、わかりました。」

フランの話を聞くとユーグネス公爵は失礼した事を再度詫びて部屋を後にしていった。

フランも雪の話聞いて、生命反応版を手に入れる為に王族の力を行使し始めた。

雪と会えるのはまだ時間がかかるわけだがそれはまた別のお話・・・

## 父と息子と母の考え（前書き）

このお話は雪がいなくなってから半年経過した頃のお話です。

## 父と息子と母の考え

「なあ！おやじ。本当に雪の居場所わからないのか？おやじの感知力なら調べられるだろ？」

ユーグネスは必死だった。自分の好きな女が居なくなってしまった。消息は行方不明しかも城へ何度も手紙を送り正式に謁見を申し出ているが、国同士の復興・経済の復旧・難民の対応など対応する事が多くあり、そのため、フレソリアル公国4公爵も各国に常に出張っており会談・復旧対策など目が廻る急がしさであった。

それでも、一度自分が伴侶にしようとした心に決めた夜空に星の煌きのごとく光る髪そして愛らしい顔をもつ少女を一時も忘れることができなかった。

ユーグネスももう、21歳になる為、周りの貴族達から多くの婚約の話は寄せられていたが、雪を忘れさせてくれる女性はいなかった。結婚の大半は政略結婚が殆どでそんな物には一切興味がないユーグネスにとって苦痛意外の何者でもない。

「なあ？親父本当にわからないのか？」

ユーグネスの父 エルユードはこの世界では本来存在しないトリプルSランク SSSランクの保持者であり、使い手がない精霊を使役し体術ですら郡を抜いている。

体術のみで一個大隊を退けるほどの力を有している。

そして、精霊を使用した際の感知能力は尋常ではない範囲を誇る。

エルユードが感知できないならムリだが・

「仕方ないな、ユーグネス。その雪という子の事で本当の真実を知る勇気があるならば・答えよう」

「本当の真実ってなんだ？」

ユーグネスは思わず、ドキっとしてしまう。まさか・・・もう死んでるとかか・

そう想像してしまい、心臓の鐘音が早くなるのを感じた・・・真実を知るのは怖い・だが・このまま知らないよりいい・

「わかった、教えてくれ」

息子の眼をエルユードは見つめ、

「わかった・・・実はその雪って子は元・男だ！」

・

・

・

・

「は!?!?」

ユーグネスがしばらく固まったあと発した言葉はそれだった。

「どういうことだ？前に抱いたときは女だったぞ？体も全部女だった。」

「精霊が残したビジョンと使役した後の精霊から見ると、どうやら魔力が枯渇した状態だと回復の為、一時的に女性になるみたいだな。そしてその間に異性から粘膜摂取行為を受けるとそのまま女性で確定してしまうらしい。精霊からの情報によると最後の時には男性になっていたが・・・」

エルユードは言いかけると

一つの魔法端末を指して

「ここをしてみる。鈴木雪すずきゆき 16日前 9日前 2日前とこちらの

世界に一週間ごとに来ている。」

「精霊で確認した所、ここ半年間はずっと女性の姿でこの世界に来ている。」

「な！親父、それって俺意外に男が居るって事か？」

「ユーグネス落ち着け、雪さんが今は女性の姿でも元は男だぞ？それでもいいのか？」

「ああ！大丈夫だ！」

即答してきた息子を見て、エルユードは、あーやっぱアイナの息

子だよな。と思った。

「ってことは、7日に一回はチャンスがあるってことか・・・」

「ありがとな！親父！」

そっぴい残し、ユーグネスはギルドを出ていったが・・・

「アイナ、こういう大事な事を誤魔化して話すのは昔からの悪い癖だぞ？」

「別にいいじゃないの？雪ちゃんって元、男の子って思えないくらいかわいしいし、元男の子が女の子になった時の方が良き理解者になれるでしょ。それに私色に染めちゃえばいいし・・・うふ」

それを見ながら、エルノードは雪が捕まらなければいいなと思っていた。

雪の日常（本編とは関係ないです）（前書き）

今回は雪が異世界召還から戻ってきてきて数日の間の出来事です。結構あなざーすとリー？

## 雪の日常（本編とは関係ないです）

安アパートの一室で一人の女の子が寝ていた。

名前は鈴木鈴木 雪雪である。

最近の雪の悩みは、性別が男性から女性になってしまった為、男性用の服が着にくい点と、男の頃には万年床でも問題の無いお布団が問題だった。

おかげで異世界から戻ったときに、布団一式を購入しなおして部屋内で干せるように折りたたみ式のパイプベットまで購入

そして下着とスカートと上着は恥ずかしいのだけど、キャミソールを数着購入していた。

あまり、クーラーなど使わない為、男性の時は裸でもいいのだが女性だとそうもいかないのだ。

キャミソールは通気性がいいので、部屋内で着る物としては素晴らしい事もあり、スカートとキャミソールで過ごしていた。

出かけるときは、周りにあまり見せたく無い事もあり、そのまま男性用のジーパンと大きめのゆったりとしたポロシャツを着ていたが、服に着られてると言った印象が強く逆に回りに見られていたことは本人だけ知らない真実である。

そして、夜になると冷えやすい体質になったこともあり、トレンカを数着購入して穿いていた。

トレンカ作った人は偉大だなーと思いつながら・・・  
パンストとかそういうのだと指先が蒸れるんだよね



寝るときも寝巻き用に、シルクの腿まであるキャミソールを着ており、ゆったりと少し大きめの物を購入。

シャンプーとリンスについても今まで100円シヨップで購入していたのを使っていたが、髪が纏まら無い事と匂いが微妙だった事もあり、買い物にいったらついつい選ぶのに力が入ってしまい、桃のエキスが入った甘い匂いのする物とボディソープと一緒に購入してしまったりと出費がひどかった。

結局、長期間女性と暮らすことになってしまったって洋服・下着・身の回りの物などを購入してしまうと前回の貰ったお金が殆ど残ってないという事態に陥ってしまうわけで、なんだかんだ言いながら女性の体に順応していた。

そんな事もありながら、女性の体になってから男性の時と違って肌が敏感になったこともあり、シルク製の肌着を着て、髪の毛をそのままベットの流して雪は寝ることが多く、6月半ばとなると掛け布団もいらなくなる為、イルカさんの形をした抱き枕を抱いて体を丸めて寝ていた。

その表情はとっても愛くるしい寝顔をしており、その寝顔を見たら草食男子ですら襲っちゃうかもしれない？くらいだった・・・

ちなみに、雪の一番の問題点は、髪留めがライトノベルを読んでる時にゴロゴロしていると頭の比重で下敷きになったときにクリップ式だと挟みこむ部分の稼動部分が砕けてしまいゴミになってしまうという点だった。

2000円くらいするバレッタなら問題はなさそうだったが・・・結局がまんして髪専用のゴムを購入してそれで髪を纏めていた。

そして朝にとても弱くなってしまったこともあり、ほっておくとお昼過ぎまで寝てることもままあり沿ういう事も問題点であった

雪が通っている学校は定時制なのだが、学校までの距離は自転車です30分程度、学費はなんと！高校なのに月10000円以下という破格な数字であり、学費から生活費から光熱費やアパート代まで自分でアルバイトで賄っていた・・・

いまは女性になったこともあり、男性のときより給料がいい仕事場で仕事できており、コールセンターで時給が1300円という高給取りであった。

派遣であるが・・・

「うん。もう食べられないよ」

そっついながらも当の本人はイルカをギューツと抱いて

お布団の上でコロコロしている。

そんな日常を今日も過ごしている

## ルークの大冒険 1

この事件は雪が箱舟を破壊してしばらくしてからのお話

ここ、フレンリアル公国フレイア城では、帝国が戦争で残した爪跡を收拾する為に右往左往の大騒ぎであった。

そんな中、フレンリアル公国フレイア城魔法騎士団団長ルークは祖母から一通の手紙をもらい故郷へ向っていた。

ルークの祖母はフレンリアル公国の南に位置するストラウス領地にある。

近年、ストラウス砦で発見された鉱脈（精霊石）を廻って帝国が攻めてきたこともあり、発掘がストップしていた。

精霊石の用途はとても広く、火の魔法をかけておくと火の精霊石となりその石は合言葉で火を消したりつけたりすることが出来るようになる。

つまり精霊石に氷の魔法をかけるだけでをそれを木の箱に入れると冷蔵庫になってしまうのだ。

そんな、すばらしい使い道のある精霊石は高額で売る事が出来、復興の資金に使えるのは当然であった。

今回、精霊石の鉱脈は全部で2箇所発見されていたが、ルークの祖

母の手紙からの話によると祖母宅を立て回しをしているときに旧道が見つかりそこに祖父がもぐっていった所、第3の精霊石の坑道が見つかったと手紙に書いてあった。

その先に進むと大きな扉があり開く為にはどうやら魔法の力が必要だった事もありルークが呼ばれたのだった。

現在、各国・フレンドリアル公国は立て直しをしてる段階であり先のストラウス砦攻防戦で多くの兵士を失い経済が傾いたストラウス領としては一つでも坑道が多く見つかる事は大変嬉しい事であったがさすがに軍務大臣を呼ぶわけにもいかずルークが呼び出されたというわけだった。

「ふう、祖母の家に行くのは10年ぶりくらいか？」

そう思いながらも期待に胸を膨らませながらストラウス領カルデウス町へ向って行った。

## ルークの大冒険2

フレリアル公国ストラウス領内にあるカルデウスの町は山間部にあることもあり馬での移動だと1週間ほどの距離になっている。

フレリアル公国王都フレリアより平原を南街道を通っていき、いくつかの森を過ぎたあとに鉱山宿泊町セントルーレを通りすぎてから鉱山都市に向うのは通例となっており、セントルーレから鉱山都市カルデウスまでは4日ほどの日程となる。

その間には、旅人・働く人のための休憩小屋やいくつか設けられているが、簡易的な物であるため、実際はこの町で逗留し、必要物資を購入してから進むものが多かった。

魔法騎士隊長から、魔法騎士団団長から昇格したルークは、先の帝国とのストラウス砦の戦いで国内の兵力の3割まで減ってる事もありその補充と鍛錬の指示など長期間休みを取れるわけもなく、鉱山都市へ進む街道を進んでいった。

箱根街道を想像してね

そついう経路もあり、残り1日で鉱山都市まで到着する距離まで歩を進めていた。

しばらく、進んでいると木々の隙間から人々の悲鳴が聞えてきた。

「なんだ？」

ルークは言葉を発すると同時に馬に疾走するように足で合図を送る。

加速し走っていくとすぐにゴブリンとオーガーに襲われてる大きな荷馬車が見える。

ルークはそのまま、すれ違いざま腰より抜き出した、代々伝わる魔剣グラムを横薙ぎに振りゴブリンをその得物の棍棒ごときり伏せる。良く見ると、オーク3匹とオーガー1匹がいた。ターバンを巻いた商人風の者は地面に倒れ付しており馬はすでに倒れて事切れてるのがわかる。

それを確認しながら、馬から降り剣を右手に構えたまま魔法を構築していく。

この世界の魔法は、この世界に存在している精霊を一度自分の中に取り込みそれを構築し事象に干渉するという物である。

その為に精霊を取り込む器が小さい場合それに比例して魔法の効果も増減する。

魔法騎士の器は常人の100倍を誇っておりルークに至っては魔法騎士の10倍の器を誇っている

魔法を使う為に必要な物は自分自身の器・精霊・そして力ある言葉と明確なイメージである。

『我、力を解放。在る者を成す者。力を翼のごとく開かん』

それと同時に体内の細胞が活性化され、通常時の50%〜80%増しの筋力で行動することができるようになる。

そのまま、走りゴブリンに剣が届く範囲までいくと袈裟切りにする。

斬られたゴブリンはそのまま後ろに倒れこむ。横から棍棒を振り下ろしてきたゴブリンの攻撃を右足を一步下げる事により半身にしなから右手を引き戻すことにより剣の峰で受け止める。そのまま力押しにゴブリンを押し弾く。体制を崩したゴブリンを右足で蹴り倒しそのまま剣を首元へ突き刺し止めを刺す。

商人に止めを刺そうとしてるゴブリンに向けて手甲より10cm程度の銀製のナイフを首元に向かって投げつける。

それてしまい目に刺さってしまうが、そのままルークはゴブリンに走り首を切り落とした。

オーガーは商人が運んでいた、乾燥肉を食べていたがルークを危険だと判断すると柄、を含むと1m近い巨大なグレートアックスを両手にもって近づいてきた。

そのグレートアックスをルークにたたきつける様に振り下ろす。ルークは横に避けるが、その直後地面にグレートアックスが叩きつけられ、砕けた石が弾かれて飛んできてルークの額を浅く傷つけた。

先ほど倒れてる商人を見るとうつすらと地面に血がついていた。

「早く手当てをしないと手遅れになるかもな・・・仕方ない・・・」

精霊を体内の器に入れて魔力として変換。その魔力を魔剣グラムに流していく。

それと同時にグラムの刀身が赤く光り、



キイイイイイイイイイイと巨大な音を奏で始める。

ルークが魔力錬ってる間に無防備になってる状態を見たのかオーガーは今度は横からグレートアックスを振るって来た。

ルークは圧倒的な質量をもっている斧に対して剣を叩きつける。剣の刀身と斧の刃の部分が赤い火花を散らす。そしてルークの持つ剣は、呆気なく斧を切り裂いていき、そのままオーガーを一刀両断にした。

上半身と下半身に分かれたオーガーはそのまま崩れるようにして倒れた。

ルークは剣に流す魔力を止め、先ほど倒れていた商人の元へ戻っていき仰向けにしてから傷口を確認した。どうやら肩を切られただけのようにだった為、外套を脱がしてから治癒の魔法を唱えていく

『彼の者 古き軀を脱ぎ捨て 回帰する海より 再生の癒しをうけん』

「ウツ」

商人が少しうめき声を上げると、少しづつ傷が塞がっていく。

1分ほどたつとうつすらと刀傷のあとが残っているのが見えたがあとは一週間ほどで直るだろうとルークは安堵し、荷馬車を確認しにくが車輪事態は破損しいなかった為、馬さえ繫げば動くようだった。

ルークは自分が乗ってきた馬を荷馬車へ繫いでから商人の方へ歩

いっていき、

商人を荷馬車に乗せ外套を体温が下がらないように上から外套をかけて1km先にある休息小屋に向けて進んでいった。

この移動速度だと1時間もあればつけるだろうと思いつつながら・

## ルークの休憩小屋編

ルークが荷馬車を自分の乗ってきた馬で牽引して休憩小屋についたのはすでに夕方を過ぎていた。

「まさか、3時間近くかかるとは、馬種がいろいろあるのが分かった気がする。」

「ブルルル・・・」

いなく馬を近くの木にくくり付けてから

「んっ」

荷馬車に載せてある商人を担いで休憩小屋に入ってしまった。

休憩小屋はバンガローのようになっており20畳の広さになっていた。窓枠は戸板でつつかえ棒を挟むようにして空く様になっていた。

すでに先客が4名ほどいるようで休憩小屋の中には暖炉の前に火がついていた。

4名はどうやら家族のようで男性と女性と10歳未満だろうか？男の子が二人母親に寄り添うようにして寝ていた。

それを見ながら、ルークは担いでいた商人を毛布を下に敷いてからその上に寝かせた。

「こんにちわ、これから一晩一緒にさせて頂きます。ルークと言います、よろしくお願ひします」

ルークが礼儀正しく挨拶をすると男性も

「あ、こちらこそ、よろしくお願ひします」

と返してくれた為、事情を説明した。街道途中で商人が襲われていた事、気絶をしていた為ここまで連れてきたという事

「そうだったんですか・・・」

「はい、ですから街道を鉦山都市まで歩いて行かれるのでしたら気をつけてください。」

話を聞いていた女性がルークの姿を見て

「ルークさんは冒険者なんですか？」

ルークは一瞬、正直に答えていいか考えていたが何かと問題があっても困ると思ひ

「一応、冒険者です。クエストの仕事で鉦山都市まで行く途中だったんですが・・・」

「それで魔物に襲われていた商人さんを助けたんですね？」

「ええ、まあ」

「ルークさんよければ、子供達もいるため鉦山都市まで一緒にさせて頂いてもいいでしょうか？」

「ええ、いいですよ。」

うう・・・話の途中で後ろの先ほど助けた人のうめき声が聞えてきた商人の傍らに近づくと目を開けてこちらを見てるのが見えた。

「ここは・・・？」

「ここは休憩小屋の中です、襲われていたのを見て魔物を倒してからあなたの乗ってきていた荷馬車をここまで運んできました。」

ルークがそう簡潔に説明する

「そうだったんですか、ありがとうございます。」

そういうと商人はまた寝てしまっていた。

しばらく様子をみていたが起きる様子がないので馬の世話をするために休憩小屋からルークは出ていった

ルーク、日本へ逆召還！？

商人と家族一向を鉾山都市カルデウスの町まで成行きで護衛をしてついたのは翌日の御昼になった頃であった。

商人の怪我はすでに塞がっており、乾燥肉以外と馬以外は損害が無かったようですぐに営業できますと感謝されて分かれた。

それから1時間かけて・・

「ふう、やっとついた。なんでこんな町から離れた所に家建ててるんだ？村八分でもされたのかな？」

かなり失礼な言い方をしているルークである。

扉まで近づいてノックをしようとした所で、庭の花に水をあげてた妙齢の女性に声を掛けられた。

「あら？ルークじゃないの。こんなところまでごめんなさいね、飲み物でも入れるからリビングに先に行っててね」

「おひさしぶりです、メーデル叔母様、ルフェルド叔父様はどちらに？」

「ルフェルドなら屋敷の中にいるよ？」

「先いってますね」

ルークは屋敷の中に大した会話もせずに入ってしまった。叔父様と叔母様の家に来た事が少なかったため、なんて対応していいのか分からない為、そっけない態度を取ってしまうのだ。

リビングに行くと、ルフエルド・フォン・スターレットが齡77歳という高齢ながらも背筋を伸ばして椅子に座っていた。

「ひさしぶりではないかルーク！すまなかったな、ムリを言って来てもらってしまった・・・」

「いえ、大丈夫ですよ。それで途中で所要がありましたあまり時間がないのです。出来れば早速。精霊石の洞窟を見せてもらいたいですか？」

「ふう、わかった」

溜息をつきながらルフエルドは、まったく息子に似て、堅物だな。少しは甘えてもいいものを・・・と考えていた。

「こっちだ、ついてきてくれ」

「ここだ。」

ルークが見たのは地下室に通じる階段であった。

「あれ？ルフエルド叔父様。たしかここは食料庫なのでは？」

「ああ、そうだ、拡張してたら壁が崩れて、精霊石の洞窟が出てき

ただよ。」

「そうだったんですか」

「ああ、それじゃ私は上に戻ってるから、ここの洞窟を3分ほど進んだ所に門があるから確認だけ頼む、無理はするなよ」

「わかりました。」

そう、ルークが答えるのを背中ごしに聞きながらルークは精霊石で青く光る高さ2m幅2mの洞窟を進んでいく。

3分ほど進むとルフエルドの言ったとおり白い扉が見えた。

「なるほど、魔法で反応する仕掛けになってるな。」

そういいながらもルークは扉を念入りに調べていく。

「んー特にこれと言ったものはないな、やはり魔法を直接流して反応を見たほうが早いかな？」

ルークは精霊を自分の中の器に取り込み、魔力に変換して手の平から放出しながら扉に触れた。

「くっ・・・なん・・・だ・・・？」

目も眩むような光が発生し、ルークは意識を失った。

-----



- - - - -

「うっ、一体何が起きたんだ？」

周辺を見ると森の中にいた。

「なんだ？何で森の中になんて？」

しばらくルークが歩いていくと風景が開けて遠くまで見渡す事ができ、それを見た瞬間ルークは、固まった・

「どこだ？ここは・・・？」

ルークが見たのは、色取り取りの四角い箱が馬などと比べられない程早く走る姿と整然と並んでいる町並み。そして異国風の服をたくさん来ている男女であった。

突然、ルークは気配を感じてその場から離れた。

一瞬間を置いて、ルークがいた位置に炎が当たる。

「私の攻撃を避けた？あなたそんな格好をして誰なの？」

その女性は赤い髪を腰まで伸ばしており緑色の膝高10cmのスカーツに緑色の軍人が着るような服を着た者だった。

「先に名乗っておくけど、私の名前は四条 楓よ」

「俺の名前は、ルーク・フォン・スターレットだ。フレンリアル公国フレイア城で魔法騎士団団長をしている。」

「それよりもいきなり攻撃してくるのはどうかと思うのだが？」

「し、仕方ないじゃないの！あやしい人がいたら先制攻撃って綾乃お姉さんから習ってたもん」

「それはもういいんだが、ここは一体どこなんだ？」

「私こそ、知りたいわよ、あなた、フレンリアル公国って言ったけど外国から来たの？」

「外国？そのような言葉は聞いた事ないが・・・」

「そう、ここはね日本の茨城県龍ヶ崎市なんだけど・・・」

「聞いた事ないな・・・」

「もしかしたらお父様が何か知ってるかもしれないし、旅は道ずれっていうし家に来る？」

「いいのか？私自身で言うものなんだが得体の知れない自分物だぞ？」

「だからこそじゃないの！神凧家の分家なんだから問題が起きそうな人にはきちんと対応しないとね！」

も、問題って……ルークは心の中で突っ込んでいた。

「それじゃ、ルークでいいのよね？ルーク、私についてきてね。屋敷まで案内するわ」

「あ、ああ。よろしく頼む」

ルークは16歳くらいに見える女の子の後を着いていった。

## ルーク、日本へ逆召還！？（後書き）

今回は出張で言ったことのある茨城県をターゲットに書きたいと思っ  
ていますが、何分、住んでいないのでここことが面白そうだよって  
いうネタがあったらカキコお待ちしてます。

ご感想・ご意見をドシドシお待ちしております

## ルーク編の人物・世界編集

ルーク・フォン・スターレット

ストラウス砦攻防により団長が殉職した為、宮廷魔法騎士団隊長から団長へ昇進

年齢 21歳

身長 189cm

容姿 蒼眼に金髪の長髪、筋肉質

趣味 体を鍛える事

武器 魔剣グラム 魔力を流す事により高周波振動を発生させ物質を切り裂く。ミミールの世界が作られた時の遺物でありロストテクノロジの産物。一定の魔力を流す事により縮小する事も巨大化させる事も可能。

戦闘力は、魔法騎士団一個師団を一人で殲滅でき、魔法に至っては治癒・地・水・風・炎・肉体増強などミミールの世界に存在している魔法をほぼコンプリートしている。

しじょう  
四条 楓 かえで

炎術師、神凧家宗家の分家 四条家の長女

年齢 18歳

身長 166cm

容姿 腰まである赤髪ロング 3サイズは秘密 体重 秘密

趣味 可愛いものを集める事 料理 炎を操る練習

炎を操る炎術師の家系に生まれたが、祖母・父ともに大した力を持っていなかったため貧乏。

楓も例外にもれなく分家の中ではもっとも炎の力が弱い、神凧家宗家の神凧 綾乃に憧れており目標にがんばっている。

しじょうなつまさ  
四条夏雅

炎術師、神凧家宗家の分家 四条家の当主

年齢 51歳

身長 181cm

容姿 赤髪 短髪 黒眼

趣味 盆栽弄り

しじょうみずほ  
四条瑞穂

炎術師、神凧家宗家の分家 四条家の妻

年齢 47歳

容姿 黒髪 黒眼

夏雅と瑞穂は恋愛結婚のため、瑞穂は一般人。そのため異能は一切ない

趣味 料理 バーゲンセールの買い物

原作キャラ

八神 和麻 (やがみ かずま)

風の精霊王と契約した世界唯一の契約者コントラクターであり、世界最強の風術師。現在は綾乃と結婚したばかりであり、海外にハネムーン中

八神 綾乃 (やがみ あやの) 旧姓は神凧

次期当主であったが八神 和麻 の弟の神凧 煉 (かんなぎ れん) に当主の座と一族の宝剣・炎雷えんらい覇を譲渡。

現在は、和麻のサポートに廻っている。

炎を操る能力は、精霊王と契約せずとも神凧家では巖馬に匹敵する。神炎、紅炎プロミネンスを使うことができる。

現在は海外へハネムーン中

茨城県龍ヶ崎市

ご存知の通り日本にある都道府県

## 四条家の客人

茨城県龍ヶ崎市、東京都心から約45kmの位置にあり、ベッドタウンとして市北部の丘陵地帯に竜ヶ崎ニュータウンが開発された。

それに伴い昔からある、土地神や生きる場を失った精霊・魔物などもおり霊障も発生していたが極軽微な物で会った為、警視庁特殊資料整理室が対応をその都度行っている。

いま、ルークは四条 楓という少女の後を歩いていつている。

ルークの鎧と剣に関しては森の中から出る際に、そんな変な格好してたら目立つから置いていってよと言われた為、剣の能力で作られる鎧と剣は縮めて5cmくらいのペンダントにして首元から下げている。

それでも、身長189cmのがっちりとした体格。肩まである金髪を後ろで括ってあり青眼。

そして、本人に自覚は無いが美形という事もあり、とても目立っていた。

「楓殿、あとのくらいなのです？」

「もう、煩いわね！さっきから何回聞いてきてるのよ？」

「森から出て、今聞いたのが始めてですよ」



「もう、男のくせにぐちぐち煩いわね！」

さすがにその言い方にルークも嘆息してしまった。

10分ほど歩くと大きな門構えの家が見えてきた。

「着いたわよ」

ルークもその門構えを見るが、何故だか文字が読めた。

『四条』

そのまま、楓は門を潜って中に入っていく。ルークも後を追って中に入るが外と違って空気がすごく浄化されてる気がした。

広さ的には2000坪近いだろうか。腐っても神凧家の分家なだけはある。

「ルーク、こっちよ」

「ああ、わかった。」

庭には土蔵が2つと近代的な家と昔ながらの母屋が立っており全て渡り廊下で繋がっている。

楓に母屋に案内されたルークは、玄関でブーツのまま上がるうとしたが良く見ると楓が履いてた靴を脱いでるのを見て、ブーツを脱いでから屋敷に上がった。

家の中を案内されてる間もルークは屋敷を見渡していたが、ずいぶ

ん私の住んでる世界とは作りが違つのだな・・・それに木の匂いがして悪い感じはしない

考え事をしていたらいつの間にか目的の客室についたようであった。

「ルーク、少しまってね。一応携帯で連絡しておいたけどもう一回説明しておくからね」

「楓殿大丈夫だ、説明なら私ができるから問題ない」

それを見た楓ははあと呟きながらも

「もう、いいわよ。それじゃ入ってきてね」

「楓です。電話の件のお客様を連れてきました。中にはいます」

そついい、楓が先に中に入りルークが続いて中に入った。

中は日本風の母屋とは違い、西洋風のテーブルが真ん中にあり、その両脇に椅子が置いてあった。その椅子の一つにルークに負けず劣らずの体格をした一人の男性が座っていた。

その男性が娘とルークを見ると一度立ち上がり、

「おかえり、楓。いつも言ってるだろう？おかえりなさいを先に言わないとダメだぞ？」

「もうお父さんったらお客様の前で何言ってるのよ!」

そついいながらもルークを観察していく

「初めまして、異世界から来られた方。私の名前は四条夏雅、ここ四条家の当主です。」

ルークも壮年の男性を観察していたが、先に挨拶をされてしまい機先を制されたこともあり、慌てて説明をした。

「挨拶が遅くなって申し訳ありません。私はルーク・フォン・スターレットと言います。フレンドリアル公国王都フレイア城宮廷魔法騎士団団長をしております。」

少し驚いた顔を夏雅はしていたが年の功と言うものだろうか？

「それではルーク殿、立ち話もなんですからお茶でも飲みながら話をしましょうか？」

「申し訳ありません、お言葉に甘えさせて頂きます」

夏雅が薦めてきてくれた椅子に座りテーブルを挟む形で視線を交わす。

「すまないが楓、今、瑞穂みずほが買出しに言ってるからお茶を入れて来てくれないか？」

「はい」

そのまま楓は部屋から出て行ってしまった。

「さて、これで10分くらいは時間が稼げるかな？」

「ルーク殿、率直に聞いてすまないがこの世界には何をしに来られ

たのですかな？」

「何をしに来たと言うか、実は鉦山の扉の調査を頼まれてまして、それを調査中起動したら気がついたらこっちの世界に居たという感じでしょうか？特に他意はないですね」

ルークは肩を落として答えた。

夏雅はかなり人の良し悪しを判断するのが得意な方であり、そのため、よく交渉で相手が嘘をついてるか否かを警察で調べる為に重宝されている。

その経験がルークという青年は、問題ないと判断した。

「それでルーク殿、元の世界に戻る手筈はあるのですか？」

ここまで聞いておいて、夏雅は帰る手筈があるならばもう帰ってると思っっているが念のため確認しておく事にした。

「いえ、実はこの世界に来て以降、鉦山も扉も何も無い森の中に入っています。」

「そうですね、それは困りましたね」

そう言いながらも夏雅は帰る手筈はだいたい考えていた。神風家に数年前に戻ってきた風の精霊王と直接契約を結んだ彼ならば世界各地を廻っていた事もあり帰る情報を何かしらもっているのではないかと

それでも今は海外にハネムーン中と聞く。戻ってくるのはしばらく掛かるだろう。

夏雅の眼から見てもこの青年は、身のこなしから相当強いと見えた。

しかも魔法騎士の団長クラスと言えば相当の使い手なのだろう。それならば、最近、急速な発展をしている龍ヶ崎市と中心とした怪異の解決の仕事を警視庁から受諾する事ができる。それに娘も実践経験をつませる事ができる  
そこまで、考えてから

「ルーク殿、よければ帰る方法は私達の方で調べておきますのでしばらく我が家に逗留しませんか？」

ルークにとってもこの話は渡りに船である。何せ、異世界なのだ。言葉を通じる事は会話できる事からわかる。文字についても読むことはできる。王都でもそうだが、肝心の戸籍がないのだ、戸籍がない。仕事してもらえない。生活ができない。それに持ってきたお金が使えるか分からない事もあり、断る必要はなかった。

「ぜひ、よろしく願います、夏雅殿」

「それと、屋敷に置いて頂ける事にあたりこれを」

ルークは懐から袋（財布）を取り出し、数個の数センチの宝石と純金で作られた金貨を40枚ほどテーブルの上に置いた。

「この世界で使えるか分かりませんが、本当に心苦しいのですがこのくらいしか先立つ物が用意できませんが、よろしく願います」  
ルークはそういい、夏雅の顔を見た。夏雅の顔は表面は取り繕っていたが顔が青くなっていた。何かまずい事でもしたか？とルークは心配していたが

夏雅はテーブルに置かれた数センチの宝石と金貨を見て絶句してい

た。夏雅は人を見る目だけではなく、貧乏な家系の上から骨董品や宝石を見る鑑定眼も持っていたからだった。

金貨は恐らく大きさから見て1枚10万はくだらないだろう。純度によつては15万になるかもしれない。それが40枚・しかも宝石に至つては赤と白い線が入つてる事からキャッツアイだと思う。

そして白い宝石はダイヤモンドか。そして普通のルビーがいや、数センチの時点で普通ではないが・・3個

全部で数千万になる。カット次第では億は超えるだろう。

だからこそ、夏雅は顔を青くしていたのだった。この青年の事を考えると一時的に預かつておき金庫に保管しておいたほうがいいなと考えた。

「ルーク殿、謹んでお受けしますが、宝石に関してはこの屋敷の金庫で預かつておきますので元の世界へ帰る際にお渡しします。」

よかった。渡した対価が多すぎて、青くなっていたのかとルークは胸を撫で下ろした。

「それでは、これからよろしくお願いします。」

話が一段落すると、楓がお茶請けとお茶をもつて中に入ってきた。

「おまたせ〜って！何この綺麗なの〜？」

楓は手に宝石をもつて眼をキラキラさせている。

「ああ、それは宝石の原石だよ。楓は見たの初めてかな？」

「うん、お父さん。初めてみたよ、すごいね！こんな大きい宝石

店じゃみないよー」

「そうか、その宝石は価値があるから当家で預かることになった。それから、ルーク殿はしばらく我が家の客人として逗留する事になったからこれから仲良くしてくれ」

「はい」

と言いながらも楓の中では、うわーこんな金髪さらさらな長身の男の人と一つ屋根の下とかこの小説のヒロインなのかしら〜とうれしはずかしドキドキ思考をしていた。

.....

ルークが通されたのは母屋から渡り廊下でいける2LDKの離れであつた。俗に言う平屋という奴である。

「それでルーク、ここの平屋のこっちがお風呂場でこっちやって使うの。それでこっちがお手洗いでこっちが台所、しばらく分からない事があると思うから分からないときは母屋に来てくれればいいからね。」

「あ、これお布団ね。一応洗濯とか掃除はお母さん好きだからやってるからそのまま使えるね」

「よいしょと、もう今日は遅いからルークも疲れたでしょう？明日、朝食が出来たら呼びにくるからまたねー」

「楓殿、何から何まですまない。これからもよろしくお願いします」

「それと楓殿はいいから楓でいいよ、なんか恥ずかしいしそれにもっと楽に話してね、あんまり丁寧な態度は嫌だな」

「分かった、楓ど・・コホン、楓これからもよろしく」

「そうそう」

ニッコリと楓は微笑んで部屋を出て行った。

「さて、寝床も確保できた事だし元の世界への帰り方は調べてくれるようだから、元の世界に帰還したときの後学のために色々な事を学んでおくのもいいかもしれないな」

そういいながら、ルークの意識は疲労の為に沈んでいった。



## 四条家の朝

四条家の朝は早い。

コケコツコーと鶏の声が庭内に響き渡ると同時に活動を開始する。

異世界から来た、ルークにとって鶏というのは見た事も聞いた事も無い為、勘違いしてしまうのは仕方ない。

鶏の鳴き声が聞えた時にはすでに普段の訓練の賜物の為か一瞬で意識が覚醒する。

「なんだ？襲撃か？」

布団を跳ね飛ばし起きる。

すぐさま、首から下げている魔剣グラムのロザリオに魔力を流す。

剣先から柄まで2m近い長剣に展開し同時にマジックプレートメー  
ルを纏う。

そのまま、平屋の表へ通じる扉を開けて外に飛び出す。

周りを見ても、昨日見かけた事のない女性がルークの姿を見て驚いてるだけであった。

ルークは、周りに神経を張り巡らしながらその女性に

「すみません、魔物の類の声が聞えました。あぶないので屋敷に入

っついてください」

その言葉に、その女性は固まってしまおうが、

その直後ルークの後頭部へ何かが迫ってくるのを感じた、くるくる廻ってきたオタマをグラムにより切り裂く。

襲撃者の攻撃が甘いな・・・と得意気な顔をしてオタマの飛んできた方向を見ると、楓が怒り心頭という感じで顔を真っ赤にしていた。

「ルーク！何してるのよ！！朝からそんな物騒な物振り回して、あぶないでしょ。しかもオタマまで斬っちゃうとかまた買いに行かないといけないじゃないの？」

「楓、すまないが先ほど、コケッコと無く声が聞えた。もしかしたら伝説にあるSランククラスのココトリスかも知れない。今はこんな事をしてる場合じゃない」

「そんな物、日本にいないから！さっさと剣と鎧しまっってお布団を物干しに干してきてよね！！」

「そうなの・・・か？」

「そんな魔物とつくの昔に外国で絶滅してるわよ、もう朝から何を騒いでると思っいたらそんな下らないことでそんな物騒な物振り回さないでよね、もう」

「ルーク！あとね、日本では銃刀法違反っていうのがあってそういう剣は持つただけで犯罪になるから武器にしないでよね！」

「ああ、わ、わかった」

楓の気迫によりすっかり意気消沈してしまったルークである。

「うん、理解したならさっさと物干し竿に昨日寝た布団干してきてね！さあ、ちゃっちゃっとなんか働いて！」

「ああ・・・」

ルークはしぶしぶ平屋の方へ戻っていった。

学校？

いま、ルークは布団を干し終わってから母屋で朝食を取っていた。

朝食は日本でいう大根のお味噌汁 ブリの塩焼き ご飯に沢庵である。中央にはサラダがボールに入っている。サラダ以外は純和風である。

食卓を囲んでいるのは、

ここの当主の四条夏雅 そしてその娘の楓である。そしてもう一人の女性とルークの4人で食事を取っていた。

子沢山の神凧家の分家では異質とも言えるほど人数が少ないが・

それは四条家だからこそと言えればそれまでである。

ルークは器用に箸を使いながら食事をしていた。

それを見ながら、夏雅は

「ルーク殿はずいぶんと箸の使い方がうまいのですな。」

「ええ、雪殿によく仕込まれたので」

「ほー雪殿？名前からしたら日本人ばいのですな」

「そうなんですか？」

それに答えたのは女性である。見た目は楓と大差がなくお姉さんと言った風貌に見える。

「ええ、雪という名前は日本で言う、春夏秋冬のひとつから取つてる言葉ですね。」

「海外でも少なくはないと思いますが、名前からしたら日本人ぽいですよね」

その答えにルークはうーんと唸って女性を見つめた。

「えーと、楓さんのお姉さんですか？」

とルークが聞くと

「いやですわ！夏雅の妻の瑞穂です。自己紹介がまだでしたね、これからもよろしくお願いしますね」

「は、はい。よろしく申し上げます。ルークと言います」

ルークが正座をしたままピンツと背筋を正して謝罪した。

「それにしてもルーク殿は箸もそうですか正座も出来るのですな？それも雪さんと呼ばれる方に？」

「はい、そうです。」

夏雅はルークの話に出てきた雪と言う者に興味を持った。異世界に行き、尚且つ宮廷で勤める団長クラスと親交があるというからには

それなりに何かあるのだろうと・・・

「それで、ルーク殿、一つお聞きしたい事があるのですがいいですか？」

ルークも夏雅の真剣な態度に気づき目を向けた

「はい」

「その雪さんとはどのようなご関係で？」

しばらくルークは思案して言葉を出す

「そうですね、簡単に説明すると国を救ったもらった英雄と言う所でしょうか？」

「国を救った？と申しますと」

「実は私がいたフレンリアル公国は帝国と言う国に30万の兵、我が国の10倍の兵力差で攻められていてそれを一人で退けて国を守ったんです。」

「一人で30万の兵を？」

その話に、夏雅だけではなく、瑞穂や楓まで箸が止まってしまった。

その話が本当ならば、世界最強の風術師に匹敵するからだ。

「ずいぶん強い力を持った方だったんですね、それでその方はどちらに？」

ルークはその言葉を聴いてから瞳を伏せて

「突然、姫の護衛騎士を辞退して行方不明になりました。」

「そうですか、もしかしたらこちらに戻って来てるかもしれませんね。」

夏雅は確信を持っていた。それだけの力を持っているならば任意で戻る事も可能ではないかと。

「その方を探し出すことが出来れば、案外早く元の世界に帰れるかも知れないですね。何か特徴とかないんですか？」

ルークは少し思案して

「そうですね、黒髪に黒眼に身長はこのくらいの女性なのに男だ！  
って言ってる人でした。」

「ふむ、少し調べてもらってみますね」

「すみません、面倒をおかけします。」

「いえいえ、お気になさらず」

朝食が済んだのはそれから20分ほど過ぎたほどであった。

.....

.....

「それじゃお父さん・お母さん行ってきます」

制服を来た楓は高校に出かけた。

「あれ？楓さんはお仕事か何かですか？」

「仕事？」

と夏雅は聞き返すが

「ええ、軍服を着ていたの」

「違いますよ、あれは学校の制服です。」

「学校ですか？」

「もしかしてルーク殿は、学校に行かれた事がないですか？」

「はい、12歳から騎士見習いをしていたもので」

「なるほど・・・」

夏雅は一般教養もつけるのもいいかと思った。家で教えるだけでは限界があるだろう。そしたら学校に通わすのも一つの手だし、あそこの校長とは友人の仲だし



「ルーク殿、学校というのは勉強を学ぶところになります。よかったですら通ってみませんか？」

「ええ？いいんですか？」

「いいですよ。」

「瑞穂、ルーク殿の制服を買ってくるので留守番を頼んだ。」

そういつて夏雅は一人車に乗り出かけていった。

## 突然来た転校生は異世界人

キンコーンカーンコーン

予鈴が鳴り、4時限目の授業が終わり楓は友達と一緒に教室で食事を摂っていた。

ここ、茨城県にある竜ヶ崎の高校は男子共学である。

最近では都会から流れ込んできた核家族の子供達の協調性の無さが原因となって色々と問題がおきている。

最近の核家族の親は、自己中そしてなんでも学校のせいにして自分の事をダメぷりが分かって無い為、その背中を見て育った子供もダメぷりが多い。そのため、最近では元から住んでいる住民とのトラブルが最近では絶えない。

それでも、高校の風景は大差ないわけで

「ねー楓、最近面白い事無い？」

そう話しかけてきたのは楓の友達の水桐美香子<sup>みずきり みかこ</sup>である。

「ダメよ、だって楓っていつも主婦じみた感じでそういつつ出会いとか無さそうじゃないの？」

失礼な言い方をしてきたのはもう一人の友達の橘由美<sup>たちばな ゆみ</sup>である。

「うん、そうね。ないわねー」

楓は、一瞬ルークの事を思い返していたが、あんなのを言ったら恋愛ごとの好きな二人の事だ。絶対うるさいに決まっている。

「何？今の間合いはあやしい」

美香子はじーっと楓を見てくる

「なんでもないわよ」

そう言つて、3Fにある教室から表を見るとセダンが見えた。あれ？あれってお父さんの車じゃなかったけ？何か学校によつがあるのかな？

食事を摂り、5間目の授業が始まるが

5間目の歴史の担当は安藤先生なのにこの教室の担任の伊藤先生が入ってきた。

「おーい、お前らさつさと椅子に座れ」

そついうと教壇の前で伊藤先生が立つて、教室を一度見渡ししてから

「あー、9月というおかしな時期だが、転校生を紹介する。」

ざわざわ、どこでも転校生というのはある種のイベントであるためこの反応は仕方ない

「ねー楓、転校生だって、男の人かな？かつこいいならいいよね？」  
そんな由美の話を聞きながら、楓は嫌な予感が止まらない・・・父親の車があり、さらにこの時期にいくら東京から近いからと言え転校生がそうそうくるとは限らない・・・導き出される答えは・・・

伊藤が扉の方へ一瞥してから

「おいルーク、入ってきてくれ」

そう言われて、教室内にルークが入っていった。

その姿を見て、男子陣からはこの色男がくシネバイイノ二と言う声が聞えてくる。女性陣からはきゃーという声が聞えてきた。

ルークが来てる制服は黒襟学生服だが、身長が190近く、鍛錬により引き絞られた体格。それでいて顔は美男子そのもの、さらさらの金髪の髪が肩まである。

そんな転校生を見て、女性ならときめかない人はいないだろう。

だが楓としては異世界人に高校は勤まるわけないというのが本音であつたため、

「お父さん・・・正気なの？」

と呟いていた。

担任の伊藤はさらに続けて

「えー、ルークさんは日本の事を学びたいとアメリカから来た留学生です。皆さん仲良くするように!」

「そうですね、席は楓さんの隣が空いてるのでそこに座ってください」

楓は、げっ! って顔をするがすでに後の祭りである。

近くまで来たルークが楓を見るなり、

「おお、楓。今日から学校に通えるように夏雅殿が手配してくれたのでこれからよろしく」

「う、うん」

うあー、空気読んでよくルーク! 女達から好奇心満載の目で見られちゃたじゃないのよー

## 神凧親族会議前日

「お父さん、どういふ事なのよ!」

母屋では楓が父親に詰め寄っていた。

「ルークが転校してきたのが御昼以降でよかったものの、さっき勉強みたら全然出来ないじゃないの?」

「あれじゃ高校はムリだわ!」

「楓、そんなに怒るな。」

夏雅は神妙そうな顔で言い直す。

「たしかに楓の言うとおりだったな。やはりある程度学力がつくまでは高校に行かせるのはまずいな・留学生というだけあってそれなりの知識がないときついだらう。」

「ルーク殿、すまないがやはり学校へはしばらく行くのを保留してはもらえないか?」

そう言われるとルークとしても学校の授業を聞いててもまったく理解出来なかった為、

「わかりました。」

といわざる得ない。

「しばらくは、当家で楓が昔使ってた勉強の本を参考に学んでいただければいいと思う。順序よく学んで頂ければそのほうが理解しやすいと思うしな」

ルークもそれには依存はない・いきなり高校というハイレベルな勉強の場に置かれてもどうにも出来ないからだ・

「では二人とも着替えて、夕食を食べよう。」

そう、夏雅が提案すると二人とも部屋から出ていった。

.....

食後、夏雅・瑞穂・楓・ルークの4人の茶の間にいた。

「ルーク殿お願いがあるのですが、私と妻は野暮用で出かけなくては行けないため、今度ある神凧家の分家・本家の集まりに楓のお供として付き添いをお願いしたいのですがお願いできますか？」

ルークとしてはお世話になってる手前、特に問題は無い為

「わかりました。いつになりますか？」

夏雅に聞くが、

「明日ですね。タクシーを手配しておきますのでそれに楓と一緒に

乗ってください。」

「わかりました。」

「それでは、明日は早いようですので私はもう寝させていただきます。お先に失礼します」

ルークはそういつて部屋から出ていった。

それを見届けた楓は

「お父さん！どういう事なの？なんでいきなりうちが呼ばれたの？今まで空気の扱いだっただのに」

「さあな？わからないが、ここ最近で神風家の親族はかなり死んだからな。そういう事もあり、楓を貰い受けたという他家の意向もあるのかもしれないな」

「一応分家と言っても血筋だけはきちんとしてるからな・・・」

「でも、神風家って分家の力ない人とかに暴力とか振るってるって聞くからすごく心配だわ、たしかにルークは少しは強いかも知れないけど、分家の人達は私達とは比べ物にならないくらい炎術が得意なのよ？」

「まあルーク殿なら大丈夫だろうな。もう少しあの若い騎士を信用してもいいんじゃないのか？」

うー、仕方ないわね



「わかったわ、でも危ないと思ったたらすぐ帰ってくるからね！あと問題あったらお父さんの責任だからね。」

「わかったわかった」

楓も父親の言い訳を聞いて部屋を出て行ってしまった。

「でも、あなた大丈夫なのかしら？最近、日本各地で不穏な感じがしてるのでしょうか？」

「そうだな、だからこそ、力がない私や瑞穂が親族会議に出るわけにはいかないのだよ。それにあのルークという青年にはもっと私達には計り知れない力を感じる。もしかしたらこれから、起きるかもしれない災いに対抗してくれるかもしれない。それにな、楓がそんなに男に興味をもったのも初めてだからな・・・」

「あらら、ルークさんに嫉妬ですか？」

「違うぞ、父親としてだな娘を心配してるだけだ」

「素直じゃないこと・・・」

夜はそうして深けていった。

## 分家の炎術師との戦い序章

次の日、四条楓とルークはタクシーに乗り

朝早く出発し国道6号線から常磐道に乗り北関東道へ乗り換え、関越道から群馬県に入りそこから国道と県道を通り神凧家の保養地のある群馬県上野村に移動した。

群馬県上野村の村で有名所といえば、1985年に日本航空123便墜落事故があった御巢鷹山が有名である。

他には日本有数のあぶくま鍾乳洞や恐竜の足跡などなかなか有名なところが揃っている。

そして、神凧家の保有地はかなり奥まった位置にあるため、一般人には出入りはとても難しくなっている。

車から降りるとすでに門が構えてあり、そこに入ると軽く500坪はあるうかという広場があり、その広場を囲むようにアスファルトの地面が門から円を一週描くようになっている。

門と対角線上に建物があり、その大きさは四条家の屋敷のトータル面積に近い3000坪近い。

その建物の入り口にルークと楓は、今向ってるわけだが

「おい、四条家の箱入り娘さんがきたぜ」

「ああ、みたいだな」

「力は弱いが血統は結構いいって親父達が話してたぜ？それに結構かわいいじゃねえか？」

「だな、ぜひお近づき願いたいな」

「隣にいる男はなんなんだ？金髪ってことは外人か？ってことは術者じゃないって事だよな？」

「ただの付き添いじゃねえのか？」

「そうだな、それより本家から重悟様と巖馬様と煉様がすでに到着して広間で待ってるみたいで親父達はもう話しをしてるらしいぜ。」

「俺達には関係ないだろ、どうせ親父達が話すわけだし」

「そういえば四条家の当主とは名ばかりの力の無いお荷物は今日は来て無いんだな？」

はははは

「おいおい、名ばかりの分家とは言え、四条家の箱入り娘も代理できてるだけ、気分悪くしたらどすんだよ？」

「力が無い奴が何言ってもなー」

そう言いながら入り口にたむろッてる若者達が笑いながら談笑をしている。

それを聞いてる楓は何も言わずに唇をかみ締めて手の平を握り締め  
たまま屋敷に入ってしまった。

ルークもその姿を見ていたが、楓が何も言い返さない事から自分が  
ゴタゴタを捲き起こしたら立場的にまずくなると思って、黙ってつ  
いていこうとしたが・・

「おい、その金髪の付き添いのにーちゃん。ここからは分家当主  
と宗家しか今の所、入れないからここで大人しく待ってるよ」

そう言われ、ルークは楓を見るが楓もルークを見て、涙を堪えてる  
のだろうか？いつも毅然とした態度から想像もつかないほど弱弱し  
い感じで首を横に振って顔を見られないように足早に屋敷に入って  
いった。

その後ろ姿を見ながら、さすがに宮廷に勤めてる団長というだけあ  
って自分の感情を自制していた。

たしかに若者達を見れば、身のこなしなどから大体の実力の予想は  
つくがせいぜい一般の騎士の一ヶ月程度訓練を受けた程度のレベル  
にしか過ぎない。

冒険者レベルで言えばDクラス程度だろう。こんな奴ら程度の力で  
有頂天になってるのかと思い、怒る気もうせていた。

周りの風景を見ながら、ルークが考え事をしてると、先ほどの若者  
達がルークに近寄ってくる。

「なあ？にーちゃん。さっきの四条家の無能な炎術師とはどんな関  
係なんだ？」

そういいながら周りの6人くらいの年齢的には16歳〜18歳程度の若者達がルークに絡んできた。

「ん？居候の身ですが？今回は付き添いで来ただけですね。」

さすがに宮廷で勤めてるだけあってスルーする。

「なんだ？そうなのかよ、俺はてっきり普通の人間とそういう関係の奴を連れて来たのかと思っただぜ」

さすがに神凧家分家と言えど一般人に手を上げるほど腐ってはいないが・・・口は腐っている

「なあ、さっきの四条家の女は恋人とかいるのか？」

「さあ？知りませんがご本人に聞けばいいのでは？」

「ふ〜ん、お前さ四条家で居候してるって事はそれなりに強いんだろ？」

「どうでしょう？普通だと思いますよ？」

ルークがそう答えると、一人の青年が手の平に炎を作り出した。

「おい、遊馬。一般人に手を上げるのはまずいって」

身長170cmの黒髪の青年が注意するが

「うるせえな、宗明。俺はこんな田舎まで連れて来られてイライラ

してんだよ。」

遊馬という若者はどうもルークに攻撃をする気のようにだった。

ルークはその遊馬に視線を移し、

「遊馬殿で良かったかな？」

「ああ、そうだがなんだ？もう降参か？」

ルークを見下した顔をして言ってくる。

「遊馬殿、力を振るうという事はそれなりの覚悟が己にも必要とされませんが分かっていますか？」

分かっていれば、こんな事は元から起きないわけだが・

「うるせえな、お前なんかむかつくんだよ。」

遊馬がそう言い、手に作り出した直径30cmほどの火の玉をルークに投げてきた。

ルークは体内の器に精霊を吸収し魔力を構築、それを右手に展開しその火の玉をそのまま地面に叩きつけた。

「な！」

広場にいた全員がその事に対して驚愕した。普通ならば燃え広がるはずが打ち落とされたからだ。

「お前一体何者なんだ？」

その言葉にルークは素直に紡ぐ

「私の名前は・・・」

## 神炎使いとの一騎打ち

周りの若者達を見回しながら、ルークは言葉を放つ

「私の名前はルーク・フォン・スターレット。フレンリアル公国王都フレイア城の宮廷魔法騎士団団長です。」

それを聞いた若者達は、一瞬、理解の範囲が追いつかず止まるが

「なあ、聞いたかよ」

「魔法っていつの時代の話だよ」

「っていつかそんな国聞いた事ねーし」

「頭沸いてるんじゃないの？」

「ルークって言ったけ？妄想もそのくらいしておけよ」

「こいつ見た目は良くてもイタイやつだったんだな。」

ルークはさすがに信じてもらえるとは思っていなかったのでもあ仕方ないかと思っただが次の言葉で

「こいつがもし騎士団長って言ってもこんな奴が使えてる王様なんてカスみたいなもんだろ」

ははははは・・・さらに若者達は笑うが



ルークはその言葉にぶち切れた。

「おい、ガキ共。いい加減にしておけよ？楓だけではなく、我が主君を愚弄するとは万死に値するぞ？」

そう言った瞬間、ルークは胸の魔剣グラムのロザリオに魔力を流し込む。

その瞬間ルークの右手に柄から剣先まで2mの長剣が抜刀状態で出現した。

「なんだ？こいつ、さっきまでと全然違うぞ？」

若者達がルークの殺気に宛てられて後ずさりするが腐っても神凧家の分家なだけあって次々と炎と作り出していく。

ルークもそれを見ながら大気の精霊を体の器に流し込み魔力へと変換する。そして展開防御魔法を構築

『この彼方より 来たりし 力 果て無き壁と成せ』

紡がれた魔力が不可視の防御となりルークを中心に展開される。

それに次々と分家の炎術師が打ち込んだ炎が当たるが全て衝突するだけでその場で霧散していく。

「なんだ？こいつ。炎が効かないぞ？炎術師なのか？」

「わかんねえよ、でもやべえ」

「あいつの右手に持つてるって真剣じゃないのか？」

分家の若者達が自分達がどれだけルークの逆鱗に触れたか分からずに次々に見当違いな事を言っているが・・

ルークは一步前へ、飛び出した瞬間に袈裟切りに遊馬と呼ばれていた者を切り伏せた。

「ひいひいひいひいひい」

「なんだ？なんなんだよ？こいつおかしい」

次々と悲鳴を上げてルークから逃げようとするがその都度グラムで斬られていく。

しばらくすると、神風家宗家と分家の当主が外の様子がおかしいと気づき広場に走ってきた。

「ルーク、やめなさい！」

楓の声がその時、遊馬に止めを刺そうと剣を下ろそうとしたルークを止めた。

「き、貴様が私の息子をこのようにしたのか？」

どうやら分家の当主らしいがそれぞれがルークに対して抗議を上げてくるが、誰も手を出してこないのは実践を経験してるだけあって

ルークが纏ってる殺気に気がついてるからである。

「楓さん彼は一体？」

煉が聞いてくるが、

「彼は、四条家の客人です。」

「ほう、なるほど・・・」

前神風家宗主の神風 重悟が相槌を打つ。

「ルーク一体どうしてこんな事をしたの？」

楓はルークにたずねるが・・・

「我が主君を愚弄したからです。」

若者達がルークの素性を聞いた後に主君を蔑ろにした発言をしたため激怒して斬ったとルークはその場で説明した。

「それと、まだ殺してませんので安心してください」

とルークは言うが・・・

広場を見ると、血が飛び散っており、どこが安心なの？って誰もが思った。

「でも困ったな。致命傷ではないとは言え、ここからは病院は遠いしな・・・」

重悟がまったく困ってない様子で言ってくるが、楓は自分の付き添いがこんな大事を起したため、困り果てていた。

ルークはそれを見ていて、仕方ないなという感じで

「わかりました、主君を愚弄した者達を生かしておくのは騎士として問題だと思いますが、楓殿のご自宅でやっかいになってる以上、私には非はありませんが彼らを治療しましょう。」

そういうとルークは青年達の元いき、治癒魔法を構築する。

『彼の者 古き軀を脱ぎ捨て 回帰する海より 再生の癒しをうけん』

次々と治癒を施していき斬られた傷跡がうつすらと残る程度になる。

それを見ていた、煉・重悟・蔵馬と分家当主は驚いていた。地術師など比較にならないほどの治癒術の使い手だからだ

治癒を施した後、ルークは楓達の方を見て、

「私に、非があるとは思いません。この者達は力に奢り、その力を自分達の欲望のまま使おうとし我が主君を貶めました。本来なら殺すはずですが、楓殿の立場もあるため今回は不問にしましょう。」

だが、分家としてはいくら息子達に非があろうと一回の術師が神風一族に対してそんな言い方をしてくるのは許せない事であった。

それを、蔵馬と煉・重悟はどうしたものかと考えていたが

「ルークと言ったか？私とやりあってその実力をここの者達に見せてもらえるか？実力を見せれば納得するだろう？」

そう敵馬が提案してきた。

分家の長はそれで納得したが、楓は不条理だと思った。

敵馬と言えば、神凧家で現役最強の炎術師であり最高の威力を持つ「黄金<sup>きん</sup>」をも凌駕する絶対無敵の力《神炎・蒼炎》を召喚することが出来るからだ。

いくら、ルークが強くても勝てるわけがない

「ルークダメだよ、敵馬さんに勝てるわけないよ。」

楓がルークを止めるが、ルークとしては常識的な事を指摘してそれに対して一切謝罪が無いことにイラついてた。こんなにもかついたのは、ひさしぶりだ・・・しかも騎士は弱きものを助けるべし！これがフレイア城の騎士団の共通の認識であり誇りだ。それを掲げて国や民を守ってきた賢王を愚弄してきてあまつさえ、納得するだろう？・・・だ？

いい加減にしるよ、お前ら・・・

「楓、すまない。これからは殺し合いになる。少し離れててくれな  
いか？」

ルークが楓に言つと、他の分家の当主が楓を引きずって敵馬とルークから離れた。

「ルーク、悪いが今殺し合いになると言ったが、それならば本気でいかせてもらうぞ?」

蔵馬の言葉にルークも

「ああ、構わない。だが、お前の命は無いと思え。」

それと同時にルークから濃厚な殺気が放たれた。

「くっ、なんだ・・・」

周りの分家の当主達と煉と重悟・蔵馬はその殺気に驚く。この世界では妖魔や妖怪・魔物と言った類と戦う事はあるが人間同士の殺し合いなどめつたにないからだ。

蔵馬は、面白いなと思いつつ、気を極限まで高めていく・・・

## これが本当の対人戦

巖馬が気を高め始めるのを見たルークは、高速詠唱で肉体の強化を行う。

『我、力を解放。在る者を成す者。力を翼のごとく開かん』

ルークの肉体の細胞が活性化され、通常の筋力の2倍近い力を出す事ができる。

そして、その瞬間、巖馬にルークは向った。

周りから見れば、ルークの姿が一瞬消えたと思わせるほどの瞬速である。まして重い鎧をつけてないのだ。

巖馬がいくら最強の炎術師であったとしても神炎を使う為には気を極限まで溜めるといふ動作が必要な為、その予備動作だけで

チャキツ・・・ルークの持つ魔剣グラムが巖馬の首筋に当てられており、皮一枚を斬ったのか一筋の血が流れていた。

「なんだと・・・」

神風家分家の当主達があまりにも呆気ない勝負の結果に驚くが、ルークとしてはこんな1対1の戦いの時に呼び動作が大きい業を使うなど愚の骨頂である。

敵馬も、ルークが迫ってくるのは見て取れたが、あまりにも早い速度だった為、肉体が追いつけず対応できなかった。

対人を想定として武を極めていた者との差であろう。

「私の負けだな」

敵馬も負けを認めざる得ない。

それでもルークは敵馬が最強とは知らない事、分家の当主達が不意打ちという形でルークが勝負を一瞬でつけてしまった事に不満を抱いてるといふ事に気づいた為

「そちらの人たちはどうやら不満があるようですが、不満があるなら私と直接やり合ってみますか？それかこの敵馬殿より強い術者くらいいるのでしょうか？その人ともいいですよ？」

怒り心頭気味のルークとしては、この程度の戦闘すら呼べない結果で消化不良気味なのだ。

それに不意打ちと分家の当主は思っているが、相手に如何に力を出さずに戦いで倒すかこれが戦う者にとって当然であり、ルークや本当の実践を潜り抜けてきた敵馬や重悟・煉にとっては痛いほど理解している。

つまり、ルークは実戦経験のある近接が得意な術者を出せと言ってきているのだ。

だがそんな術者は、海外にハネムーン中の綾乃と和麻くらいな者だ。

分家の当主達に至ってはルークの移動速度など目で追いきれなかつ



たため、対峙しても瞬殺されるのは目に見えており、本家の最強の炎術師でさえこの様なのだ。不満があるうと納得するしかない。

「わかった。息子達の非礼を詫びましょう。ルーク殿、申し訳なかった。」

当主自らがルークへ謝罪を述べていく。

楓はそれを見て、ルークって一体どれだけ強いのか？と思っ  
てしまっ  
ていた。

「ねえ？ルークって魔法騎士団っていうくらいだから魔法使えるの？」

その言葉に宗家だけではなく、分家まで反応した。

「ええ、すでに敵馬殿と戦う際にも魔法は使っていましたよ？」

その言葉に、分家そして宗家まで啞然としてしまっ。言い換えれば敵馬を神炎出す暇すら与えずに知覚すらできない魔法の補助を受けたルークに倒されたという事になるからだ。

「ほう、それでルーク殿。良ければ簡単な魔法を見せてもらえないかな？」

重悟がルークに聞いてくるが、すでに謝罪を受けてるルークの身としてはもう怒りは収まっていた為普通に対応する。

「そうですね、簡単な魔法でよければ」



会議は1時間くらいで終わったが最後に親族が一同居る前で重悟がルークと楓に

「楓殿、ルーク殿ほどの方は一緒にいるならば、今ままで四条家に振らなかつた討伐依頼がこなせるな。これからよろしく頼む。」

それから、楓はタクシーで四条家に向うまでご機嫌であつた。

## 新たなる脅威

車に乗って帰る途中、四条楓は気になっていた事をルークに確認しようと考えていた。

「ねえ？ルーク。一応ね、最後に戦った蔵馬さんは宗家では最強の炎術師なんだけどなんであんなにあっさり勝てたの？」

その事を聞かれ、ルークは楓達が最強という言葉履き違えてると感じた。

「楓、この世界には一人でどんな状況にも立ち向かえる者などめつたに居る者ではない。どんな状況でも最強というのは必ず存在しない。状況に応じて戦い方を臨機応変に変えてどんな状況でも勝つことが出来るものが最強と言う者だ。」

「私と対峙した蔵馬どのには恐らく手を抜いていたと思う。すぐに打てる魔法を使わずにわざと溜めが必要な業を使ってきた。タイムラグが無い魔法を連発されてれば結果は違っていたかもしれない。それでも、私に魔剣グラムがあるから結果は変わらないと思う。」

「私から見た感じ、楓と蔵馬殿や神凧家の人たちは前線で戦うのではなく、前線を誰かに任せてその間に後方から殲滅する魔道士隊に近いと思う。私が最初に斬り捨てた若者達も魔法は中々だったが身を守る術が幼稚すぎたからこそ、一方的に斬られたのだと思う。」

ルークの言葉を、楓はそれをきよとんとして聞いていた。今まで、強力な炎術が使えるれば最強と思っていたからこそであったが・・

「そしたら、私もルークに魔法つてのと体術を教えてもらえれば強くなれる?」

我ながらいいアイデアだと思い、ルークを見るが

「どうでしょうね?女性が力を振るうのは男としては守りがいが無くなると言っか・・・」

ひさしぶりにルークが歯切れの悪い言葉と影のある顔で言ってくる。

「それに、楓。力を求めて力を入れるという事はそれだけその力に対して責任を負わないと行けないのですよ?」

楓はルークが何を言ってるのか分からないといった表情で聞いてくる。

「責任ってどういう事?」

ルークはそれに対して溜息を困ったようにして説明を始める。

「力を手にすれば、必ずその力を使いたくなります。神風の若者達はその典型的な例でしょう。人より優れてるから自分は特別だと思いいその力を見せ付ける為だけに自分の欲望を満たす為だけに力を振りかざす。そういう事をしないように自制する心そして弱きものを守る為に力を振るう事ですね。」

「楓、私の言ってる事は誰しも力を持ってしまふ過程で見失ってしまふ心なのです。だからこそ力を持つ者にとつてもっとも必要な事なんですよ。楓はなんで力を欲しているのですか?力を何に使いたいのですか?その答えを自分自身で見つけ出す事が出来たら教えて



「この魔物は？」

「ええ、姿を現してから（門）ゲートが閉じてから消滅してます。」

「最近では日本各地で発生しておりまして、頻繁になっています。神凧家と他の術者にも依頼をしているのですが、何分多く困っています。」

「ちなみにいつ頃からなんですか？」

「そうですね、去年の夏ごろからでしょうか？それまでは確認されていません。」

霧香が答えてくるが

「そうですね、しばらくは陰陽連にも依頼をしておいたほうがいいでしょうね。」

その夏雅の言葉に霧香も相槌を打つ。

「さて、そろそろ遅いので一度帰ります。また進展がありましたら呼んでください。そうでした、霧香さん、電話で頼んでおいた雪という人について何か分かった事がありますか？」

「いえ、だめですね。名前と特徴だけではいかににも。それに何十万もの武装してる兵士を一人で倒せるそんな術者がいたらこっちでもうリストアップして力を貸してもらっていますよ。」

霧香が真面目な顔をして答えてくる。夏雅もそれを見てやはりかと少しがっかりした。警視庁と言うだけあって人調べのデータの

「ベースは膨大だ。それを使っても見つからず神風家も知らないとなるとどうにも出来ない。やはり和麻殿が帰ってくるのを待って聞いた方が早いなと考えを切り替えた。」

「それでは失礼します。」

部屋から、瑞穂と夏雅が出ていきしばらくすると一人の職員が入ってきた。

倉橋 和泉（くらはし いずみ）霧香の片腕であるが、

「霧香さん、分かりましたよ。どうやら長野で起きた異界への召還ゲートですがどうやらアーカム財団が関わってるようです。」

「アーカムが？超常現象にはほとんど関与してこないあの財団が何のために？」

「これを見てください、米軍の衛星が長野で起きた異界の召還ゲート消失の際に偶然取った衛星写真です。」

そこには黒い腰まである髪をした二人の女性が映っていた。近くには白塗りのレガシィがある。

「おそらく、彼らが何らかの事を知ってると思います。」

「なるほどね。でもここまで情報が漏洩しなかったという事はアーカムの情報でも機密にされていたってことかしらね？倉橋！早急にこの二人を探し出して。車の標識を道路に設置されてるカメラから読み取ればすぐに足はつくと思うわ。あれだけの特S級クラスの危険地区を二人だけで消し去る事が出来るなら余程の術者かもしれ



ないからね」

そう霧香が命令をすると倉橋は部屋から出て言った。

## 早朝の修練と力の代償

神凧家の親族会議の翌日の朝、結局群馬までの往復という事もあり、茨城の邸宅に戻ってきたのは深夜の為もあり、すぐに床にルークと楓はついていた。

四条家の朝は、いつも早い。

今日は楓は昨日の疲れもあり起きれないのか寝ているようだったが、  
・  
ルークとしては早朝の訓練をしていた。

肉体の魔力の器に精霊を取り込み、それを魔力に変換。ロザリオにしてある魔剣グラムへ魔力を流し柄から剣先まで2mの長剣へ具現化させ右手に持つ。それと同時に魔法による防御機構を自動展開させる鎧を装備する。

鎧・剣・防御機構ともに魔剣グラムが持つ特性であり、代々スターレット家に受け継がれてる物なのであるが、扱えた者はスターレット家が発祥して3000年間ルークと初代のみである。

ルークは右手にもってる剣へ、魔力を流す。それにより剣の特殊効果である高震動が発生し知覚できない音を発生させる。それを発動させたまま、ルークは剣の型の修練を行っていた。

それを母屋から見ていた夏雅はルークが昨日、神凧家の最強の炎術師敵馬を倒したと聞いて、驚いていたが修練を見ていて、納得していた。

何故ならば、どの術者にも拠るものも自分の身を守るといふ接近戦をもっとも苦手をしてるからだ。だから懐に入り込まれると弱い。それでもある程度の術者になればオートでその術者が得意とする属性の防御が働くわけなのだが、ルークが先ほどから持つてる剣はそんな防御など意に介さないほどの力を秘めているのは精霊を通じて分かる。

中・遠距離攻撃ならば術者が有利だろうが、近距離となってしまうとあのコントラクターですらルークに勝てるかどうか・・・

そこまで夏雅が考えていた所でルークの修練は終わったようで、自分が寝ていた離れへ戻っていく。

「ルーク殿に最近発生してる件をお願いしてみるか。楓もサポートをしようと言っただけでいいければいい実戦経験をつめるだろう。」

実際のところ、夏雅は神凧家の術者の力量については大事な一人娘をつけて実戦を積ませられるほど安心できる者など敵馬くらいしか考えていなかった。他の術者に限っては突発的な事から自分の身すら守れる力があるとは思っていないからだ。それに敵馬殿に聞いた話によると治癒術も使うという・・・

魔法という不可解な物も扱う事が出来、その力は敵馬殿に匹敵すると言っていた。

これ以上適任はいないからこそ、ルークにつけようと考えているのだが・・・

「今日は、ルーク殿へ楓の成長を含めてこれからの家庭教師でもお願いするかな？」



困ったなと言う感じの顔をしながらルークを見る、若くは見えるが相当修羅場を潜って来ているのだろう。日本の同年代の若者より遙かに早熟している。

「実は、楓の件なのです」

「楓さんの？」

「はい、実は、神凧家の分家は本来、妖魔や妖怪・魔物と言った類を封じ、滅ぼす事を生業としてきています。それが先々代の当主の保身により優秀な術者を軒並み追放してしまった為、現在の神凧家で優秀な術者は実は5人もいないのです。だからこそ、現在分家にも優秀な術者が求められています。実は分家の四条家は力が弱い術者しか最近生まれてきていないのです。だからこそ、炎術以外の部分でそれを補えればと思っっているのですが、実戦経験も含めて、楓をルーク殿に鍛えてもらいたいです。いざと言う時に自分の身を守るくらいに、お願いできませんか？」

ルークとしては、身寄りが無い以上、お世話を受けてる為、無碍にも出来ない。だが実戦といえ、生死に関する。だからこそ、ルークは即答を控えているのだが・

「実戦を抜きにした、修練ならばいいですよ？まだ、楓さんは実戦は早いと思いますので」

「分かりました、必要な物がありませんでしたら言ってください」

夏雅としても大事な娘をいきなり実戦に出す気は無い為、理解はしていたしその修練と言うのも興味が沸いていた。この世界とは違う

異世界の修練というのはどういふものかと・・・

ルークとしては、本当は楓のような女性が力を持つ事は本当は良しとしていなかった。

力という物は強い力を持てば持つほど、自制する心と比例し重荷を背負う事になるからだ・ルークが数日滞在して思った日本という国は本当に平和な国というイメージだ。力の無い者でも最低源の生活・安全が保障されている。だからこそ、力を手に入れた者に課せられるモノは大きい。

本当は夏雅に頼まれなければどんな答えを楓が導き出しても教える気はなかった。

「自分の生まれ持った宿命からは逃げられないと言う事が」

ルークは夏雅たちと別れてから廊下で離れに向ってる間、一言呟いていた。

## 日光東照宮

ルーク達が神凧家の親族会議へ出席してる頃まで時間は上る

アーカム財団日本支部第1会議室

一人の研究員と剣山副所長、御神苗 優がそこにはいた。

「それで剣山さん、見せたいものってのはなんなんだ？」

「うむ、御神苗くんこれを見てくれ。」

モニター上で次々と衛星写真が切り替わっていく。

「まだ詳しくは確認出来ていないが研究班の考えだと『リバーズバベル』の可能性が高いという事だ」

「日本にリバーズバベルだって？なんでそんな物がここにあるんだ？」

「東の果てにはいろいろな物が流れ着くものなんだよ、以前、君が折ったエクスカリバーのようにね」

「それに、御神苗くんおかしいと思わないかね？なぜ武士の時代があんなに長く続きさらに徳川の時代が200年以上も続いたという事を。」

「つまり、剣山さんは武士の特殊な階級の人がリバーズバベルを使い身分の確立を行ったと考えてるんだな？」

「そうだ、そして日光東照宮という隠れ蓑を作り一般人が入れないようにリバースバベルを隠した。人心をいつでも掌握できるように、それでも長い時間は恐らく発動方法を忘却させてしまいそれにより徳川幕府は崩壊。そして形だけの存在として日光東照宮があるのだらう」

「でも、それだったらとつくの昔に明治政府とかが見つけてるんじゃないのか？明治政府が江戸城を無血開城したとき、江戸幕府が溜めていた財政資金が見つからないという事で江戸幕府の縁の場所は徹底的に探されたはずだ」

御神苗がそう言うのと剣山は一枚のホログラムを出してきた。

「御神苗くん、戦争という物はお金が掛かるといのは理解してるね？」

「ああ、戦争の物資を売りつけて復興した国もあるしな、利益を上げる為だけに意図的に戦争をするアメリカ合衆国もあるくらいだしな」

「うむ、つまり戦争というのはお金がかかるのだよ、だが明治政府はそれほどの資金を持っていったわけではない。それにも関わらず日露戦争、軍の近代化などそれほどのお金をどこから持ってきたと思う？」

「まさか・・・」

「そう、江戸城を無血開城したときに資金は存在していたのだよ。だが、諸外国を相手に対等に付き合うためには自国を守る軍備が最



優先だ。だがそれをするほどのお金は明治政府には無く、無理矢理税金を市民から奪ってしまつては市民からの心象も悪くなる。そこで考えたのが無血開城時に存在した現在価値にすると1兆円近い幕府の御用金だ。そして御用金を無かつた事にしそれで軍備を増長させた。」

「当時の、資金が足りない明治政府だと本来ならば軍の強化など出来なかつただろう、それが出来たのは幕府の御用金をひそかに流用していたからだ。そして海外へ眼を向けて政策を行つていた為、各地の徳川の縁の散策など大した物ではなかつた。だから発見されなかつたのだろう。」

「でも、剣山さんさういうと今の徳川幕府直系の子孫とか残つてるんだろ？そいつらは何か知らなかつたのか？」

「うむ、長いときは記憶を風化させていくからな、おそらく初代から数代当たりで途切れてしまつたのだろう。」

「次にだ、これを見てくれ。リバースバベルがあるとされる日光東照宮にて去年の7月12日磁場が確認された後、次々と日本各地で磁場が確認されている。」

「警視庁資料対策室も動いてるようだが、あそこの連中では対策は出来ないだろうな。モニターから見た限り磁場の消失と共に現れた魔物はすぐに消えている。恐らく異界からのゲートが閉じる為召還されても繋がりが絶たれて存在を維持できないと推測している。だがここ数ヶ月、日本の龍脈レイラインポイントにて多くの異常磁場が発生しているんだ。それに伴い富士山一帯付近もおかしな状況に陥っている。」

ガタツと御神苗が椅子の音を鳴らして立ち上がる。

「つまり、その異常磁場に誘発されて富士山が噴火するかも知れないって事か？」

「まだ確証は得られていないが、アーカム考古学研究所のコンピューター解析によると1週間以内にピークに達する可能性が高いと示唆されている。だからこそ、今回は日光東照宮にあるリバースバベルの封印もしくは破壊を君に任せたい。」

「はぁー仕方ないな。わかったよ。なるべく早くの方がいいんだろ？明日にはいけるように手配しておいてくれ」

「わかった。」

そう剣山が返すと御神苗は会議室から出ていった。

## 嵐の前の

現在、ルークと楓は敵馬に連れられて、栃木県へ向っていた。

今日の早朝、ルークが楓の家庭教師？を夏雅から受けたあと、宗家より昔から親交関係が深い宇都宮市に本拠地を構える枝流家宗家より助力の要請があり、話を聞く限り神凧家だけでは対処は不可能と思い、ルークへの助力を四条家へ頼んだのだが・・・助力を受ける代償が楓を同席する事であった。

楓のような生半可な炎術師など足手まといにしか思っていない敵馬としてはしぶい顔をしてるわけであるが・・・

「それで敵馬殿、実際には今向つてるところはどのような状態になつてるのですか？」

「ああ、これを見てほしい。」

敵馬は数枚の写真を出してきた。

「デーモン悪魔ですか・・・また厄介ですね」

ルークは写真を見ながら言う。楓は写真を見てもピンと来ない。

「ルーク、悪魔ってどういう事？」

「つまりですね、物理的攻撃が効かないんですよ、精神を流せる銀の武器か浄化をもつ精神に直接作用させる魔法でないとダメージが与えられないんです。」

「ですが、今回は神凧家の方は浄化の炎を使えるという事で、  
でそれほど問題はないと思いますが、基本精神生命体である、悪魔  
が実体化してる方が問題なんですよ」

そこまでルークが言うと、蔵馬も続く

「つまりだな、四条。今回はその悪魔が発生してる原因も調査しな  
いと行けないという事だ。そして場合によってはそれを引き起して  
る原因を浄化または破壊しないとイケない。いま支流家の宗家の術  
者が総出で当たってるがすでに死者が多数出てるらしい。中には  
高位の純魔族も含まれてるといふ話もある。今回だけは私でも、四  
条殿を守れないかも知れない。」

純魔族という言葉聞き、ルークは顔色を変えた。

「蔵馬殿。純魔族もいるのですか？それは古代龍クラスですよ？い  
くら私でも時間稼ぎくらいしか・・・」

「ああ、だからルーク殿には前衛として時間稼ぎをしてもらいその  
間に私の神炎で倒したいと考えている。四条殿は出来るだけ邪魔を  
しないように立ち回ってほしい。」

「はい」

楓としては今回の戦いの内容を聞けば聞くほど、初めての初陣とい  
う事もあり、普段は炎術の真似事をしていたが自信を無くしていっ  
た。

「この分なら今日の夕方過ぎには日光に入れそうだな・・・」

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

ルークたちが日光へ向ってる時期

東照宮の地下数百メートル

2対の白い翼を生やした神官服を来たモノが巨大な四方100mはある円球の中心にある足場で交信をしていた。

「はい、首尾は上々です。現在は、この国を守護してる風術師風情が攻めてきておりますが、我らが世界より呼び出した尖兵と交戦中です。たいした力も持たない者達ですがその血肉は世界中で走っている悪魔陣デビルラインの良い生贄となる事でしょう。」

「あとは、このガブリエルにお任せください。」

「.....」

「それも問題ありません。我らが作り出した人形は数多の異界への召還の良い生贄になっておりそのため、時空は安定せずこうしてやと我らが悲願が達成されようとしているのですから.....」

そういうと、ガブリエルは2対の翼を広げて楽しそうに笑っていた。

その頃、横田基地から飛び立ったA H - 6 4 D アパッチに御神苗  
優は乗っていた。剣山副所長からもらった書類によると、どうやらリバースバベルで戦ったような化け物が湧いてるらしい。そのため、メイゼル博士より新型のオリハルコンを極度に圧縮した精神感應ナイフと弾丸と拳銃を至急されていた。

弾丸を発射する際にグリップにはサイコグロブのようなシステムが組み込まれており、それにより悪魔や霊にダメージを与える弾を撃てるようになった。弾丸の光景がグロツグという銃の種類もあり9 m m弾丸というのが痛い。弾丸とナイフをチェック・それと新型のA M Sを確認していた。

## ルーク編の人物編集 2

ルーク・フォン・スターレット

ストラウス砦攻防により団長が殉職した為、宮廷魔法騎士団隊長から団長へ昇進

年齢 21歳

身長 189cm

容姿 蒼眼に金髪の長髪、筋肉質

趣味 体を鍛える事

武器 魔剣グラム 魔力を流す事により高周波振動を発生させ物質を切り裂く。ミミールの世界が作られた時の遺物でありロストテクノロジの産物。一定の魔力を流す事により縮小する事も巨大化させる事も可能。

戦闘力は、魔法騎士団一個師団を一人で殲滅でき、魔法に至っては治癒・地・水・風・炎・肉体増強などミミールの世界に存在している魔法をほぼコンプリートしている。

しじょう  
かえで  
四条 楓

炎術師、神凧家宗家の分家 四条家の長女

年齢 18歳

身長 166cm

容姿 腰まである赤髪ロング 3サイズは秘密 体重 秘密

趣味 可愛いものを集める事 料理 炎を操る練習

炎を操る炎術師の家系に生まれたが、祖母・父ともに大した力を持っていなかったため貧乏。

楓も例外にもれなく分家の中ではもっとも炎の力が弱い、神凧家宗家の神凧 綾乃に憧れており目標にがんばっている。

しじょうなつまさ  
四条夏雅

炎術師、神凧家宗家の分家 四条家の当主

年齢 51歳

身長 181cm

容姿 赤髪 短髪 黒眼

趣味 盆栽弄り

しじょうみずほ  
四条瑞穂

炎術師、神凧家宗家の分家 四条家の妻

年齢 47歳

容姿 黒髪 黒眼

夏雅と瑞穂は恋愛結婚のため、瑞穂は一般人。そのため異能は一切ない

趣味 料理 バーゲンセールの買い物

ガブリエル

2対の白い翼を持つ。白い十字架の印のついている緑色の神官服をきている。金髪の白肌

原作キャラ

八神 和麻 (やがみ かずま)

風の精霊王と契約した世界唯一の契約者コントラクターであり、世界最強の風術師。現在は綾乃と結婚したばかりであり、海外にハネムーン中

八神 綾乃 (やがみ あやの) 旧姓は神凧

次期当主であったが八神 和麻 の弟の神凧 煉 (かんなぎ れ



ん)に当主の座と一族の宝剣・炎雷えんらい覇を譲渡。

現在は、和麻のサポートに廻っている。

炎を操る能力は、精霊王と契約せずとも神凧家では巖馬に匹敵する。  
神炎、プロミネンス紅炎を使うことができる。

現在は海外へハネムーン中

### 《神凧一族・宗家》

神凧 重悟 (かななぎ じゅうご)

元・神凧一族宗主で綾乃の父親。神凧一族最強の術者だが、事故により片足を失ってから一線を退いている。神炎「紫炎」の使い手で、神凧史上最強と評された。

神凧 巖馬 (かななぎ げんま)

和麻・煉の父親にして現役では神凧一族最強の術者。宗主・重悟とはいとこにあたる。神炎使いの一人であり、「蒼炎」と呼ばれる蒼い霊気で染められた炎を操る。

神凧 煉 (かななぎ れん) 現在は17歳

和麻とは違い、炎術の才能に恵まれ、高校生(初登場時は小学生)ながらに浄化の炎の最高位・>黄金の炎くを操る炎術師。現在は、神炎「黄炎」の使い手。

### 《警視庁特殊資料整理室》

警察によって妖魔に対抗するために結成された退魔専門組織。様々な異能を操る人間たちによって構成されているが、殆どが妖魔との戦闘に向かない能力のため、有名無実の見本として扱われている。

橘 霧香 (たちばな きりか)

日本唯一の公営退魔組織「特殊資料整理室」の室長をつとめ、階級

は警視。陰陽道の名門・篁一族たかむらの分家・橘家の陰陽師。本家を凌ぐ実力の持ち主であったために疎まれ、更に他流の術を節操なく取り込んでいたため、宗家の老人達からも反感を買っていた。結果、特殊資料整理室の室長に就任という名目で追い払われてしまった。和泉もまた、橘の主流から外れていたため、霧香の巻き添えで整理室に飛ばされた。

倉橋 和泉（くらはし いずみ）

霧香と同じく橘の分家出の陰陽師。階級は巡查部長。きつい感じの美女。術者としては一流で、霧香の信頼も篤い。

石動 大樹（いするぎ だいき）

術者の家系の出ではなく、潜在的に異能を秘めていた青年。致死レベルの外的要因がふりかかるとその不幸のベクトルが完全に逆転し、異常な程の強運でそれを回避させる。災厄へと至る奇跡ミラクル・イン・ディザスターという能力を持ち、さらにその危険が確率操作で対処できる限界を超えるとその要因を問答無用で異次元の彼方に追いやってしまうという凄まじい能力。悪魔喰らい（デモン・イーター）を発動する。

## 《アーカム財団関係者》

御神苗優おみなえ ゆう

南極の遺跡の戦闘から5年経過 アーカム財団S級エージェント・スプリガンスプリガンの一人。

超古代文明の遺物を保護または破壊するという任務を帯びる。極めて外向的、明朗な性格

体術・銃火器の取り扱い・サバイバル技術と高い能力を誇る

今作では、大気の震動を肌で確かめる体術を会得してる為、（精神感応金属オリハルコンの特性を最大限に利用し脳波により力場を発生それにより状況によっては30倍以上の力を出す事が出来るリストバンドを採用。

武器は、硬度を高めて精製されたオリハルコン製のナイフはモース硬度30を誇る。ナイフには付加機能が搭載されているが一発のみ精神感応金属オリハルコン製のグロツグカスタムとオリハルコンと銀を合成した弾丸500発

## メイゼル

アーカムの科学者で、オリハルコン研究の第一人者。優の装備するA・M スーツや、オリハルコンナイフを製造した。助手に女性の科学者、マーガレットがいる。ティア・フラットとも長い付き合い。

## 剣山 充けんざん みつる

職業 アーカム研究所日本支部副所長

身長 180cm

容姿 典型的な日本人 痩せ型

趣味 とくになし

## 剣山 薫けんざん かおる

職業 私立探偵事務所所長 充の娘

身長 168cm

年齢 24歳

容姿 黒髪黒眼 髪はセミロング

## 山本

アーカム日本支部の所長で、スプリガンに直接仕事の指示を出す。温厚かつ実直な人柄で優やジャンたちに信頼されている。元スプリ

ガン

茨城県龍ヶ崎市

ご存知の通り日本にある都道府県

## 戦いの場

日光東照宮

歴史は古く、源頼朝の時代まで遡ることが出来る。

現在、日光は封鎖されてる状態になっており、一般市民はテトリス  
トの予告があったとして非難させられている。

「くそ、どうなってるんだ。次から次へと沸いてきて切りがない。」

「当主どうしますか？このままでは事態を沈静化するより全滅しか  
ねません。」

現在、当主を含め、元50人近くいた風術師はすでに10人近くま  
で減っていた。度重なる連戦と見慣れない悪魔に対して浄化の力を  
もつ術者があまりにも足りない為だ。

「わかってる。だがここ五重の塔の結界が破られれば日光東照宮  
に初代徳川家当主が掛けたとされる結界が崩れてしまう。そんな事  
になれば被害は甚大だ。なんとしても死守せねばならん。」

「ですがこのままでは？」

そのまま当主に意見しようとした男の体が空に泳ぐようにして倒れ  
る。

その後方の空間が割れるようにして一匹の巨大なカマキリのような  
物が現れる。

現れたと同時に、当主の近くにいた二人の風術師を一瞬にして下半身と上半身に分かつ。崩れ落ちたあとから血飛沫がまわりの石畳みを真っ赤に染め上げる。

突然の襲撃に混乱している枝流家の術者に対し攻撃をしかけようとするが、そこに「蒼炎」が打ち込まれ、一瞬にして巨大なカマキリが燃やし尽くされた。

「またせたな、枝流家宗家当主 夕凧殿。」

そちらを見ると見たこともない16歳くらいの赤髪の少女と金髪の長剣をもった金髪の長身の男、そして神凧家最強の炎術師たる神凧蔵馬が立っていた。

「いや、助かった。」

蔵馬が夕凧と挨拶をしている間に、ルークはすでに展開してある魔剣グラムを右手に持ちながら次々と角と翼を生やしたツキノワグマのようなモノを斬り捨てていく。

それを見ていた、夕凧はルークの殲滅速度に眼を見張っていた。今まで術者が1匹倒すのにすらかなりの精神力を削って倒していたのにあの若者は異常な速度で駆け回り倒していくからだ

「夕凧殿、あちらにいる若者がルーク・この女性が四条家の次期当主だ。」

なるほど、だが、四条家はたしか炎術にはここ数世代秀でてはいないはずだが？いまはその事を考えてる場合ではないか・まずは近くの魔物を一層すること・・・が？

先ほどまで200体近くいた魔物が蒼い炎に焼かれていた。残った魔物はルークという青年がもつ剣により切り伏せられていた。

それを見た、夕凧は苦笑していた。50名近い風術師でも対応できなかったのだ、それをたった二人で殲滅してしまうとは・・

「蔵馬殿、ここら一带は殲滅し終わったみたいですね。」

ルークが蔵馬の近くへきて言ってくる。

「そのようだな。夕凧殿、発生場所はどこかわかりますか？」

「一番最初に異変を感じたのは日光東照宮の奥社 宝塔です。」

「わかりました。ルーク殿、四条殿、奥社へ向かおう。」

蔵馬はそのまま後ろを振り返り、

「夕凧殿なるべく敵は倒しながら進む為、発生の元を断つまでこの場の死守を任せたい。」

「わかった、気をつけてください」

すでに限界近かったが、宗家当主としては弱腰を見せられない事もあり虚勢をはり送り出した。

それと同時に、大気を叩くような音が聞えてくる。

「な・・・なんだ・・・？ヘリコプターか？」

そのまま、優を乗せたAH-64D アパッチは夕凧の上空を過ぎ  
ていき家康の廟にある方に向っていく。

「でも、あれなんですかね？」

「よくは知らないが、ファイアーライター発火能力者かなんかだろ。それにしても異界  
の住人がそのまま存在してるなんて聞いてねーぞ。アーカムの情報  
部の奴らは何してるんだ？」

御神苗優はそのまま、廟近くまで来たことを確認する。

「ここでいい、地上10mくらいでヘリをホバリング状態にしてく  
れ。」

「そう操縦者に命令すると、ヘリの扉を開けてそのまま飛び出す。」

「ちょ・・・ちよっと・・・」

そのまま、優は、何事もないように地面に降り立つ。

「まじか・・・よ・・・スプリガンって皆あんな感じの人ばかりなの  
か？」

そのまま、優は廟へ向っていった。



## 入り口

奥社拝殿の入り口の階段付近まで優が走っていくと、悪魔が見え、射程に入ったと同時にグロツグカスタムを構え次々と悪魔に銃弾を打ち込んでいく。

それに伴い次々と悪魔が霧のように消えていく。そのまま十数段ある階段を上り屋根のある門を抜けると多数の悪魔が闊歩していた。

その中を、走りながら近くに来た魔物へ銃弾を撃ち続け奥へ向う。しばらく進むと石で作られた囲いの中に安置されてる廟が見えてきた。

それと同時に右手につけてあるリストバンドの投影画面にここが入り口であることを知らせる表示が映し出される。

「まじか？家康の廟の真下が入り口ってどうなんだよ？」

そっぴいなながらもTNT火薬を設置。雷管を埋め込み離れる。

「鬼が出るか蛇が出るか・・・」

そっぴいなながら手元の起爆装置を作動させる。同時に廟と土台の石が吹き飛び煙が周囲に巻き起こった。

よし、煙が晴れてきて視界がある程度確認出来るようになったな。いくか・・・

そのまま、優は廟へ走り出すが

「くっ」

大気の震動を感じ、とっさに屈みながら右へ回転しながら避ける。其れと同時に右手で腰に差してあるオリハルコン製のダガーを抜き取り回転をしたまま先ほどの気配の位置へ切りつける。たしかな手ごたえと共に悪魔が一匹倒れてから霧になって消えていく。

「さてと・・・本当の入り口があるんだな・・・」

優が見た箇所には地下へ通じる横1m縦1m50cm程空間に階段が続いていた。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

その頃、蔽馬とルークと楓は空間から現れては消えて攻撃をしてくる純魔族に苦戦をしていた。

数は約100・・・

はああああ、気合を入れて切り出したルークが繰り出す魔剣グラムは魔族を切り捨てていくが、致命傷を中々与える事が出来ない。蔽馬も攻撃をしているが突然現れて消える魔族に苦戦している。さらに楓を守りながら戦っている為、中々先に進めない。

「蔽馬殿切がないですね。」

「そうだな」

敵馬も相槌を打った途端、奥の院の方からドーンと何かを爆発させる音が聞えてくる。

「なんだ？奥社社の方からか？」

どうなってるんだ・先ほど頭上を軍事へりが通り過ぎたと思っただら銃声に今度は爆発だと？ルーク殿を先に行かせるしかないな・

「ルーク殿、ここは私と四条に任せて先に行ってくれ」

敵馬はルークに対して今は先に進むほうが肝心と思い先へ進むように言う、ルークもそれには同意したが楓のことが心配でもあった。

「楓、これを持っていてくれ。以前、知り合いの女性からもらったお守りだ。」

え？いきなり戦場で話しかけられた楓は混乱してしまいが、そのまま頭から紐と通されて身に付けさせられてしまう。

「あ、ありがとう。ルーク」

顔を真っ赤にして御礼を楓は言うが、それを聞かずにルークは廟へ向い走って行った。

それを見た敵馬は楓を見て、

「四条楓！私が神炎を出す数秒の間、防御は任せたぞ？」

「え？」

まさか、自分も戦闘に参加するとは思っていない楓は焦ってしまっ  
が、

「楓！お前は何のために来たんだ？ここは戦う場所だ。分家の意地  
を見せて数秒間死守してみせろ」

そういうと、敵馬は精神を極限まで高めていく。

「わかりました。」

楓は、敵馬とルークに答えようと意志と明確にしていく。炎術師の  
基本は明確なイメージと意思これが一番必要だ。普段から、学んで  
きた環境と違い今は一瞬のミスが死を招く。

倒さなくてもいい、攻撃を防御、うつん逸らすだけでも！！！！

楓が生まれてからもっとも長い数秒間の攻防が始まった。

しばらく走り続けると破壊されたあとがある石が散らばってる所に  
ルークはついた。

「なんだ？地面に穴が開いて階段が下に続いている？しかも誰かが通  
った形跡がある・・・」

ルークはそのまま階段を下りて行った。

## 数秒の攻防

敵馬に数秒とはいえ、戦いの場の時間稼ぎを任された楓は、気合を入れて周りを見渡していた。

今まで、炎術師の家系の神凧家の分家の一 四条家の次期当主とは言え、炎を扱う力は四条家という事だけあって弱かった。

過去、大災害があったベルアル召還を抑えた宗家次期当主だった神凧綾乃の事に関して髪の色が同じだった事もあり憧れと羨望が多々あった。

それに伴い、力を渴望していた。力さえあれば！

だが、以前群馬の神凧家の帰りにルークに言われた力を持てばそれに伴い責任が生じるという事。

本当に理解はしていなかった。

自分が如何に甘えていたのかは自分の周りにいる純魔族という存在を見ていて理解した。

知覚すら許さず空間を渡り攻撃をしてくる。

こんな化け物を数秒と言えど、神炎を使える精神状態まで敵馬が持つていくまで自分一人で支え切れるのかと・・

明らかに5重の塔にいた魔物より遙かに強い力をもっているのは楓でもわかる。

だからこそ、自分自身に課せられた数秒と言う時間稼ぎをとても重く受けとめていた。

もし、ここで自分自身が時間稼ぎを失敗し敵馬が敗れることがあればそれは日光東照宮にかけられている結界が崩れる事を意味する。おそらく夕凧殿ではこの魔族を相手に支え切れないのはわかる。

そして結界が万一壊れるような事になれば、大勢の一般市民が犠牲になる。

自分自身の命だけではなく、多くの万を越す命が危険に晒される。

そこまで考えて、楓は自分自身は震えてるのに気がついた。

ルークや蔽馬ですら手こずる相手に自分自身程度がどこまでやれるのか？

これが、力を手にした際に自分が倒れた時に受ける責任・・・？

怖い・・・

怖い・・・

怖い・・・

なんで私がこんな事をしないといけないの？

なんで私がこんな状態になってるの？

嫌だ・・・

逃げ出したい・・・

こんなのは・・・

そこまで考えた所でルークから受け取った胸に掛かっているお守りが  
視界に入った。

それと同時に考えが脳裏に浮かんでくる。

私は何を守りたいの？

何がしたいの？

大事な人を守りたい？

違う、私は自分の思いを貫く為に力がほしい!!!!

だから私は、こんな所で立ち止まってるわけにはいかないのよ!

それと、同時に楓の視界が急に開けて自身の体内の精霊の力が活性化していくを感じる。

楓がこの間に考えた時間は僅かに数秒だったが、

「ふん、吹っ切れたか・・・」

蔵馬がそれを言うと同時に精神を高めていく。

蔵馬が精神集中の状態に移行したのを確認し、純魔族が攻撃をし始めてくる。

楓は父親から習っていたが使えなかった浄化の炎を周囲に展開する。一時的とは言え、浄化の炎を扱い方には膨大な精神力と熟練した操作技術・膨大な精霊の力が必要になるが・・・その炎は円陣のように蔵馬と楓を囲い一種の結界のようになっていく。

わずか数秒で消えてしまおうが、そこから現れたのは蒼炎を纏った蔵馬であった。

「四条楓良くやったな」



楓の方へ敵馬は視線を移すと力尽きたのか楓は石畳みの上に座り込んでいた。楓は敵馬の時間稼ぎを無事できた事と宗家最強の炎術師に認められた事に感慨していた。

敵馬は純魔族へ一瞥すると、高さ100mまで届く炎が辺り一面を対象以外を燃やさない神炎「蒼炎」が純魔族を焼き尽くした。

「大丈夫か？」

そう、声をかけて楓を立たせようとするが空間が割れて敵馬を後ろから攻撃しようと生き残った純魔族が攻撃をしてきた。神炎により全てを倒していたと思っていた敵馬にとっては不意打ちの形になってしまう。

そして、そのまま敵馬の背を切りつけようとするが、風がその魔族を切り捨てた。

「おやじ！やっぱもう歳なんじゃないのか？」

赤いワンピースを着た赤い髪をした女性と青い服をきた黒髪の男性が立っていた、魔物を風と炎で散歩しますよという気軽さで倒しながら此方へ近づいてくる。

## 地底湖の祭壇

時間は少し遡る。

優は徳川家康の廟の下に隠された通路の階段を降りていくと、洞窟に出た。

「これってなんか、手を入れたというよりは自然に出来た鍾乳洞を利用した感じだな・・・」

3分ほど、進んでいくと、いきなり視界が開けた。

「なんだこれ？」

そこには100mほどの球体の空間に巨大な地底湖が広がっており、中央の浮島には祭壇がある。浮島までは赤い漆喰が塗られた端が50mほど続いて掛かっていた。

「とりあえず行ってみるか」

鍾乳洞と浮島のを掛ける橋の中央部分で一人の身長180cmくらいの金髪金眼の髪が肩まである細面の男が突然姿を現した。

「つつっ！」

気配を感じなかった。何だこいつ？

「誰ですか？あなたは？人間ですか？」

「何を言ってるんだ？おま・・・え？」

優は良く見るとその男の背中から2対の翼を生やしているのが確認できた。ちっ、なんなんだよ。今度の敵は神様なんかかよ・・・

「ああ、俺はスプリガンだ！お前は一体何者で何をしているんだ？」

「ふむ、私はガブリエルです。人間風に言えば天使ですね。」

「なるほどな、それでこんな危険な物をそのガブリエルさんは何に使うおつとしてるんだ？」

「ほう。この装置の意味が人間の中で理解してる者がいようとは・・・」

「そうすると、スプリガンくん。君はここの装置を止めに来たのかね？」

「ああ、封印もしくは破壊だ。あと表に出てる化け物はお前が出してるんだな？」

優の言葉を聞くとしばらくガブリエルは思索してから

「そこまで分かっているとは中々聡明ですね・・・」

「お前は何をやるおつとしてるんだ？どうしてこんな真似をするんだ？」

「いいでしょう、冥途の土産に教えてあげましょう。この装置を使

い、ある御方を召還するためですよ。今はその練習段階にしか過ぎません。その御方が光臨されれば世界は新しく組み直されます。私からはこのくらいしか言えませんがね。」

「ああ、それだけで十分だ。つまりお前は世界を滅ぼすって事を考えてるんだな。そして新しい自分達に都合のいい秩序の世界を作ることか。」

「おや？そこまでわかってしまうとは・・・困りましたね」

そう言うと、ガブリエルは手を振るってきた。優は咄嗟に後方へ引く、それと同時に橋が不可視な力で数トンの岩を落とされたように粉碎されていく。

「ちっ、超能力か？」

そういいながらも、グロツグカスタムを右手に持ち避けながらガブリエルに向けて打ち込む。当たると思った瞬間、その姿が消える。大気の震動を地肌を通じて感じ、振り向き様にオリハルコン製のナイフを何もいない空間に振るう。

ザシュ・・・と手ごたえと共に鮮血が舞い散る。

「なんだと・・・？」

驚愕の意志を孕んだ声が聞えてくる。

振り向いた先には、ガブリエルが在て体に纏っていた神官服の胸元が斬れて血がその下から垂れていた。

「ばかな？時間凍結後のわずかな時間でこちらを補足してくるだど？」

「おのれ！人間風情がああああ」

そのまま、動揺してる間に打ち込まれたオリハルコンと銀の特性をあわせた精神感応弾を時間凍結して避け、優から距離をとった。

「私が傷を負うとは1万年ぶりだぞ、スプリガン！！！」

そういうと同時にガブリエルは2対の翼を広げて空に浮かぶ。地底湖の泉を手で操り高圧力をかけて打ち出してくる。それを優は避け続ける。

「何故だ？何故当たらない？」

どんどん優が近づいていき、近距離からナイフの柄で顔を殴りつけその衝撃で地面で叩きつける。

「グハツ、ガハツ・・・バカな・・・人間の分際でこんなバカな・・・」

ゴリツ・・・ガブリエルの額に銃口をつきつける。

「ガブリエルさんとやら、あなたには聞きたい事が山ほどある。大人しく答えてもらおうか？」

「誰かいるのか？」

そう言い広場に入ってきたのは金髪の長身の西洋風の甲冑と剣を装備した男だった。

## 地底湖の祭壇2

優の視線がルークに向いた際に、ガブリエルは時間凍結を使い優の銃口から斜線上から消えた。

優は銃口の先に存在してた気配が一瞬で消えたことに焦り、周りを見渡すと泉の中央にある島にガブリエルが立っていた。

「よくも、私を散々、家畜の分際で邪魔をしてくれたモノだ、私の本当の力を見てから死ね！」

そういうと空間の裂け目からガブリエルに黒い粒子が注ぎ込まれていく。ガブリエルの翼の色が白が黒に変色した2対の翼になる。

「スプリガンとその男、そして地上で私が召還した尖兵を倒した者達を纏めて始末してくれる！」

2対の黒い翼を広げ中に舞う。ガブリエルが操る水が超圧縮されマシガンのようにルークと優に打ち込まれる。

「な！」

優はそのまま、避け続けるが・

「なんなんだ、一体？」

ルークは疑問に思うが、水系の魔法で攻撃をされているのは分かった。体内の器を介し精霊を魔力に変換。

『古ふるき力ちから 古いにしへの契約けいやくの名なの元もとに 今いま 我われを守る 盾たてとならん』

ルークの周辺に魔力防御壁が展開される。それに圧縮された水が次々と当たり跳ね返される。

それを見ていた、優はその若者が気になっていた。

「あなた、何しにここまで来たんだ？」

ルークも気になっていたが、話の口実を振ってくれたのはいい。だが正直に話してしまっているのか？ここまで大げさになっている以上もう関係ないか・・・と思い

「私の名前はルークと言う。ここに現れた魔物を退治に神凧家に呼ばれた者だ。」

「神凧？炎術師の関係者か。つまりさつきドンパチやったのはあなた達だったんだな？」

「そうだ、それでこれはどういう事か教えてもらえないか？」

「あそこに見える祭壇があるよな？あの祭壇が魔物の召還ゲートを作り出してる原因らしい。」

「つまりあの祭壇を破壊すれば良いというわけか」

「それと俺はアーカム財団のスプリガン、御神苗優おみなえ ゆうだ。御神苗おみなえ ゆうとでも呼んでくれ」



「分かった、御神苗殿、あとで詳しい話を交わすとして今はあいつを倒す事に集中しよう。私がやつの際をつく、その間に接近してくれ」

「ああ、わかった。」

御神苗としてもマシンガンの速度で打ち出される圧縮された水の塊は距離があるからこそ、避け続けることが出来る。着弾までのタイムラグがあるからだ。近接になればそれだけ避けるのが難しくなる。だからこそ、ルークの提案にはすぐに乗った。ルークとしては、優の回避能力を見てる限り体術に関しては自分より数段上なのは間違いないと確信しており、そのため、自分が援護に廻ったに過ぎない。ルークは自分の体内の器限界まで精霊を取り組み一気に魔力を作り上げ、それを右手にもつ魔剣グラムに流していく。そして魔剣グラムの特性である高周波を発生させながら剣先をガブリエルに向けて一気に練り上げた魔力をグラムに収束させ刀身の伸ばした。

くっ・・・

そのままガブリエルは回避行動を取ろうとするが、伸びたのは剣先であり柄はルークがもっている。そのまま剣をガブリエルが回避した方向へ斬る。ガブリエルは打ち込んでいた魔法を中断し時間凍結をしてにげようとするが、魔剣グラムの特性でその能力すら切り裂かれる。仕方なく、高濃度に圧縮した水の盾で受け取める。

攻撃がやんだ間に一気に距離を詰めながら御神苗が打ち込んだ弾丸がガブリエルの右手を打ち抜き翼を弾丸が貫き、背中に数発の弾丸がめり込む。

「ぐっ、がはっ」

血を吐きながら中央の島にガブリエルが落ちる。落ちてきたガブリエルに優が右拳で殴りつけようとすることが不可視な壁をに吹飛ばされる。

ガブリエルが優を見て、ニヤリと笑い指先を優に向けると同時に周囲にある湖が波打ち高さ10m近い津波が形成されそれが小島を襲った。間一髪、優は避けていたがガブリエルと距離をとられてしまふ。

「みせてやろう、スプリガン！私の力を！！」

翼を大きく広げたガブリエルが人の可聴領域を遥かに超えた音を紡ぎだす。それに呼応するように地底湖の水が震動し始め熱を持ち始める。

それを見て、ルークが魔法を発動の詠唱を紡ぐ。

『火の源 剣に成りて 射抜け』

数本の剣の形状をした炎がガブリエルに向っていくが、すべて不可視の壁にあたり消失する。

「こいつ何をしたんだ？」

ルークは物理・魔法防御すら打ちぬく攻撃を消失されて焦る。

だが、優はもつと、焦っていた。周囲に立ちこみ始めた蒸気と熱、まさかこいつこんな狭い所で水蒸気爆発を誘発するつもりなのか？くそ、急いで退避しないとやばい（

「ルーク、こいつはやばい、一度ここから非難するぞ」

優はそうルークに言う。と鍾乳洞を走って抜けていく。すでに鍾乳洞の中も辺り一面蒸気により大気が熱せられている。

1分ほどで家康の廟から出た優とルークは5重の塔の方向へ走っていく。階段まで来たところで、地面が揺れ、後方の森が吹き飛ぶ！

その余波が近づいて・・・

「御神苗殿、こちらに来てください。」

御神苗が近くにくると同時に防御魔法を展開していく。それも魔力を最大限まで練り上げて！

『古ふるき力ちから 古いにしへの契約の名の元に 今 我を守る 盾たてとならん』

優とルークの周囲に不可視の盾が多重に展開される。

持ち堪えられるか？ルークはそう心の中で呟いた。

その瞬間、衝撃波がルークの魔法防御壁に当たり、火花と散らした。

少し、時間は遡り、

五重の塔の付近では突然現れた、2人組の男女と話をしていた。

「綾乃に和馬か。なんでこんな所に？」

「おじ様おひさしぶりです」

「いや、何。知り合いに頼まれてな・・・」

「お久しぶりです。綾乃姉さま！」

そのまま楓は綾乃に抱きつく。

「こんにちわ、楓さん」

「よう！楓、結構美人になったじゃないか」

「おやじ、さつき相手してたのって何なんだ？妖魔か何かか？」

「ああ、実はな」

巖馬が説明仕様とした所で奥の院の方で建物が空に舞い上がるのが見えた。

「和麻これって？」

「ああ、やばいな」

（なんだこの力は？ただの爆発じゃないな。風の精霊で見ても禍々しい存在しか見えないな。それに爆発の衝撃波か？近づいてくるな）

「おやじ、楓、綾乃。衝撃波が来るから俺から離れるなよ。」

和麻はそついうと竜巻を作り出し、衝撃波をやり過ごしていく。

和麻が竜巻を消したあと、周りには建物・木々が全て吹き飛び更地になった直径1km近いクレーターが出来ていた。

## 地底湖の祭壇2（後書き）

この章だけ違う書き方をしてみたのですが、一日寝てから見ると文  
章的に違和感があったので訂正しました。

ご指摘・ご要望がありましたらぜひよろしく願います。  
作者自身気がつかない事が多いと思うので、文章の書き方で悪い点  
や改正する部分がありましたらドシドシ書いてください。

### 地底湖の祭壇3

「和麻これってどうなってるのよ？」

「わからねえ、でもあいつがやった張本人だつて事は間違いなさそうだな？」

空に視線を移してる和麻を見て、巖馬・綾乃・楓が浮いてるモノを視界におさめた。

「なんですか？あれは・・・翼が生えてる・・・天使？？」

楓も混乱してるようでの的外れな事を発言している。

「いや、天使ならこんな事しないだろ」

なんだ？大気の様子がおかしい。アイツなにかしてやがるな？

「和麻、空の様子がおかしいわ。」

「なに？」

和麻は風の精霊を使い大気を制圧下に置く。まさか、これは・・・

「おやじ、綾乃。俺が時間を稼いでる間にあの浮いてる奴を倒せ！あのヤロー、元素を操ってやがる。この規模でやられると日光東照宮だけじゃなくて県クラスで被害がでちまう。時間は俺が風の精霊で稼ぐ。早くしろ！」

そういうと、和麻は「コントラクター」の力を解放し大気を操作しガブリエルの天体制御魔法を抑える。

「なんだと・・・？どこからか私の力を抑制してる者がいる・・・？」

ガブリエルが地面を見ると蒼炎と紅炎を纏った人間が近づいてくるのが見えた。

「人間風情があれほどの力を？」

ガブリエルはそこまで考えてから、日光の地下水脈の水を操り地上に噴出させそれを操る。

「なんだ？こいつは・・・」

敵馬は突然、地面から噴出した水が全長100mほどの龍に変化したの見て、驚いた。

「おじさま、こんな術見たことが？」

「ああ、どうやら、相手は普通ではないようだな・・・」

その間も次々と水龍が作られていき、数は20を超えた。

敵馬の蒼炎と綾乃の紅炎が焼き尽くしていくが、水を媒介にして作られている為、無尽蔵に補充され続け、ガブリエルに近づくことが出来ない

くそ、なんだ。あの空に浮かんでる奴は、コントラクターの力を使ってる俺と互角の力を出して、あれだけの水を操れるとか大悪魔ク



ラスか？

コントラクターの力は体に負担がかかるからな、そう長くは続かない。

しかもアイツが上空に作ってるのは液体窒素かよ……しゃれにならねーぞ

すでにガブリエルが上空に作り出してる液体窒素の量は数百トンに及んでいた。

「誰かが大気を制圧下に置いてるおかげで地上に落せないではないか……誰がこんな真似を」

ガブリエルは水龍で動きを押さえ込んで、術者以外を探していく。一人離れた位置に桁外れの力を放出してる人間が目に入った。

「アイツか……」

そういうと、ガブリエルが大気中の水素を結合し全長10m近くの氷の槍を作り上げそれを引力のままに和麻に落す。

「くそが、」

大気を制圧下に置いてる和麻は突然目の前に作られた槍に貫かれる瞬間、和馬の周りに黄金きんの炎術の円陣きんが作られ、それが向ってくる氷の槍を全て蒸発させていく。

「わるいな」

和麻がそう、礼を言った先には楓きんが黄金きんの炎を纏って立っていた。こいつ、戦闘の中で化けたな。

よし、これなら大気の制御に集中できる。

「楓！防御はお前に任せる。きちんとやれよ」

「はい！」

楓も自分の中に湧き上がってくる力に驚きながらも、やけに落ち着いて術を行使できる事に驚いていた反面、いままで僅かしか聞き取れなかった精霊の囁きが明確に聞けるようになったことに喜びを感じていた。

今までは精霊の声がほとんど聞き取れなかった。

綾乃姉さまが、精霊は相棒パートナーと言ってたけど、その意味が分からなかった。

でも今なら分かる、精霊と語り合う事ができる。

それだけで、力の制御・力の引き出し方を精霊と一緒にする事が出来る。

だから！もっと！！

同時に楓の纏う炎の色が変化していく。

綾乃とは違う、赤い炎。

それは、神炎「緋炎」

楓は「緋炎」により次々と和麻に迫る巨大は氷の塊である槍を打ち消していく。

「神炎か、そのまま踏ん張れよ。楓！」

そう言うと、和麻は上空の大気を操りガブリエルに無数の研ぎ澄まされた刃を打ち出す。

そのまま、すべての刃がガブリエルの周囲に展開されている歌衣により消滅させられていく。

「なんで攻撃が通らないんだ？あいつ何かしてやがるのか？」

和麻の操る風の力は、全てのモノの事象を斬ることが出来る。たとえ、それが光であつても・・

だが、事実、和麻の攻撃が届いていない。

それにコントラクターの力ももう長くは持たない。上空にこれだけの大量の質量をもった物質を抑えておくにはコントラクターの力が必要不可欠。おそらくもつて2分程度・・

それが過ぎれば、すでに数万トンに達する液体窒素が当たり一面に降り注ぎ、日光市だけでは無く近隣の市や町に襲いかかる。そんな事になれば大惨事は免れない。

「おやじと綾乃も、手一杯か・・このままじゃやばいな」

綾乃と巖馬の周りにはすでに百匹以上の20m以上の高さを誇る水龍が深海8000m級の圧力をかけた水を吹きかけて足止めをしていた。

「おじさま、このままじゃ！」

「ああ、わかっている」

だが、二人とも多方向から打ち出される水を防御しながら水龍を撃破していくので精一杯であった。



## 地底湖の祭壇 4

その頃、廟の近くで、ルークと優は衝撃波を受けてルークの防御魔法で耐え抜いたのは良かったが、水脈を利用した攻撃を、無造作にガブリエルが行っていた為、地盤沈下によりそのまま鍾乳洞に落ちていた。

「いてて、とりあえず生きてるか・・・おい、ルーク大丈夫か？」

「ああ、なんとかな・・・」

ルークはそう返答しながら御神苗を見ると、御神苗が上空を見て顔を真っ青にしていた。

「どうかしたのか、御神苗殿」

「ああ、空をしてみる。あれ何かやばい感じがするな、けどなんですぐに攻撃してこないんだ？」

それを聞きながら、ルークは少し思案する。あれが使えるかもしれないな

「御神苗殿、地上を映し出す事が出来ると思うが、どうしますか？」

その言葉に、優が反応する。

「そんな事が出来るのか？」

「ええ、楓殿に渡したお守りがあるので」

楓に実は渡したお守りは、フレンリアル公国の魔道士店で売ってる遠見の媒介アイテムである。それをつけてる者が見た視界がそのまま、魔法で作った物に投影されるのだが・

ルークはさっそく近くに残っていた水溜りに魔法を展開させていく。

『思い人の 身を 案じ 目は鷹に 心は水に 水は景色とならん』

同時に楓が見てる視界が水溜りに移っていく。

「マジかよ・・・なんの特撮だよ」

優が考える人のポーズではあーと溜息をついていた。

「御神苗殿、どうやらガブリエルという者には攻撃が届いていないようですね」

「ああ、そのようだな・・・でもさっきまで普通に攻撃が通ってたのに何で通らなくなったんだ？」

ルークも攻撃が通らない理由が思いつかないが、魔剣グラムならばその特性で切り裂きダメージを負わず事は可能だが、楓殿の視界から見る限りガブリエルがいるところは上空300m近い。全魔力を注ぎ込んでも拡大できる剣の長さは70m程度。どちらにせよ、地上でこのような戦いをしてる状態の場面に自分が言っても意味がないのは理解出来る。

優もその事を理解しつつ、考えていた。なんで攻撃が通らない？それまでは普通に銃弾や打撃が通っていたのに・・・  
そこで、ルークが来てから不可視の盾により攻撃が通らなくなった

事を思い出した。

「ルーク！おそらくさっきガブリエルの奴が使った装置が原因だ。あれを止めればあいつの力を抑えられるかもしれない。急いで装置まで行こう。」

優とルークは装置まで急いで向った。

- - - - -

広間にたどり着いたルークと優が見たのは地底湖の水が全て無くなつており、中央に地面より真っ直ぐに伸びている柱の上にあった祭壇だけであった。

島はすでに、先ほどの爆発の影響から綺麗に消えており橋もなくなっている為、普通には渡る手段がない。

「ルーク、風の魔法は使えるか？」

「ええ、あと一回程度ならば・・・何に使うのですか？」

「ああ、今から、中央の祭壇に向けて飛び移るから飛んだ瞬間に風の魔法で俺を押ししてくれ、でも斬らないでくれよ？押すだけいいからな」

「わかりました。」

ルークは残り少ない体内の器に精霊を通して魔力に変換していく。

「御神苗殿いつでもいいです。」

「わかった。」

優はそう言うと、左手につけてるリストバンド型のAMSを脳波より起動させる。それと同時に優の周辺に力場が発生。そのまま対岸より助走をつけて飛び出す。

うおおおおおおおおお・・・ダンッ

『風よ 旅の帆を 羽ばたかせよ』

ルークの詠唱により突風がそのまま、優を押し上げていく。

ドサツと言う音と共に優が中央祭壇に着陸する。そのまま、優は祭壇に近寄り確認すると周辺にはルーン文字が展開されており、優には読めなかった。

「くそ、わかんね」

その間にも、亀裂の入った空間から黒い粒子は空に向かって流れ出していく。

「この黒い粒子ってあのガブリエルが取り込んでいた物だよな？ということはこの破壊して止めてしまえば・・・」

優はホルスターからグロッグカスタムを抜き出して祭壇に打ち込むが火花が散るだけでまったく傷がつかない



「何で出来てるんだ？」

そついいながらも今度はオリハルコン製のナイフで祭壇を切りつけるがそれでも傷が入らない。

「くそつ、どうすればいいんだ！ハッ、そついえば博士が・・・」

優はすぐに左手にあるリストバンドのコンソールパネルをチェックしていく。

「これだ！これならいける。」

コンソールパネルにはこう表示されていた。

新型オリハルコンナイフ AMSのコードをナイフの柄に差し込む事により精神増幅の付加機能をナイフに付与、それにより対消滅エネルギーを発生させる事が可能。特性により1回のみ使用。起動1分に発動する為、すぐその場から退避する事。

優はすぐにAMSのリストバンドからコードを抜き出してオリハルコン製のナイフ柄に接続する。

そしてAMSで精神増幅をしてからナイフを祭壇の上に置いて起動させる。少しづつブレが大きくなるナイフを後ろにリストバンドで筋力を30倍近くまで増幅ダッシュでとジャンプでルークのところまで走る。

「ルーク！まだ走れるか？」

「ああ、どうしたんだ？」

「いいから、ここから離れるぞ!」

すぐに、鍾乳洞の奥へ向けて入っていく。

「そういえば、さっきここに来るまでに地盤沈下で上がれそうな所があったからそこから地上にしよう。」

「わかった」

ルークも広間の中央の祭壇でおかしな事になってる現象を見て、即答し御神苗のあとをついていった。

しばらく走ると、地上に出れる所まで来たところで、優はAMSを使いルークを抱えたまま鍾乳洞から抜けて五重塔の方へ走っていた。

祭壇では、臨界点を越えたナイフの物質が崩壊。祭壇と対消滅していき、祭壇とその広間を吹飛ばした。

## 地底湖の祭壇 5

ルークと御神苗が祭壇を破壊した直後、巖馬と綾乃が対峙していた水龍が只の水になり崩れ落ちる。

その際に発生した水は、神炎に焼かれ、蒸発していく。

それを視界に入れながらガブリエルは突然、力を失った理由を探して周りを見渡していた。

先ほど、自分が出てきた、広間から断続的に地盤沈下していくのが見える。そして、自分の方へ二人の人間が入ってくるのが見えた。

「あ、あいつらが、破壊したのか・・・」

すでにガブリエルの目は怒りの余り赤く染まっていたが、力を行使しようにも黒かった翼は白くなりつつあり、随時力が抜けていく。

「ここまでか・・・だが、私が作ったこれはもう止められまい・・・すでに上空には10万トンに近い液体窒素が作られており、力を失ったガブリエルではそれをすでに広範囲に散布する事はできない。本来ならば絨毯爆撃のように広範囲に打ち込みたかったが・・・」

ガブリエルはその場から空間を渡り消えた。



「これは死ねる……斑鳩いかるがさんあとのくらいですか？」

斑鳩と呼ばれた者があと1分くらいと合図してくる。

その時、バイクを運転していた斑鳩が上を指差してくる。上を見ると上空から何か巨大な質量が落ちてくるのが見えた。

「嘘だろ……？なんだよあれ……」

そういうと、その女性は目を閉じて再度開く。朱色の幾何学な模様が浮かび上がってくる。

それと同時に、グラフで数値で表されていく。

解析完了……液体窒素 11万3398トン

「……………」

思わず無言になってしまう。

とりあえず、丹田を通して肉体を強化していく。それと同時に左手片手一本で斑鳩に抱きつきながら存在を魔力に変換していく。

赤い粒子が集まって行き、それが右手に収束していく。

「ドラグスレイブ  
《竜波斬》」

まだ、地上から10km以上ある物体へ突き刺さり蒸発させていく。

「質量多すぎるだろ!!」

「くそ、詠唱破棄の《ドラグスレイブ竜波斬》」

4発ほど打ち込み再度確認するが、容量6万2009トン

すでに地上からの距離は1kmもない。あんなのどうしろって言うんだー

そついつてる間にも、壊滅して更地になっている所をなんとなくバイクは疾走していくが・・・バイクが進む先に何人か人が見えた。

《アルファステイグマ複写眼》で確認する

「あれが、剣山さんの言ってた炎術師か？」

.....

ルークと優が地上に出て、敵馬達と合流し力を使い果たしたのはルークは更地になった所へ腰を落とした。

敵馬達は、優を見て不信な目で見てきたが、ルークが説明をすると納得したのか落下してくる物体に集中し炎術を練り上げていく。

誰も、その間一言も発しない。

コントラクターである、和麻が力尽きて戦線離脱。そして炎術師は神炎使いとなった楓を入れてもたったの3人。その3人であれだけの10万トン近い質量をもつ液体窒素を燃やし尽くすとなればかなり難しい。だからこそ、誰も何も言わず炎術を練り上げてるわけだがすでに、その大質量は上空20kmから10kmまで高度を落としている。落下速度はかなりのモノだろう。

上空を見上げた、御神苗の視界外から赤い閃光が入ってきてそれが落下物に突き刺さる、同時に蒸発していく。たった一発で1割以上を削っている。

次々とその赤い閃光が南の方から打ち込まれる度に上空から落下してくる物質を蒸発させていく。

すでに5割近く削っているが、それでも大質量の為、脅威には変わらないが、同時に二人乗りのバイクが近づいてきて御神苗や嚴馬の当たりで止まった。

「御神苗先輩、お待ちせしました。剣山さんから増援を強制されて来ました。」

そう言い、ヘルメットを取った女性は髪が開放された為か腰まで髪の毛が垂れた。顔を見るとまだ少女という感じだろう。

御神苗以外の人間もそれを見て驚いている。楓と同じくらいの年頃の少女がこんな所に来たら驚くのは当たり前だが、すでに目の前で近づいてる大質量を消すのは最優先な神凧一族は疑問を口にする前に炎術を打つ準備を始めた。

「どのくらい時間を稼げば、全部燃やし尽くせますか？」

「ああ、10秒あればいけるな」

竜馬が少女の言葉を受けて答える。

「分かりました。」

少女は目を閉じ再度開ける。目に朱色の幾何学的な模様が浮かび上がりそれと同時に存在で大気 of 精霊を浄化し支配下におく。

攻撃ではなく、大気を使いその場に止まらせる。如何に膨大な力を行使できる少女としても大気をそのまま操り続ける事は難しいが・

・  
短時間ならばなんとか出来る。

少女の意識と同時に上空100mで巨大な質量をもった液体窒素が空中に停止する。

それに合わせて

《蒼炎》が

《紅炎》が

《緋炎》が

焼き尽くしていく。

数十秒後には全てが燃やしつくされた。





## 戦い終わって

私は、四条楓。神凧家の分家の一つ、四条家の次期当主。今、私は高校の教室で授業中だけど空を見上げてあの戦いの後の事を考えていた。

もう、東照宮と周辺の商店街まで巻き込んだ戦闘から、2日が過ぎていた。日光周辺では、アーカム財団が政府と警察上層部に圧力をかけて、住民を避難しておいた為、一般市民の死者は0だった。でも、残念な事に枝流家は宗家の当主以外は全員死去。49人の死者を出しており分家と宗家ともに7割以上の術者を失っていた。昨日、枝流家では最優先に関東に張ってある結界の一角である日光東照宮に結界を張りなおしたらしい。

東照宮の建物は写真に映っている物を、雪と呼ばれた少女が復元してた。両手を地面につけるだけで写真や動画とまったく同じ物を作り出してるのを見たときはびっくりした。

商店街や建物の復興に関しては国とアーカム財団の援助で復興してくれてるようで、早ければ半年ほどで復旧の目処がついてるみたい。

その後は、ルークとは知り合いのだったみたいで、仲良く話しをした。それを見て、少しイラって来た。

それと、神凧家の中での四条家の立場が一遍したのが一番大きいかな？四条家の次期当主の私が神炎「緋炎」を使えるようになったことと同じ分家の人達から羨望と妬みと嫉妬の眼差しで見られたから、  
・あとは、分家の人達から養子の話もたくさん来てるらしいけど、お父さんは全部断ってるみたい。

今回は、力を求めるより人を守ろうとした時に方が強く力になったから、誰かを守ろうと思ってる限り私はもつと精霊と仲良くなれる気がする。

今日は、学校が終わったらルークと少し話をしよう。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

その頃、

「で！剣山さん、今回の報酬が10万ってどうなんですか？」

「お前の能力を見た結果だろう？あの程度の復旧、大したことないだろ？」

「国宝文化財の建物を復旧させておいて10万とかありえないんですけど？普通数千円くらいくれますよ」

そこまで、雪が言うと剣山が仕方ないなと言う感じでもう一枚封筒を雪に渡してきた。

「なら100万追加だ！これ以上は出せないぞ？それに今回は、国際的人材派遣会社『ASE』（エース）に仕事を依頼したし、日光の復旧にも何十億もお金がかかると。お前がもう少し早く着いてればそれもなかったのに・・・残念だ」

ひどすぎる・・・この副所長頭の髪の毛キラーン の刑にしてやりてえええええええ

「仕方ないでしょう！連絡くれるの遅すぎなんですよ！！」

「愚痴を言っても仕方がない。それと警視庁がお前の周りを嗅ぎ回ってるようだから気をつけておけよ」

愚痴？え？これって俺が言うのって全部愚痴なの？

ダメだ・・・もう疲れたよ、ぱとっらっしゅ・・・

雪がやる気なさそうな感じで返事をして部屋から出て行った。

雪はアーカム財団日本支社から出ると、JRを乗り換え千葉へ向っていた。あ、そういえば3日後にミミールの世界に行くついでにルークを届けないと・・・

日光のあの戦いの後、神凧家の術者とアーカム財団のスプリガンの御神苗先輩とルークはお互いに挨拶を交わした。

まあ俺の事は、御神苗先輩がうまく言い含めてくれていた。

その時にルークがいたのは驚いたが、話を聞く限りなんらかの移動のゲートが起動してこちらの世界へ飛ばされたんだらうと予測した。ルークと話したところ、神凧家の分家の四条家と言う家でお世話になってるとの事だった。

丁度、5日後にルークのいる世界へ存在の力の補充に行かないと行

けない為、その話をしたところ、いまから3日後にミミールの世界へルークを送り届ける事になったわけだが・・・

ルークと話してる間、楓という少女にむちゃ睨みつけられたのは困った。

「あれってたぶんルークの事好きだけど、本人は気がついてないんだろうな」

そう言いながら雪は、電車に揺られていた

## 神殿

上下の感覚が狂いそうになる世界にひとつの神殿が浮かんでいる。

上下左右を見渡してもどこまでいっても深闇しかなく唯一、そこにある神殿だけは存在を誇示していた。

神殿の大きさは、柱一本だけで直径20m 高さは300m近い。それが規則的に並び神殿の屋根を支えていた。

あまりにも現実離れした大きさは感覚を狂わしてしまう。

いま、そこを一人の男が歩いていた。しばらくすると数人の男が、寛いでるのが目に入ってくる。

「失態だったな？ガブリエル」

8対の赤い翼を持つ男がガブリエルに話しかけてきた。

「ルシフェルですか。仕方ないでしょう、あの世界では我々の神は信仰されてはいますけど、東洋の島国は八百万信仰がありキリスト教はそこまで勢力がないし我々のような存在だとゲートの力を使っても3割も力が出せませんからね」

ルシフェルにガブリエルが真実を告げる。

「それよりも思ったより、不確定要素が増えってる気がしますね？」

6対の翼をもった者が発言してくる。

「計算上より、多くの世界が重なってきているな。」

4対の翼をもつ者が追従してくる。

それを聞きながら、ルシフェルと呼ばれた者が口を開く。

「それより、ガブリエル。クレミアの魂が夢現している世界はどのような状態になっているんだ？」

「今回の多重ゲート開放による我々の干涉式の構築は失敗。最後に我々が作った人形によりどうやら邪魔をされたようです。計画自体については特に問題はないですね。ですが、思ったより夢現世界の住人の力が強い者が増えていますね。」

「人形の調子はどうなのだ？」

「以前は、精神にある問題が発生していましたが最近は何問題ないようですね。」

「悪魔陣の稼動状態はどうなっている？」

4対の翼をもつ男がガブリエルに聞いてくる。

「人間達がつねに戦争で血を大地に染み込ませてくれてるおかげで問題なく動かせますね。それよりラファエル、我々の人形を少し抑えておいてもらえますか？人形に計画の邪魔をされるのは困りものですよ。」

「わるいな、ガブリエル。封印の一部が解除されてるお前と違って我々はこの空間から出る事ができない。」

「そういえば、ルシフェル。ミカエルの姿が見えませんがどちらに？」

「あの御方に呼ばれているよ。」

そう、ルシフェルは呟いた。



## 楓とルーク 1

「ただいまー」

楓は自宅に帰ってきてきて、さっそくルークと話をしようとして制服から部屋着に着替えて、離れのあるルークの部屋に向っていった。

「ルーク。いる〜?」

いつも鍵をかけてないルークの部屋のドアを数度叩いて入ろうとすると鍵が掛かっていた。

「あれ? いないのかな?」

母屋の方じゃないよね?

「あ、お母さん。」

「おかえり、楓。」

「うん、ただいま」

「ねね、ルーク知らない?」

「えーと、ルークさんなら夕食までには戻ってくるって言ってたわよ。」

「はづー、そうなんだ。」

「仕方ないかゝ炎術の練習でもしておこ・・・」

.....

その頃、ルークは雪と一緒に町を散策していた。

「でも、まさかルークがこっちの世界に来るとは思わなかったよ」

「私も雪殿に会えるとは思いませんでした。」

「それで、フランは怒ってた？」

「ええ、かなり怒ってましたよ。」

「やっぱりー」

雪はそう言いながらも3日後に言ったら謝っておくか・・・と考えていた。

「そういうえば、雪殿ここの世界はいろいろと発達してますね。これだけ色々な乗り物があれば物資の移動など楽そうですね。」

「だね、ルークはこの技術を持って帰りたいの？」

「いいえ、まだまだ私達の世界には早いと思っています。」



ルークの姿は、黒のジーンズに黒のポロシャツと膝まで届く薄めのコートを羽織っている。ルークって何きても似合うよねーと見ていると後ろからもう一人入ってくるのが見えた。

身長は自分より10cmくらい低い、黒髪の少女だった。その少女は私から見てもスタイルも良く、顔もとってもかわいらしかった。記憶に違いなければ、たしか雪って名前だったような・・・？

なんで、あの女とルークが一緒に出かけてるの？一番最初に浮かんだのはそういう疑問だった。私の姿が視界に入ったのかルークがこちらへ近づいてくるの分かる。

「ただいま返りました。楓殿、こちらは、雪殿と言います。」

「初めまして、楓さん。よろしくね」

雪という女は挨拶をしてきたけど、私は、今までルークが楓と言ってくれていたのをいきなり楓殿と言いなおした事について嫌な予感がしてた。

少し考え事をして放心してた事もあり、挨拶をしていなかった事に気がついてすぐに挨拶をしたけど、雪という女は少し困った顔をしていた。

今、私達は広間に集まってお茶を飲んでた。

広間にいるのは私とルーク・お母さんと雪という女だった。

しばらくするとお父さんが入ってきて、今回、雪って人が来た事に関しての話 시작했다。

「初めまして、私はアーカム財団B級エージントの鈴木雪と言

います。こちらでお世話になっているルークとは昔一緒に旅をした仲であり今回、ルークがこちらの世界へ飛ばされた事に関して、戻す事が出来るため、その事の説明に伺いました。」

え？ルークを戻す？それっていなくなるって事？私はそこまで意識した途端、胸が絞め付けられる感じがする。

雪という女がルークの方へ目配せをするのが見えた。

「夏雅殿、瑞穂殿、楓殿。実は雪殿に送還してもらった為、3日後の21時に元の世界へ立とうと思っています。今までお世話になりました。宝石の事ですがどうか貰って置いてください。今までお世話になったお礼です。」

そこまでルークは言うとお父さんも話始めた。

「わかりました。そこまで言うのでしたら・・・3日後ですね。それではその日に盛大にお別れ会でも行いましょう。」

「あらら、そしたら明日は買出しに行かないとねー。楓も手伝ってね！」

「う・・・ん」

何かわかんないけど、胸がモヤモヤする。3日後？なんでそんなに・・・

そういえばルークが来てまだ一週間も立ってないんだ・・・いろいろあつてずつという感じがしてたけどそうじゃないんだよね・・・でも、なんかルークがいなくなるのは嫌だった。

「それでは、私は一度帰りますので3日後にまた来ます。」

用件だけを告げて雪という女は広間から出ていった。  
お母さんが玄関まで付き添ったみたい。

俺は広間から出て、四条家の屋敷を出てから普通に家に帰る事にした。こんな所で魔法とか特別な力を使って家に帰る時目撃されたら困るからな・・・

それに瑞穂って女性が夕飯一緒にどうですか？って言ってきてくれたけど、楓って女の子は気がついてないみたいだけど、俺にめっっちゃ嫉妬してるのは目線から分かった。

どう考えても俺とルークが男女の仲なのか？って疑ってるような感じだったので思いつきりハリのむしろだった。だからこそ、用件だけ告げて四条家をすぐに出た。

それと帰るのが遅くなると電車が混むつてもある・・・  
とりあえず、3日後にまた来る事になるな・・・

広間にはお母さんが戻ってきた。私はしばらく考えてた事を聞いてみた。

「ねえ、ルーク？3日後に帰っても、またこっちに来れるの？」

私は、意味不明な質問をした。そんなに簡単に世界の壁を越える事が出来たらそれは大事だから・・・

だからこそ、神凧家宗家の術者達は雪という女を見たときに得体の知れない妖魔を見るような目で見ていた。

私も、神炎を使えるようになったけど、雪という女が纏ってる雰囲気

気は普通じゃなかった。コントラクターの和麻さんに匹敵する感じがしていた。

「すまない、楓殿。元の世界に戻った後はこちらの世界へ来る事は無いと思う。今回はあくまで不可抗力で飛ばされた事であるし、私には宮廷魔法騎士団団長の仕事もあるので、その時間は無いと思う。」

も・う・う・う・来れないの？会えない？

「それに、もう楓殿も大丈夫でしょう。力の使い方や考え方もきちんと出来るようになったようですし。どうやら夏雅殿に頼まれてた家庭教師も簡単な体術を教えるだけで大丈夫そうですね。」

そう言いながらルークとお父さんはビールを飲んでいた。

私は、よく分からないまま、夕飯を食べずにそのまま母屋の自分の部屋に走っていった。

自分の部屋に入るとドアの鍵を閉めてベットに横になって枕に顔を押し付けていた。しばらくすると枕が湿っていた。気がつくと頬を伝って涙が次々と枕に染みを作っていく。

何故か知らないけど、胸が絞めつけられるように痛くてその日はいつの間にか泣き疲れて寝ていた。

## 楓とルーク 2

部屋の窓から朝日がさしこんでくる。部屋の壁紙は白を基調としておりベットと勉強机、本棚の上にはぬいぐるみが置いてある。時計は午前6時を指していた。

いま、部屋の主たる者はこの部屋にはいなかった。

その部屋の主たる、四条楓はルークの朝の修練を縁側から見ていた。

昨日、夕食を食べずに広間から出て行ってそのまま部屋で寝た為、両親とルークに会わせる顔が無かった事もあり朝、起きてもこうして離れてルークを見てるだけであった。

その様子を夏雅と瑞穂は見ていたが・・

「あらあら、楓も女の子してるわねー。楓は自分でもルークさんのことが好きなのを気付いてないのね」

「そうなのか？てつきり具合が悪いと思っていたが？どちらにしても楓は四条家の次期当主と言う事もあるしな・・ルーク殿とは難しいだろうな」

「あら？どつしてなの？」

「異世界というのは、繋がりが絶たれてしまった場合この世界に存在出来なくなってしまう。だからこそあんまり薦めたりはしないのだがな。それでも自分の娘があんな切ない顔をしているのを見るのは辛いものがあるな」



「そうね。どうにかならないのかしらね。」

「世界と世界の壁はそんなに簡単に越える事は出来ない。この世界を作ったと言う、精霊王クラスならば可能かも知れないが・・・どちらにしても私達が出来るとは何もないさ・・・男女の色恋沙汰は当事者に任せるしかない。」

「でも、楓はたぶん好きって感情が分かって無いと思うのよね。もう、誰に似たのかしらね。」

そう言うと、瑞穂は朝食を作り台所に向っていった。

夏雅はその瑞穂の遠ざかっていく後ろ姿を見ながら昨日、突然訪問した雪と言う少女の事を考えていた。

夏雅の慧眼から見て、あの少女は異常だった。存在が希薄なくせに圧倒的な力を内包していたからだ。夏雅から見た、雪という少女の力は恐らくコントラクターの和麻すら凌駕すると思えた。だからこそ、簡単に異世界へのルークの送還方法についても信じる事が出来たのだが・・・

だが、本当に異世界へ単独で飛ぶ事が出来るならばそれは精霊王と同等の力を持つと言っても差し支えはない。

味方のうちならばいいかも知れないが、敵となった場合は大悪魔<sup>ペリアル</sup>ク拉斯をも超える災害となるかも知れない・・・

だからこそ、昨日のうちに特殊資料整理室の橋 霧香へ情報を提供していた。敵になった時に対抗できる策を用意する為に。

そしてその結果を今日、確認する為に警視庁へ伺う手筈を整えていた。

「まあ仕方ないか・・・」

そう夏雅は言う。服のポケットから2枚のチケットを出した。そのまま縁側でぼーっとルークを見ていた楓まで近づく。

「楓」

夏雅がそう呼ぶと楓は昨日の事もあるのか、気まずい顔をしてこちらを見てきた。

「おはよう、お父さん」

「おはよう。楓、ルーク殿の社会見学の一貫としてデイズニールランドのチケットを2人分用意しておいたのだが、思ったより帰る日にちが近くなってしまったので使えなくなる前にルーク殿をデイズニールランドに案内してほしい。」

そういうと、夏雅は楓にチケットを2枚渡して離れ間際に今日は仕事で瑞穂と一緒に遅くまで留守にするというて離れて行った。

楓は夏雅に渡されたチケットを見て、驚いていた。

今日までの指定日チケットであったからだ。

「はあ、仕方ないよね・・・別にルークをデートに誘うとかじゃなくて、お父さんに頼まれてたからだよ！そうだよ、社会見学の一環なんだからね！」

そういいながらも顔を赤くして楓はルークに近づいていく。

近くによるに連れてルークの身のこなしや体術・剣術がはっきりと見えてくる。

近くで見るとはつきり分かる。

自分の知ってる学校で教えてる実戦では使い物にならない剣道とはまったく違うという事が・

しばらく、ぼーっと見てしまっていた楓はハッ！と気がつく

いけない、いけない。きちんと言わないと

「ルーク！」

思ったより大きな声で話しかけてしまっていた。

楓自身思ったより緊張していたようだ。

それに大して、ルークは楓が近づいて来ているのに気がついていた。そして何か言いたいという事も

「どうかしましたか？楓殿」

「う、うん。実はねお父さんから、社会見学の一環でルークと今日一日デー・じゃなくて」

ぶんぶんと首を横に振る楓であったが。行けないイケナイ、デートじゃないのよ！

落ち着くのを、楓。そういつものように気軽に言っ

「ルーク、今日は寒いね」

「はい、そうですね。ですが体を動かしてればそうでもありませんよ」

私たら何言ってるのよー。と言いながら楓は心の中で頭を抱えていた。

そうよね！端的に言うのよ、がんばれ！私。

「ルーク！いい？今日出かけるから私について来なさい！！わかった？それじゃ10時に出かけるからきちんと用意しておくのよ。」

「は、はい？」

そのまま、ルークの返答を聞かずに楓はそのまま自分の部屋にダッシュで入ってベットにダイブしていた。

私、何上がってるの？昨日から私変だ。

なんでだろう？ルークの前に行くとは前はそうでもなかったのに今は胸がドキドキして顔が熱くなってきたんと顔を見て話せないよ・・それに、あんな言い方じゃ嫌われちゃうよ

そんなの嫌だよ・・・

嫌われるって思っただけで胸がぎゅーっと締め付けられた感じがする。

楓はチラッと潤んでる瞳で時計を見ると時計の針は7時を指していた。

### 楓とルーク 3

「楓殿、何か飲み物でも買って来ましようか？」

ルークはそう言い近くの売店へ飲み物を買いに離れて行った。

楓は、ビックサンダー・マウンテンから、スペース・マウンテンそしてスター・ツアーズと絶叫系のアトラクションに乗った後に、震動系のアトラクションで止めを刺されてしまい撃沈していた。

「うっ。首が痛いよ、気持ち悪い……. . . よお」

楓は今の格好は黒のコクーンワンピースと黒のトレンカに白のストールを首にくるくる巻いていた。

それでも顔を真っ青にしてる楓はルークと話す余裕は無かったわけだが・.

「絶叫系を甘く見てたわ。初めてこういう所に来たけど・. . . まさかこんなにすごいなんて・. . . うっ」

実はというと、楓はデイズニーランドに来たのは初めてだった事もあり、かなり満喫していたのだ。

炎術師の家系という事もあるが、交通の便で言えば龍ヶ崎市からは山手線で一度降りて、京葉線へ切り替えてから舞浜で降りないといけない事もあり、結構遠いのだ。

そのため、今回は、ビックサンダーマウンテンを一回乗った後に、ルークと一緒に遊びにきてるといふ気持ちも手伝って油っこい食べ物頼んでしまいそのあとの絶叫系で胃袋がシェイクされ、振動系のアトラクションで車酔いの状態になって撃沈したのだった。

「楓殿、お待たせしました。」

ルークがオレンジのアイスクリームを手渡して来てくれた。

「ありがとう、ルーク」

ぺろぺろと舌でアイスを舐めてると段々と気持ち悪いのが引いてきた楓であったが、そういうえば油物のあとにアイスって食べたからお腹壊すんじゃないかと気分が落ち着いた後に気がついた。

二人してベンチに座って、周りを見ていた。今日は休日という事もあってそれぞれのアトラクションが2〜3時間待ちだった為、すでに午後5時を過ぎていた。

「楓殿、そろそろ電車の時間もありますし帰りますか？」

楓は周りを見ると、10月が近いという事もあり、夜の帳が下りてきたのが分かった。それでも、やっと気持ち悪さが抜けてきた事もありもう少しここに居たかった。

「ねえ？ルーク。パレード見て行こうよ」

「パレードですか・・・」

ルークが今日の園内のスケジュールを確認してるけど、結構しぶい顔をしているのが見えた。

パレードの開始が19:30 スタートの花火が20:30 からだから帰る時間も考えると午後23時近くになってしまつのをルークが心配してるのだろう。

しばらくすると、ルークはお父さんに渡された携帯電話を使って電

話をしていた。

「ええ、そういう事ですのでよろしく願いします」

「楓殿、夏雅殿の許可が取れましたので今日は花火まで見ていきましようか？」

その言葉を私は聞きながら、なんかとっても嬉しい気持ちになつた。

だから、うんつてすぐ答えちゃた。

でも、ルークつて携帯電話使えるんだね・・・つて余計な事も考えていたけど・・・

そのあとは特にアトラクションも乗らずに園内のお店を廻ったり珍しい食べ物食べてた。

19時30分になつてパレードが始まつた。夜の帳が完全に落ちてる中でのライトはとても綺麗で幻想的だった。

学校で女の子達がパレードは絶対見ないと損だよーつて言つてたのを思い出してたしかにそうだよねつて自然と納得していた。

「楓殿そろそろ花火の時間です。」

ルークはそう言ってきたけど、私はずっと不満だった事をルークに言った。

「ねえ？なんでルークは私の事、楓つて呼ばないの？きちんと楓つて呼んでほしい」

ルークはまさか楓からそんな事を言われるとは思っていなかった。楓殿と言ってたのは、四条家からもうすぐいなくなる事を考えてある程度距離を置こうと思って使っていたのだが、どうやら楓は気にいらないらしかった。

「わかりました、楓<sup>かえて</sup>。これでいいですか？」

「もう、いなくなるからって距離置こうとしてそういう風に接するのはすごい嫌なんだよ！」

ルークとしては、困ってしまったが、立つ鳥跡を濁さずという事もある。

「わかった、楓。これでいいのか？」

「うん！それでいいー」

楓はひさしぶりにルークがきちんと接してくれた事にとてもうれしかった。

「ねえ、ルーク。ちょっとこっちきてー」

楓はルークの手を引いて園内から出て、殆ど人がいない駐車場の隅へ走って言った。

しばらくすると空に色とりどりの花が咲いた。

その光にルークと楓は照らされている。



そして、その花火の光に背を向けて暗闇で顔が見えない位置に楓は陣取るとルークに語りかけた。

「ねえ？ルーク。覚えてる？一番最初に会ったこと」

「ええ、覚えていますよ。いきなり炎術で攻撃してきて困りましたね」

「もう、敬語になってるよ？それにそんな事おぼえてるなんて」

「ルーク覚えてる？ルークが学校に来た事、」

「そうですね、夏雅殿も思い切りがすごいですね」

「神凧家の親睦会の時もルーク、分家に大怪我させてたし・・・」

「ですね。あの時はぶち切れました。」

「ねえ？ルークは知らないと思うけどね、ルークからお守りもらった時すごうれしかったんだよ？もうダメって思った時もお守りを見てがんばれたんだよ」

「でも、楓はもう十分に力もそれを扱う心構えもきちんとして来たと思います。」

きつと、今から私がする質問はしちやいけない質問だっていうのは分かってる。

それでも、もう一回聞かずにはいられなかった。

だからこそ、

「ねえ？ルークは本当に帰っちゃったの？」

しばらくルークは考えてたみたいだったけど

「そうですね、私にも仕事がありますからそんなに休んでる訳には  
いきませんから」

やっぱり……………

「そうなんだ……………」

ルークからは花火の光を楓が背負ってうつむいてる為、光加減もあり表情を見る事はできなかった。

楓は、今、ルークと話してる内容は思い出という事はわかった。そして、父親がルークとの思い出作りの為、わざわざ日付指定のチケットをくれた事も・・・

楓も自分が神凧家の分家、四条家の跡取りである事は誇りに思っている。

でもたぶん、私が神炎「緋炎」に目覚めなければ、分家から養子を取ってそれで家を存続していたかもしれない。

でもそれは、もし目覚めてなければ・・・という思いもあった。

でも、神炎の使い手になった楓には、神凧家と四条家の2つを背負わないと行けないという責任がある。

でも、だからこそ・・・

楓はパレードを見ながらずっと考えていた。

なんで、普通の女の子みたいに自由に恋愛が出来ないんだろうとここに来て楓ははつきり感じていた、私はルークが好きなんだと・・・電車に乗ってる時も一緒に歩いている時もずっとドキドキしてた。顔も見られるのも見られるのもカーツと体温が上がってきてうまく話せない。

でも、一緒にいるだけ！それだけでとても安心する。

だからこそ楓は、自分がどんな顔をしてルークに接していいのかわからなかった。

今、ルークに聞いた。本当に帰ってしまうのか？とルークはそれに対して肯定を示してきた。

たぶん、今の私の顔は酷い事になってると思う。出かける時、お母さんが軽く化粧してくれたけど・・・

でも、私はきつと言わないといけないんだ・・・

ルークがこの世界から去るならルークに心残りが無いように笑って送り出せるようにしないと行けない。  
だから・・・こそ・・・

「ねえ？ルーク。今日は楽しかった？」

「ええ、とても楽しかったです。楓が撃沈してたのも見れましたし」

「うん、よかつ・・・た」

「楓？」

ルークが心配そうに私の顔を見てくるのが分かる。

花火が終わり、当たりが統一された薄い闇に閉ざされる。

それでも駐車場に設置してある外灯で十分に周りを見渡す事が出来る。

私は、ルークの方に視線を向けずに半回転してルークに背を向けた。

「うん、よかつた。明後日には帰るんだよね？その時は盛大にパーティーしようね！」

私はそういうと、ルークにお手洗いに行つて来るねと行つて園内に再度入場して手洗いで自分の顔を鏡で見た。

ひどい顔だった。

目が真っ赤になっていた。

私は急いで目を冷やして、軽く化粧をし直しルークの所へ何事も無いように装って家に帰った。

家に入るともう時間は22時を過ぎてたけど、お父さんと少し話してからルークは休む事を告げると離れに向っていった。

お父さんは私の方を見て、おかえりと言ったあとすぐに母屋に入っていた。

お母さんは私の方を見て、つらそうな表情をしてお帰りなさいと言ってくれた。

私もそれに答えて、軽くシャワーを浴びてベッドの中にもぐりこんだ。

その日は、ルークと最後に話した事とあと数日で居なくなってしまう事を考えてしまい中々寝付けなかった。

## 楓とルーク 4

あれから結局、朝になるまで寝付けなかった。

いつものように制服に着替えて、学校に私は向った。

学校では、ルークの事を考えていて睡眠不足な事もあり、授業中もぼーっとしていた。

友達が心配そうにしてたけど、今はそっとしておいてほしい事もあり一人でした。

「ただいまー」

「おかえりなさい、楓」

家にお母さんだけいた。

「楓、お茶菓子買ってきてあるから一緒に食べましょう。」

お母さんがそう言って来たので私はうんと答えて広間でコタツの中に入ってお茶の用意をしていた。

しばらくするとお母さんがお茶菓子をもってきてくれた。

お茶菓子は、おはぎとか日本の茶菓子だった。

しばらく、お母さんと会話をしないでお茶菓子を食べながらお茶を飲んでいただけど……

「楓、明日にはルークさん帰っちゃうけどきちんとお別れの挨拶は出来たの？」

お母さんは突然、話を振ってきた。

「う．．．うん」

「そう、それならいいの」

お母さんは相槌を打つとテレビをつけた。

テレビから聞える音声が広間の空気を震わせていたけど、いつも面白かったテレビが今日は雑音にしか聞えなかった。

「ねえ？楓」

「なに？」

「あなた、ルークさんの事が好きなんじゃないの？本当に相手の顔を見てお別れを言えたの？」

私はその言葉に沈黙をしまっていた。

そして下を向いた時にいつの間にか流れていた涙が瞼から零れて自分の手の甲を塗らしていたのに気がついた。

お母さんは私の側に来ると、私を抱しめてくれて頭を撫でてくれた。

「楓、もっと自分の気持ちに素直にならないとダメよ。本当に大切なモノは無くした時に気がつくのだから．．．」

「うん、わかってる。だから私はルークにお別れをきちんと言わないといけないんだよね」

そういうと、お母さんは少し悲しい顔を私に向けて、言って来た。

「ねえ？楓。四条家や神凧家の事を抜かしてあなたはルークさんの事をどう思ってるの？」

四条や神凧を抜かして？今まで、私はそういう風に思ったことは無かった。

だって、神凧家宗家・分家を含めて自分の家を存続させる事が第一だったから・・・だからそういう考えはした事がない。

もし、私が一般の家庭に生まれたなら出会いが違っていたなら普通に恋が出来たのかな？

「ねえ？お母さんはお父さんと結婚するときはどうだったの？」

「そうね、たくさん反対されたわ。由緒正しい家に嫁ぐのですもの。たくさん陰口も叩かれたけど、夏雅さんががんばってくれたわ。」

「楓、良く聞きなさい。本当に好きな人との出会いなんて一生に一度あるかどうかなのよ？」

「たしかに、楓は今、宗家・分家にも認められてるわ。それはとても素晴らしい事よ、でもね親としてはそんな事より娘の気持ちの方がもっと大事なの。だからね、自分の家の事より今の楓がどうしたいのかをまずは考えなさい。」

そう言いながら、お母さんは私の涙をハンカチで拭き取ってくれた。



「うん、わかった。」

そのまま、私はいつの間にかコタツの中で寝てしまっていた。

## 不協和音

話は楓が学校に行ってる間に遡る。  
そこは警視庁内にある一室、公営退魔組織「特殊資料整理室」である。

部屋の中にはルークと四条夏雅、室長の橘 霧香（たちばな きりか）が話をしていた。

「夏雅様、これがこの前依頼を受けた鈴木 雪という方の情報になります。」

夏雅は書類を受け取り目を通していく。

名前は鈴木 雪

年齢は18歳

性別 男

○× 高校定時制3年生

身長、体重などの細かい身体的特徴

そして一人暮らし

住所など

そして両親の欄は空白という所を見て特に不信な点は見当たらなかった。

夏雅がしばらく考えこんでるのを見て霧香は紅茶を飲みながら

「夏雅様、どうですか？」

「そうですね、特におかしな点は見当たらないですね」

そう言った夏雅に霧香は少し鋭い視線を向けてから

「夏雅様、その雪という者の両親の欄を見ておかしいとは思いませんか？」

夏雅は一瞬、霧香が何を言ってるか理解出来なかったが、しばらくその調査書を見てるとある事に気がついた。

それは両親の欄が空白だったからだ。片方だけの空白ならば分かる。だが、両方が空白というのは絶対にありえない。

意図的な意思が無い限りは。

夏雅がそこまで考えが行き着いた事を顔色から判断した霧香は話を続けた。

「私も最初は、この報告書に疑問を抱きませんでした。ですが、私達の公営退魔組織には異能者も数多く、それを調べて来た石動 大樹（いすぎるぎ だいき）と言う部下からの報告でおかしいと気付きました。」

「それをこれを見てください。」

一枚の用紙を夏雅は受け取り見ていく。雪の賃貸借用書であるが、その欄にも保護者の名前どころか保証人の所さえ空白であったからだ。

「こんなバカな！こんな事は普通ありえない。」

夏雅が思わず声を上げてしまう事は間違っではない。

日本という国で保証人無しで家を借りる事など不可能に近いからだ。それなのに、実際、家を借りてるといふのは不可解極まりない。

もう一枚の紙を霧香が差し出してくる。

それは雪という者が学校に通う際に書く書類であったがそれにも両親の名前は記載されていない。

「霧香殿、一体これはどういう事ですか？」

夏雅がそう言いながら霧香を見ると、いつもの軽い口調では無く、重々しい口調で夏雅に告げてきた。

「夏雅様、この学校の書類と賃貸借用書そして区役所のデータベースの改竄は全てある時期に集中しているのです。」

「集中？」

夏雅はそう言いながら、賃貸借用書や調査結果により割り出したデータベースの改竄日、学校への書類届け日などを見ていく。全てが2010年7月11日に記載されている。

だが入学届けに関しては今年3年生という事はこの日に届けがあるというのはおかしい

「なるほど、つまりこれは意図的に誰かが仕組んだ事という事ですか？」

「ええ。それとこの調査書を見てください」

夏雅が受け取った書類には、異常力場が測定された長野の様子を上空から取った衛星写真。

そして異常力場が無くなったあとに現れた二人の女性が映っている。その片方の女性は、とても雪という者に似ている。

「夏雅様、ここの異常力場は異界に繋がっていると、雪という者が同

行していた私立探偵より話は聞いているのです。そしてその異界わずか数刻で滅して脱出したとその探偵は証言してくれました。」

「つまり、雪という者は一人で空間を破壊そして移動する術を備えていると考える事が出来ます。ここまで来ると、戸籍が意図的に作られてる事も考えられるとおかしいとしか考えられません。それに私が指摘するまでは神風家もそしてあの風のコントラクター和麻ですら気がおかしいという事に気がついていないのです。」

「つまり、この雪という者の戸籍を作り、この世界に置いたという者は我々の認識すら騙す事が出来る程の力を持つ者という事ですか。」

「ええ、それと私立探偵の方から話を聞いた限り、アーカム日本支部副所長とはある程度、交友はあるそうです。もしかしたらなんらかの情報を握ってるかも知れませんが、聞き出すのは、むずかしいでしょうね。私達の出来ることは雪という者をしばらくは監視するという事になってしまっています。」

「わかりました。」

夏雅は、調査結果を聞きながらも納得していた。

雪という者がなぜ、あんなに希薄だったのかを……

そう、もし考えてる事が当たっていれば何らかの事をさせるために彼を作ったという点が一番妥当な線だ。

だが、何の為に？

あれほどの力を何に使わせる為に作った？

夏雅は無意識のうちに考えていた事に対して、それは在りえないな  
と思っていたが……

その部屋に居たルークとしては、保証人の話を聞いてもさっぱりであった。

なにせ、ルークのいた世界という物は戦争孤児が多く、両親が分からないなど普通であったからだ。

二人の話が終った後、ルークは夏雅に付き合っつて車で四条家に向つてゐる間、夏雅に説明されていた。

たしかに夏雅の話を聞く限り、この国の基準では雪殿には不可解な点が多かつたが、ルークはほとんど気にはしていなかつた。

途中、夏雅に連れられて、お土産の品を買っていたら四条家に帰つたのはすでに夜10時を過ぎていたのはごく愛嬌である。

## 楓とルーク 5

楓は、朦朧とした意識の中誰かに抱えられてるのを感じていた。

ルークと夏雅は四条家に帰宅した後、広間に行くとコタツで楓が寝ていた。

夏雅はルークにお風呂を進め、娘を抱えて部屋まで運び、ベッドの上を下ろしてから布団をかけて部屋を後にした。

丁度、広間に戻ると瑞穂がお茶を入れて、コタツに座ってるのが見えた。

「おかえりなさい、あなた」

「ただいま」

「ずいぶんと帰りが遅くなったのね」

「ああ、ルーク殿が元の世界に帰る際にお土産を持って帰りたいたいと言っていたので、文明的に問題の無い物を選んでたから時間がかかったんだ。」

「そうなの。でも持っていけるの？」

「ああ、持込は問題ないらしい。その辺は例の雪という者に確認してあるそうだ。」

「そうなのね・・・」

「それで、楓の方はどうだった？」

「うーん、どうもね。昨日、ディズニーランドに行った後からあれなのよねー」

「あれと言いつと？」

「そ、恋する乙女って感じかしら？でも、家に縛られててうまく気持ち传达えられないって言う感じかしら？」

「そうか・・・」

夏雅としても、親としては娘に好きな人と結婚をしてほしいと思っている。

それに、ルークという青年は危険が常に付きまとう炎術師の家系としては能力としては申し分ない。

そして性格についても、誠実で真っ直ぐな所も夏雅は気に入っている。

だが、夏雅から見てルークは恋愛事にはかなり不器用な所がある。今の所、見ていると楓の一方的な恋に見えてしまうのだ。

だからこそ、男女と一緒にする作戦を思いついて、ディズニーランドに二人で行けば気持ちがあつきりと踏んでチケットを渡したのだが、結局それは楓が自分がルークを好きという事を確信させてしまった事に止まっており、ルークに関してはそれほど変化は見られなかった。

「困ったものだな。楓も恋愛には奥手だったが、ルーク殿はそれに



輪をかけて奥手というか鈍感だな」

そう言い、夏雅は熱いお茶を飲み干した。

「でも、ルークさんの目は楓を見るときだけ、とつてもやさしいのよね。きっと本人も気付いてないと思うけどね」

「そうだな、何かきつかけがあればいいのだがな」

「いよいよ、明日ね。ルークさんが帰る日は、楓ったらどうするかしら？とつても楽しみだわ」

コロコロ笑う瑞穂を見ながら、夏雅は明日はどうなるのか気が気ではなかった。

その頃、ルークはお風呂から上がっており、すでに離れの部屋で床に入っていた。

「明日でこの世界ともお別れか」

ルークはそう呟きながらも、本当に短い時間であったけど楓やこの四条家でお世話になった事を考えていた。

神凧家の親睦会の時、ルークは普段在りえないほど怒り神凧家の分家の若者達をその手で斬り伏せていった。

王の不平不満を言う者は必ずどこの世界にもいる。

そういう者を次々と切り捨てていったりしては、大変なことになる。だからこそ、めったに怒らない。

ああ、そうか。

そこでルークは気がついた。

きっと分家の若者達の心無い言葉で普段は見せないあんなに傷ついた姿を楓が見せたからなんだなと・・・  
たぶん、楓がああ姿を見せた時点で、自分は怒りが頂点に達していたのだろう。

だから、王を侮辱された軽い言葉がトリガーとなって暴れまわったのだろう。

そこまで考えが行き着くと

そういえば、デイズニールランドで夜のパレードを見た後、花火が空に上がつてるとき、何故、楓は顔を見せないように私に話しかけていたんだ？

そのあと、何度も話してたが楓は何かを堪えている雰囲気だった。  
私は、体調が悪いと置いていたが・・・

ルークとしては恋愛事につねに無頓着な性格と12歳という若い時点から騎士団にいたため、異性との交流が殆どなかったのがここまですがルークの限界であった。

## 帰還

「ルーク、本当にいいの？」

雪は、ルークに再度確認する。

「ええ、あまり楓殿にご迷惑をかけたくありませんから」

ルークと雪は楓の両親と共に挨拶を交わしてそのまま、送還のゲートを開き世界を渡った。

話は少し遡り

夏雅に抱えられてベットに下ろされた楓は翌日に目を覚まして、ルークの日課である朝の鍛錬を縁側から見ている。

その後、朝食の手伝いをして、制服に着替えてから学校に向った。授業中は、ルークが今日帰ってしまう事を考えていてまったく上の空だった事もあり、教師より度々注意を受けていた。

それでも楓は学校が終わったら、最後にお別れを言っておたくさん話をして自分の気持ちに区切りをつけようと考えていた。

楓が学校に行ってる時、雪は今日の異世界転移の際の問題点についてミミールへ連絡を取っていた。

ミミールの世界の住人がこの世界に迷い込んでいる為、そちらへ連れていくと

その際のミミールはしばらく自分の管理してる世界からどのように移動していたか確認をしているようであった。

しばらくすると、ミミールからの答えは特殊な方法により雪の世界への扉を開き、本来持ち込めないはずの物質を持ち込んだ事を説明してきた。

そのため、それと同対価の物が転移の際に必要な事、その対価と言うのはこの世界でルークが得た知識・経験である事。

そして、雪の世界にある物は持ち込めない事を伝えてきた。

雪としては、異世界への転移の際になんらかのペナルティは毎回払っていた為、仕方ないと納得していた。

つまり、ルークが元の世界であるミミールの世界へ転移した場合、

楓についての記憶を全て失ってしまうという事である。

それに今は、雪がミミールの世界とのバイパス役をしているがいずれそれらも必要なくなる。

その際には、完全にミミールの世界と雪との関係は立たれてしまい、もしルークが残る方を選んでも結局は世界からの情報媒体が閉ざされてしまうため、存在は出来ない。

つまり、帰らないと死ぬという事になる。

雪はそこまでミミールと話をし、一度接続を切った。

そして、携帯電話の時間を確認すると、現時刻は午前11時20分

21時に帰る予定で話を四条家と進めていた為、お別れ会は夕方近くするはず。

雪は、楓がルークを好きな事は理解しているが、今回だけはそれを

容認すればルークはいずれ消滅する。

それに基本ルークは鈍感だから、楓に好意の視線を向けているのにまだ自覚はしてないはず、それならばお互いに好きになる前に分かれさせるのが最良の選択だろうと考えた。

幸い、今日は平日という事もあり、楓が学校から戻ってくるまでには話しを済まし、異世界への送還ゲートを開き移動する事ができるだろうと思い、そのまま四条家に向った。

雪が四条家についたのは午後1時30分。早くしないと楓が戻ってくるなと思い、すぐに四条家に入っていき庭の手入れをしていた瑞穂に声をかけた。

「こんにちわ、急用があつてこの時間帯にお伺いさせて頂きました。夏雅さんとルークは居ますでしょうか？」

「ええ、いますけど。どうかしたんですか？」

瑞穂としてもこの時間に雪が来るとは思つて居なかつた為、困惑していた。

雪は広間へ通され、そのあと瑞穂に伴つてルークと夏雅が部屋に入ってきた。

瑞穂が入れてくれたお茶をお互いに飲みながら、雪はミミールの世界の神と話した内容を伝えた。

その話が先に進むに連れて、部屋の空気が重くなり、残つた場合ルークの存在が消えるという話になった所で夏雅は腕を組んで考え込んでしまっていた。

雪は、瑞穂とルークの様子も見たが、瑞穂は俯いて何かを考えていたようであった。

ルークは瞼を閉じ、何かを考えていたようであったが、膝元へ視線を移せば拳を思いつき握り込んでいた。

それを見ながら雪は、溜息をついていた。

ルークは、雪に説明された内容を頭の中で整理していた。この世界に残ってもいずれば消滅する。そして元の世界へ帰る際には何一つ持ち帰る事は出来ない。

この世界の物、経験、知識、そして楓に対する思いも．．．．それでも、これ以上ここに止まればいずれは消える運命。

一度、楓の事を意識し始めたからにはもう、今までのように振舞う事は出来ないだろう。

それに楓に辛い別れの思いはして欲しくない。

それならば、楓が居ない間に世界へ帰る事が一番の最良の選択ではないかと．．．

「わかりました、雪殿。」

ルークは夏雅と瑞穂を順番に見ていく。

「夏雅殿に瑞穂殿、これまで大変お世話になりました。私はこれで、元の世界へ戻ります。少し早い別れになってしまいました、今まで大変ありがとうございました。」

ルークは頭を二人に下げて礼を述べてから立ち上がる。

瑞穂と夏雅はその様子を見ながらも了承し、見送る為にルークと雪の後について庭に出た。

雪はルークを元の世界へ返す為に、ミミールの世界で最後にルークが消えた座標軸を空中に展開した送還ゲートに書き込んでいく。

そして、最後に、

「ルーク、これを通つたらこの世界の事は全部忘れるけど、楓っ子にお別れ言わなくて本当にいいの？」

雪はルークを見ながら最終通告をするが、

「大丈夫です。それにこんな事言える訳ないじゃないですか？」

そう、ルークは泣きそうな顔をしながらゲートを潜っていった。それを見ながら、雪は、はあ素直じゃないよねーと少しゲートに手を加えて一緒にその場から消えた。

## 帰還 2

ルークと雪が帰ったのを見届けると夏雅と瑞穂は玄関を通り広間に入って腰を落ち着けた。

「どうでしょうか？あなた。」

「そうだな、間違いなく戻ってきたら楓はルーク殿と話したがるからな」

「そうですね」

「ありのままを伝えるしか無い。それに楓も次期当主となるなら気持を切り替える事が出来る良い機会かもしれないしな」

瑞穂は夏雅の話聞きながら、まったく男の人はいつも自分の気持ちばかり女に押し付けて自己満足に浸ってるんだからと不満だった。

「ただいまー」

玄関の方から娘の声が聞えてきた。

たぶんいつもより元気な声をしてるのは好きな人を笑顔で送り届けようと精一杯の思いから来てるのかもしれないわねと瑞穂は思った。少しすると、瑞穂と夏雅がいる広間に楓が入って来た。

私は、楓にコタツに入るように促して楓がコタツに入る間に楓の分のお茶を湯飲みに入れて楓の前に置いた。



「楓、よく聞いて欲しい。」

「なに？お父さん。」

「実はルーク殿が異世界へ帰るには、ある条件が必要だったんだ。」

「条件って？」

「ルーク殿は元の世界へ帰る際に、こちらの世界へ持ってきた物の変わりの代償を支払わないと行けない物があったんだ。」

「代償？」

「ああ、宝石や金貨などを私達は滞在費としてもらったが、それをこちらの世界へ来る際に具現化してしまった為、元の世界へ帰る際にそれと同価値の物を差し出す必要があった。」

「同価値？それって何なの？」

「ルーク殿がこちらの世界へ来てからの全ての知識と記憶が代償として求められたそうだ。」

「瞬楓はきょとんとしていた。」

「え、お父さん。そ．．．それって、ルークの記憶から私達が消えるって事なの？」

「ああ、そうだ。」

楓は一瞬、頭が真っ白になってしまっていた。え？私がルークの中から居なくなる？記憶から？

ルークに会って聞かないと、だって記憶から消えるなんて

「それと、ルーク殿は元々この世界の住人ではない。無理を言っ  
て引きとめてしまえばルーク殿の存在自体消えるんだ。楓分かるな  
？」

「神凧家の分家とは言え、お前は次期四条家の当主になる身であり、  
しかもお前は神炎「緋炎」の使い手でもある。もはやお前一人のわ  
がママが通せる立場で無い事は重々承知してらと思う。ルーク殿も  
お前の立場を考え、お前が迷わないようにとついさっき元の世界へ  
帰っていった。お前も次期当主になるならば、ルーク殿の気持ちを  
汲んでくれ」

夏雅はそういって、楓は何も言わずに自分の部屋に入り鍵をかけて  
からベットに横たわった。

その頃、広間では、瑞穂が怒りくるってた。

「あなた！なんであんな言い方をするのですか？あれでは、あまり  
にも楓がかわいそすぎます。なんでもっとやさしく言ってあげな  
ったのですか？」

夏雅も瑞穂が言ってる事も分かる。それに楓のショックも多少理解  
はしていたが、いずれ四条家の次期当主になる以上、どんな状況下  
においても冷静に炎術師として対応出来ないかと死に直結すると言っ  
るのは分かりきっていた。

だからこそ、今回の実らない恋を次の糧にして乗り越えてもらえばいいと思い、現当主としてきつく言ったのであった。

「瑞穂、言いたい事は分かるが今回は楓の次期当主としての責務も掛かっているのだ。それに雪殿に聞いた話によるとどちらにしても結ばれる事はない。それにもう過ぎた事を言っても仕方ないだろう。それならば今回の事をバネにして前に進むと言う事を楓には学んで貰わなければならない。」

私は夏雅さんに言っただけでやりたい事はたくさんあったわでも、夏雅さんの言う事は間違っただけでいいなし次期当主になる娘の事を考えるなら別れを克服しないといけないというのは分かるけどこんな分かれ方はひどすぎる。

今、娘がどんな気持ちなのか考えるだけで心が痛む。

楓は、今ベットの上で横になりながら天井を虚ろな眼差しで見上げていた。

私、今何してるんだろ。

そういえば、今日はルークが帰る日なんだよね、お買い物いかないと……

あつ、そうだった、もう帰っちゃたんだよね。最後まではいはきちんとお話ししたかったな。

でも、ルークが消えて死んじゃうなら、元の世界に帰ってこっちの事全部忘れて向こうの世界へ頑張った方がルークのためだね。私なら大丈夫。

これでも四条家の当主で神炎の使い手だもの。もうルークが居なくても大丈夫。

それに四条家の次期当主ってお父さんも言ってたじゃないの。だからこのくらいのこととは問題ない。

うん、大丈夫。

楓はずっと虚ろな眼差しで天井を見上げながら自問自答していた。

その頃、ルークは異世界へ転移した際の白い門の前で倒れていた。

「イタタ」

「いきなり魔力を流したら光るとは」

そういいながらも立ち上がり、再度門に手を伸ばすが触った瞬間に砂となって砕けて消えてしまっていた。

その後ろには精霊石の壁があるだけで、他には何も見当たらなかった。

ルークはスターレット家の食料保存庫から出ると、待っていたルフエルドに今回の門は触った途端砂となって消えた事を告げた。

どうやらルークが気を失っていたのは夫妻に聞いた所、大した時間ではないようだった。

「ルーク、涙を流してるけどどこか痛い所があるのかい？」

メーデルがそう、ルークに聞いてくるがルークとしては涙を流して理由が見当たらなかった為、大丈夫ですと答えた。

そのあと、ルークは財布が無くなって事に気がつき食料庫と精霊石の洞窟を探し回ったが見つからなかった為、王都までの旅費と今

回の調査費を含めてかなりの額のお金を夫妻から受け取っていた。その後、ルークは心の中で何か大事な事を忘れてるような気持ちを感じながらも王都へ帰還した。

## 壊れた齒車

数日後、ルークは王都へ帰還。

一週間程、ルークはフレイア城内にて宮廷魔法騎士団長としての執務室にて騎士団の人員整理や配置、これからの配属などの貯まっていた書類を片付けていた。

時間も御昼に差し掛かる所で部屋のドアをノックする音が聞えてきた。

「失礼します」

部屋に入ってきたのは赤い髪の女性であった。

身長は170cm近く、凛と美しさを兼ね備えた容貌に赤い髪は腰まで伸ばされており、白のノーブルドレスを着ていても美しい。

「ミリア様、どうかしたのですか？」

「ルーク、王都に戻ってきたばかりで大変だとは思いますが、私達は4日後に結婚を控えているのですよ？他人行儀なのは良く無いと思いますわ。ミリアと呼んでくださいね。」

ミリアはにっこりと笑いかけながらルークに御昼でも一緒にいかがですか？と誘う。

ミリアはルークの父親のドルイネスと自分の父親である伯爵が数日前に引き合わせてくれたルークという青年に一目惚れし、最近執務室に顔を出すまでになっていた。

ルークとしても、もう22歳になる。

すでにこの世界の結婚適齢期を過ぎてしまっている為、良妻兼備なミリアには好意を抱いていた。

それに、ミリアの赤い髪を見ると落ち着く事もあり、結婚に関しては承諾をしていた。

そして、ルークの家は伯爵家であり、同じ伯爵家であるミリアとの結婚は家とそしてお互いにを思いあっている事もあり問題無い事であった。

「ルーク、そういえばね。お父様から聞いたんだけどね、城下町ではお守りを自分の大事な人に渡すのが流行ってるらしいの。それでね私も、購入してきたのよね。」

ミリアは持つてきたお守りを2つルークに渡すと1つをルークから受け取り自身の服のポケットにしまいこんだ。

「それでね、このお守りは地面に水を張ってからお守りを一番最初にあげた相手の様子を見ることが出来るの。」

「城下町ではね、浮気防止とか言ってるのよ?」

そういいながら、華の咲くような微笑でルークにミリアは話しかけた。

そのあとルークとミリアは、御昼を一緒にするために部屋から出て城の中庭にある休息所で食事を摂った。

その頃、四条家では

瑞穂が楓の部屋の前で楓に話しかけていた。

「楓、少しはご飯を食べないとダメよ」

「うん、でもお腹空かないから。」

楓はそう返答しながら、虚ろな瞳のまま横になったまま、天井を見上げていた。

「ここに置いておくからお腹すいたら食べてね」

楓の部屋にある机の上に食事を置くと、瑞穂は楓を見た。

楓はルークが居なくなってから、たった3日で親の言う事を只聞くだけの人形になってしまった事に心を痛めながら部屋の扉を閉めて広間に戻っていった。

もう、夏雅さんはお仕事でいないし、楓ときたらルークさんが戻ってからもう3日も食事を摂らないし、あんな状態になってるしどうしたらいいの？

しばらくしてから電話が鳴り、それを瑞穂は取った。

電話の主は、神凧家宗家からの妖魔の討伐依頼。

奥多摩の妖魔の封印が破られたと連絡が来た為、神炎使いの楓に依頼が来たのであった。

神凧家から依頼が四条家に来るのは70年近く間があった事もあり名誉な事であったが、今の楓の状態を見ると受けていいかどうか瑞穂は迷ってしまっていた。



神凧家はすでに現当主の夏雅の許可をもらっている旨を伝え、妖魔も神炎使いならば問題ないほどの物である事を説明してきた事もあり、瑞穂は奥多摩という自然で気分転換になればと依頼を受けた。

瑞穂は、楓の部屋に入り神凧家から仕事の依頼が来た事を伝え、詳細を説明した。

「楓どうするの？お母さんとしてはあんまり無理には進めないけど」「ううん、大丈夫。お母さん、私には四条家の次期後継者としてきちんとしないといけないし、もうこんな事くらいしか残ってないから大丈夫」

楓は、昔の活発に光輝いてた瞳が嘘のような虚ろな瞳でそう答えた。

そう、私にはもう、これしか残ってないもの。

大丈夫、私が例え死んでも神凧家には私の変わりはまだたくさんいるもの……

早く、楽になりたいな……死ねばあなたに会えるのかな？

もう、わかんないよ。

ルーク、もういいよね……でも記憶から消えちゃたならもう怒られないから大丈夫かな

楓は自分が危険な発想を無意識にしているのにも気付かずにいた。

翌日、楓は奥多摩に向った。

## 壊れた齒車 2

楓は奥多摩のケーブルカーに乗り山の奥にある社を潜っていた。

社を超えると明らかに空気が違うのが分かる。

とても静かदैいて清められた空気が周辺に満ちており聖域と言っても過言ではない。

さらに先に進むと神社関係者だけの石造りの道が視界に入ってくる。そして前方に洞窟が見える。

洞窟の入り口には、神主と思われる人が立っていた。

「お待ちせしました。神凧家から派遣された四糸楓といいます。」

住職は楓があまりにも若かった為、驚いていた。

「いえいえ、こちらこそ申し訳ありませんでした。まだ封印が完全に解かれたわけではないのですが、私共の家系ではすでに力が失われて久しく神凧家をお願いをしてしまいました。お恥ずかしい限りです。」

「御気になさらないでください。妖魔滅殺するのは神凧家の仕事です。」

楓は、光を無くした瞳で神主を見る。神主は感情を捨てさった楓の目を見て、一瞬危険な感じを受けていたがそのまま話を続ける事にした。

「四条様それではこの入り口から先に進むと大体5分程度で大きな広間に突き当たります。そこに封印された者の封印または浄化をお願いします」

「分かりました。」

神主の横を通り過ぎて楓は洞窟の奥に入っていった。

楓は高さ2m横幅2mの洞窟を進むと辺りを包む空気がどんどん重くなっていくのを感じた。

神主の言ったとおり5分ほど進むと大きな広間に出た。

広間は直径100mの球形をしており中央に祭壇があった。

ルークと優が見ることが出来たならば、日光と同じ物だった事に気づきその危険性に気づいた事だろう。

楓が中央の祭壇がある所まで続く橋を進んでいくと

トクン・・・トクン・・・

と生き物の心臓の鼓動が聞えてきた。

「えっ!?!」

周囲を見ても異常はない、橋の上から真下にある地底湖を見ても何もなかった。そして上空を見ると巨大な黒い球体が空間に縫い付けられるようにして存在していた。

その球体は楓が見てる中でゆっくりと球体に亀裂を入れていく。球体全体に亀裂が入ったと同時に4対の白い翼を持つ男が球体を破壊し姿を現した。

「やっとこちらの世界へこれたか。だが、妖魔の体を喰らい尽くして顕在しても本来の力の1割もこれでは出せんな。まあいい今はゲートの起動が最優先だな」

楓は日光で対峙したモノとあまりにも風貌が似ていた為、その姿を見て固まっていた。

そのまま、翼のモノは楓が眼中にないように祭壇へ足を薦めていく。

「ま．．．待ちなさい、その翼人。ここは、一般人が通って良い場所ではありません。即刻立ち去りなさい。」

楓が翼のモノに言うと

「ん？」

ようやく楓に気がついたかというように顔を楓の方へ向けてくる。

「おや、人間ですか、それも女性。これは失礼しました。私の名前はウリエルと言います、そこで静かにしてください。女性を殺すのはあまり好きではありませんので」

ウリエルはそのまま、祭壇の方へ向っていくが、楓はウリエルはあの日光を襲った仲間だと思つと好き勝手にさせるわけにはいかなかった。

周囲の精霊の認識しながら楓は自分の炎と黄金きんから神炎「緋炎」に

昇華していく。

視界のウリエルが祭壇まであと20歩と言う所で神炎を打ち込む。そして神炎が断ち切られた。

「な！つ．．．！」

その瞬間、楓は自分の右肩が焼け付くような痛みを感じた。そして私は視界を何かが弧を描いて地面にポトツと軽い音を立てて落ちたのを見た。

それは白い、人の腕だった。

え？なに？あれ？

右肩を見ると、肩から先がない．．．

アアアアアアアツと祭壇のある広間を楓の絶叫が染め上げた。

後ろを見ると、ウリエルと言った男が困った顔をしていた。

「まったく困ったものですね。手を出さなければ死ななくても済んだものを、ですが今のはガブリエルから報告があった色つきの火ですよね？主から計画の邪魔になる可能性があるため、色つきの火使いは全員殺すように言われてまして申し訳ないのですが死んでください」

ウリエルは右手に掲げている炎の魔剣フランヘルジュを持ちながら楓に哀れなモノを見る視線を向けてきた。

楓は神炎を周囲に展開し結界を作り出す。

その直後、楓の後ろから

「私は火を統括する者ですよ？貴方達の火遊び程度では傷一つつける事はできませんよ。」

ウリエルはそう言うと、剣に纏わせていた火を消して、剣先を楓の背中に差し込んでいく。そのまま心臓を貫き楓の胸から剣が姿を現した。

楓は、自分の体に背中から剣を差し込まれる痛みとそして心臓と突き破られたときに致命的な何かを失った感触そして胸元から剣が姿を現したのを見て、私死ぬんだ・・・と確信した。

ルーク、たすけて・・・もう一度会いたいよ。

私は涙を流しながら意識が失われていくのを感じた。

ウリエルは少女を貫いた剣を遺体から抜き去るとその少女の顔を覗き込んだ。

「ふむ、恐怖の顔を見せると思ったら、涙を流しながら何かを求めるように死ぬとは。人間と言うのは謎が多いな」

そしてウリエルは楓に背を向けて祭壇へ足を進めた。



雪は、ルークを送ったあと2度目のミミールの世界の訪問の際にフレリアル公国のフレイア城で謁見を申し込んだら、フランの部屋に案内されてしまっていた。

本来ならば、騎士を辞退した時点で謁見という形しか会うことは出来ないのだが、ストラウス砦の戦いにおいて国を救った英雄としてフランの一存という事で無理矢理部屋に連れて来られたのだった。

部屋に入ると、フランはぶすつとした顔をしていた。

二人きりになるとフランは雪にベットに腰掛けるように言ってきたので雪もそれに習ってフランの横に腰を下ろした。

「それじゃ、雪！私の護衛を辞退した理由を切り切りと吐いてもらいましょうか？」

そのまま、フランに肩を押されてベットに雪は押し倒されてしまい、その上からフランが抱きついてきた。

雪は、溜息を着きながら、フランの直属護衛を辞退したのは帝国が企てていたこの世界を滅ぼし別世界への侵攻を止める為に、急務に動く必要性があったからと説明した。

「そうだったのですか」

フランは、この世界が滅びるなどその当時言われても絵空事にしか



思えなかつただろう。

それでも、きちんと行ってほしかったと思っていた。

「はい」

「それでは雪、今度からはきちんと行ってから行動しないとダメですよ？」

フランは怒ったふりをした。

「わかりました。そういえば、ルーク殿はいますか？お城の方に所要で出かけてると聞きましたか？」

「ええ、もう戻って、執務をこなしてます」

「それと雪、ビックニユースがあるのよ！ルークがねあさって結婚するの。」

「そうなんですか」

雪は自分が沈んだ気持ちで答えた事に気がついていなかった。

「雪、どうかしたの？」

「いえ、何でもないです。そろそろ元の世界へ戻らないと行けないので一度ルークの様子を見てから帰りますね。」

雪はそのままルークの元へ向った。

フランに教えてもらったルークの執務室に向って歩いてる時に中庭

から男女の話し声が聞えてきた。

一人はつい先日聞いたばかりのルークの声だった。そちらへ視線を移すとルークが赤髪の女性と楽しく話してるのが映った。

これでいいんだよなと心の中でざわついた思いをしながら元の世界へ転移した。

雪はその足で、四条家へ足を運び四条家の正門で固まってしまっていた。

なんだ？なんで葬式の準備なんか？

慌てて、四条家の中に入ると四条家の広間でいつか話した夏雅が視界に入った。

「夏雅さん！これは一体どういう・・・え？」

葬式の写真を見るといつか見た、楓という女性の写真が立てかけてあった。

「雪さん、娘の楓が何者かに殺されたのです。」

夏雅も体を震わして嗚咽を耐えていた。

「私が、許可を出さなければ娘を殺したのは私だった。」

雪はそのまま、瑞穂が寝ている部屋へ案内してもらい部屋に入ると憔悴しきった顔をした女性が寝ていた。

「瑞穂は、楓が死んだと聞かされた時に倒れてしまっただけと目を覚まさないのです。」

雪は瑞穂の枕の傍らに小さな4cm四方の金属で出来たペンダントを見かけた。

「夏雅さん、これは？」

「これは楓の遺体が発見されたときに手に大事に握っていた物です。何かあるのかと思います、瑞穂の傍らに置いてあるのですが」

雪は、金属の表面に書いてある文字を見て、フレンリアル公国の言語と気づいた。

そしてこれを渡せるのはルークのみ。

「夏雅さん、楓さんはどのように殺されたのですか？」

雪は夏雅が耐えているのを感じていたが、これは重要な事だった。殺した相手が分からないとどうにも対応が出来ないからだ。

「娘の右肩先は鋭利な刃物で切断されていて傷口は炭化。そして背中から心臓を一突きにされていました。」

「つまり相手は人間に順ずる者という事ですね、それとこのペンダントですがお借りしてもいいでしょうか？」

「ええ、ですが何に使うのですか？」

「ちょっと所要ですよ」

そついいながら、雪は初めて、自分から異世界への扉をこじ開けて移動した。

## 壊れた齒車 4

2日後に結婚式を控えたルークは、執務室で仕事をしていた。

そして、いつものミルアの控えめなノックではなく、ドン！と言う音と共に部屋の入り口のドアが爆砕した。

ルークは城の中でこんな事になるとは思っ居ない為、呆然と扉を破壊した者に目を向けていた。

黒髪に黒眼の女性・・・雪

「こ・・・これは、どうしたのですか？雪殿？」

ルークは雪が何故かすごい怒り狂ってるのを感じていた。

そのため、思わず敬語になってしまっていた。

雪はそのまま、ツカツカとルークの元まで歩いていくとルークの胸倉を掴み、丹田を通し増幅した力でルークを執務室から見える鍛錬上へ投げ飛ばした。

城内にガシャーンという音が響き、窓を突き破りルークは50mほど先にある鍛錬上へ向っていく。

空中で体制を整えて床に足から着地するが、すでに雪は目の前に移動してきた。

ルークは何故このような事をされたか一切覚えがなかった。

そして雪も何故、こんなに腹が立っているのか分からなかった。

楓という少女が苦しむ思いをしているのに、ルークが全て忘れて能天

気に他の女と仲良くしてるのを見た時からムカムカいらついていた。雪は服のポケットから4cm四方のペンダントを出すとルークの足元に落とした。

ルークはそれを拾いながらも、何故か最近忘れていたモノが胸の奥からこみ上げてくるのを感じていた。

「ルーク、ミミールから聞いたけど、そのペンダントには本来の持ち主だった者が本当に守りたい人、大事だった人にそれを渡す事によりその人の見てる視界がどんなに離れていても見る事が出来るって聞いた。」

「ルーク、本当に忘れたの？」

ペンダントを握りながらもルークは雪が何を言ってるのか理解できないでいた。

それでも何か大切な物を忘れてる思いがこみ上げてくる。

「ちっ、ミミールのババア。存在事構築し直したのか？」

普段の雪からは想像もつかない悪態であるが

そして本来ならば使わない術をルークのペンダントに向けて展開していく。

今、雪がやってる事は世界同士の秩序を破壊する行為、それは分かっているが自分の中の何かがこんな結末ダメだ叫んでいる。

雪が展開しているのはペンダントが記録している情報を大気中に投影すると言う魔法式

魔法式が発動すると同時にペンダントから光が零れそれが大気中に  
投影されていく。

日光の時に戦った緑色の神官服を着た翼を生やした者 ガブリエル

「そして、楓の思い」

もう、ルークったら何してるのよ・・・

花火綺麗だね・・・

ルークにお別れ言うときくらいは笑顔で言わなくちゃ・・・

花火を後ろにすれば泣いてるの分からないよね・・・

学校から帰ったらルークが心配しないように笑顔で別れを言おう・・・

え、ルークがもういない？・・・

なんで？．．．．．

きちんとお別れも言っていないよ．．．．．

でも私は神凧家．．．

自由な恋は許されない．．．

それでも会いたい．．．

一緒にいたい．．．

貴方じゃないとダメなの．．．

ルーク会いたいよ．．．

ルークが居なくなるんだったらこんな力いらなかった．．．

だって貴方が好きなの．．．



疲れたよ・・・

死ねばルークに会えるのかな？・・・

でも死んだらルークに怒られちゃうかな？・・・

でもルークは戻った時に記憶が全部消去されるって言ってたから大丈夫だよね・・・

場面は切り替わりウリエルに右腕が切り飛ばされて心臓を貫かれた映像が流れる。

最後に

ルーク・・・・・・・・・・最後にもう一度だけ会いたか  
った・・・

その言葉で大気に投影されていた映像が消える。

ルークと雪はその情景を呆然として見ていた。

その様子は対照的だった。

雪は怒りに満ちた表情をしていた。忌々しいこの力を植えつけた奴らがやっと見つかったからだ。

ルークは、安心して膝をついて崩れ落ちていた。

「何故だ！何故忘れていたんだ？」

「完全には忘れていなかったと思う。結婚する相手も同じ髪の色だったし？」

「っ・・・！そうだったのか、安心していたのは無意識に求めていたからだったのか」

「はつきり言つて、今回のルークに教えたのって私の八つ当たりの部分が多いんだよね。なんかルークの事を好きな奴が死んで、それをルークは知らずに幸せを掴もうとするのがイラツときたというか、なんというか。だから八つ当たり」

「それで、どうする？」

「どうするとは？」

「賭けだったけど、ミミールがルークの時間操作をした際に、一度

だけ楓の生きていた空間へルークだけ戻る事ができるように仕掛けをしておいたんだけど、それを使えば楓を助ける事が出来るかもしれない。丁度このお守りが目印になるし。あとは些細な問題点があるんだけど、無理矢理時間転移をさせる魔法になるから何が起きるか分からない」

その言葉に

「だが結婚式は明後日だ。もう取り消しは効かない」

突然、鍛錬上の観客席の方から女性の声が聞えてきた。

「ルーク、私は他の女の影を自分に重ねられて好かれるのは好みませんわ」

「ミルア・・・」

「ルーク、私は貴方が確かに好きです。でもそれは自分に自信をもった貴方が好きなのですよ？それに恋はライバルがいた方が燃えますすしね。」

「すまなかつた、ミルア」

「大丈夫です。他の女に重ねられて好意を向けられていたのは薄々感じていましたから。それでも良かったと思っていましたけど、今の貴方の顔を見てしまうと毒気が抜かれました。がんばってきてください」

「雪殿、助けにいきます。」

「ルークもう一度だけ言うよ、相手は投影した画像から見ても相当の使い手。最初から全開で行かないと死ぬからね。それとその時間軸にいる私に分かるように魔法式を渡しておくから着いたらすぐに発動してね。」

「分かりました、それではお願いします」

「ok」

雪はチラリとミルアを見る。

「ミルアさん、ごめんね。結婚式の邪魔しちゃて」

「いえ、他の女性の影に一生付き纏われるくらいならきちんと精算して改めてアタックしますから大丈夫です。」

雪はそれを聞きながら空間に時空間転移魔法式を構築していく。

「それじゃ、ルークいくよ!」

ゲートが力ある言葉と共に展開しルークは消えて言った。

広い空間にウリエルの言葉が響く

「私は火を統括する者ですよ？貴方達の火遊び程度では傷一つつける事はできませんよ。」

剣に纏わせていた炎を消し、ウリエルは楓の心臓に向けて剣を背中から差し入れようとした瞬間、剣へ衝撃を受け後方へ吹飛ばされた。

「何者だ？」

楓は、ウリエルの困惑した言葉を耳にして後ろを振り返った。

そこには、ずっと会いたいと願っていた人が楓にやさしい眼差しを向けていた。

## 悪夢終るとき

「大丈夫か？楓。」

ルークはいつの間にか、ウリエルに斬り飛ばされた楓の腕を右手にもっていた。

そのまま、ルークは楓に治療を施そうとするが、ウリエルもそれを黙って見ている甘くはない。

一瞬で間合いに踏み込み、ルークの首に向けて剣を振るう。

ルークはウリエルに一瞥し、左手に握ってる魔剣グラムを振るい炎の魔剣を弾き飛ばす。

炎の魔剣が宙を舞い、地底湖へ向けて落ちていく。

ウリエルは急いで、ルークから離脱し剣を空中で受け止めるがその間にルークは右手に持った楓の腕を肩口に当てて、回復魔法を唱える。

『天使の息吹 神々の煌き 大いなる大地の恵み 今ここに傷つきし者へ 神の奇跡を』

ミミールの世界で、最上級回復魔法SSランクの魔法を発動させ、楓の腕を接合する。

傷口が炭化している為、動くようになるかどうかは半分の確立だが、一命を取り留めた事にほっと一息つく。

それでも一生残る傷を楓に負わせたウリエルに対しては殺意が湧き上がってくる。

自動的に魔法信号が発動しても分からないくらいに静かに心の奥底では灰燼のごとく怒りが渦巻いていた。

ルークを見て、安心し倒れた楓を床に置き、設置型の防御魔法を展開する。

5分間だけの簡易防御だが、10個近くの宝珠タリスマンを使う事により完全絶対防御を発動する事が出来る。

ウリエルは突然現れた、男を警戒していた。

神速の斬撃を1度ならず2度も止められたからだ。

だからこそ、男がする事に対して、割り込みはしなかった。

「貴様は、何者だ！」

「ルークだ。お前はここで死ぬんだからこれ以上は必要はないだろう？」

ルークはウリエルが掛けて来た言葉に対して、冷静に対応した自分に驚いていた。

怒りが度を越えるところなのかと納得した。

「それでは、ルーク。貴様を殺して後ろで寝ている女も止めを刺して終わりにしてやろう」

ウリエルがその場から消えてルークの背後から斬りかかってくるが、その場にはあまりにも早く動いた為、ルークの残像が残っていた。

ルークは膨大な魔力の器を使い、精霊から変換した全ての魔法力を肉体強化にそして魔剣グラムに埋め込んである宝珠を発動し、高周波を発生させていた。

ウリエルがルークの残像を斬り空振りした所を狙い、上段からグラムを斬り下ろす。

ルークの魔剣グラムがウリエルが手元に戻し防御をしようと思った  
炎の魔剣<sup>フランヘルジュ</sup>を切断しウリエルを頭から一刀両断にした。

「ば、ばかな。人間如きが我を倒すだと……………」

ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

広間に断末魔が響きウリエルが憑依した妖魔は黒い粒子を散らしながら消滅した。



楓はルークに抱しめられてる格好で目を覚ました。

「楓、大丈夫だったか？」

ルークの声聞いて、ずっと会いたかった思いが心に溢れていく。虚ろだった瞳が、涙で濡れて光り輝く。

そのまま、楓はルークの胸に頭を寄せてルークを見上げた。

「うん、ルークずっと会いたかったよ、私、ルークが居ないとダメなの、もうどこにも行ったら嫌。我俣って言われてもいい。ルークと一緒にいるためなら神凧家も力もいらさない、だからずっと私と一緒にいてほしいよ」

「ああ、私も楓と共に生きていきたい。そのためにはどんな事でも乗り越えて見せる。たとえば、世界が相手でも身分を失おうとも一緒に居たい。だから」

ルークはズボンのポケットから一つの指輪を出した。

「楓、私の国の風習で結婚したい相手に指輪を送る慣わしがあるんだが……」

「うん、それで？」

「送った相手がその指輪をつけてくれるとプロポーズを受けてくれたってことになるわけなんだが」

ルークは顔を真っ赤にしながら楓に伝えた。

「もう、ルーク。プロポーズの時はきちんと相手の目を見ないとダメだよ！」

「ああ、分かってる」

ルークが楓の瞳を見るとそこには強い輝きが満ちていた。

「はい、ルーク。左手の薬指にお願いね！」

「ああ、」

くっ、思ったより時間がかかった。

雪は魔法信号を受け取り急いで駆けつけた、広間に入ったと同時に

「ルーク、大丈夫．．．．か？」

雪の視界に入ったのは、楓が両腕をルークの首に巻きつけながらキスをしていた風景であった。

楓の左手の薬指にはトパーズの指輪が地底湖の蒼い光を吸収し反射して光って幻想的光景を醸し出していた。



## エピソード（前書き）

文章が途中で切れてしまっていました。

申し訳ありません。

## エピソード

あの奥多摩の戦いからすでに一週間が経過していた。

あの戦いの場で、ほとんど動かなかった私の右手はひどい裂傷を残したまま病院でも地術師でも手の施しようが無いという事で、分家の満場一致により現役からは退かされた。

神炎使いの血統は子孫も優秀な術者が生まれる事が多いため、これから子供を生む道具として使おうという分家の意向が丸見えだった。そこにルークとの結婚を宗家に伝えた所、分家から猛反対にあったが、ルークの全力全開の殺気を受けて分家の当主は全員気を失うという醜態を敵馬様や煉さまなどの宗家の前で晒すという事をしたこともあり、半ば力押しで婚約の話は通った。

その後は、雪さんが治癒魔法で私の右手の裂傷を含む全ての傷をこつそり治してくれた。

その時、雪さんは私のせいでもあるからね！これでチャラだよって笑っていたのは印象的だった。

ルークを無理矢理、時空間転送した影響はお互いの世界にとっても深刻な影響を与えていたようで、私とルークはお互いの世界を行き来する事により世界に存在するマナと存在の力というモノをお互いが死ぬまで安定させないといけないという事だった。

つまり、二人死ぬまでいつでも雪さんが言っていたミミールの世界と私達の世界をルークと私は何の制約も無く行き来できるらしい。

でもお互いの世界の物は持ち込み禁止という事は雪さんにすっぱく言われた。

最後に、お守りと言うペンダントをお互いに一個づつ持つ事によりペンダントを媒介にして世界を行き来できるようになってくれた。

なんでもその方が都合がいいからとか？

謎だった。

フレリリアル公国へ、ルークのお父さんであるドルイネスさんに結婚の挨拶に行った時は、ルークはかなり怒られていた。

許婚はどうするんだと！

ルークは一日かけて、あらゆる方面へ謝罪して回り精算してきてくれた。

ドルイネスさんとその間話してたけど、堅物だけどやっぱりルークのお父さんだなーと思った。

融通は効かないけどきちん筋は通す人って感じ？

そして今、私達は、フレンリアル公国王都フレイアにある高さ50m幅30mというラーストル教会で結婚式を挙げていた。

どうやら雪さんが手を回してくれたようで一週間だけ両親と友達と神凧家宗家の方と綾乃お姉さま、和麻さんをこの世界での滞在許可をこの世界を管理してる神からもらってくれたようだった。

本当に雪さんって何者？って感じ

私は今赤い絨毯を上を歩いている。着ているドレスは日本で言えば、純白のウエディングドレスプリンセス風みたいなものって言えば分かりやすいかな？

でも、王宮御用達の職人さんのオーダーメイドだったので一言言わせてもらえば、お・も・い

ルークの前まできて、ルークを見上げると長身に整った容姿さらに白いタキシードが相まって見惚れるほどカッコよかった。

思わずぼーっとしちやたけど、誓いの神父さんの代役をしたフランって姫様が面白かったのは内緒。

この国の姫様まで参加しちゃうとかどれだけルークはすごいのよ

そして、ルークが私のベールを上げて私とルークは誓いのキスをみんなの前でしたんだけど、途中からはてんぱってて良く覚えてないのよね



そのあとは一週間、地球からきた皆はフレンリアル公園を堪能して帰って言ったんだけど、その際に雪さんは水色の髪をした妙齡な女性に首根っこを掴まれて町の路地に連れていかれてた。

ps

いま私は死ぬほど仕事をしています。

え？どこでかって？

ミミールの端末からアクセスして必死にバグ取りしてる所です。

もうかれこれ、3週間徹夜続きです。

「あら？雪さん後日談なんか書いてる暇あったらさっさとバグを取ってくださいね」

「あなたが勝手に行った時空間転送にさらに地球からの部外者の不正入出。さらに異世界と地球を常時行き来する為に作った宝具。そ

れに消費されたこの世界の存在の力と発生するバグ。全部とり終わるまでは返しませんよ?」

「ちょwまっww」

「一応、私にも学校と仕事があるんだけど」

「大丈夫ですよ、外界との時間は完全に!!遮断してますのでいくら残業しても地球では1秒も誤差はでませんので安心して仕事してくださいね」

「まって、3週間寝てないんだけど」

「大丈夫です。そんなヤワな鍛え方してないでしょう?」

「がくがく、こんなに微笑みが怖いと思った事は今まで一度もありません。」

「私、この仕事が終わったらお風呂入るんだ・・・」

## エピソード（後書き）

一日でギリギリ纏めた感じでしたが如何でしたでしょうか？

ご感想、ご要望、気になった点がありましたらぜひご投稿よろしく  
お願いします。

作者はご投稿があるとはりきって返信しちゃいます！

これからもよろしくお願いします。

## 新たなる胎動

巨大な神殿の中枢部から少し離れた区画。

そこには大小さまざまなおポットが並べられていた。

その中に一人の男が入っていた。

その男は4対の翼を持ち、ポットが抜け出すとよろけて床に膝をつく。

「くっ、カハッ」

血を口から吐きながら、その男が倒れこんだ。

「どつした？ウリエル。お前ほどの男が倒されるとは相当の者なのか？」

「はい、ルシフェル様」

「1割程度しか力が出せないとは言え、手も足も出ずに敗れました。」

「

「ほづ。それは面白いな」

「それに、炎の魔剣フランベルジュを破壊されました。」

「それはそれは、面白い遊び相手が出来たではないか？」

「はい、ですが、フィードバックでかなりの肉体損傷を受けたので休眠に入ります」

「わかった。もうすぐ始まる約束の日に向けて休め」

ルシフェルは8対の翼を羽ばたかせ、巨大な神殿の入り口から数多の銀河を眺め呟いた。

「もうすぐだ、もうすぐ始まりと終わりが交差する時が来る。」

拝啓、女の子が降ってきました

地獄の残業というバグ取りを終えて、今、私は元の世界へ帰るためのゲートを空間に展開していた。

その時、私は睡眠不足によりゲートが何らかの干渉を受けていた事に気がつかなかった。

そしてそのままゲートを潜ったところで私の意識は途絶えた。

アクテルス銀河の外れに位置するA E - 199移民開拓惑星

ここは、宇宙の航行中トラブルにより不時着した移民船が開拓した星

母星であるユラウスト星より計算上27万光年離れてる事と宇宙航行通信が故障していた事もあり、救助は絶望的であった。

その為、今から700年前に不時着した3万人の移民はこの星を開拓する事を決定。

それから色々とあり、今に至っていた。

これはそんな移民開拓惑星のトーラント大陸にあるリメイラ合衆国の首都スワントで起きた物語である。

首都スワントの第41区画にある、居住スペースに一人の20歳くらいの男が一日の仕事を追えてベットに横になっていた。

男は、擬似空間投影された映像を切り替えて、今日のニュースや明日の天気を見ていた。

「あーあ、明日雨かよ、だりい」

そのまま男は、音声で映像を切り替えていく。そして一つのドキュメントで画面を停止させていた。

ドキュメンタリーには過去、絶滅した生物というお題目で女性を取り上げていた。

この星では特殊な電磁場が影響しているのか、女性が生まれない。その為、クローニング技術を使い、友人・家族・知り合い同士の遺伝子を人工的に組み合わせそれにより子孫を増やしていた。

「まったく、ずっと昔の事なんか考えても始まらないだろ、はあなんか面白い事ないもんかねー」

男はそう言つとベットに横になり、体を休めることにした。

イイイイイイイイ

「なんだよ、うるせえな」

男は被っていた布団をずらして部屋を見渡すと、ベットの上で何も無い空間が歪んでいくのが目に映った。

「おいおい、なんだよこれ、空間の歪み？」



そうしてる間にも、空間に数千の幾何学的な文字が並びそれが円を紡いでいく。

「テレポーターゲート？軍事施設同士を繋ぐ物なのになんでうちにくるんだ？」

ゲートが完全に形作られると同時に、男の部屋の中は空間と空間が繋いだ際の余波により微弱な風が舞いおこった。

そして男が見ている目の前でゲートから一人の少女が慣性の法則に従って男のベットの上に落ちてきた。

「な、なんだよ、一体？」

男は震える手で自分の上に落ちてきたモノをどかさうとする。

むじょ

「うあああああ」

今まで味わった事のない感触に男は悲鳴を上げて広くはないベットから転げ落ちた。

そのモノは今の衝撃でベットの上に上向きで寝転がる形になってしまっ、

「な、なんなんだよ・・・」

引きつった声をしながら、その落ちてきたモノを男は観察していく。それは、今まで見たモノとはまったく違った生き物であった。

ベッドの上に投げ出された拍子に散らばった黒く煌く髪、ふっくらとした女性特有の顔に長く細い眉に長いまつげ、ふっくらとやわらかそうな朱色な唇、掘りの浅い瞼に均整の取れた鼻、それぞれが絶妙な位置に配置されていた。

そして白いワンピースの裾から伸びる細く白いが健康的な輝きを放つ手足。

ワンピースの胸元は、少女の呼吸に合わせて2つの双胸が上下に動いていた。

「え？これって」

男は急いで先ほど見たドキュメンタリーの番組を見た。

そのドキュメンタリーで取り上げてる女性と落ちてきたモノは特徴が似ていた。

．．．．ろ

お．．．ろ

おい、おきる！

知らない男の声が聞えてくる。

疲労しきっていた残りの体力を総動員して私は話しかけてくる見慣れない服装をした男の人を見た。

疲れすぎて頭がふらふらしてるのが自分でも分かる。

でも、私はアパートで同棲なんかした覚えもないし、する気もない。

ゆっくり部屋の中を見渡すと、いつもの自分のアパートの部屋では無い事に気がついた。

「やっと起きたか」

私の前に座ってる男性は、私の顔を見ながら溜息を吐いていた。

「なあ？起きたなら出て行ってくれないか？軍関係者の実験か何か知らないけどテレポーターゲートで居住区エリアに来るのは少し非常識だろ、さっさと出ていってくれ」

その男性は、私を立たせると手首を掴んで玄関と思わしき方向へ引っ張って行った。

そこで、私の体力は尽きてしまい、意識が遠のいていった。

突然、倒れた女を見ながら、俺は溜息をついた。

まったく良い迷惑だ。軍の関係者か何か知らないけど、居住区に不法侵入して更に気まで失うとは、この女が起きたら所属してる軍を確認して軍に連絡をした方が早いな。

と俺は考えた。

とりあえず、起きるまではこの女を寝かせたほうがいいと思い、指を振るい俺が住んでる居住区を管理しているボタンを複数空間に投影してから空間拡張をするボタンを指で指定する。

そうすると、ダイニングルームの右側の何も無い壁に空間拡張を利用した部屋が作り出される。

俺は気を失った女を脇に抱えて作り出した部屋に入ると、再度空間に居住区管理ボタンを表示し、部屋のレイアウト項目を選んだ。

レイアウトの詳細が表示され、その中の一つベットを選ぶ、設置場所をどこにするか？と聞いてきたので作り出した部屋の隅にベットを投影するようにする。

しばらくすると大気中の粒子を構成し、一つのベットが部屋に出現した。

遙か昔、母星の貴族階級の女が好んで使ったとされるベットだ。

その上に女を乗せてから掛け布団をかぶせた。

その女の身元が分からない事もあり、元壁だった場所に空間を隔てる超高度のカーボン製のミラーを設置した。

その後、俺は翌日の朝に目を覚ましたが、ミラー越しに見る女はまだ寝たままで眼を覚ます様子はなかった。

俺は仕方なく、仕事に向かった。

んゝ、私はベットで眼を覚ました。

まだ、若干頭痛がしていたけど、問題ないと思い、部屋の中を見渡すとやっぱり見たことがない部屋だった。

私が寝ている所は6畳の部屋で床はフローリング。

寝ているベットはゴシック風の凝ったデザインのピンク色で統一された物だった。

ベットから降りて素足でフローリングに足をつけると絨毯のような感触が足の裏からした。

部屋からダイニングルームに出ようとすると見えない壁に顔からぶつかった。

痛った〜いと思いながら今度はゆっくり手を当てると見えないけど何かがあるのが分かる。

しばらくすると、この家の主？が戻ってきたのか音が近づいてきた。

仕事が終わりに、俺が家に帰ると女がおきていて、ミラー越しにこっちを見ていた。

こっちからは見えるけど、向こうからは見えない仕掛けになってるんだったなと思い、解除するとその女が支えを失ったようにしてダイニングルームに倒れこんできた。

思わず、手を差し出して支えて近くからその女の顔を見てしまった。寝ているときもそうだったが、起きて活発そうに瞳を動かしてる姿を見ると心臓の鼓動が早くなり、顔が熱くなつていくのが分かる。

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫」

私は思わず答えてしまっていた。

俺はその女が話した声を聞いてどくんと一際大きく心臓が高鳴ったのが分かった。思わず俺、心臓病なのか？と疑うくらいに

このままでは話が進まないと思い、何も調度品がないダイニングル

ームに椅子とテーブルを投影させ、そこに女を座らせた。私は、空間にいきなり現れた調度品を見て驚いた。

俺はそのまま、食料システム庫のコンソールパネルを操作し大気中の成分からオレンジジュースを2人分作りだし、一つをその女に渡した。

私はもらった飲み物を口にした。まるで・・・フアンタオレンジ？みたいな味がした。

私に飲み物を渡した男性は、私の前に座ってじつと顔を見てきた。

「お前、どこの軍の所属なんだ？ゲートって事は今実験中のテスト中なんだろう？どこなんだ？」

「え、軍？ゲート？テスト？」

「はあ、じゃお前どこの都市に住んでるんだ？」

溜息を吐かれながら言われても・・・

「えっと私には雪って名前があります。お前とかじゃ友好的な話はいえないと思いませんか？」

「わーったよ、俺の名前は、アルベルト・スターゲイザー。仲間は皆、アルと呼んでる」

「分かりました、アルさん。それでここはどこなのでしょう？」

「へ？」

俺は、雪という女が何を言ってるのか一瞬理解できなかった。

拝啓、女の子が降ってきました 2

「どういうことだ？ここがどこか分からないのか？」

「うん」

「記憶喪失か？どこか頭でも打ったのか？いや、むしろ頭が悪いのか？」

「失礼ね！いたって普通だよ。」

「それならアクテルス銀河って知ってるか？」

「全然、知らない！」

なんだよ、って事は全然違う宙域から何かのゲートを潜って飛んで来たって事かよ。めんどくせえな

「でも、そんなに心配しなくてもいいよ」

普通心配するだろ、この女じゃなくて雪、頭おかしいのか？もう帰れないかもしれないんだぞ？

「どういうことだ？」

「ここの星の座標が私の感覚で割り出せれば、あとは私自身でゲート作って帰れるから」

「へーそうな．．．．．はあ？お前、ゲート作れるって単独で作れ



るって事か？」

「う．．．うん」

ちよつとアルの言動から引いちゃた。

「それでね、お願いがあるんだけど、あの部屋を座標が安定するまで貸してほしいなーって」

「はあ？そんなの常識的に考えて無理に決まってるだろ。」

「えー、私他に行く所ないんだもん、お願いだよー。ほら、私こっに見えても一人暮らし長いから家事全般得意だよ！」

「自動的に清掃は大気中に散布されてるナノマシンがやってくれるし、料理はキッチンにある機械が勝手にやってくれるから家事やる必要は無い」

「それより、元気になったなら出て行け！」

「元気じゃないもん！2ヶ月も残業してて寝たり無いから元気じゃないよ」

なんだ、雪って女。ずうずうしいにも程があるだろ。

ドキュメンタリーで女は物静かで奥ゆかしいって言ってたけど全部嘘じゃねえかよ。

「たぶん1週間くらいで帰れると思うからそれまでお願いします」

もういいや、まったく面倒な粗大ゴミが舞い込んできたもんだな。

「わかった、一週間だけだぞ？その間は雪が寝てた部屋使っていないからな」

「はい」

はあ、こいつといるとペースが狂わされるな

私はさつきからずっと気になってたキッチンの方に入っていった。

目の前には、腰までくらいある台の上に高さ1m 幅2m 奥行き70cmくらいの電子レンジぽいのが置いてあった。

タッチパネルがどこにもないんだけど？

開閉場所もないし、仕方なく窓のところの手を近づけると、ブン、と言う音と共に文字が空間に浮かんできた。

良く知らない文字がたくさん書いてあって読めない。

適当にボタンを押すと電子レンジもどきの窓の部分が開いて、ピザぽい？のが出てきた。

食べてみるとピザだった。

「ねえ？アル。手を洗うときはどれを使えばいいの？」

「いま、お前が起動した食料投影システムの横に洗浄除去の機械があるだろ、そこに手を入れてみる」

私の目の前にはヒートフライパンしかないんだけどw

しかたくその上に手をもっていくと、光の粒子が立ち上ってフライパンの中で粒子が回転して消えた。

さっきまでジュースを飲んでベタベタだった指と手の平が綺麗になつてた。

「すごいよ！アル、これすごい！」

「うるせえな、静かにしろよ、仕事から帰ってきて眠いんだよ」

「仕事？アルって何の仕事してるの？」

「あー俺の仕事は大気中のナノマシンの製造と時期が来て使い終わつたナノマシンの回収する事だな」

「へー」

「ナノマシンって分かるくせに他は分からないってお前どんだけ田舎から来たんだよ？」

「世界の技術大国日本だよ」

「ふーん、ずいぶん技術の発展が遅れてる星だったんだな」

「別にいいじゃん！」

「まあな、それじゃ俺はもう寝るからお前ももう寝ろよ」

俺は空間にルーム内の制御システムを空間に投影して部屋内の電気を消した。

もうアルったら一方的に話進めすぎだよ！  
洋服がそのままだしどうしよう

「アルく起きてる？」

「うつせえな！寝るって言ったろ。」

「ねーねー。洋服貸して！実は着替えがないのよね」

「ああ？」

「お願いですじゃ、お代官様」

上目遣いでこつち見て頼んでくるなよな、これでいいか。

「ありがとーYシャツだね！なんか裸にYシャツだとエッチよね？」

「知るか！もう寝ろ」

「むー、言葉のキャッチボールって大切だと思うんだよね」

「キャッチボールの前に人が寝るって言ってるんだからそつちを優先にしろよ」

「はい」

「つたく、疲れてくる。」

「どうやら雪って女もベットに入ったみたいだな」

「おやすみなさい〜ある〜」

「ああ、お休み」

そうして波乱の一日は過ぎた

俺は翌日起きると、雪が朝食を作りダイニングルームのテーブルの上に並べていた。

「あ、おはよう、アル。」

雪の姿を見ると俺と身長が30cm近く違う為か、渡したYシャツを着てるといつか着られてる感じだった。

「でも、すごいねアル。」

私はアルからの返事を聞かずに話した。

「味覚ルーチンエンジンも積んでるなんて思わなかったよ」

「なんだ？それ」

俺は椅子に座るとテーブルの上にはハムエッグとトースト、ベーコンに火を通した物、サラダがあった。

それをそのまま口に入れると、今まで感じた事のないほどの味覚が口の中に広がった。

「なんだ？これ。本当に同じ物なのか？」

「うん、そつだよ。少し味覚がずれてる様だったからね、少し設定してみたの」

「はあ？設定つて、文字読めるのか？それに機械の使い方だつて説明してないだろ」

「なんとなくやってみたよ」

アルファステイグマ  
複写眼を使いましたと言えないよね

「あと、お弁当も作つておいたから持つて行つてね！」

「お弁当？会社にも同じシステムがあるんだぞ？」

「いいから、いいから遠慮しないの！間借りさせてもらつてるんだし」

「わかつた。それと問題が起きたら困るからこの家からは出るなよ？」

「え？」

「そつか、お前は知らないかも知らないがこの星には男しかいないんだよ。だからお前みたいな奴が俺の家で生活するならなるべく外には出ないでくれ。ゴタゴタすると迷惑だからな、主に俺の」

俺はすぐに朝食を食べて、弁当をもって仕事に向つた。家を出る際にもう一度家を出ないように忠告してからだ。

私は、アルが言っていた男しかいないという世界に興味深々だった。すぐに家から出るために玄関に向かい外に出ようとするけど、扉が開かない。

どうやら部屋から出る際には家主じゃないとダメみたいだった。

仕方ないからテレビか何かないか探しても何もなかった。

裸にYシャツのままだと落ち着かないので、アルに教えてもらった洗濯装置の前に来ていた。

目の前には、天井に一つの金属のパイプが横になって壁に埋め込まれていてそこにハンガーをかけるようになっていた。

着ていたワンピースと、下着をそれぞれかけてからパイプにハンガーをかけ手を線の内側から引いて10秒程すると赤い粒子が線の内側だけ舞い踊ってそれが収まったあと洗濯が終わっていた。

時間的には20秒くらい？

ワンピースと下着をもって匂いを嗅ぐとお日様の匂いがした。

アルは今、仕事を終わってから、同僚達と食堂で食事をする所だった。

「なあ？アル。そろそろリヴァイブ相手決まったのか？」

「いや、決まってるないな」

「なら俺とかどうよ？お前と俺のリヴァイブした子供ならきつとカッコイイぜ！」

「俺、そういうの興味ないんだよな」

「まったく、そんなんじゃないつまでたつても子供できないぞ?」

「だからそういうの興味無いって言ってるだろ。」

アルは荷物の中から雪が作ったお弁当を取り出した。

「あれ?それって弁当だよな?」

「ああ、そうだがそれがどうかしたのか?」

「いや、弁当なんて前時代的な作ってくる奴なんかいるのかって驚いただけだ。」

アルはその言葉を聞きながら確かになと思い、弁当の蓋を開けると中には海苔とご飯を重ね醤油で味付けした海苔弁とおかずはタコさんウィンナーにから揚げ、レタスとキュウリのサラダ フルーツとしてオレンジとリンゴをそれぞれ8分の1つつカットした物が入っていた。

アルはそれを見ながら、見たことのない料理を見てなんだこれは? 食べ物なのか?と考えていた。

「アル、ずいぶん手の込んだ料理つくってるな」

「うるさい!」

「っていうかお前、なんで自分が作った物に対していい評価もらってるのに怒ってるんだよ?」



「カズは少し黙ってたほうがいいと思うぞ？」

俺は雪が作った料理を食べ始めたが、今までで一番うまかった。気がついたら一瞬で平らげていた。

そのあとは同僚と仕事をして、家に帰ったが、その時、雪はダイニングルームでぐたーと寝ていた。

まったく、少しは恥じらいもてよなと思い、抱き抱えてベットまで運んで上に下ろした。

そのあと少し気になっていた事もあり、食料投影システムを確認する事にした。

今日、御昼の弁当で食べた食材、あんなのこの星で見ることがないからだ。

食料投影システムと飲料投影システムのコンソールシステムをチェックしていくと、通常では在りえないはずの美しい演算プログラムが組み込まれていた。

ナノマシンの制御の仕事も時たま手掛ける俺の会社では、プログラムの仕事のうちに入るために覚えていたがこのご時世0と1だけで構成する所などない。

こんな物をなんとなくで出来るわけがない。

俺はそのまま、コンソールパネルを移動していくと地球の食材と料理と言う項目があったのに気がついた。

あいつ、本当に地球って所から来たのか・・・

全部は疑ってはいなかったが、まさか本当に違う星から来るとはな。

謎の多い女だと思ってしまっていた。

### 第3部登場人物、世界観、用語編集

登場人物

鈴木雪すずき ゆき

数々の異世界召還において身につけた能力により対魔法戦に置いては無類の強さを誇るが近接戦闘においては致命的な欠点を持つ。

身長152cm 3サイズは上から91 59 90

体重48kg

黒眼に腰まである黒髪

主力は全てを解析する複写眼アルファステイグマ

概念物質から構成されてる武器 《至高剣》 《魔降剣》

短時間しか構成することはできないがモース硬度27の物質ですら断ち切ることが可能

惑星を一つ破壊するほどの自爆魔法を展開する事も可能。

一人暮らしが長い為、家事全般得意。

元、男であるが最近は、私という言葉使いが目立ってきている。いつの間にか3歳児の娘の母親になってしまいました。

アルベルト・スターゲイザー

身長 188cm 体重71kg

金髪に黒眼

年齢20歳

ナノマシンの修繕・回収の仕事をしている。

ガイスター・ブルネイド

身長182cm 体重88kg

金髪に青眼

年齢23歳

ナノマシンの情報統制の仕事をしている。

オルスバス

生体研究所所長

身長177cm 体重65kg

年齢29歳

生体研究所において、政府に不都合な者の人格の破壊や形成を主に  
行っているが、本来の目的は絶滅に瀕している人類を救う事。その  
為には手段を選ばない。

自分自身も寿命が近づいて来てる事もあり、死の恐怖に苛まれている

ハルシオン・ブランディシュ

身長 191cm

体重 89kg

リメイラ合衆国軍N03の地位に当たる地位はリメイラ合衆国軍参  
謀本部長

スワイデルト・マーカスグレース

身長 172cm

体重 119kg

代々受け継がれてきた権力を振りかざす独裁者。

自分以外の者は、コマとしか認識していない。

イスル・ハーバネスト

科学顧問団の筆頭

身長 177cm

体重 55kg

オルスバスの失脚、ライザスが行方不明になったことにより、政府の科学部門を一手に牛耳ることに成功する。

世界観

今回の舞台はアクテルス銀河

技術レベルは地球と比べて2000年は進んでいる。

渦巻きを形成しており、中心部には巨大な質量をもつブラックホールが存在している。

ユラウスト星

アクテルス連合政府の中心となる母星

重力は地球と同程度

人口の増えすぎにより移民政策を実行

アクテルス銀河に500を超える移民星を持つ

AE-199移民開拓惑星

199番目に出発したTYPE-AE-199という名前の移民船の名前から名付けられた惑星

大きさは火星と同程度

大気中の成分は、ナノマシンにより地球の大気と同じように調整されている。

重力は地球の20倍

その為、住んでる者は全員生体改造を受けている。

平均寿命は無理な交配を推し進めている為、30歳程度

女性が生きていけない星の為、男だけしかない。

人口は7000万人

6つの都市が存在している。

トーラント大陸

地球で言うところのパンゲアひとつの大陸しかなく回りは全て海に囲まれている。

リメイラ合衆国

トーラント大陸唯一の国

大きさはアラスカ程度。

スワント

リメイラ合衆国の首都。他に5つの副都市があり都市間を音周により行き来が可能。

用語

リヴァイブ

気のある友人とお互いの遺伝子を掛け合わせて人工子宮で子供を作る事を指す。

テロメアの劣化により子孫を重ねるほど寿命が短くなる。

700年の間で平均寿命140年のユラウスト人は30年まで寿命が短くなっている。

## 投影システム

大気中の酸素などの原子を組み替え、その場にまったく違う物質として作り上げる技術。

移民開拓時代に作られた技術らしいが詳細は不明。

## 音周

物質の出す周波数をエネルギーに変えて推進にするシステム。

## 重力制御システム

一時的にその物体にかかる重力を自由に操作する事が出来る。

## 航行システム

人を乗せない乗り物をプログラムにより自動で目的<sup>オート</sup>地まで連れて行くシステム

## 記憶洗淨

記憶を全てリセットする事、その後新しい人格を作り出す前作業。

## 座標攻撃

指定した空間に直接、事象を起こす事により防御を無効化する攻撃。  
避ける事しか回避する方法はない。



## 狂気

雪が、アルベルトの家に滞在し6日目の朝

「アル、アル」

と雪がアルベルトの寝ているベッドの横で名前を呼んでいた。

俺は既に起きていたが、今日は、仕事も休みのため、惰眠をしようとしていた。

ところが！この女ときたら朝から俺の名前を呼んできて煩くて二度寝できやしない。

「アル」

「アル」

段々とイライラしてきた。

とりあえず、文句を言ってやらないと気がすまない。

「うつせえな！今日は休みな・・・むぐつ！？」

俺は、この女に文句を言おうと女のほうへ顔を向けたただけなのに予想より接近していた女と唇が触れ合った。

その感触は、とてもやわらかくしっとりとしていた。

俺は無意識のうちに、男とは違う、特有の香りを嗅いでしまい思わず女をベッドの中に引き込んでいた。

「え、ちよつと」

私は、突然、アルが振り向いてキスした事に動揺してしまって、抵抗する間もなくベットのの中に連れ込まれた事もありパニックになった。

力で振りほどこうにも、何故か振りほどく事が出来ない。

それに、私の腕を押さえつけてる腕の握力が、身体強化した際の私よりずっと強い。

ミシツと嫌な音がなって

「痛いよ！やめて、離してよ！」

俺は、その言葉を聞いた途端、その女から離れた。

俺は何をしたんだ？女が寝てるベットから立ち上がって女を見ると、女はベットの上で座って、腕が痛いのかさすってるのが見えた。

その腕は紫色に変色していた。

「すまない、そんなつもりじゃなかったんだ」

俺は、そいつの姿を見ながら謝った。

ベットの中に連れ込んだときに、破けたのか白い華奢な肩が露出しており、腰まである髪の毛は何本も顔に貼り付いていた。痛いのか、瞳が潤んでるのが見てとれる。

「もう、いいよ。私も何回も話しかけたのが悪かったから」

私は、アルが素直に謝罪してきたので、私にも非があるしお互い様って事にした。

そのあと、怪我の治療の為に整体治療ラボに連れて行くからって事でこの世界に来てから初めて外にでた。

部屋の外は日本と大差ない感じだった。

私とアルが住んでる部屋は普通の2F建てのアパートだったけど、アルに聞いた話だと話声とか騒音関係は部屋と部屋の間を組み込まれてる周波数除去装置ってのがあるらしくてそれでどんなに煩い音でも一切、お隣さんに聞えないって言うてた。

それと部屋は空間拡張システムを備えてるらしい。聞いた感じ、東京ドームクラスまで大きくできるらしい。

それがデフォルトで全ての住居に設置されてるものだから、びっくり。

歩道に出るとアルは私の左手を握ってきて、指を振るってた。私から見たら何もない空間に手を走らせた後、体が浮いた。

そのまま時速50kmくらいの速さで大きい建物まで来たんだけど、加速・減速の際に一切衝撃を受けなかったから聞いたら、慣性キャンセルって技術とミクロの機械で編まれた歩道と道路には移動する際に発生するエネルギーを前方に展開する事で体に降りかかる物質を相殺するシステムが組み立てるらしく移動してる際にも一切風とを感じる事はなかった。

アルと私が住んでるアパートみたいなのが両端にたくさん続いてたんだけど、不思議な光景だった。

なんというか、無機質な町？

それが、受けた感覚だった。

しばらく進むとぼつんと住宅の中に大きな建物が見えてきた。

その建物の中に入って進むと、アルが左手につけてるブレスレット

「時計？みたいなのを操作してから、JRの改札口みたいなところを通っていった。」

「私はアルに手招きされたので改札口を通り抜けた。20mほど進むと前方に卵型の乗り物があって一つで4人乗りのようだった。」

「それがたくさん並んでいて、アルと私が乗ってからシートに座ると空に浮かび上がってからすごい速度で移動を始めた。」

「アル。これって何なの？」

「ああ、これは音周ってシステムを採用してるんだ。」

「音周？」

「簡単に言えば、物質が周波数を常に発してるのを利用してそれをエネルギーに変えて移動する乗り物なんだ。で、浮いてるのは重力制御システム、移動してるのは慣性航行システムを利用してるんだ。」

「へー。SFみたいだね。」

「SFって良く知らないがそれで納得するならそれでいい。」

「ねえ？アル。上空から見てもまったく植物が見当たらないんだけどどうなってるの？」

「植物？ああ、そういうえばデータチップを最初埋め込まれた時にそういうのが母星にあったて聞いたことあるな。酸素の供給についてはナノマシンで代用してるから問題ないぞ。」

そんなにナノマシン使ってて体に異常はないのかな？

それになんか植物とかないのって何かおかしいよ。

そっか、なんか無機質な町だと感じたのは街路樹が無いからなんだ。

「ねえ、アル。一つ気になったんだけど」

「なんだ？」

「男の人の洋服だと、肌が擦れて痛い。どこか洋服店とかないのかな？」

「洋服店？なんだそれ？」

え？洋服店がない。そういえば町でお店を見かけなかったような

「それじゃ洋服どうしてるの？」

「洋服は粒子を構成して作り出してるから、俺の家にある機械で好きな物作れるぞ」

「そうなんだー」

アルの家に戻ったら使ってみよう。

5分ほどで来た時と同じような形をした駅にアルと一緒に降りてから建物を出た。

やっぱり人が一人も歩いていない。

「ねえ、アル。誰も歩いていないんだね」

「そうだな、好き好んで外を歩く奴はいないな。大抵は家で全部出来るからな」

しばらく進むと、ひとつの白い建物の前についた。高さは300mほど、正面玄関を抜けると受付があつてその画面をアルが操作してから二人で近くにある椅子で順番が来るまで待った。

待ったと言つても1分くらいだったけど、少しするとアルの左に座つていたのでアルの腕にあるブレスレッドが光つて空間に文字が投影されたのがわかつた。

複写眼を起動させないと文字の内容は理解出来ないけど、まあいいかなつて思つてたら、アルに連れられて一つの部屋に入つていった。部屋に入ると20代後半の男性が私を見て、驚いていた。

そこで私は重要な事に気がついた。元男だけど、今はある事情により女性になっている。

男しかいない星に女がいたら？

それでも、その医者？は私の怪我をしていた腕を持つてからどこが痛いのか触診してきた。

「痛いのはここだけかな？」

私は、男に連れられて来た者が男性で無い事に一目で気がついた。

本来ならば触診する必要はないのだが、私達、細胞管理施設者の者は細胞を管理するに辺り特殊なナノマシンにより相手に触れることによりその者のもつ細胞遺伝子を調べる事が出来る。

そして、話をしながらこのメインコンピュータでこの者の遺伝子状態を解析していく。

私の眼球に埋め込まれたリンカーシステムにより視界に遺伝子情報と肉体構成情報が表示されていく。

遺伝形式 XX (女性体) 肉体年齢 計測不能 細胞遺伝子

計測不能 身長体重 計測不能 生体 未強化

次々と計測不能の文字が羅列されていく。  
馬鹿な？こんな事が実際ありえるのか？

それに遺伝形式がXX女性だと？そんな事があるわけがない。それに、生体強化が未強化だと？普通の人間なら生存不可能なはずだ。私は急いで、照合するためにデーターを本部へ送った。

破損箇所 両腕の筋組織 . . . .

どうやら大した怪我では無い様だ。

それよりも驚くのは、この者が女性という点だ。

その女性を連れて来てるのは間違いなく、データーベースから見ても検体培養体 T I R A - 6 5 9 8 4 A 2 - 3 8 から見るように一般人。

私はそのまま、治療する為に粒子コントロールパウダーを使うとした所で

「すみません、急用があつたのを忘れてしまったのでまた、後で来ますね」

私はそういうと、その医者 of 部屋から急いで出た。

アルも私を追ってきたのかどうしたんだ？と聞いてきたけど、私はそれ所じゃなかった。

なんとも言えないけど、嫌な予感がしたからだ。  
ここに居たら行けない。そんな予感。

アルを連れて、建物から出ると建物の入り口から門の間に十数人の男達が立ってるのが見えた。

「なんで、こんな所に軍がいるんだ？」

アルは同様していたけど、私はやっぱりと思った。

この星では女性は生きていけない。つまりは研究対象になるって事こんな事なら、外に出たいて興味で腕の怪我を理由に外に出たのは失敗だった。

「アルベルト・スターゲイザーさん、そちらの検体を引き渡しても  
られないだろうか？」

俺は軍の連中が言ってきた事が一瞬理解出来なかった。

そして、なるほどと理解した。

つまりこいつらは、成人した実験として扱える女の身柄がほしいのかと。

この星では、女性は生まれないが人工的に作るうとして遺伝子を組み替えて行っている。それでも成功はしない。

700年前に不時着したときには女性は普通に生活してたらしい。

つまり生活はできるが、女性という種がこの星では生まれないって事だ。

だからこそ、成人し健康な女性を研究して今のテロメア劣化に歯止めをかけようとしているのだろう。

話によるとこのまま、劣化していくとあと100年ほどで俺達の種は絶滅するらしい。

だからこそ、軍を使ってでも政府上層部は手に入れようとしているのかと

俺が迷っているのを見ると軍の連中は、照準を合わせてきた。

「アルベルトさん、時間がありませんので引き渡して貰えないのでしたら少し手荒になってしまいますが？政府の方から謝礼は出ると思いますので引き渡して貰えないでしょうか？」



軍の連中がそう言いながら、そいつの後ろでは軍の連中が銃口をこちらに向けている。

「こちらの意思は関係ないのか？」

「ええ、これは政府の意向です。国民にはそれに従う義務がありません。」

雪の方を見ると、顔を横に振ってから軍の連中の方へ歩いて行った。そして俺の方を見て一言

「バイバイ、楽しかったよ」

微笑んでそう言ってから、立ち竦む俺の前から軍と一緒に軍用の音周りに乗り眼の前からいなくなった。



今、私はアルと分かれて両脇を挟まれるような形をして軍の乗り物に乗っている。

10分くらいでいくつもの大型の建物が建っている場所に乗る物は降りたわけだけど、その際にアイマスクをつけられて連行された。目隠しとか何プレー？と思いつながら

10分くらい歩いて浮遊感を感じた後、また移動してアイマスクを外された時は無機質な何もない部屋に通された。

ベットはあったけどね。

病院のベットみたいなき感じだった。

連れてこられた人達にしばらくいるように言われて一人にされた。扉にはロックがかかっているみたいで、軽く押したり引っ張ったりしたくらいじゃ開かない。

どちらにしても、座標が確定するまでは帰れないし、下手な行動をするもんならアルにも迷惑はかかる。

本当は、魔法でドカーンと暴りたいんだけど、大人しくしてた方がよさそう。

しばらく、ベットの上でボーっとしてる事にして、ベットの上で寝転がった。

その雪の様子を研究員達は見ていた。

「ずいぶんと落ち着いていますね」

「普通ならば、喚いたり騒いだりするはずなのだがな」

「オルスバル所長。」

「どうした？」

「所長が、先ほど命令したあの部屋に設置されている記憶洗浄装置がああ検体に効いてません。」

「なんだと？」

「それだけではありません。」

「ナノマシンを使った、記憶の改竄処理も効果が見られません」

「仕方あるまい、直接打ち込んで人格を破壊、新しく形成して実験に協力的な検体を作り出すしかないな、暴れられてもこまる。軍から選りすぐりの者を派遣してもらおうように連絡を取ってくれ」

この部屋に連れて来られてからすでに1時間が経過していた。今、私は差し迫った現状に晒されている。ぐっつとお腹が鳴った。

「お腹すいた・・・」

そうしていると何人もの私を連れてきた人が白い服を着た人と入ってきた。

「お嬢さん、一緒に来てください」

拒否権ないんですね。

仕方なくその人達に連れられ連れられていくと大きな手術室みたいな所に出た。

えーと、手術室〓解剖？

さすがに身の危険を感じた為、丹田を通して昇華した気を体中に張り巡らす。

振り向き様に、拳銃を弾き飛ばしボディに一撃入れて足を払う。

多少手加減はしたけど、一人目撃墜。残りは3人。

そちらへ視線を向けて、移動しようとした所で足を掴まれて床に倒れた。

最初に、私が倒した人が何事もないように立ち上がって、私の足を掴んでいた。

「やれやれ、抵抗しなければ痛い目を合わせなくてもよかったのですが」

白い服を着た男がそう言いながら、銃口を私に向けて撃ってきた。

それを、回避しようとしたけど弾が飛んでこない？

そう思った途端、手足に力が入らなくなった。

座標攻撃？

「大丈夫ですよ、脊髄の神経の一部を一時的に除去しただけなので死にはしません。」

「全然大丈夫じゃないから！」

「まあ丁度都合がいいですね。おい、この検体をその台の上に乗せる」

台に載せられると動けないようにしっかりと四肢が台座に括り付けられた。

手足を縛ってるベルトぽいのが喰いこんでいるのが見えるけど、手足の感覚が無いから実感が沸かない。

丹田の気を使って肉体の損傷回復を図ってるけど、脊髄の回復には時間がかかる。

「さて、お嬢さん。今度は検体として会いましょう。」

その男がそう言い、私の首に何かを差し込んで液体を注入していた。

「検体？何を、」

ドクン！心臓が跳ね上がるような。

違う、これは。

段々と意識が曖昧になってくる。

そこで私の意識が途絶えた。

いつもの私の朝が始まる。

(いつも?)

私を作ってくれたご主人様マスターを起しにいかないといけない。

私は部屋を出ると、ご主人様の部屋に入って行き、寝ているベットの近くまで寄ってから声をかけた。

「オルスバル様、そろそろ起床の時間です。」

「ああ、おはよう。トール雪」

「おはようございます。マスター」

これはいつもの朝の挨拶。

「こちらへ」

私はマスターに呼ばれた為、マスターが寝ているベットに座った。

マスターは私の肩に手をかけると私をベットに寝かせた。

その後は、いつものように体を求められた。

しばらくしてから体を洗浄し、衣服を整えてからマスターと一緒に研究の手伝いをしていた。

私は偶然、この星でマスターが生み出す事に成功した唯一の女性型の人間という事だった。

軍や国が私の事を解剖してそのメカニズムを解こうとした所を、オルスバル様はここ生体研究所所長の力を使い私を守ってくれたみたい。

みたいというのは、私には、ここで目が覚めてから1週間立つけど、その前の記憶がないから、大して役に立たない私をマスターは必要

にしてくれる。

それはとても嬉しい事。

だから、私はマスターに色々としてあげたい。

でも、マスターはお前がいるだけでいいんだよって言うてくれる。とつても嬉しかった。

「雪、少しここで待っててくれ」

「はい、マスター」

そう言うとマスターは私から離れて部屋に入ってしまった。

「所長、経過はどうですか？」

「大丈夫みたいだな、うまくシステムが機能してて元の人格を新しい人格が押さえ込んでる形になっている。そのおかげで以前の記憶も失ってしまっているが母体さえあれば問題ないだろう。まだ、成功するかは分からないが、あの検体には子供を産んでもらう。その子供のテロメアを確認して実験を再開する事にしよう。あの女の周期だと5日後が一番受精しやすい。」

「ですが人工的に着床したほうが早いのでは？」

「いや、なるべく自然な状態での受胎が好ましい。あまり手を加えてしまうと今の我々のように寿命が短い種が出来てしまうからな」

「所長、生体強化は行わなくていいのですか？」



「ああ、それもやらなくていい。どうやらあの検体はそういうのは無くても問題ないようだからな、生体強化がいらないのであればこの星の過酷な環境下でも人類はその版図を広げる事が出来るかもしれん。あの女の生活してる部屋の環境はこの星のドーム（人工環境都市）の外と同じ設定にしてある」

その言葉に研究員達が驚く。

人口環境都市、それはナノマシンにより大気中から全ての物質までコントロールし人が生存可能にしてある環境エリアだからだ。

この環境都市から出ると大気は調整してあるが重力制御は一切行っておらず都市内では重力を5倍で抑えているが、都市を出ると地球の20倍に跳ね上がる。

そして、計測が出来ない未知の物質がこの星からは検出されており、それにより生命が存在する事が出来ない星となっている。その為、環境都市以外では生存する事は高水準の生体強化を受けていても1時間も都市の外にいたらまず生きていられない。

その環境下の部屋で平然と生きてる雪に対して研究員達が驚くのも無理はない。

部下が納得したのをオルスバルも見て

「ここ一週間、あの検体と交わっているが嫌な素振りは一切見せていない。子供が出来るのが楽しみだな」

そう言うと、オルスバルは笑っていた。



## 作られた家族

そこは辺り一面、金色に輝く絨毯で敷き詰められている。

そして、四方50m程度の石で組まれた古代様式の住居があった。

男はそこでふと、今まで感じてた波動が弱まった事に気がついた。

雪は、いつもどおり目を覚ました。

そして朝の日課というべきマスターを起しに部屋に入ると私が来るのを待っているようだった。

マスターは私にベットに寝るように言うと私に覆いかぶさるようにベットに乗りかかって、一つの薬を取り出すと私の首に当てて、それを機械で私の血流に直接流しこんできました。

私はその後、何度もマスターから子種を体の中に注がれて意識を失ったと、気がつくとも研究所の施設で横になってました。

「所長が検体の排卵日に注入した薬品の成分形跡により、10日間の潜伏期間を置き、検査を行いました所、着床に成功しています。」

「そうか」

俺は、雪の方を見ながら少し気分が乗らない気持ちであった。

いかな、検体に愛情を抱いてしまつとは……

「それと、雪の卵子と俺の精子を実験的に掛けあわせた、検体はどうだった？」

「雪？検体の事でしょうか？」

「ああ、そつだ。」

「検体より取り出した卵子と所長の精子を掛け合わせて高速培養を試みた結果、3歳程の女の子が製造できました。さらに生体改造を行わなくてもドーム外の気候に対応しています。」

その言葉を聞いた途端、怒りが沸いた。俺は報告してきた所員の襟を両手で掴みそのまま壁に押し付けた。

「貴様！そんな子供を劣悪な環境化においたというのか！！」

「ま、まっってください。所長、これは貴方が前に命じた事じゃないですか！」

ハツとした。俺は今何をしたんだと……

「すまない、よく考えれば骨格の出来上がっておらず免疫機能の効いていない子供をいきなり実験に使おうとした俺が間違っていたな。それとその子供を連れてきてくれないか？」

「わかりました。」

所員は、しぶしぶ部屋の外に出ていった。

雪が来て、私の生活は前と一遍した。女性といるとこれだけ違うのかと思うほど私の殺伐していた空気はやわらかくなったと所員からも好評だった。

それと同時に、雪に離れられるのも怖くなっていた。まったく、何を感傷に浸ってるんだ。

しばらくすると所員が一人の女の子を連れてきた。

女の子は雪をそのまま小さくしたような子供で身長は60cmくらいの黒い大きなぱつちりとした瞳に私譲りの金色の髪が肩までかかっていた。

「所長お待たせしました。この子が検体番号C-101Aです。」

「わかった。しばらく私が経過を調べる為に預かるとしよう。」

俺をじーっと見つめてる子を胸に抱いた。ミルクの香りがしてなんとも言えない気持ちになる。

所員たちは私を不思議そうな顔で見ている。

その日は、俺は雪と子供の3人で家に戻った。

家に戻る間は、雪はずっと興味深く女の子を見ていた。

「マスター、その子供は一体？」

「雪。家に居るときはスバルでいいと言っただろう？」

「申し訳ありません、マスター」

「この子は、お前の卵子と俺の精子で試験管培養した子供だ。つまり雪と俺の子供になる。まだ名前が無いよugdだから雪が決めてやれ」

「はい、マスター」

しばらく、雪は考えていたようだった。

「マスター」

「スバルだ！いい加減直せ」

そういうと雪はしゅんとしてしまった。

「スバル、紅葉という名前はどうでしょうか？」

「いいと思う。それでは今日からはお前の名前は紅葉だ」

俺は抱き抱えている娘に向って言うത്とそれを理解したかどうかは知らないがきよんとした顔をしていた。

「紅葉、俺が今日からお前のパパで、向こうにいるのがお前のママの雪だ。甘えてきなさい」

そう言うってから床に下ろすと雪の方へ紅葉は歩いて行った。

私は、歩いてきた女の子が娘ってマスターから聞いた時、驚いた反

面すごくうれしかった。

マスターが紅葉を床に下ろして歩いてきた紅葉が私の事をじーっと見てから笑ってママって呼んでくれた時に泣きそうな程うれしくてつい抱いてしまった。

紅葉は疲れてるのか、私が抱っこしてあげるとしばらく回りを見渡していたみたいだけど、すぐに安心した顔をして寝ついてた。

マスターが今日は特にする事は無いから、ゆっくりしてなさいと言ってくれたのでリビングで紅葉を抱きながらその顔をずっと見ていた。

俺は、雪がリビングの椅子に座りながら紅葉をやさしい視線で見てるのを見て、今まで空虚だった心の隙間が暖かい物で埋まっていくのを感じていた。

その時、俺はこの幸せな気持ちが続くと思っていた。

翌朝

私が起きるとマスターが既に起きて朝食の準備をしていた。

「マスター、朝食の準備なら私がやります。」

「気にするな、それより紅葉でも起してきなさい。それとマスターではなくスバルだからな、あと家に居るときはもう少し砕けた口調でいい。」

雪は少し考えていたようだったが納得したようだった。

「はい、スバル」

そういうと、雪は娘が寝ていた部屋に向っていった。

私は、娘の紅葉がいる部屋に入った途端、娘が大泣きしていたのを見てびっくりした。

急いで娘を抱いて、怪我をしてないか確認していくけど、どこにも怪我してる場所がない？

どういうこと？あたふたしてるというの間にか紅葉が私の胸に頭をグリグリして笑ってた。

でも私の中では、なんで怪我してないのに泣いてたのか理解できなかった。

混乱してる私に、ママ、どうしたの？ってクリッとした瞳で私の瞳を覗き込んで話して来た。

私は思わず、ううん、なんでもないよ。って答えてた。

娘を抱っこしながらスバルのいる部屋まで歩いて行って部屋に入った時、スバルはとても苦い表情をした。

「どうしたの？スバル。」

雪が俺にそう話しかけてきた。娘も雪に気持ちよさそうに抱っこされている。

それを見て、俺は取り返しのつかない事をしていたのでは無いのかと思っていた。





## 作られた家族 2

### ユグドラシル計画

それは、この星に女性が生まれないという生物としては致命的な欠点を補う為に計画された物だった。

この星に生物が存在しない一番の理由は、子孫を残す為の女性を生まれなくするモノが発せられているのを私達は突き止めた。

それは今から570年前、この星は異星人に作られた天体であることが分かった。

星の核を計測してる際に不定期に活動する惑星核を不信に思い、当時の技術の粋を集めて作り出したモノにより核まで到達し調べることが出来た。

その結果、この星を統治しているシステムは我々の技術を遥かに凌駕しているという事が判明した。

そしてこの星から離脱できない原因は特殊なフィールドがこの星を覆っているという事も同時に確認が出来た。

軍と科学者達はここの星は元は犯罪者達の流刑地だったと予測した。そしてなんらかのシステムトラブルにより、重力の暴走。種としての保存が利かないに陥り、生物は死滅。それにより大気が狂い死の星になったと結論付けられた。

それから300年の時が流れてある程度のシステムの解明に成功。それに伴い、この星を再生するプログラムを発見した。

それを起動するためには母体となる女性が必要という事も判明。

それ以降は、女性を作る為に政府と軍上層部は最上級機密事項としてこの案件を進めてきた。

プログラムが発動した場合、推定であるがこの星が眠らせている動植物が一度に戻る可能性があるという事も見解に出ている。

私は今、紅葉と一緒に朝食を取ってから紅葉に歌を聞かせてあげていた。

記憶はないのに、歌だけは自然と口から紡ぎ出されていく。

床の上に座った私の膝の上に紅葉は頭をのせて私の歌を聞いている。

俺は、雪が歌ってる歌という物は知らなかった。

この世界に歌という物は文化として存在していない。

だからこそ、今歌ってる歌を聞いた時の衝撃はすごい一言だった。歌詞の中に思いが伝えたい言葉が込められている。

男だけの世界では作られない旋律に思える。

雪の歌を聴いてる娘の紅葉も瞳を閉じて聴き入っている。

私は雪の歌を聴きながら、昨日、政府より娘の紅葉の提出を求められた。

紅葉を使い、ユグドラシルシステムを起動する気なのだろう。

だが、それを使えば紅葉が……

雪がやさしい眼差しで紅葉の頭を撫でながら歌を詠っている。

紅葉の調整があると嘘をついて一週間猶予をもらったが、それも時間の問題だろう。

雪の記憶を戻して逃亡させるか？

だが、その際の雪はどんな眼差しで私を見てくる？

好きでも無い男に記憶を改竄されてその子供を身籠り母親にすらされた雪はどれほどの軽蔑な視線で俺を見てくる？

その時に雪は紅葉にどう接するんだ？

なんでこんな事をしてしまったんだ・・・

最初から卵子を何個か摘出だけで良かったではないか？

そうすれば、こんな事には

それに最近の雪は、以前までは頻繁に記憶のフラッシュバックがあったようだったが、紅葉が家に来てから安定しているし以前は無機質な人形みたいな感情が情緒豊かな感じになっている。

俺は今の生活を失いたくはなかった。

それでも、政府に逆らう事は出来ない。それでも娘と雪だけはなんとしてでも守りたい。

今までは考えた事がなかった苦悩が俺を苛む。

「どうしたの、大丈夫？」 「パパ、大丈夫？」

娘と雪が心配して俺を覗き込んできた。

「ああ、最近疲れていてな、今日は研究所はお休みだからゆっくりしようか？」

「うん」

娘が私の膝の上に乗ってきて甘えてくる。その都度、罪悪感に苛まれた。

おい、しっかりしろよ。

「なんだ。ガイか。」

「アル、お前、ここずっと変だぞ？この前の2週間前の休みからずっとおかしいぞ。どうかしたのか？」

「いや、大した事じゃない。」

そう言っつて立ち上がる俺をガイが腕を掴んで席に座らせる。

「ふざけんな！お前ここの所まともに睡眠も飯も食ってないだろ！誰から見てもお前の最近の状態は異常だっつてわかるんだよ！」

「異常？俺は至っつて普通だが？」

「お前本当に気がついてないのか？何か大事な物を無くしましたっつて顔してるぞ」

大事な物？何かあったのか？

ポタポタとテーブルの上に水が垂れた。

「お、おい。何泣いてるんだ？」

「ガイに言われて、瞼を拭くと水滴がついた。」

「それ以前は一週間弁当作って持ってきてたのに、それが無くなった途端お前こんな感じじゃねーかよ。何か関係あるのか？」

弁当・・・？雪か

そつえばあいつ最後に笑って離れて行ったな。

「なあ？ガイ。信じてくれないとは思っけど、俺の話聞いてくれるか？」

## 壊れる日常

「まったくこんな俺の仕事じゃない！」

「愚痴を言わないでくださいミカエル、あの方からのご命令ですよ？」

「ラファエル、お前にだけは言われたくない。」

二人は巨大は暗闇の支配する空洞の中で、空中に展開されていくグラフと波形、そして星海地図をチェックしていく。

赤い8対の翼を持つ男がそこに入ってくる。

「どうだ？ミカエル、人形の位置の特定は出来たか？」

「ルシフェル、あの方はなんでこんな事を命令してきた？」

「分からないが、どちらにせよ我々の人形がおかしな状況に置かれているという事なのだろう？ならばすぐに対策を打たなければならぬ。」

「ミカエル、ルシフェル。場所が特定できました。」

ラファエルがコンソールを動かすと星海地図が拡大されていく。

「これでは広すぎるな、もう少し範囲をしばってくれ。」

約束の期日がとうとう来てしまった。

恐らく、渡さなければ実力行使も持さないだろう。

ここ一週間、まともに寝ていない頭でどうするべきか考えていた。

紅葉が来てから、家の中はとても明るくやわらかい雰囲気になった。

雪もよく笑って娘と遊んでいる。

それに、添い寝をしてるようだ。

本来、生体研究所では基本、12歳まで試験管の中で育てる。その後、知識を学習するさせる為に脳に直接、生体記録チップを埋め込む。

それにより効率的な知識を身につけることができる。

3歳で試験管から出すなど今までからの前例からは在りえなかった。それより3歳で重力に耐えられるように生体強化を施す事ができないからでもある。

俺は雪と娘がいる部屋の前に行き部屋の中に入ると、娘と雪は一緒に寝ていた。

顔が親子というだけあってとても似ている。

あと5時間程で娘を政府に引き渡さなければならぬ。



俺は、政府へ始めての女性の固体の成功例という事で調整がまだうまく言つて無い事を理由に引渡しを引き伸ばす事を決めて、早い時間に研究所へ向つた。

研究所で政府に調整延期の書類を作っていたら、他の研究員が出勤する時間になっていた。

「オルスバス所長、こんな早くから仕事をしていたのですか？」

「この副所長であり優秀な研究員でもあるライザスは私に声をかけてきた。」

「ああ、まだ調整が済んでいないからな」

「それは例の検体番号C - 101A事でしょうか？」

「ああ、そうだ。」

「そうですね、本当に残念ですよ」

ライザスはそう言つと俺に銃口を向けてきた。

「あなたに政府反逆罪の疑いがかけられています。」

「なんだと？」

「オルスバス所長、いえ、元・所長といひましようか。今後、あなたの身柄は軍が拘束します。今、あなたの自宅に検体2匹を確保に

軍が向っています。」

「ライザス、貴様！」

「昔のオルスバス所長、貴方は尊敬できる方でした。どんな事でも一切の情を抱く事なく最短で実験の結果を追求してきた。それがあの検体の女を自分の所に置いてしまっただけから変わってしまった。無駄な事ばかりしてあまつさえ情を移し、政府すら騙そうとするとは！裏切られた気持ちですよ？わかりますか？尊敬していた者に失望した者の気持ちがいかに！」

「ふん、俺はお前に尊敬して欲しいとは一言も言っていないがな？」

「なんだと？」

俺は同様したライザスの拳銃を弾くと、それを拾い上げてそいつの頭に銃口を当てた。

「ひっ！や、やめ」

バスツ、銃口から軽い音を響せる。ライザス一瞬が痙攣したあと動かなくなった。

俺は他の研究員が来ないうちにライザスを冷凍システムに突っ込みロックをかけ自宅に急いだ。

私はいつもどおり起きて、ベッドから出ようとした所で枕元に手紙を見つけた。

そこには今日は早めに出かけるからゆっくりしておくようにスバルの字で書いてあった。

娘を起さないように、朝食の準備をしてから娘を起しにいつて、朝食を食べてリビングで娘と遊んでいた。

「まま〜お歌うたって〜」

「はいはい」

いつものように娘を膝にのせて歌を歌っていると、家の玄関が壊される音が聞えてきた。

「まま!」

娘が怯えて、私に抱きついてきた。私が娘を抱き寄せていると、知らない男の人達が8人程中に入ってきた。

「こいつらが命令のあった検体2匹か?」

この人達は何を言ってるの?それに私と娘を見る眼がスバルと全然違う。

「実験に必要なのは一匹だけだ、成体の方は子供を孕んでるらしいから手荒には扱うな。小さい検体を連れていけばいい」

男の中の一人がさういうと、私の両手を掴んで、抱きついていた娘

を引き剥がしてきた。

「ままー。」

「やめて、娘に酷い事しないで！」

私は必死に抵抗した、ここで娘を連れて行かれたらもう会えない予感がしたから、命令があったからか私を押さえ込むだけにして男が暴れていた私の髪が眼に入ったのか怒った声で拳銃の柄を私に振り下ろしてきた。

「煩いだまっている」

ゴスツと音がして私は暗くなっていく視界で、娘が必死に私を求めていたのを感じながら意識を失った。

「おい、手荒な事はするなと言っただろうが」

「すみません、ハルシオン隊長」

「まあいい、その検体に泣きついてるC-101Aを連れて、例の場所へ移動するぞ」

## 殺戮眼

「ここで間違いないんだな？」

「ああ、軍の情報網経由で調べた所、ここに検体がいるらしい。」

そう言っつて二人のうちの一人が空中に画像を表示する。

それを見たもう一人は顔をしかめていた。

検体番号C - 101A    検体番号C - 101

俺はその画像を見て、顔を青くした。

あまりにも両者の画像が似ていたからであった。

急激に成長させた場合、細胞の劣化速度が恐ろしく速くなる。

見た目は5歳程だと思うが、たった2週間程度でここまで育てたとなるとこの雪の細胞から作られた子供は長くは持たない。アルはその事に気づき顔を青くしていたのだ。

ガイもその事を察していたのか何も言わずに二人は建物に入っていた。

しばらくすると、一人の少女が倒れてるのが見えた。

「おい！大丈夫か？」

アルは雪を起して、揺さぶる。

.....!!

私は、揺さぶられるのを感じてゆっくりと瞼を開けていった。知らない男性が私の事を起して声をかけて来る。それと同時に娘の紅葉が攫われたのを思いだす。

「娘は．．．紅葉は？」

私は男性の返答を待たずに起き上がるとそのまま建物の入り口で向おうとするが男性が私を離してくれない為に、起き上がれない。

「離してください！貴方達は娘をどうする気なんですか？」

俺は、雪のその言葉に戸惑ってしまった。俺の事が分からない？忘れられてるといふ事にショックを受けていた。

人との係わり合いなど必要ないと生きて来たのにこれほど人に忘れられてショックを受けるとは思っていなかった。

それはガイが何度も俺に話しかけてきても気がつかないほど。

「おい！アル。しつかりしろ」

俺の肩をガイが引き寄せてくる。

「恐らく、雪はナノマシンで感情や記憶が抑制されていて別人格を形成されてるんだ。だからそれをまず解除しないと話が進まない。」

俺は、それを聞きながらもどうするんだ？と聞いた。

「お前、俺達の仕事を何か忘れてないか？ナノマシンの制御プログラムを受け持つ会社だろ。お前手伝え。」

二人の周辺にいくつもの演算システムが空間に表示される。

「アル、そっちのプログラムは任せた。まずは表層意識を覆っているナノマシンから停止させて体から排出させる。」

次々とグラフが展開されていき、プログラムが書き換えられていく。

私はそれを見ながら、頭を殴られた影響からか立ち上がれない体を床に横たえながらその作業を見てみると、次々と知らない言語や風景が、切り取った写真のように頭の中を駆け巡っていくのを感じる。そして・・・意識が闇の中に飲み込まれた。

「よし、表層意識のナノマシン停止確認。排出完了だ」

「アル、次は記憶領域の・・・」

「記憶演算装置起動、高稼働システムのバックアップをメインへ接続。第2から第81までの回路を接続・・・」

アルは突然、雪の口から発せられた情報に困惑する。

ガイも突然の事に作業が止まっていた。

「ガイ、これは一体どうなってるんだ？」

「わからない。一体なんだっていうんだ、でも、これじゃまるでロボットみたいじゃないか」

今、私の視界には多種多様なプログラムが私の記憶領域を侵しているのを確認していた。

そのプログラムを排除する為に、本来のあるべき力を解放する。

「ジェノサイド・アイズ《殺戮眼》起動。全システムを強制解除、精神・肉体を一度リセットします。稼働領域からの干渉を全て排除。システムの再度立ち上げを開始。肉体の抗体細胞の形成を開始。体内の神経を一度全て解除。記憶媒体内の汚染度81%、全て除去終了。再起動に入りませう。記憶の消去を開始、エラーを確認。正常な立ち上げに支障。支障を来たす記憶においては一時的に封印し再度立ち上げを開始。」

アルとガイは、雪の口から感情が一切ない機械音が発せられてる事に見ていることしか出来ない。

そこへ、オルスバスが息を切らして部屋に入ってきた。

オルスバスはリビングにいた、アルとガイの方を見て、お前達私の家で何をしてるんだ！と言いかけた所でその二人の視線の先にいた雪に気がついた。

無事だった事に安堵しながらも走りより抱き抱えようとした所で、見えない何かに弾かれた。

「ガッ！」

アルとガイはそこまで来てやっとその男が入ってきた事に気がついた。

「オルスバス所長！お前、あいつに何をしたんだ？」

「貴様こそ何をした？」

アルは、威圧的な態度に腹を立てそのままオルスバスを床に叩きつ



けた。

ガイは二人の会話を聞きながらも事態の收拾を図る事にした。

「オルスバス所長、私達は表層意識のナノマシンを停止させて排出させたのですが、そうしたらいきなりこの状態になったのです。何か心当たりはありますか？」

オルスバスは床に倒れながらも、表層意識の解除だけでこんな事態になるとはありえない、こんな事になるなら元からこういう事態を想定して何者かがプログラムを組み込み決定的な破損があった場合データを初期化し起動させること事にしか思いつかない。だが、そんな事が可能かと言えば否としかいう事が出来ない。そんなプログラムを実行できる、いや、起動するなど生物の体では絶対に不可能だからだ。それこそ、人の形をした物でない限り

3人が結論に至らない間に、雪の状態が変わっていく。

「システムの再起動を確認。各霊玉を起動。

《陣》ルアルを起動

《風》イークを起動

《水》ウィルを起動

《土》ロームロイスを起動

《火》レイムロームを起動

《光》クレミアを起動

《闇》スペルダークを起動

《雷》ライロットを起動

《天》サルベージを起動

《星》ダイロードを起動

《虚》ザイロードを起動

《癒》システムエラーにより未起動」

「記憶領域の復旧を確認。肉体の形成を開始。通常にて構築を開始。デフォルト男性体への構築を開始。肉体内部に異物を確認。位置は子宮内部。子宮内部の消去を開始。エラーを確認。予期せぬエラーにより肉体の再構築を中断。記憶、精神媒体を通常機能復旧を確認。現在の環境化における肉体の適合を開始。現在環境下を検索開始。検索終了。

窒素 32.088%  
酸素 19.619%  
アルゴン 0.93%  
二酸化炭素 約0.04%  
一酸化炭素 1×10<sup>-5</sup>%  
ネオン 1.8×10<sup>-3</sup>%  
ヘリウム 5.24×10<sup>-4</sup>%  
メタン 1.4×10<sup>-4</sup>%  
クリプトン 1.14×10<sup>-4</sup>%  
一酸化二窒素 5×10<sup>-5</sup>%  
水素 5×10<sup>-5</sup>%  
オゾン 約2×10<sup>-6</sup>%  
水蒸気 0.04%  
他がイスラードにて構築を確認。」

ガイ、アル、オルスバスは雪の口から発せられてる言葉を聞いていることしか出来なかった。  
星の大气を調べる為には観測などの機械も必要であることもそうだがイスラードという知らない物質を聞いた事により更に混乱していた。

「肉体の精製強化を開始、終了。生体バイオリズムをアウラウストウルの楔に同期を開始。終了。一部のシステムエラーを除きオールグリーン。人格の形成を開始、終了。通常モードで起動します。」

雪はゆつくりと幾何学的な模様を浮かべていた瞳を元に戻し、数度  
瞼を瞬かせる。

私は、しばらく記憶を失っていたらしい。  
立ったまま、記憶を失うなんて器用だなと思った。

周りを見渡すと、私を罫に嵌めたオルスバスという所長とアルベル  
トがいた。それと同時に連れ去れた私の細胞より培養された紅葉と  
いう名前の娘も理解出来る。

「ひさしぶり、アル。」

私がそう言っていると、固まっていた3人が顔を見せ合って微妙な表情で  
此方を見てきた。

はつきり言って、私は無理矢理、私を手籠めにしたオルスバスと言  
う男を許す事はできないが記憶の領域内にある彼は必死に父親にな  
ろうと苦悩していたのは理解していた。

本来ならば、問答無用で制裁を加える所だが、紅葉と会ったときに  
五体満足じゃないと悲しむと思ひ衝動を押さえ込んだ。

「アル、オルスバス。今から紅葉を助けに行くからあとの事はよろ  
しくね」

私はそう言うと、オルスバス邸から走って出て、紅葉が連れて行か  
れた方向を感覚的に理解する。

そして、「《レイウィング翔封界》」を使い高速でそちらへ移動を開始した。



## 絶望という名の

暗い深遠のに色塗られた巨大なドーム中では空間に次々と星海地図が表示されていく。

「ミカエル、先ほど、そこは調べませんでしたか？」

ミカエルはラファエルからの指摘に言葉を返そうとした所でドーム内の空間の多様な場所に赤い文字で表示がされていく。

二人はその表示を見て、焦る。

そこでルシフェルがドームに入ってきた。

「どうした？何か問題でも発生したのか？」

二人がそれに答える前に滑らかな女性の声で現状を知らせるアナウンスがドームの中に流れる。

「オベリスクのプログラムが一時的に書き換えられています。現在強制解除中。肉体内部に異物を確認。データ<sup>データ</sup>から子宮内に胎盤を形成してると思われます。その為、完全な消去が不可能。不完全状態からの覚醒になると思われます。」

ラファエルはそれを聞きながら落ち着いた。

「どうやら人形は、自動初期プログラムが発動したみたいですね。おそらくはもう問題はないでしょう。」

ルシフェルはラファエルから説明を聞きながらも、問題が解決出来たならば我々、神だった者が人形と接するには時期尚早になるなど

結論づけていた。

元々、あのお方の指示がなければ約束の日までは我々は人形に会うのは危険なのだから。

そう考えてるうちにも次々と雪がシステムへアクセスしてきて情報を開示してくるのがドーム中に表示されていく。

「デフォルト リール・アイズ  
基本の天輪眼のリミッターが一時的に外れます。肉体・精神・記憶の構築並びに有機細胞の設定をする為、一時的にジェノサイド・アイズ殺戮眼を起動します。オベリスクの動力回路の91%まで復旧。動力コアの霊玉12個中11個正常稼動。1つは今まで通り待機モードで移行。オベリスクの座標軸を展開します。X - 298783872 Y - 811289AA15 Z - 459s8982 惑星名を確認しました。第7981 - D419K 生命の木実験惑星ユグドラシル」

「なに？」

ミカエルとラファエルだけではなく、ルシフェルまで驚く。

「どうしますか？ルシフェル。」

「どうするもこうもない、あのお方に報告するしかあるまい。恐らく、人形の再起動を伝えれば我々の出番はないだろう。」

そのまま、立ち去っていくルシフェルの後ろ姿をガブリエルとミカエルは見ていた。

雪は今、音速で飛び続ける軍の音周を追いかけていた。肉体強化により跳ね上がっているからこそ、音速より早い速度で移動魔法が展開出来ているのだが、本人はまったく違和感をもたずに使っている。

前方の追いかけてる音周を、アルファステイゲマ複写眼で確認する。それと同時に視界にグラフ・数値で状況が表示されていく。

人数11人。その中で自分と同じ波動を感じるのが一人

「まってて、紅葉。いま助けてあげるから」

軍の人間達もセンサーに反応した移動物を見て、驚愕していた。音速の数倍の速さをもつこの軍専用機に追いついてこれる者など常識的に考えられないからだ。しかも相手は生身である。

「もうすぐ軍の制空権だ、落ち付け」

ハルシオンは、部下に指示を出しながらも緊急時、ライザスから使うようにと渡されていた薬剤を用意した。

雪が軍の音周を追いかけて数分立たった所、前方に直径1km近い空洞が視界に入ってきた。

それと同時に雪の視界に、次々とグラフと数字が表示される。

解析完了。座標攻撃兵器 数 1700

瞬歩にてその場から離脱する。それと同時に次々と先ほどまで雪が

滞空していた空間が削られていく。  
その間に、雪が追っていた軍の音周は空洞を下降していく。

私はそれを見ながらも地上からの対空砲火の弾幕により身動きが取れないでいた。空間座標を指定してくる攻撃には全ての防御魔法が無効化されるから。私が足止めを食ってる間に追いかけていた軍の音周が視界から消えた。

魔法を展開する時間すら、与えてくれない為、突破口を開く事が出来ない。

10分で軍の音周は、星の中心の中心にたどり着いた。

そこから降りると一人の男が立っていた。

「ハルシオン、例の検体は手に入ったのか？」

「はい、スワイデルト市長」

ハルシオンが、部下に命令をすると、数人の軍人が紅葉を肩に抱えて連れてきた。

それを見た、スワイデルトは感嘆の声を上げていた。よくやった、これedyouやく我々の悲願が達成されると・・・

「イスル、C-101Aを使いユグドラシルを起動しろ。」

「はい、わかりました。」

イスルがユグドラシルに近づき、容器の中に紅葉を入れる。そしてプログラムを起動していく。

紅葉の体が緑色の液体に足元から浸されていき、頭まで覆うと苦し



いのか紅葉が目を開けていた。

紅葉は、口の中に入ってきた液体で目を覚ました。目を開けると緑色の水の入った所に入れられていて外が窓ごしに見える。

紅葉は体中から、力を抜けていくのを感じ始めると必死にママと叫んでいた。

「何を言ってるのか聞えないな、イスル！聞えるように出来るか？」

イスルは手元のシステムを弄ると周辺に拡張された紅葉の声が鳴り響いた。

「ママ！ママ！怖いよ、ママ！助けて、ママー」

ハルシオンはその必死さに顔を歪めていたが、スワイデルトは恍惚としていた。

「検体の分際で親を求めるとはな、面白いものだな？イスル」

「ママ！たすけて。ママ……」

私は今上空で活路を作り出す為に、弾幕を避けていた。

その時ふと、娘の紅葉が助けを呼んでるのが、理屈ではなく心が理解した。

私は防御を捨てて、自由落下に切り替える。それと同時に数発が私の右足に着弾し右足が吹き飛ぶ。痛みを耐えながらも高速で回復魔法を展開し発動させる。

オートリジエネ  
「《自動高位回復魔法》」

着弾し吹き飛んだ足の再生が始まっていくが次々と体中に着弾していく。その都度、右手が、左指が、肘が肩が次々に肉片となって散らばっていく。

そして20倍という重力加速度に任せて周囲の風を加速のみに使う。体中がバラバラになるほどの衝撃を受けながらも対空砲火を抜けた。すでに体中が損傷して無事な部分が顔くらいしか見当たらない。

両手両足の破損さらに内蔵や肺、心臓まで、わき腹、両肩まで吹き飛んでいる。

完全に死体状態。それでも回復魔法により少しづつ肉体の損傷は直つてきているが、両手が破損してる為、魔法式を構築する事が出来ない為、そのまま星の中心に叩きつけられた。

「なんだと？あの対空砲火を抜けてきたというのか？」

ハルシオンは驚きの声をあげていた。それでも雪の体の状態を見るにあともって数分、即死していてもおかしくない状態を見て落ち着いた。

「ハルシオン、あれは検体番号C-101だったな？死体でもかまわん、あとであれば確保しておけ」

「はい、わかりました。」

もはや、死に体の雪には興味はないのだろう。それでもハルシオンは雪を監視していた。

私は意識が飛ぶほどの衝撃を受けながらも、霞む視界の中で娘の紅

葉の姿を捉えていた。

そして、私の聴覚が回復したのか紅葉の助けを求める声がここに響き渡っていた。

「ままー！ままー！怖いよ！ままー！」

私はそれを聞きながら、必死に紅葉の方へ進もうとする。でもまだ再生が始まってすらいらない四肢では這う事も出来ない。内臓が破損してる事もあり、紅葉に声をかける事すら叶わない。話そうとしても、ヒューヒューと言った音しか出ない。

紅葉、今助けてあげるから……

紅葉は空から落ちてきたママを見て、会いたかった気持ちが溢れてきて一生懸命自分のママの名前を呼んでいた。

私は、娘の紅葉の元へいくため、内臓の損傷部分の回復を後回しにして四肢の回復に魔法を回していた。

そうすると私の視界の紅葉の体が薄くなっていく。

私の複写眼アルファステイグマの解析で紅葉が量子変換されつつあり、それを星中に走るシステムが利用しようとするのが見えた。

ダメ、そんなのダメ、やめて、だれか助けて！紅葉を……娘を助けてよ！お願いだから誰か助けてよ、私は必死に心の中で願った。娘が紅葉が助かるなら私の命なんか上げるから、悪魔にだって契約するから、だから娘だけは娘だけは助けてと……それでも

動けない私の視界の中で娘の紅葉が必死に、まま、怖いよ！助けて、まま。と助けを呼びながら、助けられないでいる無力な私の前で光の粒子を残して分解して消えた。

「いやあああああああああ」

音を出せるようになった私の絶叫が、星の中心の空洞内に反響した。

## 数多の交差する思惑

星中に走っているシステムが稼働を開始し脈動するように星の大地を海中を駆け巡っていく。

星の至る部分で、緊急プログラムで眠りについていた動植物の種子が空に発生した雨で成長していく。それと同時に星の20倍もの重力も消滅し母星と同じ重力に切り替わっていく。

ユグドラシルの間にいた、スイッチデルトは体にかかっていた荷重が取れた事により星が再生を始めた事を理解した。

「イスル、外の様子を写せるか？」

次々と空間に、星の現状の状態が映し出されていく。

いままで、淀んでいた海が光輝き、木々が覆い茂り、動物のような物が急激な成長で大きくなっていくのが見て取れる。そして、今まで空を覆いつくしていた蒼いベールも消えていく。

その光景に、この場にいた者は誰しも絶望していた未来への希望の扉が開かれた事に感慨していた。

その頃、アルとガイとオルスバスは、研究所に向ってる途中に一瞬、コントロールの効かなくなつた音周を立て直しながらも、外の風景

を見て啞然としていた。

「な．．．なんだ？」

「空の色が変わっていく。データーでしか見たことのない緑が広がっていく？」

二人の意見をそれぞれ聞きながらオルスバスは遅かったかと呟いていた。これではもう、紅葉は消滅してしまつて．．．

「遅かつたつてどういう事だ？」

アルはオルスバスの呟きを聞き逃さなかつた。

オルスバスはアルとガイに星を再生する為には女性の体を構成するXX遺伝子をこの星を管理している木ユグドラシルに与えてシステムを起動させないと行けない事、そして紅葉と雪がその為の実験材料として生かされていた事を伝える。

「貴様！」

アルが怒りのあまり、オルスバスを殴っていた。

「お前達のせいで、どれだけあいつらが傷ついたと思ってるんだ？  
なんとか言えよ、おい」

「仕方ない事だったんだ。今を逃せば加速度的に滅びに向っている人類を救う方法はなかつたんだ。その為には必要な犠牲だったんだ。」

それを聞きながらもガイは冷めた目でオルスバスを見ながら、たつ

た一人の犠牲の上に成り立つ世界に価値はあるのかねと呟いていた。そうしてる間にも、ガイの視線の先には一つの建物が見えてきた。そこは、700年前に廃棄された現在ではロストテクノロジーの産物たる量子変換研究設備が眠る所であった。

星の再生が始まり10分ほど立った辺りで、ハルシオンは雪の方へ目を向け、目を見張った。全ての体組織が元通りに復元されていたからである。

それでもまったく動く素振りを見せない事からどうしたのか？と近づいていく。

床に伏せていた体を起し、顔を自分の方へ向けさせると壊れた人形のように瞳は輝きを失っており、口からは検体の名前であろう紅葉の名前が何度も紡がれていた。

ハルシオンは、その状態から心が壊れてしまったと判断すると検体の確保の為に軍用機に乗せてから、スワイデルト市長へ検体を運ぶ事を告げて政府直轄の情報機関の建物へシステムを設定して移動を始めた。

私の名前はイスル・ハーバネスト。科学顧問団の筆頭、今回のユグドラシルシステムにより星の再生が行われてからすでに3日が過ぎている。

星の重力・大気は母星に近くなり、大気中のナノマシンについては現在は宇宙線などの有害物質を排除する大気が形成されるまでの物として利用している。

一番画期的なのが、C-101の検体が必要なくなったと言うのが大きい点である。

過去に遺伝子凍結された卵子を使い、今まで成功しなかった女性体の製造が成功している。さらに分かった事がありこの星の再生が始まった事によりテロメアに害していた未知なる物質が除去された事により我々の寿命も140年とは言わないが60年前後まで生存可能という結果が出た。

あと一週間ほどでこの星は母星と同じ環境下に戻る事になる。

あと、星を正常に稼働させる為に1ヶ月に1回、女性体をシステムに喰わせないといけないというのが分かった。

それも、今はいくらでも製造が効くため最早問題はないだろう。政府の方でも必要という事で承諾はもらっている。

イスルはそのまま、待機中の画面を表示した。

そこには連行されてきた、雪が虚ろな目をしたままベットの所で座ったまま、検体N.O.C-101Aたる紅葉と同じ大きさの縫いぐるみを抱いて歌を詠っていた。

量子変換研究設備が眠っている場所では、アルとガイが何十も大気中に表示されているデータを総チェックしてプログラムを組みなおし、オルスバスが設備の復旧に全力を挙げていた。

「オルスバスどうだ？いけそうか？」

「ああ、理論上は紅葉を再構成して取り戻す事が出来る。」

アルとオルスバスのやり取りを見ながら、ガイも疑問に思った事を口に出す。



「なあ？もし仮に成功して紅葉を量子変換から取り戻せたとしたらこの星はどうなるんだ？」

オルスバスはその問いかけに、この星を根本から作り変えた物を取りだすんだ。数日中にこの星は崩壊を起こすと告げた。

「まじかよ？星の崩壊ってひとつの正系が吹き飛ぶんだろ？無事じゃいられないんじゃないのか？」

ガイの言った事はもつともある。

「その為に今設備の復旧をしてるんだ。これが復旧できればナノマシンを使い都市ごと宇宙空間に移動する事が出来る。」

「でもそれって誰かがここに残って犠牲にならないといけないんだろ？どうするんだ？」

アルはガイとオルスバスのやり取りを聞いていた。

「なあ？雪をその前に助けにいかないとやばいんじゃないのか？オルスバス所長の前に言った女性体がもう作られている環境となつたらわざわざ生かしておく必要がないんじゃないのか？」

それを聞いた、オルスバスの表情が翳った。そして我々だけで助けに行けるほど、相手は弱くはない。救出は絶望的だと苦悩の表情をしながら語った。

数多の星が煌く中に存在しているギリシア風の高さ300m以上もの無数の柱で支えられている巨大な神殿の前に4人の神官服を来た者が集まっていた。

「まさか、我々全員で人形を助け人いくとは思いませんでしたね」

「仕方ないだろう、あのお方のご命令だ。」

「ウリエル、もう体の調子は大丈夫か？」

「はい、問題ないですね」

「それでは行くのでしょうか？」

「あと、あのお方からの命令で、邪魔する者は容赦しなくて言い、それと私達の力を一時的とは言え3割近くまで使えるようにしておいてくれるという事だ。」

「それでは、いくぞ」

ルシフェルの言葉と同時に空間にゲートが展開される、そのゲートをルシフェル、ガブリエル、ウリエル、ラファエルの順に潜っていた。

それをミカエルは見ながら、帰りのゲートの展開の準備でもしておきますかと呟きながら神殿の中へ姿を消した。



## 死と破壊

リメイラ合衆国首都スワントにある、市長邸では市民に対して演説が行われていた。

科学が発展してこの世界において多くの機材とは必要なく数人のスタッフにより大気中の粒子をコントロールして作り出した伝心装置によりトーラント全域にそれは流されていた。

「私は、市長のスワイデルト・マーカスグレイズである。このたび、我々は大いなる前進をした。それはこの世界を政府が懸命に諦めずに作り続けてきたナノマシンにより改善する事が出来たという事実である。今、我々はこの星に新たな第一歩を踏み出した事を宣言しようではないか！政府が作り出した、緑や動植物もあと数ヶ月のうちにこの星を覆いつくし命と緑の楽園に変える事だろう。すべては、今！生きてる者、そして先人達が諦めず長い年月、前進を続けてきたからこそである。今、ここに我々は新たな世紀として大陸の名をとりトーラン紀0年としようではないか」

長い演説はまだ続いていく。

ハルシオンはそれを聞きながら、ナノマシン程度でどうにか出来るならもっと早く出来ると誰でも気がつくだろうかと悪態をついていた。

その時、軍警備防衛室内にアラートが鳴り響いた。

「どうした？」

「わかりません、ですが空間が割れていきます」

「なんだと？表示しろ」

部屋の空間に次々とグラフと数字と画像が表示されていく。

「な．．．なんだ？あいつらは？」

ハルシオンと部下達が見てる前でその物体は姿を現した。

赤い8対の翼を持つ者 赤い2対の翼を持つ者 赤い4対の翼を持つ者 赤い6対の翼を持つ者がそれぞれ姿を現す。

「ルシフェル、どうやらこの文明は少しは進んでる文明のようですね。こちらに来た我々を発見したようですよ」

3人がガブリエルの指を指した方へ視線を向ける。

「丁度いいな。私はこの視線の消去に向う。ガブリエルとウリエルは人形の確保。ラファエルはこの国の首都を破壊し麻痺させておけ。」

瞬時に4人の姿がモニターからかき消えた。

ズン．．．

音と共に建物が揺れる。

「どうした？報告しろ」

「軍が攻撃を受けています。モニターに移せ」

そこには8対の翼を生やしたルシフェルが腕を組んで上空に滞空していた。

「すぐに攻撃をしろ！座標指定兵器でかまわない」

軍の基地というだけあってその数は雪を空に釘付けにした数の20倍に匹敵する。

次々とルシフェルに対して、攻撃が打ち込まれるがルシフェルの姿が揺らぐだけで決定的なダメージを与えられていない。

ルシフェルは砲撃を喰らいながらも実際は、アストラルサイド精神世界に肉体の本体を移動していた為、無傷であった。

「くだらないな、この程度の攻撃とは……見せてやろう。虚無を司りし神の力を！」

手を眼下に見える軍の基地に向けて物質を強制的に反物質へ変換しそれを化学反応により転化させる。

「滅びの風をその身に受けるがいい。《滅びの風》」

転化されたエネルギーが一瞬で建物を融解させ、消し去っていく。

「な、なにが起きているのだ？」

「わかりません。エネルギー値が……超新星と同等……」

疑問が解決されぬまま直径5kmほどの爆発が発生し全てを焼却した。

軍本部が消滅した頃、ウリエルとガブリエルが科学省を建物を突き進んでいた。

文字通り壁を破壊しながら、前方に数十人の警備兵が現れるが体が内側より爆散しバラバラに飛び散る。降りかかってきた血肉は全てウリエルの炎により身にたどり着く前に焼き尽くされる。

「ずいぶんご機嫌じゃないか？ガブリエル。」

「ああ、3割近くの力があれば、相手の内部にある支配下を血すら操る事が出来るからな、これが出来ていればとつくにあの忌々しいスプリガンすら殺せたものを！」

イスルはモニターで侵入者たる二人を見て、震えていた。そして軍本部へ連絡を取ろうとしても、まるで軍本部が消えて無くなってしまったようにエコーを返すだけでナノマシンによる現地確認すら一切出来ない状態であった。

「あれではまるで……」

イスルの言葉が吐き出される前にウリエルが壁を打ち抜くために使った《紅星剣》<sup>レシエンダ</sup>により部屋の隔壁ごと頭だけを残して蒸発させられていた。

空中に残った顔は何が起きたか分からないままガブリエルの能力範囲に入ってしまった爆散して部屋内に脳漿を飛び散らせそれもウリエルの炎で一瞬で蒸発させられていた。

「こちらに人形がいるようだな？」

二人は雪のいる方へ進んでいった。

スワイデルトは演説中に側近達から未知なる者が襲来したという話により演説を中止。

そして詳細を確認する為、連絡を取ろうとした軍も科学省も連絡がつかない状況に陥っており市長官邸は混乱していた。

「どうなっておるのだ？なぜどこも繋がらないのだ？」

「わかりません、何が起きているのか一切報告が、それにナノマシンが何者かにより制御下を離れている為、一切の交信が遮断されている状態です。」

”無駄な事はよしたらどうだ？人間よ。貴様達は我が主の物に手を出したのだ、楽に死ねると思うな”  
全員の脳に直接言葉が降ってくる。

「これは一体なんなのだ。」

スワイデルトは恐慌に陥る。

首都の上空に鎮座している、ラファエルは首都と官邸を眼下に見ながら手を上空へ掲げる。

「風を司りし神の力を見せてやろう」

大気を直接真空状態へ変えていく。首都上空に巨大なレンズを形成。太陽風を直接レンジへ当て収束する。



「滅ぶがいい、エルドメイス《神光陣》」

巨大な熱量を持った指向性の光は首都のシールドを一瞬で蒸発させ  
官邸を中心に首都を消し去った。

## 眠りと覚醒

ルシフェルは大気に存在しているナノマシンがおかしな動きをしている事をラファエルより聞いていた。

「そうか、場所は特定できるのか？」

「ええ、問題ありません」

ルシフェルのいる空間に情報が表示される。

「ふむ、近いな。直接見に行くでしょう。ラファエルは撤収の準備を進めておいてくれ」

「はい、わかりました。」

ガイとアルとオルスバスは量子変換設備の元研究所にて最後の調整を行っていた。

「これで理論上はいけるはずだ！」

「あとはこのプログラムを書き換えて起動すればいいんだな？」

ガイの問いかけにオルスバスが頷く。

” まったく、気になったから来て見ればこんなくだらないプログラ

ムを組んでいるとは興ざめしたぞ、人間よ？”

3人の脳に直接、言葉が降ってくる。

「な．．．なんだ？」

3人が当たりを見渡すと一人の白い髪に8対の赤い翼をもった男が近づいてくるのをアルの視界が捉えた。

「なんだ？貴様は？」

”人に名前を聞くならばまずは自分から名乗るべきではないのか？”

3人は声を上げようとしたところで、目の前にいる男は名前を教えなくてもいいと言う反応をした。そして3人の順序に見ていく。

”アルベルト・スターゲイザー、ガイスター・ブルネイド、オルスバス・レイドか”

”我が名は、ルシフェルだ”

「な！」

3人はルシフェルという名前で驚いたのではない。自分達の名前を当てて見せたからだ、オルスバスにとっては二人以上の衝撃があった。

オルスバスが隠していた姓まで当てて見せたからだ。

”貴様達の魂のあり方を見れば分かる。気にすることはない”

ルシフェルの言葉に啞然としている3人の近くにきて、組んでいたプログラムを目で追っていく。

”この程度の下位言語でこの星の上位言語システムを掌握できるわけがないだろう?”

「なんだと?」

ガイがルシフェルを睨みつけるが威圧感で近寄る事が出来ない。

”だが、発想は悪くはないな。どうやらお前達は人形にとっていい影響を与えそうだ。少しだけ力を貸してやろう”

ルシフェルは片腕を振るうとそこに、画面が表示され文字の羅列が凄まじい速度で打ち込まれていく。

オルスバスはその文字に見覚えがあった。

移民が始まる前時代、母星が軍で各惑星を支配下に置いていた頃、発見された遺跡跡の文字にそっくりだからだ。

”いま、打ち込んだこのデータとお前達のデータを合わせて生命樹で使えばいい。それと貴様らが木ユグドラシルと呼んでいる物は生贄を使わずとも動かす事ができる。動かすには……”

途中で、ラファエルから通信が入る。

「ルシフェル、ミカエルよりあと3分ほどでゲートを開くと通達がありました。至急今から指定する座標に来てください。」

「わかった」

”人間達、鍵はお前らの中にある、考えてみるのだな”

3人が返答する前に目の前から霞のごとくルシフェルが消え去った。

ウリエルとガブリエルは、雪が軟禁されてる部屋の前に来ていた。

「ここか？」

「人形の波動から見て間違いは無さそうだ。」

ウリエルは扉に手をかけるとドアをそのまま引き千切った。

そして二人の視界に腰まで黒い髪のある少女が光を映さない虚ろな眼差しで、一抱えもありそうな縫い包みを抱きながら歌を詠ってる姿が映った。

ガブリエルはその姿を見て、どうするか思案していたがウリエルはそのまま歩いていき、雪が抱いていた縫い包みを力任せに奪い取った。

抱いていた物を奪われた雪は二人に必死に娘を、紅葉を返してくださいと懇願している。

「娘？どういふ事でしょう？」

ウリエルが疑問の眼差しで雪を見ていたが、ガブリエルが雪の額に手の平を当てて、そのまま頭の中に手を滑り込ませた。

ビクッ……

雪は体が痙攣したあと、動きを止められてしまっていた。

二人がいる空間に次々と雪の記憶が表示されていく。

そして、紅葉と呼ばれる娘が雪の遺伝子で作られた事を確認し、雪が妊娠している情報も引き出した。

「やはり、女性の体のままだと何かと不便のようですね。一度、胎内を直接この手で消去してから肉体の再起動と必要のない記憶の削除を行いましょう」

ガブリエルが停止している雪のお腹の表面を撫でてから子宮の位置で手を止めて胎内へ手を差し込もうとした途端、弾かれた。

「くっなにが？」

私は、深い深層心理の中で溶け込みそうになりながらも、自分の中で宿っていた命を無理矢理奪われる事に恐怖していた。

もう、奪われたくない。でも、私じゃもう守れない。だから．．．．．  
そこまで考えた所で、私の中にもう一つの別意識が眠っているのを感じた。

693

その意識は私が出てくるまでずっと戦ってくれていた意識だった。私の心が強くなってからはずっとずっと眠っていた。

私はその意識に語りかけた。助けてと、私の赤ちゃんを助けてと。

俺は、意識が覚醒するのを感じた。

そして、目の前の少女が俺に助けを求めているという事を．．．  
どこかで見た事がある顔だったが、女性の助けを断るようでは男の中の男じゃない。

俺は、承諾し、意識が覚醒した。

覚醒した俺の視界の中には忘れてたくても忘れられない、俺にこの眼を埋め込んだ奴らがあった。

俺は風の精霊を爆風に変えて俺の体に障っていた奴を弾いた。

## 敗北

白い巨大なドーム状の建物の一部が崩壊しそこから、赤い翼をもつた者が二人外へと放り出された。

「なにが起きたというのですか？」

ウリエルの問いかけにガブリエルも理解が追いつかないでいた。人形の子宮内部を再構築しようと胎内へ手を入れようとした途端、弾き飛ばされ追撃の魔法攻撃により外部まで吹飛ばされたのだから。

建物から人形が姿を現した。

俺は視界に見える、神官共に空間破裂の無詠唱攻撃を加えたが無傷な事に少し安心していった。簡単に死なれては困る。

俺は口の中の犬歯を擦り合わせて臨戦態勢にもっていく。  
視界は中はずでに複写眼により数値やグラフで埋め尽くされている。アルファステイグマ  
そのまま、結界で足場を作り、瞬歩にて神官達のとこまで移動する。そのまま存在の力を魔力に変えて指先に刻み込んでいた対神格魔法を強制発動させる。

ノータイム、詠唱なしで動作の一つだけで繰り出せるその魔法は、

「《まこうせんだん魔光千弾》」

右一指し指を左から右に振るっただけで数十の追尾性のある黒い貫通弾が形成され神官達に打ち出される。

ウリエルは《アケニステイル火神壁》で、ガブリエルは《エターナサリージンケ絶対氷結陣》でそれぞれ



防御を展開する。

雪が打ち出した闇の閃光は二人の防御を破壊貫通しすべて二人に着弾し大気中に巨大な衝撃波を発生させ一瞬で科学省の建物を含め数百メートルを吹飛ばした。

「まったくとんでもないですね。」

「まったくだ、歌衣がなければ多少ダメージを受けていたかも知れないな」

俺はそれを見ながらも呪文を紡ぎ空間に魔法式を構築していく。

対神格用強大魔法

『千の雷』  
イカツチ  
ライセイ

『億の雷精』

『今こそ、我が元につどいて 我が名に従いて』

『全てを破壊する 天空の轟雷と成せ』

そして力ある言葉と同時に発動する。

「『ブレイクハース神界破斬』」

宇宙そらで作られた巨大なプラズマが命にしたがって降臨する。

直径200mもの推定1500億ボルトの雷が二人を飲み込み大地を蒸発させその衝撃により大気を揺るがす。

俺の視界の複写眼が二人が瞬時に使った防御を解析した。

解析完了……信者達の聖歌により強化された歌の衣の力場

俺は、マルチタスクを起動しながら空間上に魔法式を構築する。

『悪夢の王のひと欠片よ』

『天空の戒め解き放たれし』

『氷れる黒き虚無の刃よ』

『我が力 我が身となりて ともに滅びの道を歩まん、神々の魂すらも打ち碎き！』

同時に魔法陣が輝き展開されていく。

さらにマルチタスクによりもう一つの魔法式も発動する。

『闇よりもなお暗き存在』

『夜よりもなお深き存在』

『混沌の海よ たゆたいし存在 金色なりし闇の王』

『我ここに汝に願う 我ここに汝に誓う』

『我が前に立ち塞がりし全ての愚かなる者に』

『我と汝の力もて等しく滅びを与えんことを』。

そして2つの魔法陣を合成！

「ラグナ・スレイブ超広範囲神滅斬！！！！」

時の止まった物質すら切り裂く巨大な虚無の刃が二人の神官がいる場所を空間ごと消し去っていく。

それでもガブリエルとウリエルは平然と構えていた。

「無駄な事をするものですね」

「そうですね」

雪が発動した魔法の余波が過ぎた後、二人は軽く感想を言いながら雪の方を見ていた。

「ばかな、何故効かない？」

やれやれと言った表情でウリエルが肩を竦める。

創造物が創造者に傷をつけることができないのは当たり前でしょう？と子供に語り聞かせるように雪に聞かせる。

「さて、覚悟はいいですか？」

ウリエルが攻撃態勢に入ったところで、ルシフェルから通信が入った。

もう人形は覚醒して安定してる為、この地にいる必要は無い事、それと自分達がこの世界にいられる時間が残り少ない事。そして、人形の娘の蘇生がうまく行けば希望を与える事が出来、その希望を絶望という甘いシロップに変えた時の事をルシフェルは二人に言い、撤退を指示した。

「ガブリエル、撤退のようです。」

「わかっていますよ」

ガブリエルは、雪が使ってくるあらゆる魔法を無効化しキャンセルその体を地面に叩きつけ、顔を足で踏みつけていた。

ウリエルが消えたあとガブリエルも雪を見て一言呟いた。

「人形風情が分をわきまえなさい。お前程度の力などムシケラに等しいんですよ」

そう言いその場から、ガブリエルも姿を消した。

「うあああああああ」

手も足も出なかった相手に雪の号泣が、更地となった場所で響いた。

## 思いと歌と

深い深い闇の中を落ちていく。

どうやら、俺は神格魔法の使いすぎによる影響により意識を失っているようだ。

闇を抜けるとそこは、よく夢の中に出てきた、あの光景の風景だった。

地平まで続く死体の山そして去っていく男の後ろ姿。

そして、見たことのある町並み。

そしてそこにはもう一人の俺が立っていた。

私は、ありがとうともう一人の私にお礼を言った。もう一人の私は力及ばなかったと私に語ってくれた。

それでも私の胎内の子は無事だった事からもう一度感謝を伝えた。

俺は、もう一人の俺と話しが出来た事に驚いていた。今まで、こんな事は無かったからだ。

違う、元々、俺達は一人だったからだ。それが何かの原因で人格が別れてしまっている。

だからこそ、話しが出来ている。

そう、まるでこうあるのが本来の自然の形のように受け入れている。まるで今までの自分達が無理矢理不自然に組み込まれていたように感じる。

それでも、結論はでないが……

私は、もう一人の私が戦ってる場面を見てなぜ力が通じていなかったのか大体の予想がついていた。複写眼を使った魔法は全て無効化キャンセルされてたけど、複写眼アルファステイグマを使用しない魔法、魂に刻み込まれて言霊で発動する物については彼らは防御術を展開していたのだから。

私はその事をもう一人の私に伝えた。

俺はそれを聞きながらも確かになと思った。

それでも複写眼アルファステイグマが使えないとなると俺の使える術は2つのみになってしまう。

あと組み込める魔法は指の本数の数だけ残り8つ。

それを開発する為には膨大な時間を必要とする。初めての異世界召還から1年以上たっているがその間に組めた対神格魔法はわずか2つ。

それに複写眼アルファステイグマが解析した奴らの歌衣イルディストストールも破壊しなければダメージが通らない。

神官共の防御機構を破壊しダメージを通す術の開発はどれだけかかるか想像もつかない。

それでも俺を足蹴にした野郎はぶちのめさないと気がすまない。だからこそ俺はもう一人の俺に体の主導権を一時的に渡して深層心理下で術の研究をすることにした。

私はそれを聞きながらも、もう一人の私の意見を尊重し手伝う事にした。

それでも私はもう一人の私と話しが出来た事に疑問を思っていた。もう一人の私も疑問に思っていたみたいだけど原因は不明だった。

それでも、私達おれは進む為に力を合わせる事にした。

私が眼を覚ますと、目の前にはアルとオルスバスともう一人男性がいた。

「大丈夫か？雪。」

アルは私が眼を覚ました事に気がついて話しかけてきた。

「うん、大丈夫だよ。えつと彼は？」

私ともう一人の男性に視線を向けるとアルは友人のガイスター・ブルネイドと教えてくれた。その人は私にガイと呼んでくれて構わないと言ってくれた。

私は機体の中の対面座席を寝ていた為、一人で占領する形となっていたため、ガイとアルとオルスバスは一緒に並んで座っていた。

私がスバルに視線を向けると、スバルは何度も自分のやった事に対して謝罪してくれた。

そして、オルスバスは紅葉を戻す事が出来ると言う事を教えてくれた。

今、その場所のユグドラシルシステムの所へ向っていると言う事だった。

でも、紅葉を助け出すと世界を再構築した力を無くしてしまったため、星が崩壊する可能性が高い事もあるとオルスバスは言ってきた。

そして星の崩壊の際に起きる事に対してナノマシンを使い、一時的に各都市を強化して宇宙を漂わせる事にするシステムも出来ているという事も告げてきた。

そういう話をしてる間に私達が乗る機体・音周は星の中心部に続く空洞上空に到達していた。

オルスバスの話しによると軍は消滅している為、作動しない対空防衛網の中を降りていき、10分程で星の中心にたどり着く事に成功した。

ユグドラシルのある空間を見るとパイプが血管のように縦横無尽に走っていて、それが血管のように脈動していた。

青い空洞の中を歩いていき、私達4人はユグドラシルのコンソールパネル前にたどり着いた。

アルファステイグマ

私は複写眼を起動して何か問題があった際に対応出来るように用意をし、ガイ・アル・オルスバスは3人も何十も空間に表示されている計算式やグラフをユグドラシルに入力していた。

私はそれを見ながら、ふとおかしい事に気がついた。

この空間は、多数の座席が設置されているからだ。

私が始めてきたときの薄暗い状態では確認出来なかつたけど、血管のようなパイプが脈動し光が均一化されてる状態だと確認する事が出来る。

私は今、私達が立つてる所を見た。

そこは、まるで以前インターネットで見た何かに似てると思った。

そう、まるで．．．．．コンサート会場みたいだと．．．．．

そこまで考えてユグドラシルを私は見て、ふと頭の中に浮かんだ事をすぐに打ち消した。

まるでこれ．．．これって見方を変えればパイプオルガンみたいだと．．．．．

「よし、システムの入力は出来たぞ」

ガイがそう告げるとアルとオルスバスも、頷いていた。

私もそれを聞いて、そちらを振り向くと複写眼が一瞬で状況を解析した。



解析完了・・・物質の再構成の開始・・・

物質を視た瞬間、嫌な予感がした。

人を構成する物は、魂Ⅱ記憶 存在Ⅱ物質 これから出来ているのだから、物質だけの構成という事は・・・

ユグドラシルシステムを複写眼で見てもそれ以上の解析は見当たらない。

私の前で光の粒子が集まっていき、ひとつの物質が形作られていく。その姿は、髪の毛は金髪だったけど私を小さくした容姿だった。

私は娘の紅葉が倒れかけた所で抱えたけど、息はしてるけどそれだけだった。

私以外の3人は成功した事に安堵していたけど、私は紅葉の前髪を指先で整えながら眼を覚まさない事に胸の奥が絞めつけられる思いだった。

現代風に言えば、植物人間に近いかも知れない。

私はいつの間にか紅葉を抱きながら嗚咽していた。

もう、紅葉は戻ってこない・・・

もう、ままって呼んでくれない。

もう、ままってあの笑顔で歌を歌って！言ってくれない。

結局、どんな大切な物があっても私は助けられない。

今までと変わらない事に思いに胸が締め付けられた。

私はどうしたらいいのかわからないまま、紅葉が何回も歌ってーと言ってくれた歌を無意識に紡いでいた。

オルスバスは、ユグドラシルの広場に失意の眼差しをしていた雪が、歌を歌い始めた事に驚いていた。

「アル、オルスバスこれを見てくれ」

ガイに指摘された箇所を見ると、ユグドラシルシステムの可聴領域システムが雪の歌に反応していた。

それに伴い、歌で作られたエネルギーがこの部屋を満たしていくのをシステムのグラフが数字が現している。

それだけではなく、雪を中心に光が溢れているようにこの空間を照らしていく。

雪の周辺には多数の光が舞い踊り、紅葉の中に入っていく。

それはとても幻想的で美しい風景。

それは雪が歌を歌い続ければ続けるほど綺麗にそして光輝く。

.....

.....

.....

今、広間は白と金の光で照らされており視界はそれだけに埋め尽くされている。

歌の終わりと同時に光が雪へ収束していく。  
それでも、雪たちが来たときより広間はやさしく全てを包み込むように全体的に光っていた。

私は最後まで歌った後、「ママ……」と聞きたかった声が耳に聞えてきた。

「ママのね、お歌が聞えたの……」

そう言って、紅葉は私の胸元に額を寄せながら泣いていた。  
私も戻ってきてくれた事に涙を流しながら再度、抱しめていた。



## ユグドラシル編エピローグ

私は、紅葉を両手で抱っこしながら蒼く淡く光輝く広い広間で歌を歌っている。

「やはり……」

オルスバスは一言呟いてから私達の方へ歩いてくる。

「この機械は、どうやら歌で動くようだ。これから、問題は解決出来る。」

「問題って星が崩壊するって問題？」

「ああ、そうだ。定期的にここで歌を歌う必要はあるかも知れないが少なくとももう問題はなさそうだ」

私の目の前で、オルスバスは走っていった紅葉を抱き上げてから頭を撫でながらそう言ってきた。

そうすると問題は、これからの私達の関係ってなるけど……

アルとガイは私の方を見て複雑そうな顔をしている。

私も、こんな形で母親にされたオルスバスにはめっちゃ抵抗あるけど、子供達の事を考えると両親は必要だと思っし……

でも、むっっちゃ強姦に近い形でされたから……でもお腹の中にも子供いるし……子供には罪はないし……もう、どうしたらいいのよ！

私の心の中の葛藤を感じ取ったか分からないけど、いつの間にか私の前に紅葉がいて私の顔を心配そうな顔で覗き込んでいたのに気が

ついた。

「まま、どうしたの？」

私は、その問いかけに「ううん、なんでもないので」としか答える事しか出来なかった。

元の世界に帰っても紅葉ともう一人のお腹にいる子をこの年齢で一人で育てる自信がないし．．．本当に困ってしまった。

ルシフェルという名前．．．それがこの世界を襲った神官の一人だとアルから聞いてから一週間が過ぎた．．．

私が歌を木に捧げた事により星の生態系は戻り、寿命を阻害していた物も除去された為、この星に住む人達は元の寿命まではいかないけど100年近くまで生存可能になったようだ。

それと今回の神官達の襲来により首都、軍、科学省の消滅で全人口の15%が死亡というとてもない被害が出たそうで、副都市デイルードを含めた4都市は政治中枢を含めた復興などを急ピッチで進めていた。

科学省は完全に消滅していた為、今回の星の復興を手伝った功績としてアルとガイが二人が長官として着任した。

そして、オルスバスと言えば、市長に当選していた。

今も、ユグドラシルの説明を含めた旧政府の実態を市民に演説して

いる。  
そして

...

..

.

「はあ、疲れたー」

今、音周の機体の中では私は紅葉の頭を撫でながら椅子に座っていた。

「ねえ、これってまだやらないといけないの？」

「そうだな、もう少しがんばってもらえたらうれしいな...」

私は今、歌という文化をこの星に根付かせる為に歌手として歌を歌ってるわけだけど、正直カラオケまでならいいんだけど何万人もいる人の前で歌うのはストレスがすごい。なんとかしてほしい

「そういえば、雪が申請していた件なのだが、無理矢理通しておいた。」

そう、私は人を物のように作るこのやり方について反抗していた。最初だけは仕方ないけど、第1世代の赤ん坊、性別は女性だけど政府が責任を持って試験管の中ではなく人が育てる事になった。

いろいろと前途多難だけど、なるべくそういう事はきちんとしてほしいと私は思っている。



でも、これはあくまで私の考えを押し付けた傲慢な考えでもあるけど……

それと、今はやっぱり子供達の事もあってこの世界と地球を歩き来する事にした。

やっぱり、紅葉と赤ちゃんの事を考えると自然とそうなっちゃうんだよね。

オルスバスとは、情状酌量の余地？あるのかなぁ……とりあえず娘の手前一緒に住んでるけど、心境はとっても複雑。

でも一生懸命父親になろうと頑張ってるのは伝わってくるから、最近はずっと普通に会話してる。

だからニツクネームの

「スバル、今日はこの後どうするの？」

「特に何も無いな。それとエナジーフィールドが星から消えて、母星と連絡を取る事が出来た。1ヶ月ほどで此方に調査団を派遣するそうさ。さすがに700年も音信普通だったからな、向こうとしては晴天の霹靂だったのだろう。」

私と紅葉とスバルの乗った音周はそのまま、我が家に向けて空を滑走していった。

スバルに聞いた、私の口から発せられたシステム起動のワードと機械音、人格の完全分裂、ルシフェルという天使長の名前をもった神官。

一体何をしたいのかどうなってるのか分からないけど、今だけはし

ばらくこの娘を抱いている温もりを感じていたい。

願いはどこまで届くか分からないけど、きっともう一人の私に言ったら、自分の道は自分で切り開けと言われそうだね。

私は音周から見える青い空を見ながらこのまま争いが無ければいいのにと願って止まなかった。

## 家なき子

西暦2011年10月27日午前10時30分、雪は今大変困っていた。

なぜならば……

家賃の滞納により借りていたアパートを10月一杯で追い出されるという事になっていたのである。

スバルの家で住んじゃえばいいじゃんと心の中で悪魔が囁いてきていたが……

それはそれでどうなのかなと思っっている。

そしてスバルと言えば、地球にちゃっかりアーカムの技術部門に就職していたりして年収1000万オーバーの高収入所得者になっているという異世界人の成功例であった。

雪はなぜか……あれおかしいな？異世界でもそんなに私、成功した事ないのとホロリと瞳から水が流れていた。それは塩味が効いていたとかいないとか

私は「はぁー」と溜息をつきながら、サイゼリアでドリンクバーを頼んで、これからの事を考えていたら3時間ほど経過していた。

でーでんでーでん と鮫の映画の音楽が鳴ったので携帯電話を取り出すとアーカム財団副所長剣山という名前が表示されていた。

うわぁ……思わずこんな言葉が似合いそうな顔をしながら電話の

着信パネルを操作した。

やあ、雪くん。実は、頼みたいことが・・・ツーツー 即効電話を切った。

剣山さんの頼みとかロクな事ないし・・・

ででででででで 煩いくらい電話が鳴る。

「まま、でんわがずっと鳴ってるよ？」

黒いくりんとした丸い紅葉の瞳が私に向けられている。  
私は仕方なく電話に出た。

「雪くん、電話が突然切れたみたいなのだが？」

「電波が多分悪いと思いますよ、なにせソフトバンクですからw」

「それならいいのだが、私からの依頼は厄介ごとと思われて切られてしまったのかと内心傷ついていたよ」

いえ、実際それが原因で電話を切りました。とは言えないし・・・

「君に頼まれていた、オルスバスさんと紅葉さんについてだが戸籍を作っておいた。これで、こちらの世界でも問題なく暮らしている事だろう。」

「ありがとうございます。でもあくまでもオブザーバーの立場なのでこの世界には長くいるとは限りませんよ？」

「ふむ、それでも彼の技術はとてすばらしい。ぜひ我がアーカム財団の正式な職員としたいものだ。それと今回、作った戸籍の費用については事件を一つ片付けるといふ事で貢献してもらいたい。」

「え!？」

「どうかしたのかね？」

「いままで散々、アーカムには貢献してるはずですけど?」

「それはそれ、これはこれだ。」

「過去を振り返っていたら何も手に入れる事は出来ないのだよ?」

理不尽すぎる。思わず心の中で突っ込んでしまう。

「詳細はメールで送っておいたから見ておいてくれ」

つーつー。それと共に電話が切れた。

「まま、どうかしたの?」

紅葉が心配して聞いてくる、私はそれになんでもないよとだけ答えた。

結局、私は千葉駅前にスバルが購入した新築分譲中の超高層マンションに住む以外に宛てはなかった。しかも最上階の1フロアぶち抜きとか……これを一括で購入したスバルのすごさに内心これってどうなの?って思ってた。

これが本当の格差社会なのか……と……

スバルは億単位クラスのマンションを一括購入。私は異世界召還の連投により家賃滞納で家から追い出されるとか……なにこれ？何プレイ？

って思ってしまったても間違っていないよね？

あ……眼から水が……

アパートから追い出されるまで時間が無い事もあり、マンションと私のアパートの間に開く亜空間ゲートで道を作って荷物をぽいぽいマンション側へ投げ入れていく。半日ほどで清掃なども全て終わり、不動産会社と手続きをしてマンションへ移った。

その頃にはすでに夜になっていて、スバルは家に戻っていた。

「おかえり、雪。今日はどうだった？」

「えー、追い出されたアパートの荷物を全部運んでたよ。」

「追い出された？」

スバルが真剣な表情で聞いてくる。

「う、うん。だからね、家を新しく借りるまでちょっと荷物を置かせてほしいなーって……」

スバルはさらに真剣な顔を私に向けてくる。

「ダメならいいよ、すぐに出ていくからごめんね。」

スバルは私の話しを聞くと、椅子に腰かけてから聞いてきた。

「そのなんだ。俺と一緒に住むのが嫌なのか？」

「そうじゃないけど．．．．．」

「でも、まだそんなに分かりあってないというかなんというか．．．」

「雪、お腹の子の事もあるが、この国では男が女を面倒見ると聞いた。だから一緒に住んでほしいのだが？」

私としては紅葉を主体に考えるとそれがいいと思ったけど．．．さすがにまだそこまでは早いというかなんというか．．．．．気持ちの整理がつかないのが現状であって．．．．．考え込んでしまった。

俺は未だに雪からの信頼を得ていない事に気づきながらも、この世界の男に雪を渡したくないと思っていた。

その為、汚いと思われるかもしれないが娘の話を中心に持ち出しながら一緒に住む事についてなんとか同意までこぎつけた。

私は今、荷物の整理が終った10畳ほどの部屋のベッドで紅葉と一緒に布団に入っていた。

紅葉はすでに寝付いていて私にべったりと引っ付いてきて、とても愛らしくかわいい。

その寝顔を見ていたら、スバルに無理矢理説得されて一緒に住む事

になった事も気にしなくなっていた。  
私はしばらく紅葉の髪の毛を触りながら、ゆっくりと意識が遠のく  
のを感じた。



## 使い魔登場！

私は、車の雑音とモノレールの騒音により眼が覚めてしまっていた。ベットのの上には3人が寝ていた？

私はぼーっとした眼差しで、確認していた。

私の娘の紅葉と私そして猫？

私はもう一度眼をゴシゴシして再度確認する。

私、紅葉．．．．猫？

あれ、おかしいな．．．？猫なんて飼った覚えないんだけど．．．

猫は茶色と黒の毛並みの猫だった。日本猫？

私は気になって、猫に手を伸ばして抱き抱えてみた。大きさは30cmくらいなのかなあ？首輪ついてないし野良猫？

でもこっつて20Fなんだよね．．．？どうやって入ってきたのかな．．．．？

頭の中はくるくる扇風機のように回って要領を得ない。

抱いてる猫が瞼を開けて青い眼で私を見つめてきた。そして

「よう！迎えにきたぜ！」

私は猫がしゃべった事に対して凍りついた。

あれ、いつから日本猫はしゃべるようになったんだろ？

これがうわさの福島原発の影響なのかな？とか謎な事を思いつつ．

...

「迎えに来たってどういう事なの？」

伊達に異世界召還を受けてない私はきわめて冷静に対応することができたはず・・・

「あれ？おかしいな、今日迎えに行くって剣山に言っておいたはずなんだけどな」

私はハツとして携帯電話を取り出してメールをチェックした。

内容は、エジプトのクフ王ピラミッドの調査 ナイル魔術師局より  
使い魔が迎えにくると書いてあった。

なんで、あんな熱い所に行かないといけないの？  
それでも仕事だから仕方ないか・・・

「事情は飲み込めたようだな！チケットは剣山が用意してくれてるはずだからいくぜ？」

「ちよつと待つてよ！私だって学校があるんだからもう2週間以上無断で休んでるんだから一回顔出さないとまずいのよ」

「なんだよ？学校に行つて何、学ぶんだ？剣山から聞いた限りだとお前もう特技持つてるんだから必要ないだろ？」

「ちよつとお前つて、私には雪つて名前があるわ」

「わかったよ、雪！細かい手続き終らせてさっさと戻ってこいよ？」

「なんで貴方はそんなに偉そうなのよ？猫のくせに！」

「失礼な！我は猫とは偽りの姿、今は使い魔だが元は女神バステトの従者のハステルだぞ？お前みたいな庶民と一緒にするなよ？」

「庶民つて！失礼でしょ。女神だが高んだか知らないけど、元つて事はクビになつたつて事でしょ、そんなんで偉そうにされてもねー」  
ふうーと私はジェスチャーする。

「ああ？お前なんか借りてた家のお金払えなくなって追い出されたくせに何言つてくれてんだ？」

「ピキッ（怒）

あんたにそこまで言われる言われはないわね……………とりあえず一回逝つておく？」

私は魔法式を空間に展開していく。

「朝から何を騒いでるんだ？」

部屋のドアを開けてスバルが入ってくる。

そして私を見て固まった。

私もスバルの視線の先を追いかけていくと胸元のボタンが寝ている間にオープンになったのか胸がフルオープンで頂まで見え見えだった。

「いやあ〜スバルのエッチー！」

「待て、言い訳をさせ……」

羞恥心に染まった私は、無我夢中でスバルに《アーク・プラス地霊咆雷陣》を打ち込んだ。

俺は体が痺れて、意識が遠のくのを感じて、床に倒れた。

スバル家の朝食時間はいつも雪が食事を作っている。

紅葉はすでにダイニングルームの椅子の上に座っている。

「ねえ？まま、パパがずっと寝てるよ？」

紅葉が疑問に思った事を聞いて来た事に関して、私は仕事で疲れるから寝かせておかないとダメよと言って近くにいた猫もどきと話しをしていた。

「お前、ひどいやつだな。別に夫婦なら裸くらい何ともないだろ？子供だっているんだから普段からそういう事もしてるのに今更ああいうのはどうかと思うぞ？」

「うっさい！あんたがいきなり朝から押しかけてくるのが悪いんでしょう？それより本当に私と話してる事分らないの？」

「そこは大丈夫だ、俺の言葉を理解するには素養が必要だからな、素養が無い者から見ればお前は猫に独り言を言ってるようにしか見えない。」

「ちょっとwそれ大問題なんだけど。それって明らかに独り言をぶつぶつ呟いてる痛い人みたいじゃないの？」

「大丈夫だ、それが分かればお前も中二病卒業だな。」

「えっと、どこからそんな言葉を教わったのか知りたいんだけど？」

「ふむ、最近は使い魔の間でもいろいろと雑誌が流行っていてな、最近だと《君が主で使い魔が俺で》というアニメが流行っていたな。」

「うわ、何その版權で訴えられそうな題目のアニメw」

私は猫と話しをしてる間にも朝食を作り食卓に並べていった。

そして紅葉と私が食事を取っているとスバルも起きてきた。

「おはよう、雪、紅葉」

「スバル、おはよう」

「ぱぱ、おはよー」

3人で食事をしてると、猫が私の膝の上にちょこんと座ってきた。なんか毛がふわふわしてこそばゆい。

「雪、そういえば、今日はどうするんだ？」

「学校を3週間近く無断欠勤してるから、顔出さないといけないか

ら．．．」

「そうか、それじゃ後で送っていくか？」

「ううん、大丈夫だよ」

友達とかに男の頃から知られてるのに、男に送り迎えしてもらった  
らそっち方向の気があると思われちゃうし．．．

ハッ！私は重要な事に気がついた。

いま、私は紅葉にママって呼ばれてさらに妊娠してる状態．．．  
つまりこれって男って言えるのかと．．．最近、ますます男に戻  
れない環境になりつつあるのを実感してしまった。

でも、紅葉の笑顔見てるだけでいいかなとか思っていたり．．．  
そこまで考えたところでブンブンと頭を振り冷静になれ、私と自身  
を鼓舞した。

紅葉とスバルは私のそんな姿を見て、キョトンとしていた。

## 波乱な予感？

私の名前は、橘<sup>たちばな</sup>63歳という。

ここ、高校定時制の教諭であり学校創立以来の問題児たる生徒がいる電気科の担任でもある。

私は今、元・男であったが今は性転換したのか？と思うほど変わってしまった生徒と話しをしていた。

基本、この学校では定時制の生徒は車での通学は認められており夕食も出て、学費も月8000円ととても安い。

定時制の学校は基本、電気科 機械科と分かれておりそれぞれ昼間とは違い何かしらの事情があつて通ってくる生徒が多い。

それでも昼間の生徒より圧倒的に人数が少ない事もあり1学年につき1クラスづつというのが原則だ。

そして定時制と言うだけあつて、制服は決められておらず過度な露出や問題がない限り原則として私服での登校であるが・・・

いま、私の前にいる鈴木<sup>すずきゆき</sup>雪はこの学校創立以来、他の生徒を競馬で言えば30馬身は離してゴールできるほどのぶっちぎりの授業出席率の悪さを誇る大問題児である。

「だからな、君は学校を休みすぎなんだ。しかも休んだ原因が異世界召還？知り合いに神経外科いるがカウンセリングでも受けるか？」

「いえ、ですから本当なんです。」

「わかった、わかった。寝言は寝てから言えよ？わかったな？」

私はいま目の前の鈴木に対して、溜息をついていた。今時、異世界だの召還だのまったくもう少しマシな嘘をついてほしいものだ。まったくこれだと、社会に出て就職した際に困るのではないかと心配になってしまう。

それでもこの生徒は授業の30%の単位を落とすとしても係わらず、テストの点数だけは常に全学年TOP独走をしている。

これでテストの点数も悪ければすぐにでも留年させる事が出来るのだが……

私は鈴木が私の方を見るのを見て、溜息をついた。

仕方ない、もう少し様子を見るかと……

「とりあえず、まだ単位は残ってるからこれからがんばって授業に出るように！わかったな？」

「イエッサー！」

「まったく、返事だけはいいな」

私は、電子の授業をする為、鈴木と教室に向った。

なんとか先生を誤魔化して説得できたよーと私は心の中で安堵していた。

「なあ？異世界召還とか言っただ大丈夫だったのか？」

私と平行して歩く猫が話しかけてきた。

「それより本当に見えてないんだね？」



「当たり前だ！そんじゃそこらの使い魔と一緒にするな。ステルス機能完備の最新鋭使い魔だせ！」

「なんかどっかの商品みたいな売出し方だね？」

「お、おい。前見るよ」

私は橘先生の方を見ると、痛い子みたいな目で私を見ていた。

「……これが俗に言う視線で相手を殺せるという奴なのかなと心で突っ込んでいた。」

学校内では特に目新しい事はなく、男性陣からいつもどおり話かけられていた。

皆、私が元男って事も分かっているのにそんなにトラブルは無かった。

授業が終わり、もう午後22時、蘇我駅から電車に乗り総武本線から千葉駅で降りてから自宅まで歩いてる途中で

「なあ？いつ、行ってくれるんだ？」

「うーん、今度の連休かな？」

「おい、そんなに待てないぞ？」

「えーだって、私だってこっちの生活とかいろいろあるんだよ！そんなにいきなりは無理だよ。それに先生にまた怒られちゃうし」

「学校つてのに興味があつて今日ついていったが、雪は、将来何になりたいんだ？」

「ん〜やっぱり、バリバリ稼いでかわいい女の子と結婚する事かな？」

「なあ？雪は少し現実を見た方がいいと思うんだが？」

猫が半眼で私を見てくる。

「なんで？やっぱり男としては女の子を奥さんに取りたいというのは普通でしょ？」

「お前、今、女だろ！しかも妊娠してすでに3歳の女の子までいる母親なんだからそういう夢はもう見ない方がいいと思うぞ？」

「違うよ！こんな格好してるけど元は男でよくナンパされたんだかね！」

「男からか？」

「うつさい！人のトラウマを一々突っ込んでこないでよね」

私と猫は周りがあのおねーちゃん変だよ、しつ、見たらいけませんという言葉のスルーしながらマンションの中に入って家の鍵を取り出して中に入った。

「あれ？見慣れない靴がある・・・しかも女物？」

「お、おい」

猫が止めるのも聞かずに部屋の中へ入っていく。

リビングルームで茶髪の毛を後ろでまとめた金縁メガネの知的な30歳くらいの女性がスバルを押し倒して、キスをしてる場面を目撃してしまった。

私は、「え？」と固まったままソファで寝ている紅葉を視界の端に捉えた所で、部屋から飛び出してエレベーターホールから表に出た所で、スバルが追いかけてくるのが足跡で分かった。

私は流していたタクシーに乗り、ポートタワーの方へと運転手さんに頼んだ。

私は、胸がドキドキと早いリズムで鼓動してるのを感じていた。

## プロポーズ

タクシーから降りた私は今、ポートタワーの人口湾の椅子に腰を掛けていた。

私、何やってるんだろ……

私がそんな疑問を思ってる間にも塩を含んだ冷たい風が私の体の火照りを冷やしていく。

スバルは別に、私の事が好きとかそういうのじゃなくて、実験をしてその結果、紅葉とお腹の子が出来たからそれで面倒見てくれるだけなんだから、別に他の女の人と付き合っても私が何か言うのは間違ってるよ……ね……？

ポタポタとスカートの上に染みが出来ていく。

私は雨かな？と思って空をみようとする視界が歪んでるのが見えた。

指先を瞳にもっていくと指先が濡れた。

あれ？涙が……

「雪。」

スバルの私を呼ぶ声が聞えてきた。

私は、立ち上がり、後ろを振り向かず

「何で追ってきたの？別にスバルとはそういう仲じゃないし、さっきの女性と仲良くしてればいいじゃん」

と言ってしまった。

心の中では、なんでキスしたの？とか言いたい事は一杯あったけど、元・男だった私としてはそんな事は言えなかった。

「違うんだ、俺の話聞いてくれ」

「違う？何が違うって言うのよ？私は、はつきり見たんだよ？紅葉がいる部屋で押し倒されてキスしてたじゃない！何が違うって言うの？分かってるよ、どうせ私はモルモットでその子供が出来たからその責任で生活を見てくれるってのは分かってる。だからもういいよ！好きにしたらいいじゃないの？別に私はスバルの事どうとも思っていないし、スバルだって自分の好きなように生きればいいでしょう？だから言い訳はしないで！惨めになってくるから。」

私は、無理矢理スバルに孕まされた事といつの間にか出来てしまっていた娘の紅葉の事も今までずっと一人で考えてきた。

18歳の私がどうしたら一人で育てていけるのかずっと不安だった。その原因を作ったスバルに対して紅葉がパパって懐いていたからどこにも当たる所はなかった。

本当はもう、ずっと前から心が限界だった。

先の見えない暗闇にこれからどうすればいいのか？

家族すら、いない私はどうしたらいいのか？

誰にも頼る事が出来ない。

それにお腹の子が大きくなったら身動き取れなくなるし稼ぐのも大

変になる。

だから、本当に、もう無意識の内に追い詰められていた。

「スバルなんて嫌い！大嫌い！どこでも行けばいいでしょ」

私がそこまで言うとスバルが私を後ろから抱しめてきた。

「雪、先ほどの女性は私は仕事で自宅を留守にすることが多い事。そして雪も学校があるのだろう？その為に雇ったアーカム財団のエンジニアなんだ。私が転びそうになった時に彼女が手を伸ばしてくれたのだが、一緒にそのまま転んでしまい、それであんな形になってしまったんだ。」

「嘘はいいよ！そんな偶然なんてあるわけないでしょ。もういいからほって……………」

私はいきなり、スバルの方へ顔だけ向かされたので腕で抗議しようとしたら腕を押さえつけられてキスをされた。

え？私の頭は真っ白になってしまって、スバルの舌が私の唇と歯を割って入って来たのを自分の舌で無意識的に絡めていた。

ふはぁ……………いきなり息が出来るようになって纏まらない頭がぐるぐる渦を巻いている。

「雪、俺はお前と紅葉を愛しているんだ。」

スバルが真剣な眼差しで私の瞳を見つめて来ている。

私は、それを見ながらえーっと……………纏まらない頭でコクンと首を縦に振った。

「本当は、お前が学校という物を卒業するまで待つつもりだったが雪がそんな風に考えてるなんて知らなかった。だから、一生お前を幸せにするから俺と結婚してくれないか？」

え、それってプロポーズ？

「ダメだよ！そんなのダメ」

私はスバルに向き合って必死に事情を説明しようとする。

きつと言ったらスバルに嫌われる。

きつと言ったらスバルに幻滅される。

きつと言ったらスバルに捨てられる

「なんでダメなんだ？」

くくくっ！？

私はね、スバル。元男なんだよ？それに時期がくれば男に戻るんだよ  
つと言いたかった。

私の口は何度も話そうとするけど、今ある幸せを失う恐怖で本当の  
事が言えない。

だってそんな事言えるわけじゃない！

きつと本当の事言ったら、離れていくそれが分かる。

人は内面が大事だって皆言うけど、結局は外面しか見ない。

そんな事は今までたくさん経験してきた。

だから……だから……

私はスバルの顔を見ると真剣に私の瞳を見つめていた。

その表情には確固たる意志が見える。

だから、私も逃げ続けるわけにはいかない、ランツェルとも約束し  
ただもの。強くなるって……

だから私は全部語った。

今までの異世界召還の事、私の体の事を全部語った。

語り終わる頃にはもう、朝焼けが見え始めていた。

私が話してる間、ずっとスバルは私の瞳を見て、話を聞いてくれた。  
そして





「よくわかんない……」

「それなら、俺が他の女を抱いたらお前はどう思う？」

どう思っつていきなりそんな事聞かれても困るよ。そこで私をスバルは強く抱しめて、私の頬を舐めてきた。

「まったく、泣くほど嫌なのに強情な奴だな。」

え、意識すると視界が潤んでいるのがわかる。それに胸がぎゅーっと痛い

「雪、俺はお前をこれからもずっと愛して幸せにするから結婚してくれ」

私は顔を真っ赤にしながらも心臓がドキドキして止まらない。でもそれはとっても心地よくてスバルに抱しめられてるのはとっても安心する。

「うん」

蚊の鳴くような小さな声で私はそう答えた。

その姿を朝焼けが二人を祝福しているよう照らしていた。



エッチなのはいけないと思います！

スバルと家に帰ると、アーカムのエージェントの人が自宅にまだいて、警備をしてくれていたみたいだったけど、私はその警備の女性がスバルを異性として好感を抱いてる事に敏感に気がついてしまった。

私はさつきまで幸せ気分だったのが、霧散して心の中で嫉妬心が燃え上がるのを感じた。

その女性が見てる前でスバルの腕に抱きついて、女性を無意識のうちに睨んでいた。

本当に短い間の顔合わせだったけど、私はイライラしてた。

しばらくするとその女性は一度、警護を長時間していた事もありそのまま帰宅したみたい。

私は眠くてイライラもしてて、その辺はつきり覚えてないけど．．．

紅葉はまだソファで寝たままだだったので私の部屋まで運んで横にしてからシャワーを浴びてから私はそのままお布団に入って紅葉の髪をいじりながら瞼がゆっくりと落ちてきた所でスバルが部屋に入ってきた。

スバルは私が紅葉をあやしてる方向と逆方向に入ってきて、後ろから私を抱き寄せてきた。

石鹸の香りがしてとても良い匂い．．．

そのまま、顔だけ天井に向けさせられて、唇が触れ合って舌を絡め合わせていた。

無意識のうちに、スバルの体に抱きついて、スバルの足に私自身の足を絡めていた。胸板に頭を寄せるようにして男性の匂いを嗅いでいた。

こうしてるだけでも、とつてもむず痒いようなそれでいてなんかずつとこうしていたいような変な気持ちになつてくる。

よく分かんないけど、顔をスバルの方へ向けるとその都度キスをし  
てきてくれる。

それがたまらなくうれしい。

もうさつきまでのあの女への不快な気持ちは全部消えてた。

私は体をスバルの方へ向けると両手の手の平をスバルの胸板に添えるようにして心臓の鼓動を聞こうと左耳をスバルの胸板にあてた。

でも聞えるわけもなく、私のそんな格好をスバルが見ながら髪の毛を毛先に沿って撫でてくれる。

それもくすぐつたいような感じがしてドキドキしてくる。

それと同時に、下半身が熱くなって顔が真っ赤になって体中が敏感になつて男の人に初めて抱いて欲しいって思った。

きつと紅葉と一緒に布団の中になかったら迷わずエッチしてたと思う。

でも、がまん出来なくて、ぎゅーっとお布団を握つてがまんしてた。我慢してるのにその都度、スバルが私の首にキスをして吸い出して鬱血を作っていく。

「まって、スバル、待つて欲しくないけど、今は紅葉がいるの。だから、いない時にお願ひ、これ以上されたら我慢できなくなっちゃうよ。」

私は、スバルが私の体を振れるたびにビクンって高まる欲情を抑えるので精一杯で涙を流しながら必死に堪えてるのが分かっていなかった。

スバルはそんな必死に快樂に耐えてる雪を見ながら、とても扇情に駆られていた。

このまま、したいと．．．

だから、雪が涙を流しながら口を半分開いて必死にシーツを握り締めながら体を震わせてる姿を見ていて、とてもがまんできなかった。

私は、スバルに哀願しながらも、口付けして唇を割って入ってきたスバルの舌を一生懸命吸いながら唾液を飲み干していった。

そのまま、時間が立つのを忘れてキスをしていると私はいつの間にか裸にされているのに気がついた。

スバルの方を見るとスバルも裸になっている。

「まって、スバル、紅葉がいるからダメ。」

そんな私の意見も聞かずに背中をつーつとスバルの指が背筋を沿うように動かしてきた。

「いやあ、はあん」

私自身、気がつかないくらい大きな声で喘いでしまっていた。

そのままスバルは私の胸を吸いたてながらも片方の胸をやさしく愛撫してきた。

「まって、ダメ、あん、紅葉がいるのよ、あつ、いやあ」

私自身、何を言ってるのか何を言っているのか纏まらない思考でス

バルに翻弄されてしまう。

紅葉の方へ顔を向けるとあどけない顔で寝ているのが目に写った。

私は心の中で、紅葉ごめんね。まま、我慢できないの、声出さないように我慢するからごめんね。

私はそう心の中で紅葉に謝罪しながらも、体がどんどん敏感になつて触られるだけでも熱い吐息が声が自然と口元から出てしまうのを止めることが出来ない。

枕に顔を押し付けて、必死に声が出るのを我慢してシーツと枕をぎゅうと握りしめて我慢した。

それでも、体はどんどん敏感になって部屋内に私の体から滴り落ちる液体の音が反響するのが私の耳にも届いてきた。

~~~~~っ！我慢できないよ！

私は必死に枕に顔を押し付けて、体を震わせながら圧倒的な快樂に耐えようと涙を流していた。

それでもスバルが私の中に入ってきた瞬間、頭の中が真っ白になつてしまつてすごい大きな声で喘いでしまった。

む．．．無理、こんなの我慢できるわけないよ。男の時とは全然違う。

私が必死に我慢しようとしてもスバルが私の中で動いてきて擦れるたびに体がびくびくって痙攣してその都度頭が真っ白になつてどうしたらいいのかわかんなくなる。

私はスバルに抱きついてキスをして必死に声が出ないようにした。

もう、スバルが私の中に入ってきてから10回以上私は連続で頭の中が真っ白になるほどの快樂を受けていて震える体を制御する事が

もう出来なかった。  
最後に中に出された後もスバルを私は体の中に入れてまま、寝てしまっていた。

朝、スバルに起こされて、気がついたらもうお昼近かった。

体が少し重い気がしてベットを見ると紅葉が寝ていた場所以外は私の体液でぐっしょり濡れていた。

それを見た瞬間、私は頭の中？顔？がカーツと赤くなっていくのを感じて、涙がぼろぼろ溢れてきた。

スバルは、紅葉はハウスキーパーさんがお散歩に連れて行ってくださると言いながら私を抱しめてベットに倒してきた。

「え？ちょっと。」

私は、今更に自分が裸って事に気がついて、羞恥心から体が桃色に染まっていく。

そして……………

紅葉が午後5時に帰ってくるまで私は紅葉の事が頭から飛んでいてそれまでずっと快樂に身を委ねていた。





## カイロへ

我は何度も夢を見る

遙か昔、ここは一面の草原であった

その頃は、多くの民に我は信仰されその信仰心により巨大な力を民に還元してきた。ある時、一人の男がここに現れた。遠い未来であり近い未来この地は何も生み出さない不毛な地になると告げて去っていった

我は、その者の話を信じてはいなかったが、少しずつ森林が山が沼地が不毛な土地になるに連れて少しずつ危機感を抱いていった。

我々は、不滅であるが信仰心が無くなった時、死を迎える。だからこそ、時の王に我と眷属が住むための門を作らせた。

その門を作らせる事が男の本当の目的だと思った時はすでに遅かった。

我の力の大半が奪われ、身動きが取れないように呪歌を掛けられてしまっていた。

我は深い深い眠りについた。

私とスバルが、猫猫した後に紅葉がハウスキーパーさんと一緒に帰ってきた。

ハウスキーパーさんは50歳くらいのおばさんになっていた。

それでも身のこなしから分かる。

A級エージェントクラスだという事が……

それでも、ちよつと気になってスバルに聞いたら、昨日のハウスキーパーさんからの電話で奥さんとうまくいかなそうだからと断られたらしい。

バレバレなの？

私はスバルから、そんな話を聞いたときに顔が真っ赤になってしまっていた。

紅葉からも「まま、顔まっかー」と冷やかされた。

夕食の料理を私がしているときに、スバルが胡坐をかいてる上に紅葉が座って幼児向けのアニメを見ていた。

「雪！ご機嫌だな」

ふと声をした方を見ると猫がしゃべっていた。

「そんな事ないよ？いつもどおりだもん」

「まったく、雪さつきから歌を口ずさみながら料理作ってて何を言ってるんだ？」

「え？」

顔がまた、真っ赤になってしまっ。

「お前、昨日から顔に良く出るようになったな？言い事でもあったのか？」

「な．．．．．なにもないもん！猫には関係ないでしょ！」

「まあいい、でいつ行けるんだ？」

「いつってなに？」

猫が人でいうと溜息をつくような動作をした。

「お前の頭の中は、お花畑が詰まってるらしいな？」

「かなり失礼だよ！きちんと脳みそつまってるよ。」

わかった、それなら．．．と猫が卓上カレンダーを器用にめくって肉球のついた手でタッチしてくる。11月12日と13日でどうだ？と聞いてくる。

「うん、それなら第2土曜日だし大丈夫かな？」

私の答えに猫が頷いて剣山へ報告すると言ってその場から消えた。

気配を感じるとスバルが後ろにいて心配そうに私を見下ろしていた。

「いまのが、言っていた使い魔というやつか？」

「うん」

「それで11月に2日どこにいくんだ？」

「え〜とエジプトのクフ王のお墓の調査依頼だつて。」

「ふむ、本当はついて行きたいが仕事もあるしな・・・」

「大丈夫だよ、スバル。私は、絶対に戻ってくるから！紅葉も待ってるしね」

「わかった。何かあった時の為にこれを」

2錠の白いカプセル製の薬だった。

「これって？」

疑問に思った事を聞くと試作品のナノマシンにより体内の細胞を爆発的に増殖させて生きてさえいれば致死に至る傷すら直す事が出来るとスバルは教えてくれた。

私は、調理が終わった料理を食卓に並べてスバルと紅葉と私の3人で食事をした。

昨日の事を乗り越えて初めて、家族という物がこんなに暖かいものだ・・・思い出した。

夜は紅葉とスバルと一緒に寝て、朝は朝食を私がつって、スバルが帰ってくる間は家の掃除に買出し。ハウスキーパーさんが来たら紅葉を預けて私は学校へ行く。帰宅後、紅葉とスバルと一緒に寝るという日常をこなしていた。

毎日同じ日の繰り返しだったけど、とつても充実していた。

スバルに抱かれる時が一番好きかも・・・

そして・・・

11月11日PM23時 アーカム財団所有の専用旅客機で私はエジプトの首都カイロに向けて旅立った。

## ナイル魔術局の混乱

### カイロ国際空港

ここはエジプトの首都カイロ市街地中心部から北東に15kmに位置している空港である。

今、私はアーカム財団の所有するチャーター機を降りて、第3ターミナルラウンジを歩いている。

床には千葉SOGOのような移動するエスカレーター？見たいなのが設置されてて早く歩く事が出来てとっても便利。

日本の羽田空港にいたみたいないな印象かな？

今、私は、使い魔ほい猫のハステルの後ろをついて出口に向かって歩いている。

周りで英語とかアラビア語？とかヘブライ語？が耳に入ってくるけど、まったく理解出来ない私としては周りが何を言ってるのかサツパリだよ。

私は入り口から出ると、二人の男の人が待っていた。

どうやら、ハステルのご主人様？みたいな感じでその人の肩の上に載った。

「アーカム……スプリガン……雪……？」

「……………」

あれ、何か話が違うような？

私をスプリガンとかそんな化け物連中と一緒にして欲しくないんだ

けど……

私の沈黙を肯定と受け取ったのか私の荷物を受け取りトランクに詰めていく。

荷物って言うてもボストンバツク一個だけどね！

着替えとか含めて3日分くらいだしね。

なんというか……車の中は微妙な甘いようなそれでいてすっぱいような匂いだった。思わずぐるぐる<sup>パワーウィンド</sup>と手動で窓ガラスを空けて外の空気を取り入れた。

うーん、なんか微妙な感じ……

前に座ってる男の人はあんまり話してこないし……

途中で渋滞に嵌ってるし。交差点にも信号機ないし……

私がぼーっとしてる目線の先で車が走っていく間を現地の人<sup>は</sup>は軽やかに交わして渡っていく。

うあー私、あれやったら100%引かれるな〜と感心してしまった。

結局、ナイル魔術局の現地についたのは、カイロ空港から2時間ほどかかってしまった。

ついた当初、場所を聞いた所、聞き取れたのはRiver Nileだけだった。

謎いっぱい！猫も私の方を見て、外国語出来ないのか？という表情をしていた。

ええ、生粋の日本人ですから日本語しか出来ませんよ、何か問題で



も？という顔をするとハステルは、はぁーと溜息をつくように肩を落としていた。

仕方ないじゃん！今の日本の高校生で外国語ペラペラ話せる人いたら見てみたいわ！

建物に入っていきしばらくすると地下へ降りる階段が見えてくる。

そこを降りていくと、ツタンカーメン？ぽいのか犬ぽいのか猫ぽいのかの偶像がガラスケースの中に入っているのが見える。

両扉まで前までいくと、私を連れてきた一人は扉を開けて入るようにジェスチャーしてきた。

私は中に入ると10人近い男の人が私を見てきて色々と言ってきている。

「ねえ？ハステル何て言ってるか通訳してくれない？」

「雪、お前魔道士なのに本当に外国語勉強してないんだな」

「魔道士って言ってもねー」

実際、私あんまりそっち方向詳しくないし、あれ？

「おい、本当にこんな小娘がアーカムのS級エージェントのスプリガンなのか？」

「そのようだな」

突然聞えるようになった。なんで？猫の方を見ると俺が翻訳魔法かけてやったんだからな！見たいな態度を見せていた。

私はそれを見て、サンキューとジェスチャーを返した。

「ふざけるな！ジェイド。こんな我々の言葉すら理解出来ない奴がエージョントなわけないだろ」

「仕方ないだろ、あれを封印する為には強い魔力を持つ魔道士の力が必要不可欠なんだ。」

「お前には悪いがこの小娘には魔力が一切感じられない。お前だって魔術師なんだ、そのくらいは分かるだろう？」

「しかもなんだ？この小娘は、肌が露出が多い服を着ていて売春婦のようではないか？」

ピクツ、私のこめかみに青筋が浮かび上がる。

「しかもなんだ。こんなに背が小さい、お子様たいけ……ぐはっ」

先ほどまで雪の悪口を言っていた男が鳩尾を殴られて壁に叩きつけられて痙攣していた。

「ずいぶん好き放題言ってくれるじゃないの？」

存在の力を魔力へ変換していく。同時に空間に魔法式を展開していく。

周りの男達が私を見て、いきなり発動した魔力に顔を蒼くしながらアタフタしだす。

「ま、ま、ま」男が何かを言う前に、私の《アーケ・プラス地霊咆雷陣》が地下の

空洞内を青い閃光が染め上げた。

## 王家の谷

私は今、ソフィテル カイロ エル ゲジラ と言う舌を噛みそうなホテルで一泊した後、ナイル魔術局の人達と王家の谷に向つていた。

昨日の正当防衛の結果、魔術師は全員意識が飛んで戻るまで2時間近くかかっていた。

そのあと、説明を受けた限りでは、王家の谷で新しく発見された墓に強力な呪いが掛けられていて、周辺の風景を喰らつてるといった話だった。

今回は、その調査と封印 . . . . .  
. . . . .  
もしかには破壊はしたらいけないのかな？

私の同行者は、ナイル魔術局長ジェイドと補佐としてついできた正規魔術師イフェネル。エジプト考古学博物館カルバイドの3人。

私が複写眼アルファステイグマで見たり魔術局長と正規魔術師の力量の差は3倍程度だった。

車に揺られながらすでに5時間 . . . . . 暑すぎる！  
砂が入ってくるから窓開けたらダメとか言われた。

しかも男ばかりで鯨詰め状態な事もあって匂いがすごい . . . .  
違う意味で再起不能になりそう . . . . .  
もう、思いつきり天候制御魔法ラナリオンで雨でも降らせようとしたところ、

車の中の男性陣に砂漠化を促進するから止めると怒られた。  
私は雨を降らせると、砂漠化が進むという謎な事を言われてきよんとした。

猫ばい使い魔は私のそんな姿を見て、溜息をついてた。

カイロから出発して8時間ほどでやっと王家の谷の入り口のクルナ村の駐車場に到着した。

周辺を見ると、午後4時くらいだった事もあり観光客はかなり少ない感じ、しかもなんか独特のお墓だよーみたいな感じ醸し出しててあんまり居たくない雰囲気。

3人の後についていくと、トトメス3世のお墓の近くに掘り立ての防空壕みたいなのが見えてきた。

私以外はそれぞれ懐中電灯を持ち出し、その中に入っていく。

私も慌てて中に入り、天井に頭をこすらない様に進んでいくと突然、大きな空洞に出た。

3人の懐中電灯の明りでも全体が見渡せないほどの大きな空洞。明りなんて持つてきてこない私は、存在の力を魔力に変換し力ある言葉で世界を騙し魔術を発動させた。

「《我は生む小さき精霊》」

その言葉と同時に10個の大きさ10cmの白い炎が生み出されて空洞内を隅々まで照らした。

私とイフェネル、カルバイドの3人は啞然としていた。

啞然としてる間にも雪が更に数個の火を作り出しそれを宙に漂わせたままこちらに歩いてくる。

「お待ちせしました。いきましよう」

その言葉を私は聞いて、ハッと我に返った。こんな魔法など聞いた

事がない。

今の、エジプトにいる魔術師で一番強い力を持っている者でもせいぜいランクはカート・クラス止まりだ。

魔術師局長の私でも、ハート・クラス。

魔術師局での一件と言い、ずいぶんアーカムは強力な魔道士を貸してくれたものだなと感心してしまっていた。

私達が依頼料として渡した粘土のような物を驚いて見ていたがそれなりの価値があるのだろう。

どちらにしてもここを封印しない事には貴重な観光資源が無くなってしまうこともあり、政府からも早くなるとかしろと言われている。アーカム財団から借りた雪の力を見る限り、カブス・クラスかもしくはサフ・クラスの力はあると判断できる。

私は、イフェネルと先頭をあるき、雪とカルバイドを案内した。

しばらく進むとジェイド達の向う先に大きな門が見えてきた。

そして、ジェイドとイフェネルがその門前で止まった。

大きさは大体高さ4 m幅3 m。赤く光る金属で作られているのが一目でわかる。それはよく眼にする金属　オリハルコン別名オレイカルコス。

「これが調査の依頼をした門になります。」

ジェイドの言葉の後、私と一緒に歩いていた考古学者のカルバイドが門の周辺に書いてある文字を解読しよう門に近づいている。

「教授、まだ何が起こるかわかりませんので門には触れないでください」

「わかっておる。」

なんか3人でゴソゴソしてるのを横目で見ながら、私は一度眼を閉じてから再度開く。幾何学な朱色の模様が瞳に浮かび上がってくる。

アルファステイグマ  
《複写眼》

同時に周囲の物質の構成、魔術公式が視界にグラフで数値で表示されていく。

解析完了。 永久への世界への扉 脈動する世界 忘れられし者  
失われし過去の遺産 システムの端末  
システムの端末？

一言だけ謎な一文があったけど、どうやらこの門はなんらかの問題児というのが分かる。

今、解読できた内容をジェイドへ私は報告した。システムの端末という部分だけを抜いて・・・

私は、雪という少女がわずか短時間で考古学者ですら解けない文字を一瞬で読めた事にさらに驚いていた。

「教授どう思いますか？」

「ううむ。永久への世界への扉という事は死後の世界の事じゃと思う。忘れられし者という事は、記録に残っていない者という事か？失われし過去の遺産というのは財宝かの？」

「財宝!？」

その言葉に、機敏に反応したイフェネルが思わず扉に触ってしまった。

それと同時に、このホールを侵食していた門が開き、雪を含む4人と猫1匹を門から漏れた光で包み込んでしまった。



## 登場人物・世界観編集

### 《登場人物編集》

鈴木<sup>すずき</sup> 雪<sup>ゆき</sup>

101回もの異世界召還において身につけた力により対魔法戦においては無類の力を誇る。

元は男であったが……？

現在は2児の母親。

スバル（本名 オルスバス・レイド）

雪の良き理解者？でありアーカム財団考古学研究所の研究施設アドバイザー

鈴木<sup>すずき</sup> 紅葉<sup>もみぢ</sup>

雪とスバルの娘

現在は3歳

### 《アーカム財団関係者》

剣山<sup>けんざん</sup> 充<sup>みつる</sup>

職業 アーカム研究所日本支部副所長

《ナイル魔術局関係者》

ジエイド

ナイル魔術局長

年齢 47歳

使い魔ハステル

猫の形をしてるジエイドの使い魔

イフェネル

ナイル魔術局、正規魔術師

年齢 29歳

《エジプト考古学博物館関係者》

カルバイド

古代エジプト文字に明るい考古学者であり大学の教授

年齢 52歳

ナイル魔術局のランク

クウ 皇位神官

空間圧縮、光などの物質

をもたない力を行使する事が出来る。

カブス 上位神官

死者を蘇らせる事すら可能と言わ

れている。

バ 中位神官

命亡き物質へ魂を吹き込むことに

より手足のごとく扱える

サフー 下位神官

相手の死期を悟り、予言などを行

う。

アップ 特級上位魔術師

4大魔術（火・水・地・風）の行使

カート 1級上位魔術師

カ 2級上位魔術師

ハティ 1級中位魔術師

現在いるのはハテ

イ・クラスまで

カイビト 2級中位魔術師

レン 1級正規魔実師（下位魔術師）

ハムメミット 2級正規魔実師（下位魔術師） ジェイド・イフェ

ネルが個々に属している

ナイル魔術局は魔術は基本、4大元素を扱う者を指す。

王家の谷

歴代の王のお墓がある所。

## 異界での戦い

気が強く震動する音が聞えてくる。

音？風？海？

私はその音に耳を傾けるようにして目を覚ました。

辺り一面、緑の草で覆われていて一面緑のカーペットのようにやわらかい風を受けながら波の音のように風に揺られている。

空は金色に染まり、太陽の日の光とはまったく違う、やさしい光が降り注いでいる。

遠くにはいくつもの神殿が見える。

そこまで見て、私は周りを確認した。

私と一緒に来た3人もそれぞれ目を覚まして周辺を見ていた。

「ここは一体？」

イフェネルが呟き、カルバイドが興奮したような言葉で見えている神殿へ近づこうと提案してきた。

私としてもあまり異存は無い為、ジェイドが私の意見を求めようと視線を向けて来た時も肩を竦めるだけにしておいた。

「なあ？雪。ここつて神格結界の中だぞ？早く出ないと力の無い者がいたら存在を喰われかねない。」

ジエイドの使い魔の猫もどきが私に話しかけてくる。

「ねえ？前から思ってたんだけど、ジエイドさんの使い魔ならそっちに言った方がいいんじゃないの？」

「それは無理、使い魔として契約はしてるが意思疎通出来るほど力は力を持ってないからな、命令も全て一方通行だ」

「ふうん、それなら案内役務まらないんじゃないの？」

「それは問題ない。こちらから意思疎通出来なくても向こうからの命令は絶対服従が使い魔の性だからな、それにそこらへんの下級使い魔と一緒にされても困るが私は神に直接仕えるほど神格が高いんだ。お使いくらい余裕だ。」

「ジエイドさん、こつち見てるけど私が猫と会話してるの見て不思議に思ってるんだろうね？」

「たぶんな」

10分ほど進むと、視界に巨大な建物が映りこんで来た。

建物の様式はギリシアの神殿のような形式。

直径3mの柱で石造りの大きな天井を支えており天井までの高さは20m近くありそう。

私達が進むと突き当たりに巨大な壁画が書いてあった。

考古学者のカルバイドさんが興奮したようにその壁画に近づき見ている。

その壁画は私から見るとアフリカ大陸のようだったけど、塗ってある色が緑一式になっていた。

「雪後ろだ！」

突然、使い魔の猫が私に話しかけてくる。

私は後ろを振り向くと同時に空間に魔法式を高速展開していく。

「《我は紡ぐ光輪の鎧》」

飛んできた火弾が多数の光輪で余れた防御壁に激突して神殿内の空気をチリチリと焼く。

私は、魔法を構築していた複写眼アルファステイグマでそちらを睨む。虎のよう足に蛇のしっぽ、人間の顔に鷲の翼？

「雪、オベリスク型タイプ、スフィンクスだ」

「どういう事？」

私が編み出した音声魔術障壁に数十に及ぶスフィンクスの口から吐き出された火炎弾が打ち込まれ散らされていく。

「わからないが、我々の神ラーの前に失われた神が使ったというオベリスクと聞いた事がある。命令に絶対服従のゴーレムのような存在だ」

「なるほどね」

私がそういう話をしてる後ろでは、ジェイドさん達が私の後ろに隠れるようにして顔を真っ青にしている。

「どつする？」

「どつするも何も！」

『大地の底に眠り在る凍える魂持ちたる霸王、汝の暗き祝福で我が前にある敵を撃て』

こんな、所で使える魔法なんて限られるでしょ！

「ダイナスト・プレス  
《霸王氷河烈》」

神殿内部の床が柱がスフィンクス達が一瞬で氷付けになってスフィンクスが砕け散る。

その間も攻撃が私に向って打ち出されてくる。

3人を守って戦ってる為、魔法障壁を張りながらの攻撃魔法展開は正直辛い。

「ジェイドさん、対魔法防御とか魔法使えないんですか？」

「む、無理だ。砂嵐程度なら起こせるがここではそれは出来ないしあれを防ぐ事は出来ない。」

私はその言葉を聞きながらも困ってしまった。

下手な広範囲破壊魔法を使えば崩落する神殿に巻き込まれるのはわ

かる。

「雪？どうするんだ？」

「ねえ？魔法障壁張れる？」

「張れるがあれだけの攻撃だと5秒くらいしか持たないぞ？」

「それで十分！」

「それじゃ任せたよ」

私は、魔法障壁を解除し自分の存在の力を魔力へと変換していく。

アルファステイグマ  
複写眼を使い魔力を制御下に置き周囲に展開させる。

空間に魔法式を展開しつつ詠唱を唱える。

『黄昏よりも暗き存在、もの血の流れより紅き存在、時の流れに埋もれし偉大なる汝の源の名において、我今ここに闇に誓わん、我等の前に立ち塞がりし全ての愚かなるものに我と汝の全ての力もて、等しく滅びの道を示さん』

「ユレイテイルト ドラッグ・スレイフ  
《上昇円陣型竜破斬》」

広範囲魔法をアレンジした一点集中型の魔法が私の手の平からでは無く、スフィックスの中心部の床から赤い閃光となって迸る。

巨大は赤い閃光と呼んでも差し支えない直径100mの円の赤い柱が床から天井まで全ての飲み込み灰燼と帰す。



いまの魔法により神殿の7割は消滅。3割は私より後ろという有様だった。

直に外が見えるようになったところには巨大なゴーレムがバーゲンセルのようにこちらを取り囲んでいた。

3m近くある土づくりの巨人が雪達を包囲し、近づいてくる。

私はそれを見ながら、編み上げていた構成を解き放つ。

「《我は放つ光の白刃》」

白い灼熱の高熱衝撃波が雪の直線上にいたゴーレムを吹飛ばす。

さらに、「《我は呼ぶ破裂の姉妹》」を唱え、空間に発生した衝撃波により数体のゴーレムを粉碎する。

私はそれを見ながら、ゴーレムの数を見てうんざりしていた。見渡す限りゴーレムだらけ、風景がまったく変わってしまったかのように足元は草だった場所が、むき出しの岩場になっていた。

完全包囲の状態からじりじりとゴーレムが近づいてくる。

私一人ならば逃げるのにわけないんだけど……

人形型の3mほどのゴーレム達が足元の岩場から次々と石碑を作り出してそれを両手に構えて私に突っ込んできた。

「《我は紡ぐ光輪の鎧》」

展開した魔術防壁に石碑が辺り粉々に砕けちり、体制が崩れた所に

《ダム・ブラス振動弾》を当てて粉碎する。

さらに後ろにいたゴーレムに火炎柱陣を発動させ、10体ほどを火の柱が飲み込みそのまま何事もないようにゴーレムが前進してくる。

「ちょ」

思わず動揺してしまい、口に出してしまったけど、そのゴーレムに向けて《メガ・ブランド爆裂陣》を足元から叩きつけて全て粉碎する。

周りを見渡しも減ってる様子がない。

一瞬隙を見せた私にゴーレムの石碑が叩きつけられた。私はそれを強化していない右手で受け止めていた。

え？なんで？疑問が心から浮かび上がってくる、それでもこれならあれが使える。

丹田を通して、肉体の強化を行いつつ存在の力を魔力に変換し、体表面に魔力を循環させていく。

同時に瞬歩でその場から消えるほどの速度で移動しつつ拳をゴーレムに打ち付ける。打ち付けたと同時にゴーレムが爆砕する。

私は、爆砕したゴーレムを見ながら体にまったく負担を感じない事から次々と拳でゴーレムを破壊し、周囲のゴーレムをあらかじめ破壊し終わったのを確認すると、魔殺まさついで一刀両断撃いっとうりょうだんげきを地面に叩きつけて進行方向に衝撃波と地割れを発生させ次々とゴーレムを破壊する。

先ほど通ってきた門までの道を確保できたのを確認する。

「皆さん、門まで全力で走ってください。」

私が指示を出すと我先にと全員が駆け出す。私は全員が門に到達するまで近づくとゴーレムを拳で破壊していく。

最後に私が門に到着すると次々と門の中に私以外が飛び込んで行く。

「ちっ、逃げられたか」

一人の男がゴーレムの後方から進み出てきた。

## 失われし思い 1

麻のような黒いの髪の毛に縦筋の入った金色の瞳孔、細身に見えるけど細部まで鍛えこまれた190cmに届く長身に黄色人種の肌の色が男がゴーレムの間から出てきて、私の方を見つめてきていた。

私は、ひさしぶりに見た、女タイプのオベリスクに対して好感を抱いた。

オベリスクの女と言えど、ここまで精巧に美しく作る技術が今の世の中にはあるのかと・・・

その男は、私の方を見て、驚いた顔を見ると先ほどまでの好戦的な顔を崩して話かけてきた。

「女タイプの戦闘型オベリスクとはめずらしいな、誰が、ご主人マスターなんだ？」

オベリスク？あのスフィックスの事だよな？なんで私をそんな言葉で指してくるの？

「ん？言ってる言葉が通じていないのか？電算能力が低いとは思えないが？」

「ううん、聞えてるけどどういう事なの？」

「どづいう事？何がだ？」

「だから何で私の事を、オベリスクって言うの？」

「ああ、なるほど。そういう事が・・・くくく」

私は、この少女の言ってる言葉が一瞬理解出来なかったが、自分の事を作られた自動人形オベリスクと知らずにいた事に笑いを抑え切れなかった。私が笑いだしてる間にも少女は臨戦態勢のままだったがどうやら問答無用で仕掛けてくる気はないようだ。

「すまない、すまない。あまりにも滑稽すぎてな。」

「どづいつ事？」

「その前に、お互い名前が分からないと困るだろう？私の名前はザイドという。出来ればお前の名前を教えてくださいののだが？」

「雪よ！でさっきの話の続きなんだけど」

「ああ、そういう事か。お前と私は同類って事。同じ作られた者同士仲良くしないか？女タイプのオベリスクは珍しいしな。それに、オベリスク タイプ (ラムダ) 同士なら子供だって作る事ができる。」

ザイドの言葉に反応して、スバルとの毎日の情事が頭の中に浮かんできてカーツと顔が真っ赤になったのがわかる。

「嫌よ！なんで貴方なんかと、こ、こ、子供を作らないといけないのよ！」

私は顔を真っ赤にしながら突然言い出した男に嫌悪感を抱いて言い返した。

「それにね！私の中にはもう子供がいるんだから！」

私の言葉を聞いた途端、その男は絶句した。私はさらに突っ込む。

「それにね、私は、人間だし貴方だってそうでしょう？いい加減な事を言つて惑わすのは止めた方がいいと思つよ？」

私は男を見ながら魔力を展開していく。男は私を見ながら、肩を竦めて溜息をついていた。

「擬似記憶でも植えつけられてるのかい？用意周到なご主人に飼われてるな」  
マスター

私はその言葉に空間に展開していた魔法式を起動し発動させた。

エルメキア・ランス  
「《烈閃槍》」

青い槍がザイドに向つて突き進み、ザイドの放つた青い槍と衝突して砕けちった。

「おいおい、ラムダタイプ同士での魔法戦は無意味だぜ？」

「無意味？」

私が睨むと、ザイドは溜息をつきながらこちらを見据えてきた。その瞳には幾何学的な朱色の文様が浮かんでいる。でも何で？

「お前だつて持つてるんだろ？天輪眼をよ？」  
リール・アイズ

「リール・アイズ  
天輪眼？」

「おいおい、何言ってるんだよ。プロテクト段階によりあらゆる物の解析しそれを自分の力に取り込んでしまう特性がある事を忘れてるのか？」

「まあ、いい。異界の扉を停止させたから外からの進入は不可能だ。ゆっくり説明してやるからついてこい」

ザイドがそう言った後、指先を空間に走らせるのが見えた。同時に砂で出来ていたゴーレムが全部、草木に変わっていき、あたり一面草原に変わった。

ザイドは私がついてくるのを確信してるような歩調で先ほどまで見えていた神殿の方へ歩いていく。

私も、ここから先の話は聞いたらいけないと理性が警鐘を鳴らしていたけど、もし本当にあの神官達の情報が掴めればと思い、ザイドの後を追いかけた。

## 失われし思い 2

ザイードの後を追って、先ほどまで私達が居た神殿の壁画までいくとザイードは壁画を触りだした。

しばらくすると壁画の隣の壁に金色に光る門が現れ、その門の中にザイードが入っていった為、急いで追いかけた。

私は、門の入り口から続く、薄暗い長い通路を歩きながら、先ほど転送門から脱出した3人の安否をザイードに確認した。

私の質問にザイードは無表情な顔で、入って来た場所へ強制送還し扉を閉じたので向こうからは開けることは出来ないと答えてきた。

私は、ザイードの話を聞きながら、歩いている通路の周辺を確認した。

通路の壁は半透明に出来ていて、周辺は星の光が瞬いているのは見える。

なんか宇宙の中を歩いている感じ？

10分ほどあるくと同じような幅1m高さ2mほどの門が現れ、ザイードを先頭に私もその門を潜った。

暗い通路を歩いてきた事もあり、扉を抜けた場所の突然まぶしい光で目を閉じてしまった。

目を開けると視界には金色に輝く大樹や動物達がたくさんいる。

「これって？」

私は、眩きつつ、遠ざかっていくザイードの背中を見つめた。

私が立ち止まっている事に気がつくるとザイードは私の方を向いてつ



いてくるように言ってきた。

ザイドの後をついていくと、あの事件のあった島とは似てるけど違う事に気がつく。

あそこは懐かしかったけど、ここは初めて来た場所？みたいな

ザイドの後を追いかけながらも体感的には4〜5分？で森が途切れて一つの四方500mほどの巨大なピラミッドが視界に入ってきた。

その一角に華麗に装飾された入り口がぽっかりと開いてる。

「ねえ？ここってどこなの？」

そう聞くとザイドが人差し指を立てて腕の上にあげてきた。

私が空を見上げるとそこには、青と白い雲で覆われた茶色い大地が横たわっていた。

「え．．．．．まさか、あれって？」

「うむ、あれは地球だな。」

いつの間にか私の服の中に潜り込んだのか10cmくらいに体長を縮めていた猫のハステルが出てしゃべってきた。

ザイドもそれを見て、驚いていた。

「これは、これは妙な珍客がいたものだ。女神様の従属神ハステルよ」

嫌味と殺気の籠った口調で私の胸元に隠れていたハステルに棘のある口調でザイドが話してきた。

「ふん、こつちもお前のようなやつには会いたくなかったがな」

「え？何？二人とも知り合いだったりするの？」

私の問いかけに、1人と一匹は嫌な顔をしながらも、昔からの腐れ縁だと教えてくれた。

「ところであれが地球って事はここはどこなの？」

その問いかけに、ザイドでは無く、ハステルが答えてくれた。ここは太陽の神ラーが、信仰心により人より生み出される前の神々によって月に作られた庭ガーデンということを……

「ハステル、それじゃこつてすごい昔に作られたって事よね？どのくらい前なの？」

つい疑問に思っただけ聞いてしまった。

「そうだな、我が生まれる前と聞いているから少なくとも1万年前だと思うが？」

ブツ、思わずその桁違いの年数に吹いてしまった。

ハステルも汚いなーという顔つきで私を見上げてくるけど、そんな目で見ると胸と胸の間から体を出す事はやめてよねと思う。

そんな事していると一つの赤い光を発している台座前にたどり着いた。

「雪、ここが我が主の光央リキウイリュディエーテ・イシユラエム様が眠つてる所になる。」

また、舌噛みそう名前だなーと思った。

「眠ってる？」

「そうだ、信仰心が無くなった神というのは消滅するしかないんだ、だから眠りにつき消滅を免れているんだ」

「ふうん、それでなんで私をここに連れてきたの？」

「これを見る」

私はザイドが空間に展開した表示画面を見る。そしてそこに映った男は赤い髪に黒い翼そして神官服を着た男だった。それを見た瞬間、私の意識は反転し俺に切り変わった。

グツ、私はいきなり雪に首を掴まれた。

オベリスクとは言え、それを遙かに超える揚力によりメキメキと嫌な音が私の首からする。オベリスクはその程度では死なないがいい感じはしない。それよりも先ほどまで雪が纏っていた空気が変わった事に驚いた。

「貴様、やつらの仲間なのか？」

感情の籠らない言葉が私に向けられてくる。

「ち・・・・・・・・・・・・・違う」

私はすぐに否定した。

「そうか、それはすまなかつたな。こいつらは何者なんだ？」

私の首を絞めたまま話を続けようとする。まるでこれは拷問だ。

「止める、雪。一方的に暴力を振るうのは良くないぞ」

ちっ、俺は舌打ちしながらもハステルの意見を聞きそのザイードの首から手を離れた。

「なるほどな、ずいぶん不安定だと思っていたがまさかひとつの器に2つの人格が入っているとはな……」

首を押し折られる寸前まで追い込まれながらもザイードは一切の感情を乗せずに話す。

俺は、そのことにイラつきながらも、疑問に思った事を口に出した。

「どうということだ!？」

「簡単な事だ、絶対的な力を行使する為には通常の生物、単体では力を制御しきれない。そこでその力を制御する為の開放にひとつの人格、そして制御にもうひとつの人格を当てている。不思議に思わなかったのか？普通の人間が生物が使える力を容量を遥かに超えている事に。そのへんも含めて、記憶操作されてるんだらうな」

「記憶操作だと？」

「最初に言っただらう？同じ同胞として教えておいてやるが、オベリクスは創造主が意のままに操る人形であるがゆえに繊細な行動を起こさせる人形を作る為には人の魂と精神がベースとしてして必要になってくる。つまり雪、お前は別の誰かがベースとなって作られ

「てるんだ。」

「おれには、ずっと前からの記憶だってあるし知り合いも俺の事を覚えてる。」

「なるほどな。だがな、記憶の操作なんて余程親しい付き合いをしていない限り簡単に書き換えられたり埋め込むことも造作もない事だ、お前は疑って聞いてくると思ったからここに連れてきたんだ」

「こいつは俺に何を教えたいんだ？俺に教えて何か特でもあるのか？俺は相手のメリットを考えても想像もつかない。」

「考えるより、視た方が早いと思うぞ？ここのシステムは時をわずかな時間視る事ができるシステムがある。それを使い、雪、お前自身が過去へ行きお前の成り立ちを見てくるんだ。」

「つまり考えるより、視てきたほうが早いって事か。視れば最初の召還の際に何があったのかすぐ分かるしな。」

「わかった、やってくれ」

俺がそう言うと静かな旋律が風のように庭を<sup>ガーデン</sup>反響していく、音が消えると同時に俺の意識が深い底へ沈んでいった。

## 封印された記憶 1

私はずっと意識の中で、もう一人の私とザイドが話しているのを聞いていた。

ザイドともう一人の私が話した後に、意識がまた反転して私は前に出てきた。

うつ．．．．．倒れそうになるのをザイドが支えてくれた。

私は一つ疑問に思っていた。

「ねえ？ザイドは何でここまで私達にしてくれるの？」

私の問いかけに少し考えていたようだったが、ザイドが私から数歩離れてから教えてくれた。

自分の主の力を殺ぐ為に、アフリカ一帯を砂漠化させたのが神官服を着た男　ルシフェルを筆頭とするガブリエル　ウリエル　ミカエル　ラファエルだという事を。

主の仇をとるために私を利用する事も。

そして、だからこそ力を貸すことにしたという事を聞かされた。

そして．．．．．

「きちんとして聞いてくれ。この世界での精神安定度から見ると恐らく、君の存在が基本ベースとなって組み立てる可能性が高い。」

「私が？」

「ああ、だから私の主をこのようにした奴らの情報は君が一番魂に刻んでると思う。だから君にはもう一人の彼とは別に過去であった事を見てきてほしい。」

「うん、いいけど。ねえ？ザイド、ベースが私ってことはもう一人の私は……」

「それ以上は私の口から言う物ではありません。あなたが向う先を見てから彼と相談してください」

「わかりました。」

私は、体が軽くなったと同時に意識が光に吸い込まれていくのを感じた。

.....

.....

・・・

「ここはどこだ？」

周辺を見渡すと歪んだ風景が見える、何かの研究施設のようだが・

「俺は体を動かそうとしたけど視てるだけであって体一つ動かす事は出来ない。」

「周りが濃い緑色の液体に包まれてるせいで周囲をきちんと見ることが出来ないが聞いた事のある声だ。」

「まったく、いくらアウラウストウルの楔の所持者の転生者の魂を束縛出来たからと言え計画を前倒しにするとはな・・・」

「こいつは、俺を足蹴りにしたガブリエルだ・・・カッソンと一人近づいてくるのが聞える。」

「オベリスクの調整はどうだ？」

「ルシフェルか、問題ない。アウラウストウル高次創世物の楔レコードの所有者 すずき鈴木 ゆき雪だつたか？そいつの力を抑制するストッパーとして男の意識は作っておいた。意識としては男の中の男って感じにな、そこまでしないと10年以上生きてきた女と意識と混じ合わせるんだ。普通だと飲み込まれてしまうからな。」

「それよりルシフェル、このオベリスクの住む場所の手配はついたのか？」



「ああ、それは問題ない。アウラウストウルの楔がこいつの望むように事象に干渉し周辺を組み立ててくれるからな。」

「問題はあるが、こいつのベースになる女の周辺だけは書き換える事が出来ないのが問題な所だな」

「問題はないだろう。どうせベースになる奴はもうすぐラファエルによって殺されるのだからな。」

二人の話を統合すると、俺を意識を作ったのは、ガブリエルという事になる。

俺はそれを聞いた途端、俺は思わず苦笑してしまった。

こいつらが言ってる事が本当ならば、全ての辻褄が合うからだ。

元のベースとなった奴の戸籍を俺用にしたり上げる。問題は、俺とその元戸籍との繋がりがある奴は一切繋がりが無い。だからその矛盾を悟られないように違うな、俺が望まなかったから空白だったんだ。表面上では人との繋がりを俺は求めていたが心の底では真実を知るのが本当が恐れていたんだろう。

そこまで考えて、やっと俺は理解した。

学校という場所の異常性を、普通に考えたら男から女に代わった奴を普通に学校に置くか？それをクラスの連中は気にせずいつもどおり接する事が出来るか？

そんなの普通に考えて在りえないだろ。

まったく俺は、問題を目の前に提示されていたにも関わらず無意識的に避けていたのか・・・笑えてくるな。  
滑稽すぎる。

って事はこいつらは俺の記憶を作りそれでベースとなった女の意識を制御してたって事になるのか。

ったくやっつてられないな。

そこで俺の意識が薄れていくのを感じた。

## 封印された記憶 2

やわらかい日差しが窓から少女を照らしている。

部屋は薄いピンクの内装に白い調度品で纏められていて清潔感を醸し出しながらも女性の部屋というのが一目で分かる。

ダブルベットに近いベットには、腰まである黒髪の少女がイルカの枕を抱きながらスヤスヤと寝ていた。

チリリリリリリ．．．．と一生懸命、主たる少女を起こすために目覚まし時計は仕事をこなしているが、それは少女が振りかぶっておろしたチョップによりボタンをカチツと押されて止まってしまった。

チツチツチツチツと指針が進む音が部屋内に反響し、40分ほどたった頃だろうか？

「うーん」

まだ、変声期が始まってない高い声で背伸びをしながら少女は眠そうな目を擦りながら時計を見た。

「ひゃあう！！！！！」

意味不明な声をあげながら、急いで少女はパジャマをベットの上へ脱ぎ捨てる。

ショーツとブラを急いでつけてから制服を着用し、学校のカバンを手に持って階段を駆け下りていく。

ドタドタドタドタ……そんな音が聞えてくるほどの急ぎぶり、1Fのリビングにはこの鈴木家の家長である父明人と妹の楓が椅子に座って朝食を取り終わったところであった。

「もう、雪。今日は終業式なんだから今日くらいは早く起きないとダメでしょ?」

雪に話かけてきたのは母の響子である。

雪はチラッと時計を見ると学校が始まる30分前であった。

「あ!もう時間が……学校始まっちゃうよ!。お母さん!なんで起してくれないの?」

雪が不満たらたらといった感じで母親に八つ当たりをしてしまうが母親も分かっているもので

「もう、高校3年生なんだから自分で起きるくせをつけなさい!」

反対に小言を言われてしまう。

「お母さんの意地悪!」

「あらあら。」

女としての言い合いには母親に勝てないと悟った雪は、父親を味方につける作戦を取った。

「ねー、お父さんも、お母さん意地悪だと思っつわよね?」

「あらあら、今度は明人さんまでヘルプなの？」

雪は、ムツとした表情で「ふ〜んだ、別にいいもん」と言いながら食パンをはむと啜えてから牛乳で流し込んでいく。

「ほら、早く行ってきなさい、今日が女子高の最後の日ですよ。卒業式くらいきちんとやってきなさい。」

そんな事、言われなくても分かっているもん！そう考えながらも行ってきますと返事をして家へ向かった。

そのあと、卒業式が終わり、学校の正門前にて友達と千葉中央駅近くにあるカラオケ「うた広」で遊ぼうという話をして自転車に乗り帰り道3差路で横断歩道の赤信号待ちをしていた。

時間は午後2時、周囲には誰も人影が見えない。

雪はいつもとおかしい雰囲気を特に意識もせず信号が変わるのをまっていた。

そして．．．その歩道にSAGAWAとロゴマークが書いてあるトラックが突っ込んできた。雪がそちらを見た時にはすでに目の前数センチにそのトラックは近づいてきており、それに雪は弾き飛ばされて横断歩道に数回叩きつけられてる間に両足両手が折れたのか知らぬ方向に曲がったまま意識を閉ざした。

私は、その一部始終を空に浮かびながら視ていた。

そして、私を轢いた者を確認する為に視た所、トラックには誰も乗っておらずエンジン音さえしていなかった。

上空を切る風の音を聞き、上を見上げた所、白い翼を持った男が私の遺体を見ながら、表情を映さない顔で一言、呟いていた。

ようやく、世界を作り変える鍵を手に入れたと . . . . .

そこで私の視てる場面が切り替わり暗い闇の中に閉ざされた。

それでも、本当の私の思いが気持ち痛みほど心の中に伝わってくる。

暗いよ . . . . .

怖いよ . . . . .

誰か私を助けてよ . . .

助ける？何から？大きな音が響いてからの記憶が曖昧だよ . . . . .



私は、直感的に失われていく記憶が私の最後の命の灯火が消えていくのを感じた。

それはどれほどのものだろうか？

私は死にたくなかった。

もっともっと恋も友達もお仕事もたくさんしたかった。

だから、こんな風に死ぬのだけは嫌だった。

それでも意識がどんどん薄れていくのを感じる。



死にたくない . . . . . だれか . . . . .

い . . . . . や . . . . . 死にたくな . . . . .  
. . . . . い

私は、消えかけてる意識の中で誰かが手を差し伸べてくれるのを感じた。

それはとても魅惑的に映った。

死にたくないならば汝、我と契レコードを存在と共に歩み、新たなる創生世そっせいでの贄を刻むか？

私はその声を聞きながらも、この契約は世界を作り変える為の私を生贄に世界を作り変えるための物という事を理解した。  
私は必死に少女にそれはしたらダメ！と大声で語りかけた。でもこの世界は過去にあった記憶を再生してるだけに過ぎない。

そして、私は死にたくないという思いからその声と契約を交わした。



### 封印された記憶 3

周りには多くの木々が光を発していてそれ自体が森を輝かせている。

その木々の周りには多くの動物達が体を休ませている。

私はそこで目を覚ました。

一人の女性と男性が私の方を見つめてきている。

女性は腰まで届く銀髪に紫と緑のオッドアイ。

男性は肩で切り揃えられた金髪に青い瞳。

私は、二人に近づいていく。3mの距離まで近づくと二人に向って進む事が出来なくなった。

「こんにちは、当代の楔をもつ巫女、雪さん。」

私は、話して来た女性を知っていた。

「おひさしぶり？クレミア」

「私は始めましてかな？ハースアールと言う。よろしく頼む」

私は、ハースアールと言う人にこちらこそと返してから二人を見つめた。

「ねえ？クレミア。あの神官達の目的は一体何なの？なんでこんな手を込んだ事までしてるの？」

二人は私の質問に少し考えながらも指先を空間に走らせた。

「ここまで来たなら、もう隠す必要はないわね。」

「そうだな。」

「雪さん、まずあなたが神官と言ってるのは元々、人間達だったモノです。」

「あれが人間？」

「ええ、いまから10万年前に一つの文明があったの。その文明は今の雪さん達の住む世界より遙かに進んだ文明を有しそれは遙か宇宙の彼方まで行くことが出来たの。でも人はね、傲慢だから人よりいい生活をさらに快適な環境を他人よりも力を！そうして色々な平行世界を作り上げていったの。」

「そうして、いくつもの世界を作り上げては崩し壊して最後には、不老不死と絶対的な力を手に入れようとすると『生命樹計画』ユゲドラシルプロジェクトが実行に移されたの。でもそれは失敗し結局は星の生態系を管理する事しかなかったの。それでその計画は凍結。その星は動力炉を停止し破棄されたの。」

「でも、生命樹計画の中心メンバーたる彼らは諦めなかった。彼らは長い年月をかけて別の上位次元から二人の意識体の確保に成功したの。それが私とハースアールなの。」

「彼らは私達を召還する間に300年近くの時を過ごしていたわ。彼らはもういつ死んでもおかしくない体だったの。私達は肉体が無

い精神のみの状態で呼び出された為、自身の肉体の構成のために意識体を使い既存概念を固定化する高次創世物の楔を作り出したわ。  
それを使って、私とハースアールは実体化したの。私は、世界の公  
共的平和をという話に乗り、作り出した高次創世物で彼ら、ルシフ  
エル ウリエル ミカエル ラファエル ガブリエル そしてその  
まとめ役だった男性 クレイに大地の気と呼応する事により寿命を  
引き伸ばさせる力を与えたの。」

「私とハースアールはこの地球に召還され、この星で受胎した事も  
あってこの星から動く事は出来なかつた。私とハースアールはこの  
星に存在している霊脈レイラインを使ってたくさんの自然を司る精霊や万物を  
見守る為の者をたくさん作り出したわ。そして気がついたときには、  
私達がこの世界に降り立ってから8万年以上もの時が過ぎていたの。  
私達を呼び出した文明は自分達の欲望の為に滅びる直前だったわ」

「私は、この星が滅びてしまえばせつかく生み育ててきた精霊や子  
供達が死んでしまふと思ひ、私の命を使って全ての事象に干渉して  
それまでの記憶と文明を一度リセットしたの。その後、私の魂と力  
は代々転生を繰り返して高次創世物の楔を守ってきたの。でも、高  
次創世物の力によって不老不死になっていた彼らは私達の力を手に  
入れようと画策して神になるべくたくさんの罪を犯してきたの。彼  
らの目的は高次元世界への門を開いて進む事を目的としているの。  
でもね、高次創世物の楔の力の発動を促す為には途方もない力と思  
ひが必要なの。」

「思い？」

私は思わず聞き返してしまった。

「そう、喜怒哀楽、そのどれでもいいの。でも、彼らはきつと雪さ

んの家族を間違ひなく狙ってくるわ。希望から絶望へ彼らはそれを狙ってくると思うの。実はね今年2012年は私達が呼び出されて丁度10万年目になるの。それは節目となり門が開きやすくなるの。

「彼らはきつと今年の最後の12月31日にあなた達を絶望させそれにより神現具を起動させて門を抜けていくと思うわ。でもね、高次元への扉は物質が通り抜ける際に膨大な天文学的エネルギーを発するの。もしこの地球上でそれが行われた場合、その被害は太陽系だけでは済まないわ。あなた達にはそれを食い止めてほしいの。」

家族には一切手を出させたりはしませんと答えると、私がそう言うのと、答えが分かっていたかのようにクレミアさんは微笑んでこちらを見てきた。

「わかったわ、いまねハースアールがもう一人のあなたに戦い方を教えてるからなんとかなるでしょう。」

クレミアさんがそう言った後、眉を伏せてから私の方へ告げてきた。そろそろ戻りなさいそしてここからが本当に重要な話になるんだけどね……………

## 神の庭園の戦い

過去の信仰心と龍脈にて支えられている庭が打ち破られ次々と空間が崩れていく。<sup>ガーデン</sup>

雪が、過去へ記憶を見に行き始めてからやつらが自分達のオベリスクの異常に気がつき、こここの空間を攻撃してきている。

すでに奴らの力は全盛期に近い状態になっている。我が主がやつらの力を抑えることが出来なっているからだ。

これでは、まだ多数のオベリスクが侵攻を食い止めてるが時間の無駄だろう。

そこまで考えた所で数万のオベリスクがたった一撃の攻撃で焼き尽くされる。

そこから二人の男がザイドを見据えている。

ザイドも二人に視線を向けると右手に漆黒の炎を纏わせた長剣をもつウリエルが進み出てくる。

「困りますね、我々の人形に手を出されてしまうのは」

「ふん、貴様らが我が主の力を手にする為だけに巨大な目を作り上げそれにより大地からの生気を奪いつくしたのと同レベルはマシだ。」

「巨大な目とはまたあれですね。あれはリシャット構造をそのまま利用した我らが世界を作る為の生命樹システムの応用なのですよ。」

今まで、私達の邪魔をしてこなかったからこそ、生かしておいてあげたのに困ったものですね。こちらの計画を潰すつもりですか？」

「貴様らが今までどれだけの人間を意図的に殺して来たというのか理解してるのか？」

「問題ないでしょう？ただ間引きしてるだけですからね。人間と言うのはとても愚かな種族ですからすぐに管理を疎かにするだけで寄生虫のように星を喰らい尽くそうとする。我々が信仰心からの力を得る為だけに作り出した宗教も最初こそは多くの人間を無作為に本能のまま虐殺してその血肉により力を捧げてくれたのに最近はその力が減ってきていますからね、役に立たないと言ったらないですよ。彼らが歌ってくれる聖歌は我々の力となり盾となってくれてますがね。」

ザイドはウリエルの独白を聞きながらも眉を寄せる。

「お前達は1万年前からまったく考えが変わっていないな。」

「お前達とはご挨拶ですね、すべてのオベリスク。貴方も例外なく私達が作ったというのに……親に対してその口の聞き方はどうかと思えますよ？それにしても、人形に何をしたんですか？」

「答える義務はないな」

「それならば、すぐに回収して記憶をチェックさせてもらうつもりですか。」

ウリエルのその言葉にザイドが臨戦態勢を取る。そして、ザイドの左上が舞った。



「は、早い」

ザイドが右手で砂塵の壁を作り上げ、ウリエルを弾き飛ばす。

ウリエルは右手にもっている紅陽神剣エスラドドリパスを地面に突き刺し、自分を中心に数千万度の炎を展開し始める。青い炎が次々と周囲を焼き尽くしていく。砂塵も例外に漏れず焼き尽くされる。

同時に大気が焼けるような匂いをザイド嗅ぎながらもあまりの速さに対応できずに

「く……はっ」

ウリエルの剣がザイドの体の中心を貫いていた。そして、青い炎がザイドを包み込もうとした瞬間、ウリエルは殺気を感じて剣をザイドから抜き後方へ飛び下がった。

ザイドは自分の前に進み出た者に対して戻ったのかと呟きつつ、その姿に目を見張った。

下がったウリエルと見物していたガブリエルは、殺気を放った者を視界に捕らえていた。

二人はその者の容貌と雰囲気以前とは変わっていた事に混乱し、その者は、その様子を楽しみながらも不敵な笑みを押し殺しながら二人に告げた。

「よう、ひさしぶりだな」

ザイドを庇うように立っていたのは、腰まである銀髪に紫水晶と緑水晶色のオッドアイの少女、雪が立っていた。

「バ．．．．．バカな。何故この時点で覚醒する？」

ガブリエルの取り乱すが、ウリエル冷静に雪を見ていた。

そして、ウリエルは瞬動によりザイドを殺す事を優先とし一瞬でザイドの後ろに回り込む。そして背中に剣をつき立てようとしたところで体に衝撃をくらい数歩後ずさる。

この動きについてくるだど？どういうことだ。

雪はウリエルの攻撃を防いだ後、ウリエルとガブリエルを視界におさめながら対神格用魔法《座標軸指定圧縮爆発》フレイクを指先を鳴らしただけで発動させ二人を吹飛ばす。

吹飛ばされているウリエルに瞬歩で追いつき、エーテルを瞬時に編み込み《至高剣》を作り出す。それを視界におさめずに感覚で片手で持ち、体制を崩してるウリエルに向い剣を振り下ろす。

ウリエルは体制を立て直しながらも紅陽神剣で至高剣を受け止め弾く。

ウリエルと雪が距離を置いた所で、雪の創生眼デイスティニー・アイズが自動的にガブリエルの能力により体内で発生した攻撃を任意の場所へ強制転換させ、それと同時に雪の左腕が吹き飛ばす。

そして瞬時に、左手が光のグラフックにより覆われ再生した。

黒炎、散る．．．．．そして

ガブリエルは前で起きてる事に動揺を隠し切れなかった。内部中枢のシステムを止める為に体内で発動した絶対攻撃が無効化されたことに．．．

「くっ．．．．」

ウリエルは切り込んできた、雪の剣を自分の剣で受け止めて再度弾く。

バカな、こちらの移動に追いついてくるだと、そんなバカな．．．

雪は二人を見ながらも一指し指に刻み込んだのである対神格魔法《魔光千弾》を打ち出す。数十に及ぶ闇の光のが二人に殺到する。

それに合わせるように雪がウリエルに向って瞬歩で距離を詰める。

そしてウリエルの展開した神炎壁を右手にもっている至高剣で切り裂く。切り裂かれた間を闇の光が通過していき、ウリエルの歌衣を破壊する。

再生するまでの本当にわずかな0コンマの時間で左手に全力の魔力を込めて技を繰り出す。

「くらえええええええ《暗黒魔闘術 奥義・魔神烈光殺》！！！」

雪が展開した膨大な魔力が素で叩き付けられ、それが衝撃波となってウリエルを精神体世界から破壊していく。

パリーンと乾いた音が鳴ると同時に雪の細腕がウリエルの体から突き出る。

「き、きさまー」

ウリエルは傷口から黒い霧を吐き出しながらすでに冷静な判断を失っていた。手にもっていた紅陽神劍エスラドリバースの力を解放する。

「この劍の開放時の炎は太陽ですら蒸発するほどだ！」

同時に数億度の炎が開放され空間を染め上げていく。

雪はそれを見ながら、構成を編み込み世界を騙し魔術を発動させた。

「《我が契約により聖戦よ終われ》」

意味消滅。白い稲妻が炎を喰らいつくしながらウリエルの体の構成すら消滅させていく。

くああああああああああああああああああ

断末魔と同時にウリエルの体が喰らい尽くされ問答無用で消し飛ぶ。

な．．．．．

ガブリエルはその情景を見ながらも、一度引く必要があると確信した。

以前とはまるで、別物。すでにあれは．．．．．

そのままガブリエルの姿が空間に解けるように消えた。

俺は、ガブリエルの姿が消えた途端、ザイドに近寄ろうとするが無理な力の反動によりもう一人の私に切り替わった。

私はザイドに近寄るとザイドの体が少しづつ砂になっていた。

「ザイドその体。」

「ああ、やつらがこの庭を破壊してくれたおかげで我が主の寿命が来たようだ。雪の中にいる光霊クレミアに我が主から伝言があるのだが頼まれてくれるか？」

「うん、なんて?」

「私を生んでくれてありがとう。と言っておいてほしいそうだ。」

「え?それって.....」

「さあ、もう行け。もうすぐこの庭は消滅する。がんば.....  
れ.....」

ザイドが最後まで言う前に、体が全て砂となって崩れた。

そして、ここの世界を構成していた力が消え、全てが崩れ無に帰っていく。

私は、ザイドが最後の力で作り出した扉を通り抜けた。  
扉を抜けたと同時に背後が消え去る。

私が抜け出た場所は最初に入って来た巨大な広間だった。

そして、その広間にはもう何もない空虚な空洞が静かに佇んでいた。

私が、白い鬼火を出して外に出た頃にはもう日がすっかり落ちあたり一面、暗闇に染まっていた。

そこにジェイドを含む、イフェネルとカルバイドが私を待っていた。

「大丈夫だったか？」

「うん、もう大丈夫。おかしい事はもう起きないよ」

「そうか、今回は私達は足手まといにしかならなかったな。」

「ううん、そんな事ないよ。」

私を含めた4人はカイロへの帰路についた。

力の解放を停止した今の私の姿は以前と同じ黒髪になっていた。  
でも、瞳の色だけは片方、紫水晶のままだった。

10時間後 . . . . .

その後、私達一向はカイロに到着しそのあと、私だけホテルに泊まった後、翌日には帰る事になった。  
学校があるしねw

そして今、私はカイロ国際空港第3ターミナルビルで足止め？をくらっていた。

「雪さん、すまなかつたな。今回は私達の修行不足を実感したよ。」

「しかし、こんなちっこいのにそんな使い手だったとはな、わはははっは」

皆がそれぞれ劳いの言葉をかけてきてくれる。

ラウンジには、ジェイドを筆頭にナイル魔術局のメンバーが30人ほどで私を送り出す為に集まってくれている。

皆、仕事があるのにありがたかった。

ジェイドの肩に乗っていた猫が床に下りて、私の側まで近寄ってくる。

「雪。」

「何、ハステル？」

「我らが主の太陽神ラーから伝言だ。中東全域の神々とその眷属はお前に星を守る為に力を貸すという事だ。他にも我が主経由で各地方へ伝令をまわしてくれると言う話だったからお前もがんばれよということだ。」

「うん、わかった。でもね、後半はハステルが考えたんでしょう？  
それとね上から目線の話し方は直さないとダメだよ？」

「うるさい、もういけ！飛行機に乗り遅れるぞ。」

「はいはい、それじゃ皆さん、お世話になりました。」

私はアーカム財団が所有するチャーター機に乗り込み、シートに腰を下ろした後、疲れて寝てしまっていた。

飛行機は離陸し、私は空の人になった。



## 雨の中のお別れ

血のように赤く染まった空。

鉄臭の風。地平線まで続く、血と屍の中を私は佇たたずんでいた。

これは、私が今まで殺してきた人の思い、心の結晶であり私の罪の象徴。

最近、私はその意味を理解した。

そして私の前にもう一人の私が姿を現した。

私はクレミアに聞いた事を、もう一人の私に話をした。

内容は、全ての高次創世物アウラウストウルの楔レコードの力を持つ残り5人の翼のあるモノを倒した際、精神体となってしまうているクレミアとハースアールは束縛を解かれ高次元へ帰還してしまうという事。その際に、高次創世物ウストウルの楔レコードの力も消え失せる事。そして私は、すでに死んでいる人間の魂を無理矢理縛り現世に止まらせている為、私をこの世界へ縛り付けている高次創世物アウラウストウルの楔レコードの力が消えるという事は私も消滅するという事と同じ意味を持つ。

そして、私が消えるという事はもう一人の私も消える。

クレミアの話によると、私が死んだ時点まで、私に付随する記憶が全ての人の中から消えると言われた事も話した。

私の話をもう一人の私は何も言わず聞いて最後にそうか……  
・とだけ言ってここから消えた。

私は、飛行機の着陸の震動で眼を覚ました。

どうやら、まだ、もう一人の私は力が回復してない？感じだった。

成田空港ラウンジを歩きながらもこれからの事を私は考えていた。彼らは間違いなく年末近くに、計画を実行に移すこと、それは私の家族を私の前で殺す事。だからその前に彼らを全部倒さないといけない。

たとえば、その結果が私自身がこの世界から消える事になったとしても……………

私は考え事をしながらも、成田線に乗り千葉駅で総武本線へ乗り換えてから稲毛駅で降り、お父さんとお母さん、妹の楓と一緒に住んでいた家に向った。

家は一軒家の2階建ての駐車スペースが一台分の50坪程度の家。私はセラミック製の両開きの門の前で、家を見上げていた。

しばらくすると、ガチャという音と共に一人の男性が家から出てきた。

私は、その男の人を見て、無意識的にお父さんと口ずさんでいた。

「え？」

声が聞えてしまったのか私の方を、見て雪か？と呟いた後、うんと私が答えるとお化けを見たような顔をして家に駆け込んでしまった。私はそれはそうだよねと心の中で半ば納得していた。

死んだ人が生きて話してくるなんて普通に考えて在りえないからね。私は、一目でいいからお父さんとお母さんと妹に先に死んでしまっ

た事について謝りたかった。

きつとすごい迷惑をかけてしまったと思うから・・・それでも、今の反応からするとたぶんそれは無理だろうな〜と思いきや家から背を向けて歩きだした所でもう一度扉の開く音が背中越しに聞えた。

「ゆきー!」

毎日聞いてた、懐かしいお母さんの声だった。

私が、振り向くと同時にお母さんが私を抱しめてきてくれた。

お母さんの匂いがして自然と涙が溢れてくる。

「お母さん」

私もお母さんに抱きついた。

家にも上げてもらつと、リビングには仏壇がポツンと置いてあった。

お母さんが料理を作ってくるねとキッチンの方へ向うとお父さんが

私の近くまできて話してきた。

お母さんが私が死んだ後、寝込んでしまった事を。そして仏壇を開くと私の高校時代の写真が仏画になっていた。

私自身の仏画を見るのはなんか変な感じがする。

「すまないな、君があまりにも娘に似ていたモノだから妻に元気になつてもらいたくて、ついこのような身代わりな真似をしてしまつて・・・」

「うっん、そんな事ないですよ」

私は、家族に分かつてもらったと思つて喜んでいた気持ちが一気に萎んでいくのを感じた。

そっだよね、死んだ人が会いにくるなんておかしいよね。

「えっと寝込んでしまったて、もしかして大変な状態だったのですか？」

家族に敬語を使うなんて．．．でも、もう私は他人なんだよね。

「ああ、一年過ぎても娘の分まで食事を作るほど心が弱ってしまったているんだ。」

「そうですか。あ、楓はどうしてますか？」

「今は、高校に行ってるがどうして楓の事を？」

「いえ、友達なので、はは．．．」

そこまで話した所で、お母さんが私の好きなお母さんの料理のハンバーグを持ってきてくれた。

「ゆき、お腹空いてるでしょう？たくさん作ったから食べてね」

私は、返事をしてから食事をした。ひさしぶりに食べたお母さんの料理はとても安心した味だった。

夕方になり妹の楓が学校から帰ってきて、お父さんと話した後、私にお姉ちゃんの代わりをさせてごめんねと言ってきた。

妹とお父さんはもう私が死んだ事への気持ちの整理がついてるみたい。

お母さんは私が死んだ事から心が壊れてしまって家族は心配してる。

夕食と一緒に取りながらも、私は、生まれ育った家にはもう居る場所が無いという事をはっきりと自覚していた。

「大丈夫か？なんなら俺が代わるが？」

もう一人の私が、私に気を使ってくれて話しかけてくれるけど、これは私がやらないと行けない事だから・・・と断った。

お母さんは、寝込んで居たというだけあって、夕方を過ぎたら疲れたのかソファで横になって寝ていた。

お父さんと楓はお母さんの寝た姿を見て、こんな顔をして寝るのはひさしぶりのような事を私に話してくれた。

しばらくしてから私はふー。と息を整えたあと、お父さんと妹に家から出て行くことを伝え、家の門から出た。

出て行くとき、また来てくださいと言われたけど、もう大丈夫ですよと私はそれに答えた。

そして、私はもう一人の私の力を借りて力を解放した。

白い腰まである髪と紫と緑のオッドアイの姿になり、力を振るう。使う力は家族と積み上げていった、私に関する全ての記憶の消去。

私という存在の記憶とそれに関する物が無くなればお母さんもこれ以上苦しむ事はないだろうと・・・

きつと私は今泣いている。

こんなに視界に映ってる私が生まれ育った家が歪んで見えるのだから。

ポツポツ・・・と雨が降り出した。

私はそのまま力を使い、私の痕跡を全て消した。

家族から私の記憶と関する物を消した私は、自分で思っていたよりシヨックだったのだろう。

次から次へと抑制できない涙が溢れてくる。通りに立ち尽くしたままの私の涙を振り続けた雨は隠してくれていた。

## 決戦前夜

私がスバルと紅葉と一緒に住んでいる家に帰宅したのは11月15日過ぎになっていた。

ドアノブを回して中に入ると紅葉が私にダッシュして抱きついてきた。

「ママ、おかえりなさい」

「紅葉、ただいま」

抱きついてきた紅葉の頭をナデナデしながら玄関から部屋に上がる。

「パパはいないの？」

「ううん、電話してるみたい。」

そうなのとリビングに行くと、スバルが仕事の話をしているみたいで真剣な顔をしていた。

娘が、くーっとお腹を鳴らしていたので

「紅葉、きちんとご飯食べてたの？」

「お外でご飯食べてたの」

「ええー。ダメだよー女の子は特にね。バランスよく摂らないといけないんだよ。」

もううとした顔でスバルの方を見ると、スバルの目線と私の目線が

合って、ピクツとスバルの体が反応していた。

「仕方ないパパだね。紅葉は何か食べたい物ある？」

「うんとね。ハンバーグ食べたい！」

「そっか、それじゃおいしいハンバーグをママは作っちゃおうかな？」

「うん」

私は、前にお母さんに作り方を教わったハンバーグを3人分作って食卓に並べてから、紅葉とスバルを呼んで食事を始めた。

「ねーねー、ママは何処行ってたの？」

「うん、エジプトかな？」

「エジプト？」

「うん、すごい暑い所なんだよ。」

紅葉は私が作ったハンバーグをもぐもぐ食べてる。スバルは私の顔をじーっと見たまま何も言ってきて来ない。

「ママ、今日は一緒に寝てくれる？」

うるうるの目線で訴えかけて思わず頷いてしまっていた。



そのあと……

紅葉と私は一緒にお風呂に入ってから、私の部屋のベットに紅葉を寝かせてから紅葉の髪の手櫛していた。

ガチャ……部屋のドアノブを回す音がしてからスバルが部屋の中に入って来た。

「紅葉はもう寝たのか？」

「うん、もう寝たよ」

スバルが固い表情を崩さないまま、私を見つめてくる。

「スバル、どうかしたの？」

「今先ほど、世界中にあるレイライポイント霊脈地点の異常観測が世界中で観測されたそうなんだ。この事に関して、雪はどう思う？」

「うん、私にはちょっと分からないかな？」

「そうか、それならいいんだが、帰ってきてからずっと思い詰めた表情をしているが、何かあったのか？」

「うん、ちょっと遠くに出張で疲れただけだから、特に何もないよ？」

スバルは私を抱き寄せながら、そうか、気のせいならいいんだがと呟いていた。

私は、頭を横に振りながら、本当に大した事じゃないから大丈夫だから……ねっとスバルの唇に人差し指を当てて追及される事を止めた。

私はスバルと紅葉と川のように寝ながらも、相手が計画を早めた事を知った。

私はスバルの方へ背中を向けて、紅葉の髪を手櫛しながらも時間が無い事知った。

そして、私が全てを終わらせたあとは紅葉やスバルに何も残せない事がとても辛かった。

だからせめて謝罪の意味も込めてだろうか？

ごめんね、紅葉……………

ダメなママでごめんね

ずっと一緒にいたかった。

ずっと紅葉の成長を見ていたかった。

お母さんの教えてくれた料理レシピを紅葉にも教えてあげたかった。

でも、今戦わないと全部がダメになっちゃうの。

だからね、スバルと紅葉は私の命に代えても絶対守るからだから今だけはこうしていてね。

私はスバルと紅葉の体温を感じながら最後の戦いへ赴く為に心の中を整理した。

初めて異世界へ召還された事。

そのあとの魔法世界での出来事。

商人の護衛で国の騎士団と戦った事。

勇者として召還されて魔王と戦った事。

たくさんたくさん、多くの人と言葉を交わして仲間を作ってその都度世界から弾かれた事。

でも、いつか旅に終わりがくるように私の旅ももうすぐ終る。

でもその終わりは、世界を滅ぼそうとしてる人を倒してからだ。

だから絶対に負ける訳にはいかない。

だから、私はスバルと紅葉の手を握って溢れかける涙を抑えながら照明が落とした暗い部屋の中で考えていた。

お腹の中の私の子には本当に本当にごめんね . . . . . 心の中で謝っていた。

私はスバルが寝付いたのを感じると、そっと部屋から抜け出して神ガーデンの庭でガブリエルが使った空間転移の際に発生した力場から割り出した座標軸を空間移動魔法陣に書き込んでいく。

そして紅葉とスバルの居る部屋をの扉を見た後、魔法式を発動させ、家の廊下から姿を消した。

## 異界での戦場 前編

長く続く暗闇の中の通路を進んで行くと突然、通路が途切れ巨大な空間へ通路が反転した。

数多の星が漆黒の暗闇の中で輝き、高さ1000m以上もの白金色に輝く柱で支えられた神殿を照らし出している。

私は、神殿の中を用心して進んでいく。

「まったく気配がない？」

《リール・アイズ天輪眼》で常に周囲を調べて移動しててもまったく反応がない。

そのまま進むと一つの巨大な扉が目の前に見えてきた。

その扉を、ダークマターにて編みこんだ《魔降剣》を左手に持ち、破壊する。そして、中に入ると一人の男が立っていた。

「やあ？ずいぶん早いね。」

「俺が来るのが分かっていたみたいじゃないか？」

「もちろんだとも、私達の人形……いや雪。君がここまで出来るとは本当に予想外だったよ。そうそう、私の名前はミカエルだよ。」

「これから殺す奴の名前を聞いても仕方ないんだがな？」

「まったく、ここまで歯向かう可能性があるならば、ガブリエルが君を追い詰めたときに機能停止にしておけばよかったよ」

「言いたい事はそれだけか？」

俺は、ミカエルの睨みながら高次創世物の楔レコードを使い、力を解放する。漆黒の髪が銀色に、両目が紫と緑のオッドアイに染まる。

「それがウリエルを倒した力かい？」

俺は、そいつの話を聞きながらも瞬歩で一気に間合いを詰める。そして、対神格魔法《魔光千弾》を打ち出す。ミカエルが編み出した土の盾を闇の光が全て貫通し、歌衣を剥がし破壊していく。

さらに追撃に左から右へ振り切った魔降剣がミカエルの歌衣防御を破壊し右手で切り下ろした至高剣がミカエルの腕を切り落とす。

「ゲツ……ガブリエルに聞いていたがこれほどはね。やっぱり正攻法ではもう君には勝てないかな？」

「どうということだ？」

「不思議に思わなかったのか？敵の本拠地まで攻めてきて何故、私一人しかいないのか」

「まさか!？」

雪が、移動魔法陣を展開してミカエル達がいる世界への扉を通った所まで時は遡る。

「人形は、我々の世界へ移動したな」

「<sup>シナリオ</sup>予定どおりだ」

雪たちの住んでるマンション上空にルシフェル・ガブリエル・ラファエルの3人が滞空していた。

「やるか」

3人が行動に移そうとした所で上空から1機の黒い機体の戦闘機X-15が急接近して2発のミサイルを撃ち込んだ。

ラファエルは大気壁を作り出しミサイルを破壊しながら不可視の空間の刃を無数に作り出し戦闘機へ打ち出すが、戦闘機は巧みな操縦によりそれを全て回避していく。

「ばかな？視認出来ない刃をどうやって……」

「ラファエル、これは罠だ」

すでに、破壊されたミサイルから幾何学模様が書かれた無数の符が3人の周りを多い尽くしており、それが光つたと同時に3人の姿がその場から消えていた。

戦闘機の中では、操縦者が通信をしていた。

「山本さん、無茶苦茶ですよ。」

「仕方ないだろう、斑鳩君しかその機体を操縦する事が出来ないのだから。それでもさすがは、剣山の紹介してくれた、ASE所属のスーパーマルチドライバーだな。」

「そうですね、それでは一度、基地へ戻ります」

3人は何も無い白い空間へ位相転移されていた。

「くそ、あの程度の力で妨害されるとは。」

ガブリエルの愚痴を聞きながら、ラファエルは空間の解析をしている。

「見たことのない空間だな？ここまで編みこまれてるのは見たことがない」

「お褒めに預かって光栄ですわ」

一人の赤い髪をした女性が3人の前に現れる。

「貴様、一体なんの真似でこんな事をした？」

「何の真似？貴方達こそ何の権限があつて今まで私達の世界へちよつかいを出してくれたのかしら？」



「なんだと？人間の分際で」

「やめろ、ガブリエル」

「すまないが、我々も時間がない。残念ながら貴方を殺してこの空間を破壊させてもらう。」

「そして、アーカム財団のエージェント　雪の娘を殺すという事かしら？」

「ああ、そうだ。」

言ったと同時にキン！．．．．．と言う音が空間に鳴り響きガブリエルがティア・フラット・アーカムへ突き出した氷星神剣を一人の男が右手にもっていたナイフで弾いていた。ガブリエルはその顔に見覚えがあった。

「またしても、スプリガン！貴様が邪魔をするのか！！」

「残念ながらスプリガンが名前じゃない。御神苗優おみなえ ゆうと言う名前がある。」

「グハツ．．．．．」

「まったく俺がいなかったらお前10回は死んでるぜ？」

ガブリエルを蹴り飛ばしたジャン・ジャックモンドがいつの間にか優の隣に立っていた。

「一体これはどうなって・・・くっ」

ドン、という大気の衝撃波でラファエルも300m近く吹飛ばされる。

「おいおい、こんなものじゃないんだろ？」

青い風を纏った和麻と綾乃が、ラファエルを睨みつけていた。

ルシフェルはそれを見ながら、何故、これほどまでに邪魔が入るのか理解が出来なかった。こちらの行動が筒抜けになつてるとしか思えない。

ラファエルとガブリエルが対峙している者達の空間の粒子を変換させ一気に殺そうとするのが力が押さえつけられていて発動しない。なに？ルシフェルは周囲を見渡して、一人の白色の色の髪をした少女がこちらに指先を向けてるのに気がついた。

「ルーク、ユーグネス。やっちやて！」

フランは事象をコントロールする指輪でルシフェルの力を押さえ込み、隣に立っていた四条楓は神炎『緋炎』を力を溜めているユーグネスの拳に纏わせる。

「了解です。フラン様」

「わかったぜ、姫さん」

ルークは魔剣グラムを2mの長剣へ展開しルシフェルに斬りつける。ルシフェルはそれを翼で防御するが、グラムの特殊能力である全て



「事象をコントロールするアイテムだと？そんなバカな物があると  
は……………」

最後まで言葉を発する前にルシフェルが神炎『緋炎』に焼き尽くさ  
れ消滅した。

## 異界での戦場 後編

ルシフェルの断末魔の声を聞きながら、ラファエルは目の前に立っている二人を見据えていた。

ラファエルは大気の粒子を編み込み操作し和馬へ無数の不可視の刃を打ち込む。

和麻は、それを全て無効化<sup>キャンセル</sup>していく。

さつきからその繰り返しである。

「貴様、一体何をしている？」

「何って言われても・・・なあ？」

和麻はラファエルとのやり取りにも普段どおり接するが、ラファエルはこの異世界に飛ばされてからまったく力が振るえていない。

何故なら。ここには太陽やそう言った他のエネルギーを応用する事が出来ないからだ。風の力は他のエネルギーを応用できなければ全属性で一番弱いと言っても過言ではない。しかも相手は、不可視の刃<sup>キャンセル</sup>を無効化するのだ。

「和麻、さつきと決めるわよ」

綾乃は、神炎『<sup>プロミネンス</sup>紅炎』で編みこんだ剣を両手で持ち突っ込んでいく。

和麻はラファエルの動きを止める為に、ダウンバーストで相手をその場に縛り付ける。

「くっ、この程度の攻撃で！我が歌衣が崩せるものか」

ラファエルは近づいてくる綾乃に向けて不可視の刃と打ち込みつつ、空間自体を破裂させ綾乃を吹飛ばそうとするが綾乃が身に纏っている紅炎にすべて燃やし尽くされていく。

そして・・・綾乃の持つ剣がラファエルが展開した翼を貫きながら体の心臓部を貫通し背中へ突き出る。

「ばかな？歌衣が消えてるだと？」

その言葉を最後にラファエルが神炎に焼き尽くされ、爆散した。

ガブリエルは、御神苗優おみなえ ゆうと斬り合いながら、否。一方的に殴られ斬り付けられながらティア・フラットの作った空間の床を吹飛ばされ転がっていた。

「何故だ、何故歌衣が消えた？」

その言葉にティア・フラット・アーカムは答えた。

多額の財力を使って聖歌を歌う事を法王庁経由でしばらくとめさせた事。そして、この場にいる全員を、楓経由でミミールの世界のルーク経由で戦力集めたのは全てアーカム研究所アドバイザーのオルスバス・レイドという事を。そして、雪の服にはアーカム日本支部副所長の剣山がオリハルコン製の盗聴器を仕掛け、それにより情報を得ていた事も。

「あんまり、人間を舐めないでもらいたいわね」

ティア・フラットがガブリエルを見下しながら言葉を紡ぐ。

ガブリエルは、そのままゆっくりと周辺の人間の位置を確認し体内にある水分を操作し破裂させようとするが、倒れこんでいた体が上空に浮かされ、腹部から胸、顎にオリハルコン製のナックル部分で拳を打ち込まれ後方へ吹き飛ぶ。

そしてナイフが、ガブリエルの胸部へ突き刺さり、震動を始める。

「な？」

ガブリエルの体内を構成していた物質が高周波により次々に破壊し崩壊していく。

ナイフを抜こうとするがナイフの柄がすり抜けてしまい抜き出す事が出来ない。

「知ってる？進みすぎた科学は魔法と区別がつかないのよ？」

ティア・アーカム・フラットのその言葉と同時にガブリエルの構成していた物質が崩れちり崩壊した。

場所は戻り

雪へ娘の死という、絶望の瞬間を見せようと、ルシフェルへ連絡を取ろうとしたが連絡が取れないことにミカエルは焦っていた。私達が作り出した、通信が取れなくなることなどこの数万年無かったからだ。

俺は、ミカエルの焦ってる姿を見て確信した。こいつらはなんらかのトラブルに巻き込まれてるという事を。

『システム上にエラーを確認。外部からの進入、システムが次々と乗っ取られていきます。』

「なんだと？どういう事だ？どこからの進入だ？」

もはや、先ほどまでの紳士的感覚が消えたミカエルが必死に空間へ表示したシステムを調べていく。

「なんと、侵攻速度だ。こんな速度で侵攻してくるなどこの  
．．．?」

そこで空間上に、一人の水色の髪の妙齡な女性が出現する。俺はその姿を見て驚いた。何故こんな所に？

「ミミールか？どうしてここに？」

「まったく、あなたはバカですね。ええ、本当にバカです。もう一度言いますよ？バカですね」

ミミールは俺の方へ向けて冷たい眼差しで苦言を言ってくる。ひさしぶりに聞いた、ミミールの言葉に思わず苦笑いをしてしまう。



「貴様がこのシステムに乗ってきているのか？」

「このシステム？この程度をシステムと言うのですか？止まった時に支配されたこの程度の世界を……」

「なんだと？」

ミカエルの言葉を見無視しミミールは俺の方へ視線を向けてくる。

「雪、今、私の世界の者とあなた達の世界の人が力を合わせて戦っています。」

なんだって？そんな危険なことを？

「あいつらの力は強大だ。俺がいないと……」

「いい加減にしないで、たった一人の力で何でも解決できるほど世界は単純に出来ていません。それに少しは人の力を信じてあげたらどうですか？あなたの為にずっと寝ずに交渉をしていたオルスバス・レイドの事を！」

「え、スバルが？」

一瞬で意識が私に切り替わってしまっていた。

「な、なんで？」

「あなたは全部を話したのでしょうか？なら、それに大して対抗措置をするのは当然ではありませんか？」

「でも、私には返せる物が何もないのに……」

私の言葉に、怒りながらミミールが告げてきた。

「見返りと求めない人達もいるのです。それに大して貴女はどう行動するつもりですか？人の好意を無駄にするつもりなのですか？貴女はどうしたいのですか？」

私は……

「もつと皆と一緒にいたい！でも……」

「それならさっさと倒してきなさい。その後、消滅までには時間があります。その間に何かしら手を打つ事が出来るでしょう？」

本当にそんな事が出来るか分からないけど……今は、

「うん、分かったよ」

「貴様ら、私を無視しおつてー!!」

ミカエルが私の方へ突っ込んでくる。ミカエルの重圧神剣を私の交プレスオブパース差した双剣、左手の魔降剣と右手の至高剣が受け止める。

私はミミールへ伝言を託す事にした。

「ミミール、みんなに言っておいてー!!」

「終わったら絶対に帰るって！！！！！」

私がそう言つとミミールは頷いて消えた。

『システムダウン、空間を構成していた物質が崩壊を始めます。作業員は早急に退避をしてください』

『繰り返します。至急、作業員は退避してください。』

「おのれ！先ほどの奴がシステムを乗っ取り破壊していったのか！！！」

ミカエルが怒り狂ってるのが見てて分かる。

「悪いな、時間が無いから瞬殺させてもらっぜ？」

私から俺に切り替わり、俺は《魔降剣》と《至高剣》に魔力を纏わせてミカエルの剣を弾く。

やっぱりなこいつらは、能力だけ高いがそれだけだ。

以前、ユーグネスに言われた。能力に頼ってるだけでは意味がないと・・・それがやっと分かった。

そしてこいつらの中で、戦闘に慣れてるのはウリエルくらいだ。

俺は一瞬で懐に入り、双剣を、ミカエルの剣に叩きつけて魔力を開放した。

同時に対神格用極大魔法「《ブレイクハース神界破斬》」が発動する。千億ボルト以上もの高電力が空間を支配し巨大な熱量を発生させる。

すでにミカエルの歌衣が再生していないのはデイスティニー・アイズ創生眼で確認済みだ。

おそらく、皆があいつらの歌衣の源である聖歌をなんとかしてくれてるのだろう。

熱と電流に焼き尽くされたミカエルが浮遊してある場所から落下するの見える。

俺は落下地点に瞬歩で移動し、俺に向けて構えてある剣に向けて、

「お前にはもつたいたないが、その剣ごと粉碎してやるぜ！受けてみる！！暗黒魔闘術最終奥義　魔王破滅拳！！」

莫大な魔力を纏った俺の右手が、ミカエルの剣ごと破壊し体を貫通する。

「ば、ばかな。ブラックホールですら切り裂く我が剣を生身で破壊するだと？そんなバカな？」

「悪いな、お前のその考えごと粉碎させてもらう。」

さらに魔力を高めて貫いていた体の中へ直接叩きつける、そしてミカエルが驚愕の顔をしたまま、体が魔力を相殺しきれずに消滅した。

.....

.....

.....

空間にグラフィックが表示され、そこに質感のある物体が形成されていく。

「まったく、吹き飛んだ体まで再生するとかどんどんどだけチートなんだよ」

俺は、ミカエルがいた後方にある扉に向かって進んだ。

## いま、そこにある聖戦 前編

ミカエルの後方に存在していた、赤く光る扉は、センサー式だったのか俺が近づくと自動的に開いた。

扉を抜け、白一色で統一されている通路を進んでいくと1分ほどで景色が反転した。

周りはいつか見たような菜の花で一面が覆われており高さ5m、四方が30m程度の神殿が一つ存在していた。

俺が、神殿の方へ進んでいくと一人の男が神殿から出てきてこちらを見据えてきた。

その男は、金色の髪に紫と緑のオッドアイを持っていた。

「おひさしぶりです、母上<sup>クレミア</sup>」

今の俺の姿は、力を解放している状態の為、クレミアとほぼ同じ状態になっている。

「母上？どういう事だ？」

俺の問いかけに、男がきょとんとして青い空を見上げてから、「ルシフェル達は何をして……そうか、全員死んだのか」と呟いてから納得したように俺の方を先ほどまでの甘えるような眼つきから殺気を籠った眼つきで変えて睨んできた。

「貴女の中にいる母上<sup>クレミア</sup>を復活させる為に、この星の生物と神々を生贄に捧げる予定だったのですが、うまくはいかなかったようですね。」

母上の復活？こいつは一体何を言ってるんだ？

「な！どういうことだ？上位次元に移動する為に高次創世物の楔アウラウストウル レコードを利用するのでは無かったのか？」

「そうですね、表向きにはそういう事にしておきました。」

「表向きだと？」

「ええ、そういう事にしておかないと、いくら私の部下になつたとは言え、言う事を聞いてくれる人達ではありませんからね。それにしても、困りましたね、せっかく私が洗脳した人間達で作ったカトリック教で力を与えてあげたというのに失敗してしまつとは……  
・まあ、いいでしょう。充分、高次創世物の楔アウラウストウル レコードも育つたようですし貴女を殺して母上の時間軸だけ巻き戻すならば開放させた霊脈レイラインポインの力だけで賄えるでしょう。」

「母上？誰の事だ？」

「貴女の中にいる女性ですよ、名前はクレミア。貴女も何度か深層心理世界で会つた事があるのでしょう？」

「なぜ、そのクレミアを復活させようとするんだ？」

「子供が親に会いたいと思うのはおかしい事ですか？私は母上が力を振るい世界を守ろうとした時に言ったんですよ。

なんで人間ごときの為に母上が命を捨てないと行けないのかと！母上は、自分達の子供が未来を掴むためにと言っていた。でもね、私は母上には死んでほしくなつた。

でもあの男、父は母上ハースタールの行いを止めないばかりか仕方ないとまで言

つたんですよ。

分かりますか？貴女に。生まれてまだ間もない私が母を無くした気持ちが？私は、憎かった。かつて美しかった世界を自分達の欲望の為だけに食い散らす寄生虫にんげんたちが、世界が、そして父がハースアール！！

だから、私は成人した時に、母上と父上の元で働いていた神官達に強大な力を与えるという名目で接近し言葉巧みに誘導して父を殺した。

そして高次創世物の楔アウラウストウルを使い上位次元へ行き、自らを神とするように誘導し彼らも力に見せられて居た事もあり私に妄信してくれた。

さらに、私は、力を得る為に自分達の行いを神と言う名の元に責任転換する事により殺した人間、殺された人間の罪を全て神に背負わせる宗教を作った。それによりたくさんレコードの神や人間達が死に、その度に私達の力は増大していった。」

そこで男は言葉を区切ると、楽しそうな顔をこちらに向けてきた。

「雪さん、本当に愚かだとは思いませんか？宗教や国のためと言う免罪符を与えるだけで、人は簡単に理性を失い妄信し多くの罪の無い人を殺しても、それは神、国と言った形無いモノに責任転化し自分達は誠実だ、無実だなど言っんですよ。そして、血塗られた両手で子供を育てる。」

そんな子供達が罪を犯さないはずがないでしょう？

正義？平和？そんな物は幻想でしかない。

貴女が住んでる世界を見るだけで分かるでしょう？死は差別はありふれた日常として近くに溢れている。

誠実？信頼？約束？

そんな物を守る人間がどこにいるんですか？

愚かかといか言いがたないですよ、本当に。偽善ですよ、全て。

自分達の欲望の為には、人の命などゴミ以下の価値に過ぎない。それが人間の本質です。



一人の命は星より重い？なら、人間以外の生き物はどうなのですか？矛盾していますよね？

他人の痛みが分からない、分かっていたらそんな事は起きないのですよ。

戦争？紛争？宗教戦争？テロ？クーデター？全ては人間のエゴが起してる物にしか過ぎないのに人は全てを他人や神か国家に転化し自分自身の罪を認めようとしない。本当に愚かとか言いようがないですよ。だからいつまでたっても争いは無くならないし傷つくものが減る事もない。それならいつそ、母上を蘇らす、《ついで》にこの星ごと消し去った方がいいと、その方が彼らの救いになるはずだと思いませんか？」

「ずいぶん饒舌なんだな？」

俺は右手に《至高剣》を持ちながら俺は戦闘態勢に入る。

「私と同等の力を持つ者とは久しぶりに会ったものでつつい余計な事を口にしてしまいましたね。さてとそろそろ始めますか？そういえば、あなた達の国では、果し合いで名乗り合つのが仕来りを聞きました。あなたの名前はすでに知っていますから、私の名前を教えましようか。」

俺は、瞬歩で一気に間合いを詰めてエーテルで編んだ《至高剣》を男に向って振り下ろす。それを男が右手一本でしかも素手で弾いた。

「私の名前は、<sup>スライゼ</sup>法廷神クレイです。」

「法廷神か、ずいぶんと大層な名前だな？」

「ええ、私がつけた名前ですがね」

「自称かよ!!!」

思わず突っ込んでしまった。

「貴方達の世界にもあるでしょう？権力者、有力者に媚びへつらう自称法律機関が？それと一緒にですよ。一部の権力者達が下層の民衆を虐げる。私がやってる事はそれと大差ないですよ。いいえ、違いますね、平等に全生物に死と言う安らぎを与えるのですから私の方はずっとマシですね。」

「本当に良くしゃべるやつだな」

俺はそう言いながらも左手にもダークマターで組み込んだ魔降剣を展開する。

そして体内の気を丹田を通して肉体の構成を引き上げていく。

一瞬で、クレイの懐に入り、編みこんでいた神格魔法を零距离から《魔光千弾》を打ち込みながら両手に持っていた剣をエックス字に交差させるように打ち込む。

闇の光が全てクレイの体の周りにある光に相殺され、両手で打ち込んだ剣が素手で受け止められてそのまま砕かれた。

不可視物質が砕けた衝撃により俺とクレイの距離が一瞬離れるが体内の魔力を体表面に循環させ、爆発的な移動速度から視認できていないクレイの鳩尾部分に《暗黒魔闘術奥義 魔人烈光殺》を打ち込む。俺の魔力とクレイの防御魔法壁が火花を散らし拮抗してる間にさらに一步俺は踏み込み、《暗黒魔闘術究極奥義 魔王破滅拳》を重ねて空いてる右拳で打ち込んだ。

膨大な魔力が空間を揺るがし、爆発する。  
魔力の飽和の煙が晴れてくると来ると同時に俺の体が再生を完了する。

煙が晴れた場所から現れたクレイは腹部の服がやぶれているだけで特に怪我らしい怪我が見当たらなかった。

クレイは俺の方を見て驚いたような顔をして話しかけてきた。

「いくら、アウラウストウル レコード 高次創世物の楔の所有者だったとしても、人間程度で上位次元の者の私、相手にここまで戦えるとは驚きを禁じえませぬ。まあ、神官程度なら今の力で充分戦えていたはずですが、本当の神たる私には少しばかりね」

クレイは、ひさしぶりの玩具を見つけたような顔を雪に向けてながら指先を振るった。

同時に雪の上半身と下半身が空間ごと、真っ二つに斬られた。

## いま、そこにある聖戦 後編

空間ごと切断された俺の体が瞬時に再生する。同時に俺もクレイに向って、

対神格用魔法《座標軸指定圧縮爆発》<sup>ブレイク</sup>を発生させクレイの体制を崩しながら魔力を体中に纏っていく。さらに距離を詰めながらマルチタスクにより空間に自動遠隔魔法陣を敷く。

両手に展開した、概念物質である《ダークマター》と《エーテル》を直接魔力で加工しランスの形にして電磁場を発生させ音速の速度で打ち出す。

それぞれがクレイの魔法防御壁に着弾し火花を散らしながら

対神格用魔法《座標軸指定圧縮爆発》<sup>ブレイク</sup>を剣の内部で発生させ概念物質を現実世界へ転換させる事により膨大な魔力を開放させる。

クレイの魔力防御壁が純粹な魔力の衝突により次々と相殺されて崩壊していく。

そこに俺の、常に質が変わる魔力を纏った攻撃が突き刺さる。《暗黒魔闘術》、素人同然の動きしか出来ないクレイは次々と魔力防御壁を破壊されていき、

《暗黒魔闘術 奥義・魔神烈光殺》がクレイの顔を殴りつけて仰け反らせる。

クレイの魔力防御壁が自動的に再度展開しようとした所で俺の展開していた自動遠隔魔法陣が発動する。

対神格用束縛魔法《煉瓦水晶》<sup>れんがすいしよつ</sup>

外部、対外排出される魔力を離れた箇所空間に固定する事により魔力防御壁形成を阻害する。

対神格用戦闘高真魔法《瞬華桜復》  
肉体の再生が時間の進行回復から巻き戻し回復に変更される。つまり俺の欠損箇所肉体箇所が壊れる前に強制的に時間的拘束を持って少し前に戻る。

対神格魔法《軌道落葉》

時の軌道を緩やかに変更する事により相手の時間を行動を一時的に束縛する。

対神官用に作っていた魔法だ。

クレイの魔力防御壁が空間で赤い水晶に吸い込まれていき、魔力障壁の形成を阻害する。

同時に俺の肉体の疲労が一瞬前まで巻き戻される事により暗黒魔闘術を利用した業の肉体反動を消し去る

そして紅葉色の葉が舞い散る中にクレイが緩慢な動きで俺を見ながら驚愕の眼差しで見ている。

「こんな……」

俺の一步踏みこんだ、右ストレート《魔神烈光殺》がクレイの腹部に刺さり、その衝撃破が極限まで追求した通し影響も与え腹部から背中を通し強大な衝撃破と通して全身を内部から打ち付ける。そして、その場で空中に縦方向に一回転した俺の右蹴り《魔殺一刀両断撃》が頭に衝突しクレイが地面に貼り付けられる。蹴りの勢いそのまま今度は地面を魔力の籠った右手で殴りつけ《地獄破斬撃》にで連続的に舞い起こった地面の隆起と衝撃波で体を浮かせる。

そして、左の渾身のアッパー《魔王破滅拳》を顎に当てさらに10m付近まで吹飛ばし浮かす。

俺は、結界術にて上空へ足場を形成して足場に瞬歩で移動する。

移動しながら、右手に《神滅斬》ラグナ・ブレイドを展開しつつ、剣の形状を5m近いランスに変換する。色はもちろん黒。

「これでどうだ、神滅槍!!!」ラグナ・ランス

神すら滅ぼす神滅斬を概念物質で固定化したモノがクレイが防御しようとした腕ごと貫通してそのままぐあああと言言葉を発しているクレイを地面に縫い付ける。

そして俺の周辺に4色の燐光りんこうが舞い集まる。

純粋的な力をそのまま力あるモノへ変換していく。

ルビド 赤眼の魔王の燃える死の根源たる《赤》  
デスフォッグ

白霧の全てを包み込み死へと誘う《白》  
カオティックブルー

蒼穹の王の静寂の死の世界への波紋の《青》  
ダイク

闇を撒く者全ての者へ死を与える闇《黒》

それぞれが、クレイを焼き、存在を崩し、精神を破壊し、肉体を破壊する。

そして.....

「これが俺の対神格用殺劇舞荒拳だあああああ」

俺の右手の掌の上で展開していた球状の直径10cmほどの虚無の力《重破斬》ギガスレイブがクレイの体の表面で弾ける。

緩慢な動きで防御すら許さない連続攻撃が全て突き刺さり虚無がクレイを飲み込んだ。

そして.....ドサツと言う軽い音がしてクレイが黄色い菜の花で一面覆われた上に落ちてきた。

そして、ゆつくりと立ち上がってきた……がすでに目には力が籠っておらず、両手がマネキンのようになっていて砕けている。「まさか……これほどとはな……なぜ、ここまで強い？何故、私の邪魔をするんだ？」

「お前、ボケてんのか？自分でやった事の責任くらい取るのが当たり前だろうが！お前は俺に喧嘩を売った、それだけで充分お釣りがくるほどだ。」

「喧嘩だと？子供が親に会いたいと思ってする事がどこが間違っているというのだ？」

《もう、やめよう。》

俺の中のもう一人の俺が、話しかけてくる。

《何を言ってるんだ？こいつが俺たちをこんな歪んだ存在に世界を危機に陥れたんだぞ？分かってるのか？》

《わかってる、わかってるよ》

《わかってない！こいつは今、ここで殺して禍根を断っておかないといけない相手だ。まさかお前、こいつが改心とかすると思ってるんじゃないんだろうな？》

《それは分からないけど、子供が親に会いたって思うのは当然だもの。だって貴方だって家族を願っていたんでしょ？もし家族がいて失った家族を取り戻せるとしたらなんでもするんじゃないの？》

《俺は、こんな奴のようににはならない。それに俺は作られた存在だ、全ては作られた記憶だった。お前が考えてる事は偽善にしか聞えない。こいつは絶対に改心なんかしない、下手に力を持つならばこの場で殺した方が後々問題が起きなくていいだろう?》

《そんな考え方はとても悲しいよ、だって私には聞えるもの、あの子<sup>クレイ</sup>の心の叫び声が．．．泣き声が．．．必死に母親<sup>クレミア</sup>の姿を求めて何も無い世界を彷徨ってる子供の泣き声が．．．それによこの世界はまるでクレミアとアースハールがいた世界のようにじゃないの?きつとクレイは両親との思い出の地を再現してるんだよ、だから》

《うるさい、こいつはお前や俺の運命を狂わして世界を仇名すモノだ。だから殺して、それで終わりだ》

「クレイ!!お前と話していても時間の無駄って事がわかった。そろそろ死ね!!」

俺は、もう一人の俺の意識を遮断して、魔力を拳に展開しクレイを殺そうと心臓の位置へ《暗黒魔闘術奥義 真魔王拳》を打ち込もうとするがクレイの体表面10cmの位置で拳が止まってしまふ。

「なに?」

俺は、自身の体が動かない事に驚いていた。

そして俺の目の前でクレイがゆっくりと菜の花の絨毯の上に倒れていった。

俺の体が制御下を離れたままで倒れたクレイの体を膝枕してクレイの金髪の髪を撫で上げた。



「な．．．にをする気だ」

「何もしないよ。」

俺の口から出たのはもう一人の私の声だった。

《ごめんね、もう一人の私、でもこれはきつと大事な事だと思うから今だけは私に任せてもらえない？》

《任せてもらえない？じゃねえよ、体の主導権握っておいて！！好きにしろ！女の頼みを聞けないほど狭量だと思われても癪だしな》

《ありがとう、もう一人の私》

私はもう一人の私に感謝してクレイの体をフェイスティート・アイズ創生眼で視る。体の構成していた物質が全て破壊しつくされていて何時、消滅してもいい状態だった。もう手の施しようがない．．．

「ねえ？クレイ。貴方、本当は人が好きだったのでしょう？だって人が嫌いだったらあんなに詳しく人を観察したりしないでしょう？」

「一体、貴様は何を言って．．．」

もはや、体を動かす事すら出来ないクレイは抗議を上げ続けようとする。私はその唇と一指し指で押し閉じる。

「否定しなくてもいいよ、人が好きだから人を信じてるから貴方は逆に憎悪したんでしょう？だって本当に無関心だったら貴方の力ならとっくに人を根絶やしに出来てるはずだもの。それにね、人を最

初から信じていなかったりする人なら人に幻滅もしないし、最初から蟲のように殺してははずだもの」

「ち、違う、俺は奴らを利用しようとしただけだ」

「ううん、だってそれなら時間がかかっても他からの力を持つてくればいいんですもの、でも、貴方はそれをしなかった。歪んだ関係だったけど人との関係をもった。それにね、貴方が作った宗教だつて人を殺してるだけじゃなくて無償で世界中に医療とかもしてるし、人への心へ活力や安らぎも与えるのよ。本当ならそれを貴方は許さないでしょう?」

「.....」

「私ね、娘がいるの。紅葉って言うんだけどね。とつてもかわいいの、貴方の母親を求める姿を見て、私ね自分が間違ってたって思ったの。本当はね私は、ここに来る前に私が死んでも消滅しても皆の記憶から私に関係する記憶は消えるから迷惑かからないからいいかなって.....でも、それって子供にとつたら母親の記憶が無くなるって事なのよね?それって愛情を母親からもらったってことも忘れちゃうのよね?それって一人よがりでも残酷な事だよね?だって子供にとって母親の記憶が無くなっちゃうんだもの」

「そうか.....」

「うん、だから私はどんな事があっても、娘の元へ戻ろうと思ったの。」

「パキン!.....ガラスが砕ける音と同時に空間にヒビが入っている。」

「もう一人の私からしたら、私はすごい甘ちゃんらしいけど。私  
はこれでいいと思うの。」

ピシピキパキン．．．．次々の風景が砕け散り淡い黄金きんの光にな  
り消えていく。

「確かに、貴方のやり方は間違っていたと思うわ。それにね、私は  
以前ね貴方の母親クレミアがこの世界を救う時に貴方の父親ハースアールが一生懸命止め  
させようと説得していたのを夢の中で見たの。きつと貴方には弱い  
自分を見せたくなかったただけだと思ふの。男の人って見栄っ張りな  
所あるから本当に仕方ないよね」

私は、クレイに笑いかけるように語らしかけた。

「そうか．．．」

「うん、だから私は貴方のやり方はダメだったと思ふけど、思いは  
間違っていないと思ふの。だから、もう強がらなくてもいいの。ずつ  
と我慢していたんだよね？」

「．．．」

私は、クレイの髪を手で撫で付けながらもう時間が残されていない  
クレイに歌を詠った。私の詩はクレミアが子供の頃のクレイに詩つ  
てあげた子守歌だった。

言葉の意味は分からないし、何語かも分からない。でも創生眼デイスティニー・アイズがク  
レミアからクレイに歌ってあげてと教えてくれた詩を自動的に再生  
してくれている。

私の歌をクレイは一瞬驚きながらも、ゆっくりと目と幸せそうに瞳を閉じて聞きはじめてくれた。

その間も次々とこの世界を構成する物質が碎け崩壊していく。世界はすでに私とクレイの周辺数十メートルしか残っていない。

そして……。「母上」。その言葉を呟くと一筋の涙がクレイの瞼から頬を伝っていく。それと同時にクレイの体が光の粒子となって舞い散る。

「雪さん、やっと束縛が解かれました。どうもありがとうございます。」

クレミアの声が聞えたと同時にアウラウストウル高次創世物の楔レコードの力と共に私の中から白い粒子が噴出して宙に舞う。

「迷惑をかけました。これでやっと戻る事ができます。」

ハースアールの声も聞え、青い粒子が私の中から抜け出て宙に舞う。金と白と青い粒子が語りあうように碎け消えた世界へ溶けるように吸い込まれていく。

同時に私も、根源の力が失われた事により力が一気に減衰するのを感じた。

「お姉ちゃん。ありがとう。」

私は薄れていく意識の片隅で、子供の声を聞いた気がした。そして、私の魂と記憶と繋ぎとめていたアウラウストウル高次創世物の楔レコードが消えたことにより

私自身が消えていくのもはつきりと感じた。

「やっぱり……私、もう戻れないかも……ごめんね……  
もみじ……」

そこで私の記憶が、体が崩壊する次元と一緒に飲み込まれていった。

限りある時の中で・・・

白い壁紙に白に塗られたパイプベッドの上で一人の少女が寝ている。少女の部屋には一人の女性が部屋の窓を開けて空気の入れ替えをしていた。

んっ・・・ベッドの上の少女がくぐもった声を上げ身動きすると換気をしていた女性が反応し、少女のベッドの側にある椅子に座ってその顔を覗き込む。少女がうつすらと瞳を開けていくのを見て、女性が体を震わせていた。

私は、ぼんやりとした視界の中に一人の女性が私を覗き込んでいるのが見えた。

「お母さん？」

私の口から出た声はとても弱々しいモノだったけど、お母さんは瞳に涙を浮かべながら私の頭を撫でながら頷いてくれた。

私が目を覚ました場所は、私立の病院で卒業式の当日に意識を失って倒れて、一年以上も原因不明のまま意識が戻らなかった事をお母さんに教えてもらった。

その後は、病院のお医者さんの診察が終わった後、お父さんと妹の楓が私を向えにきて家に帰宅した。

なんだから、とつても長い長い夢を見ていたような気がする。

退院してから数日してから、私は世界最大の多国籍企業アーカム財

団へ何の因果か就職する事が出来た。

そのアーカム考古学研究所の所長のオルスバスさんはとってもいい人で、よくしてくれる。

オルスバスさんの娘さんの紅葉も私にとっても懐いてくれてとてもかわいい。

でも、私を呼ぶときは「まま！」って呼んでくるのは、まだ結婚もしてない私としては時期尚早な気もしないでもないんだけどね。

紅葉はいつも私に、お歌を聞かせて〜とせがんでくるんだけど、その都度、私が知らない詩が自然と口から零れるようにして紡がれていく。

でも悪い感じはしない。

でも、私はいつも誰かと一緒に何かをしていた気がする。

きっと、この詩はその人が残していつてくれた歌の気がする。

歌うと心がワクワクしてくる。

きっと私の忘れていた何かが始まるような……

私は紅葉とスバルと一緒に、千葉公園にあるボートの上で空を見上げていた。

俺はそれを、空間上に設置されていたモニターから見ていた。

「うまくいったみたいね」

そう、

あの空間の崩壊時、主人格である雪の記憶と魂は過去へ還元され消滅の一途を辿っていた。それと同時に雪が関与していた全ての記録も削除されるはずだった。

俺は、主人格が崩壊する間に表に出た時間 わずか数十秒の間に、アウラウストウル高次創世物の楔レコードと同化しかけていた肉体の力を使い新しく高次創世物レコードの楔を作り出し、発動条件として自分の肉体オベリスクと全魔力、全存在の力、そして世界中で暴走状態にあつたレイラインポイント霊脈を使い発動させた。

それにより、本来、主人格たる雪が死に消え去るはずだった記憶を改変し記録を去年の7月から全て書き換えた。

肉体の構成については膨大な魔力と概念物質を使用し作ろうとしたが、世界との干渉などからうまく作る事ができなかった。

残りが10秒を過ぎた所で、死者蘇生の概念をもってるエジプトの神々が力を貸してくれたこともあり主人格の雪の肉体の再生に成功し今に至ると言う所だ。

主人格たる雪の記憶が消えてしまったのは、普通の女の子だった雪が多く生き物を殺してきた事に少しでも罪悪感を減らせればという俺のエゴだ。







限りある時の中で・・・（後書き）

これで最終回になります。

いままで読んで頂きましてありがとうございます。

これからは手直しをメインでしていきたいと思っていますのでこれからまた別作品が書きあがりましたらよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5635t/>

---

101回目の異世界への召還

2011年8月3日13時13分発行